

**IBM InfoSphere Master Data Management
Standard and Advanced Editions
バージョン 11 リリース 4**

インストール・ガイド



**IBM InfoSphere Master Data Management
Standard and Advanced Editions
バージョン 11 リリース 4**

インストール・ガイド



ご注意

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、特記事項および商標に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM InfoSphere Master Data Management バージョン 11.4、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GC27-6717-00
IBM InfoSphere Master Data Management Standard and
Advanced Editions
Version 11 Release 4
Installation Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1996, 2014.

目次

表	v	カスタム・デプロイメントのインストール	84
図	vii	インストール・ファイルの獲得と解凍	85
第 1 章 IBM InfoSphere Master Data Management Standard and Advanced Editions のインストール	1	カスタム・デプロイメントの準備	86
インストール要件	2	InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール	134
64 ビットのオペレーティング・システムに必要な		サイレント・インストール	160
32 ビット・ライブラリー	5	madconfig ユーティリティーを使用した手動インストール	173
第 2 章 インストールの概説	7	ハイブリッド MDM ソリューションのインストール	179
IBM Installation Manager によりインストールされる		クライアント・アプリケーションと個々のコンポー	
フィーチャー	9	ネットのインストール	180
カスタム・インストールのための Installation Startup Kit	11	Business Administration UI のインストール	181
複数インスタンスのサポート	13	Data Stewardship UI のインストール	183
インストール・アプリケーションで使用されるユー		品目保守 UI のインストール	185
ザー・アカウント、グループ、およびデフォルト	14	InfoSphere MDM Workbench のインストール	187
パスワードのストレージと露出	16	サンプルのインストール	189
WebSphere Application Server によるパスワードの		基本インストールの検証	191
暗号化	17	WebSphere Application Server でのテスト・クラ	
ディレクトリー構造	17	イアントを使用したインストールの検証	192
MAD_ROOTDIR と MAD_HOMEDIR の使用	19	テスト・クライアント・プロパティー	194
第 3 章 製品のインストール	21	インストール・ログ	195
インストールの計画	23	インストール済み環境の変更	197
スタンドアロンまたはカスタム・インストール・		新しいノードを既存のクラスターに追加する	198
デプロイメント・タイプ	23	物理 MDM のデプロイされたプロパティー・フ	
グラフィカル・インストールまたはサイレント・		ァイルの更新	200
インストール	28	第 4 章 フィックスパックの適用	203
高可用性環境のサポート	29	フィックスパックのインストール	203
インストールおよび構成のワークシート	30	指定したコンポーネントをフィックスパックから除	
インストール・シナリオ	51	外	205
スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と		適用済みのフィックスパックのロールバック	206
共に)	67	第 5 章 Standard Edition または	
インストール・ファイルの獲得と解凍	68	Advanced Edition のインストールのト	
DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備	68	ラブルシューティング	207
ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と		インストール・エラー	207
共に) インストールの開始	69	インストール・エラー: AppManagement MBean	
スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2		での checkIfAppExists 操作でアクセスが拒否さ	
と共に)	70	れます	208
スタンドアロン・ワークステーション・インスト		インストール・エラー: AdminTask	209
ール (DB2 と共に)	75	インストール・エラー: AdminTask オブジェクト	
インストール・ファイルの獲得と解凍	76	は使用できません	210
DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備	77	インストール・エラー: バインド処理がアクティ	
ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と		ブではありません	211
共に) インストールの開始	78	インストール・エラー: UI へのログイン後に空	
スタンドアロン・ワークステーション・インスト		白ページが表示されます	212
ール (DB2 と共に) のインストール	79	インストール・エラー: 資産	
		com.ibm.mdm.hub.server.app.eba を追加できませ	
		ん	213

インストール・エラー: httpPort プロパティを ブランクにすることはできません.	214
アンインストール・エラー: インストーラーが仮 想 MDM 表をドロップしません.	215
インストール・エラー: java.lang.RuntimeException: アプリケーションを 初期化できませんでした.	215
インストール・エラー: OutOfMemoryError - PermGen スペース.	216
インストール・エラー: SSL ハンドシェイク障 害.	217
アンインストール・エラー: システムはポート 88xx でホスト localhost に接続するための SOAP コネクタを作成できませんでした.	218
インストール・エラー: 仮想 MDM IVT 障害	219

第 6 章 InfoSphere MDM のアンイン ストール.	221
InfoSphere MDM インスタンスのアンインストール	221

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と 共に) のアンインストール.	222
スタンドアロン・ワークステーション・インストー ル (DB2 と共に) のアンインストール.	223
単一のコンポーネントのアンインストール.	224
サイレント・モードでのアンインストール.	225
内部バンドル・リポジトリからの CBA の削除	227

特記事項.	229
----------------------	------------

索引	235
---------------------	------------

IBM へのお問い合わせ.	239
------------------------------	------------

表

1. インストール要件	3	18. システムの検査	82
2. インストールされる InfoSphere MDM フィーチャー	9	19. データベースの検査	83
3. InfoSphere MDM ユーザー・アカウント	14	20. 運用サーバーの検査	84
4. InfoSphere MDM ユーザー・グループ	15	21. システムの検査	139
5. MDM_INSTALL_HOME ディレクトリー	18	22. データベースの検査	139
6. InfoSphere MDM インストール・ディレクトリー・ワークシート	31	23. 運用サーバーの検査	143
7. IBM DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート	32	24. 基本的な madconfig ユーティリティー・ターゲット	173
8. Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシート	35	25. 運用サーバー・インストールのための madconfig ユーティリティー・ターゲット	175
9. Oracle データ・ソース・ワークシート	37	26. データベース・インストールのための madconfig ユーティリティー・ターゲット	176
10. IBM WebSphere Application Server インストール・ワークシート	40	27. Web ベース・ユーザー・インターフェースの madconfig ユーティリティー・ターゲット	177
11. MDM アプリケーションのインストール・ワークシート	43	28. Flexible Search のための madconfig ユーティリティー・ターゲット	178
12. ユーザー・アプリケーションのインストール・ワークシート	46	29. アンインストールのための madconfig ユーティリティー・ターゲット	178
13. InfoSphere MDM ユーザー・アプリケーション	48	30. インストール検査テスト	193
14. 履歴インストール・ワークシート	49	31. テスト・クライアント・プロパティー・ファイルで設定できるプロパティー	194
15. システムの検査	73	32. IBM のリソース	239
16. データベースの検査	74	33. IBM へのフィードバックの提供	240
17. 運用サーバーの検査	75		



1. InfoSphere MDM のインストールの概要	1	4. スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に)	26
2. InfoSphere MDM のインストールの概要	21	5. クラスター環境でのカスタム・インストール	28
3. スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)	25		

第 1 章 IBM InfoSphere Master Data Management Standard and Advanced Editions のインストール

InfoSphere® MDM コンポーネントは、IBM® Installation Manager を使用してインストールします。これによって、簡単で一貫性のあるインストールが可能になります。

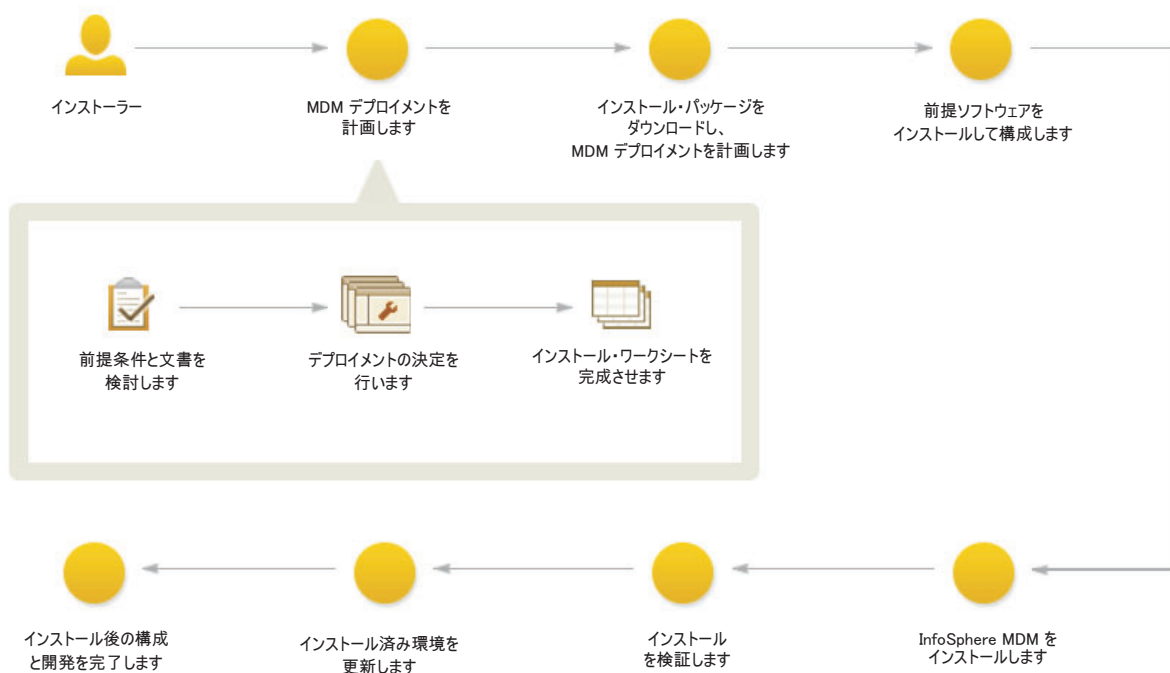


図 1. InfoSphere MDM のインストールの概要

重要: InfoSphere MDM のインストール・プロセスを開始する前に、既知の問題を確認してください。インストールに関する既知の問題の中には、特定のプリインストール構成タスクの実行を必要とするものがあります。これらの構成タスクを完了できなかった場合、結果としてインストールに失敗する可能性があります。

インストールのトピックでは、InfoSphere MDM のインストールのための環境 (アプリケーション・サーバーやデータベースなど) の準備方法、および InfoSphere MDM のインストール方法について説明します。グラフィカル・モードまたはサイレント・モードでインストールを実行できます。

IBM Installation Manager は、コンポーネントをアンインストールしたり、コンポーネントの追加または削除によって既存のインストールを変更したりするためにも使用します。

ヒント: 以下の、インストール・トピックの PDF や、特定のインストール・シナリオの PDF をダウンロードできます。

- InfoSphere MDM Standard and Advanced Edition Installation Guide
- Quick Installation including MDM Workbench
- Installation Cookbook: Oracle, WebSphere Default Messaging, and WebSphere Cluster
- Installation Cookbook: DB2, WebSphere MQ, and WebSphere Cluster

関連情報:

 [エディションに基づく IBM InfoSphere Master Data Management インストール・パッケージのダウンロード](#)

 [InfoSphere MDM system requirements](#)

インストール要件

インストールを開始する前に、以下のリストをリファレンスとして使用します。また、IBM DB2[®]、IBM WebSphere[®] Application Server、IBM Rational[®] Application Developer のいずれかもインストールする場合、このリストは、インストールする適切なフィーチャーを選択するためのガイドラインともなります。

重要: サポート対象のハードウェアとソフトウェアおよび必須バージョンの詳しいリストについては、IBM InfoSphere Master Data Management のシステム要件ページを必ず確認してください。このページへのリンクは、このバージョンのリリース・ノートに記載されています。

任意のフィーチャーとアプリケーションをインストールするには、インストールを実行するシステム上に IBM Installation Manager 1.7 がインストールされていなければなりません。IBM Installation Manager は InfoSphere MDM に同梱されています。IBM Installation Manager を実行できるのは、64 ビット・マシンにおいてのみです。

インストールするサーバーまたはワークステーションでは、最低で 30 GB のスペースが使用可能でなければなりません。

スタンドアロン・サーバーのインストールには、40 から 50 GB のスペースが使用可能でなければなりません。スタンドアロン・ワークステーションのインストールには、60 から 70 GB が必要です。

インストールするフィーチャーまたはアプリケーションがこの表にリストされていない場合、対象フィーチャーの資料を参照し、特定の要件について調べてください。

表 1. インストール要件

対象フィーチャーをインストールする予定の場合	必要な前提条件
InfoSphere MDM Standard Edition、Advanced Edition、Enterprise Edition のいずれか	<p>InfoSphere MDM コンポーネントをインストールおよび使用するサーバーとワークステーションすべてで、サポート対象オペレーティング・システムがインストールおよび構成されていなければなりません。ガイドラインとして、製品固有の資料を使用してください。</p> <p>重要: Advanced Edition は、カスタマイズ環境としてのみ、Microsoft Windows オペレーティング・システムへのインストールをサポートしています。Windows の実稼働環境は、Advanced Edition ではサポートされていません。Windows のカスタマイズ環境および実稼働環境の両方でサポートされているのは、Standard Edition のみです。</p>
Installation Startup Kit	<p>重要: カスタム・インストールの実行を計画している場合は、必ず Installation Startup Kit をインストールしてください。</p> <p>スタンドアロン・サーバー・インストール、またはスタンドアロン・ワークステーション・インストールを実行する場合、このキットをインストールする必要はありません。</p>
MDM 運用サーバー	<p>このフィーチャーにより、ご使用の運用サーバー用のコアの IBM WebSphere Application Server バンドル、EBA などがインストールされます。</p> <p>スタンドアロン・インストールを実行する場合、IBM Installation Manager は IBM WebSphere Application Server をインストールして、デフォルト設定で構成します。</p> <p>カスタム・インストールを実行する場合、サポート対象バージョンの IBM WebSphere Application Server がインストールされ、管理プロファイル (ユーザー名とパスワード) が作成済みである必要があります。IBM WebSphere Application Server のインストール後、アプリケーション・サーバーの準備に関するトピックを使用してサーバーを構成してください。</p>

表1. インストール要件 (続き)

対象フィーチャーをインストールする予定の場合	必要な前提条件
MDM データベース	<p>このデータベース・コンポーネントは、InfoSphere MDM 表とスキーマを作成します。</p> <p>スタンドアロン・インストールを実行する場合、IBM Installation Manager によって IBM DB2 がインストールされて、デフォルト設定で構成されます。</p> <p>カスタム・インストールの場合、使用している MDM 運用サーバーに接続するためのユーザー・アカウント名とパスワードを使用してサポート対象データベースをインストールして構成しておく必要があります。</p> <p>ガイドラインとして、製品固有の資料を使用してください。データベース・ソフトウェアのインストール後、データベースの準備に関するトピックを使用して、データベースが InfoSphere MDM をサポートするように構成します。</p>
ユーザー・アプリケーション	<p>アプリケーションにアクセスするワークステーションに、サポート対象 Web ブラウザーをインストールする必要があります。</p>
InfoSphere MDM Workbench	<p>ワークステーションにワークベンチをインストールする前に、IBM Rational Application Developer for WebSphere (64 ビット) をインストールする必要があります。</p>
IBM DB2	<p>スタンドアロン・インストールの場合:</p> <p>InfoSphere MDM インストールに組み込まれている DB2 データベース・ラッパーをインストールします。選択されているデフォルト・フィーチャーを使用します。</p> <p>重要: このソフトウェアは、スタンドアロン・インストールを実行している場合に必須です。</p> <p>カスタム・インストールの場合:</p> <p>DB2 データベースの構成をカスタム・インストールの一環として行う場合、IBM DB2 Enterprise Edition がインストール済みでなければなりません。</p>
IBM WebSphere Application Server	<p>以下のフィーチャーをアプリケーション・サーバー用にインストールするよう選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM WebSphere Application Server <ul style="list-style-type: none"> – IBM WebSphere Application Server Full Profile – IBM WebSphere Application Server SDK for Java™ Technology Edition 6 <p>システム要件のページでサポート対象バージョン番号を必ず確認してください。</p>

表 1. インストール要件 (続き)

対象フィーチャーをインストールする予定の場合	必要な前提条件
IBM Rational Application Developer	<p>IBM Rational Application Developer をインストールする場合、IBM Installation Manager で、最小でも以下の追加に必要な機能を選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Web Developer Tools <ul style="list-style-type: none"> - AJAX、Dojo、および HTML - JSF - JSP およびサーブレット • Enterprise Developer Tools <ul style="list-style-type: none"> - データ・アクセス - OSGi アプリケーション • IBM WebSphere Application Server <ul style="list-style-type: none"> - 開発ツール - リモート・サーバー・スタブ <p>必要な 32 ビット・ライブラリーが 64 ビット・オペレーティング・システムで使用可能であることも確認する必要があります。</p>

関連タスク:

187 ページの『InfoSphere MDM Workbench のインストール』

86 ページの『カスタム・デプロイメントの準備』

68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』

関連資料:

48 ページの『ユーザー・アプリケーションと運用サーバーの関連付け』

64 ビットのオペレーティング・システムに必要な 32 ビット・ライブラリー

InfoSphere MDM Workbench および IBM Rational Application Developer を 64 ビットのワークステーションにインストールする場合、インストールを正常に行うには、ワークステーション上に特定の 32 ビット・ライブラリーがなければなりません。

InfoSphere MDM フィーチャーをインストールする前に、以下にリストされている 32 ビット・ライブラリーをインストールするか、IBM Rational Application Developer を 64 ビット・モードでインストールする必要があります。

必要な 32 ビット・ライブラリーは以下のとおりです。

- libatk-1.0.so.0
- libfontconfig.so.1
- libfreetype.so.6
- libgdk_pixbuf-2.0.so.0
- libgdk-x11-2.0.so.0

- libglib-2.0.so.0
- libgmodule-2.0.so.0
- libgobject-2.0.so.0
- libgthread-2.0.so.0
- libgtk-x11-2.0.so.0
- libpango-1.0.so.0
- libpangoft2-1.0.so.0
- libpng12.so.0
- libselinux.so.1
- libX11.so.6
- libXcomposite.so.1
- libXcursor.so.1
- libXdamage.so.1
- libXext.so.6
- libXfixes.so.3
- libXft.so.2
- libXinerama.so.1
- libXi.so.6
- libXrandr.so.2
- libXrender.so.1
- libXtst.so.6
- libz.so.1

関連タスク:

79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のインストール』

187 ページの『InfoSphere MDM Workbench のインストール』

第 2 章 インストールの概説

ほとんどの IBM InfoSphere Master Data Management コンポーネントは、サーバーまたはワークステーション、この 2 つの組み合わせ、またはクラスター環境をサポートするために複数のサーバーにインストールできます。

重要: InfoSphere MDM のインストール・プロセスを開始する前に、既知の問題を確認してください。インストールに関する既知の問題の中には、特定のプリインストール構成タスクの実行を必要とするものがあります。これらの構成タスクを完了できなかった場合、結果としてインストールに失敗する可能性があります。

ヒント: IBM InfoSphere Master Data Management のダウンロード・ページを使用して、ライセンス交付を受けたご使用のエディションおよびバージョンに必要なパーツを判別できます。

クライアント・システムおよび 1 つ以上のサーバー・システムの両方をセットアップする必要があります。アプリケーション・サーバー、データベース・サーバー、および HTTP サーバーはすべて同じサーバー上に置くか、それぞれ専用のサーバー上に置くことができます。HTTP サーバーは推奨されていますが、オプションです。

InfoSphere MDM のインストールに要する時間は多くの要因に依存するため、推定所要時間を示すことはできません。準備やインストールの時間に影響する要因には、以下のようなものがあります。

- インストールされているコンポーネントの数。
- 環境内のサーバーまたはワークステーションの数。
- クラスター環境でのインストールの場合、ネットワークの負荷容量。
- IBM WebSphere Application Server が既にインストールされているかどうか。
- データベース・ソフトウェアが既にインストールされているかどうか。

インストール・プロセスの最初のステップは、いずれかの DB2 を伴うスタンドアロン・インストール・タイプ (サーバーまたはワークステーション) あるいはカスタム・インストール・タイプのうち、使用環境での要件に対して最良のデプロイメント・タイプは何かを判別することです。ほとんどの実動の実装では、カスタム・デプロイメントが必要になります。

オプションで、ランチパッド を使用して、DB2 を伴うスタンドアロンまたはカスタム・インストールを開始できます。ランチパッド により、インストール・タイプを選択できます。その後、選択内容に適したインストール・ファイルを使用するように IBM Installation Manager が構成されます。カスタム・インストールでは、Installation Manager の開始後に、インストール用に選択されたオフリングを変更する機会があります。

ヒント: ランチパッドはブラウザー・ベースのアプリケーションであり、スタンドアロン・サーバーやワークステーションのインストールの開始点として使用されま

す。ランチパッドは、Mozilla Firefox ブラウザーを必要とします。Firefox が使用不可の場合、ランチパッドを使用できない可能性があります。ランチパッドを使用できない場合は、以下のようにします。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. IBM Installation Manager を管理者モードでインストールします。
3. InfoSphere MDM インストール・リポジトリを手動で構成します。

IBM Installation Manager の開始後における基本的な作業順序を、以下のステップで説明します。

1. インストールする InfoSphere MDM のフィーチャーを選択します。

重要: MDM データベースと MDM 運用サーバーは、どちらも必須のコンポーネントです。MDM データベースには、インストールしているエディション用のコア・データベース表が含まれます。MDM Operational Server は、重要な処理機能を提供します。

2. フィーチャーとインストール・ディレクトリーの場所を選択すると、インストールが実行される前に、インストーラーによってオペレーティング・システム、ディスク・スペース、およびサポートされるソフトウェアについていくつかの基本的なチェックが行われます。指定したインストール・ディレクトリーが既存のディレクトリーである場合、IBM Installation Manager によって既存のインストールがあるかどうか検査され、検出された場合は、インストールの上書きについて警告が出されます。
3. 一連の構成パネルで情報を入力するように促されます。この情報は、MDM データベースおよびアプリケーション・サーバーを特定の接続情報で自動的に構成し、InfoSphere MDM 成果物がデプロイされるセル、ノード、およびサーバーを識別するために使用されます。

スタンドアロン・インストールを使用している場合、構成パネルは表示されません。データベース、アプリケーション・サーバー、および運用サーバーの設定を自動構成するために、デフォルト値が使用されます。

4. 静的データは、プロセスの最初に選択した `MDM_INSTALL_HOME` ディレクトリーに取り出されます。静的データには、バッチ・プロセッサ、管理エージェント、管理コンソール、および `madconfig` ユーティリティ・スクリプトなどの項目が含まれます。
5. データベース表および索引が作成されます。
6. 次に、ネイティブ・コンポーネントおよび Web サービスがアプリケーション・サーバーにデプロイされます。つまり、すべての成果物はすべての指定ノードにデプロイされます。
7. インストールのために選択したユーザー・インターフェースと Web アプリケーションもアプリケーション・サーバーにデプロイされます。インストーラーによって Web ベース・アプリケーション WAR ファイルが EAR ファイルに圧縮され、その EAR ファイルがアプリケーション・サーバーにデプロイされます。デプロイメント中に、アプリケーション・サーバーによって EAR ファイルのコンテンツが解凍されます。
8. ネイティブ構成ファイル `.cfg` が作成されます。
9. デプロイメント後、データベースがブートされます。

10. インストール完了前に、インストーラーは運用サーバーを使用してトランザクションを実行することによって検証処理を完了します。

インストール・アプリケーションが実行する検証テストに加え、ユーザーがテスト・クライアントを使用してテスト・トランザクションを実行し、インストールが正常に行われたことを確認できます。

関連概念:

191 ページの『基本インストールの検証』

関連情報:

 [IBM InfoSphere Master Data Management のダウンロード](#)

IBM Installation Manager によりインストールされるフィーチャー

インストールできるフィーチャーは、選択した InfoSphere MDM エディションによって決まります。

以下の表に、IBM Installation Manager を使用してインストールできるフィーチャーを示します。この表内のアスタリスク * は、そのフィーチャーがワークステーションにのみインストール可能であることを示します。2 つのアスタリスク ** は、対象製品を Microsoft SQL Server データベースと一緒に使用できないことを示します。

表 2. インストールされる InfoSphere MDM フィーチャー

インストールするもの	使用可能なフィーチャー
InfoSphere MDM Standard Edition	<p>MDM データベース</p> <p>MDM 運用サーバー (Enterprise Service Oriented Architecture (ESOA) Toolkit, Java、および Web サービス SDK を含む)</p> <p>ユーザー・アプリケーション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Inspector • Enterprise Viewer • Web Reports • Provider Direct • Pair Manager* <p>サンプル</p> <p>Patient - Advanced Edition コンポーネント (この品目は、Standard Edition と一緒に自動的にインストールされ、IBM Installation Manager ではオプションとしてリストされません)</p>

表2. インストールされる InfoSphere MDM フィーチャー (続き)

インストールするもの	使用可能なフィーチャー
InfoSphere MDM Advanced Edition	Advanced Edition には、Standard Edition と以下のアプリケーション用にリストされているすべてのフィーチャーが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • Business Administration UI** • Data Stewardship UI** • 品目保守 UI**
InfoSphere MDM Enterprise Edition	すべての Advanced Edition フィーチャーと、Collaborative Edition、および InfoSphere MDM Extension for Unstructured Text Correlation が含まれます。
InfoSphere MDM Workbench	MDM Workbench* (仮想、物理、およびハイブリッドの実装をサポートします)。IBM Rational Application Developer も InfoSphere MDM にバンドルされており、InfoSphere MDM Workbench をインストールする前にそれをインストールする必要があります。
IBM DB2	スタンドアロン・インストールの実行を計画している場合、DB2 データベース・ラッパーをインストールすることもできます。ラッパーにはネイティブ DB2 データベース・インストーラーが含まれており、IBM Installation Manager を介してサイレント・モードで実行されます。 カスタム・インストールを使用する計画の場合、ネイティブ DB2 インストーラーを使用して独自に DB2 をインストールする必要があります。
IBM WebSphere Application Server	IBM WebSphere Application Server は InfoSphere MDM の実装に必須です。このアプリケーション・サーバーがインストールされていない場合は、InfoSphere MDM のインストール時にこれをインストールすることもできます。このフィーチャーは、スタンドアロン・インストールを実行するときにインストールされます。

InfoSphere MDM Standard Edition および Advanced Edition に加えて、その他の IBM MDM コンポーネント、エディション、および製品も IBM Installation Manager を使用してインストールされます。これらのコンポーネントを以下にリストします。それぞれのインストール手順については、それぞれのオンライン資料に記載されています。

- IBM Stewardship Center
- InfoSphere MDM Application Toolkit
- Master Data Policy Monitoring
- InfoSphere MDM Collaboration Server
- InfoSphere MDM Custom Domain Hub および InfoSphere MDM Reference Data Management Hub

関連概念:

- 23 ページの『スタンドアロン・インストール・デプロイメント・タイプ』
- 24 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』
- 26 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に)』

関連資料:

- 48 ページの『ユーザー・アプリケーションと運用サーバーの関連付け』

カスタム・インストールのための Installation Startup Kit

Installation Startup Kit には、InfoSphere MDM をインストールする前に環境を準備するために役立つファイルとスクリプトが含まれています。

Installation Startup Kit ツールを使用すると、カスタム・インストールの実行に役立ちます。

Installation Startup Kit のファイルおよびスクリプトは、ダウンロードした InfoSphere MDM パッケージ・ファイル `disk1.zip/StartUpToolkit` から抽出できます。本書では、Startup Kit が抽出されたロケーションを `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` と表しています。

データベースの作成と構成

InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、Installation Startup Kit のデータベース・スクリプトを実行します。これらのスクリプトは、ご使用のエディションに必要な適切な表、表スペース、バッファ・プール、エンコード指定、およびトリガーを自動的に作成します。

インストール・アプリケーションによって、デプロイメントのために必要な表スペースを作成することができます。または代替の方法として、InfoSphere MDM をインストールする前に、提供されたスクリプトを使用して表スペースを作成することもできます。

ヒント: ブロック・サイズごとに一時表スペースを 1 つ作成します。例えば、16 K の表スペースが複数ある場合は、16 K の一時表スペースを 1 つ作成します。

- IBM DB2 データベースおよび表スペースを作成するためのスクリプトは、`STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/DB2/Standard/dd1/` にあります。
 - `CreateDB.sql`
 - `CreateTS.sql`
- DB2 for z/OS® データベースの作成とコアおよびドメイン・データのインストールのためのスクリプト:
 - `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/DB2/ZOS/pds/`
 - `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/Full/DB2/ZOS/pds/`

スクリプトは、メインフレーム内で JCL スクリプトを使用して TSO セッションから実行するように構成されています。

- Oracle データベースを作成するためのスクリプト:
`STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/Oracle/Standard/dd1/create_schema_ora.sql`

- Microsoft SQL Server データベースを作成するためのスクリプト:
STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/SQLServer/ddl/CreateDB.sql
- Microsoft XA トランザクションに使用される SQL Server ファイルは、
STARTUPKIT_INSTALL_HOME/SQLServer JTA にあります。
 - 32 ビット SQL Server または 64 ビット SQL Server のどちらかをサ
ポートする sqljdbc.dll ファイルは、win32 および win64_amd64 に
あります。
 - instjdbc.sql

拡張インストール・デバッグ・ロギング

Installation Startup Kit には、拡張デバッグ・ロギングを有効にして InfoSphere MDM インストール・プロセスの追加の詳細をキャプチャーするために使用できるプロパティ・ファイルが含まれています。このファイルは、STARTUPKIT_INSTALL_HOME/InstallationManagerDebug/log.properties にあります。

拡張デバッグ・ロギングを使用すると、標準のインストール・ログ・イベントに加えて、以下に関する詳細情報をキャプチャーできます。

- IBM Installation Manager が Web リポジトリからダウンロードした、またはローカル・ファイル・システム DISK リポジトリから取得した、各ファイルまたはプラグイン。
- IBM Installation Manager が実行した以下のような各アクション。
 - ANT アクションの実行
 - Java クラスの呼び出し
 - .sh スクリプトの実行
- すべての IBM Installation Manager 内部メタデータの処理
- すべてのユーザー入力データ (そのデータがインストール、アンインストール、またはロールバックのアクションでどのように変更されたのかという詳細を含む)。

重要: 拡張デバッグ・ロギングを有効にすると、./InstallationManager/logs 内のログ情報に、インストール時にユーザーが入力したパスワードの詳細を含めることができます。パスワードの機密漏れを防ぐために、必ず、これらのログは安全な場所に保管してください。

さらに、インストールを完了するために必要な手動のステップがある場合は、拡張デバッグ・ロギングから、次に実行するステップに関するプロンプトが出されます。例えば、インストールと構成を分離するオプションを選択した場合は、デバッグ・ファイルから、インストールを構成できるようにする madconfig スクリプトの実行を求めるプロンプトが出されます。

サイレント・インストールを使用して InfoSphere MDM Web アプリケーション・ユーザー・インターフェースをインストールした場合は、デプロイされた Web アプリケーションの URL がデバッグ・メッセージに組み込まれます。

./InstallationManager/logs で拡張デバッグ・ロギングを有効にするには、IBM Installation Manager を起動して InfoSphere MDM のインストール

を開始する前に、`STARTUPKIT_INSTALL_HOME/InstallationManagerDebug/log.properties` を `./InstallationManager/logs` にコピーします。

メッセージング・コンポーネントのセットアップ

Installation Startup Kit には、WebSphere MQ の存在するマシンが IBM Installation Manager を実行しているマシンと異なる場合に、InfoSphere MDM メッセージング・コンポーネントのインストールに使用できるスクリプトが含まれています。 `custSetupMQServer.mqsc` および `ChannelAuth.mqsc` スクリプトを使用します。

前提条件検査ツール

前提条件検査のコマンド・ライン・ツールは、前提条件が満たされていないことが原因で正常に完了できないインストールが開始されることを防ぐのに役立ちます。このツールには、以下の機能があります。

- InfoSphere MDM インストールのための前提条件検査を実行します。
- 基本的なデータ収集の実行 - ログや構成ファイルを収集します。
- 拡張データ収集の実行 - ログ、構成ファイル、データベースに保管されているメタデータを収集します。

前提条件検査ツールのデータ収集機能は、InfoSphere MDM が完了した後に、またはインストールのトラブルシューティングを行う必要がある場合に役立つことがあります。これらの収集の結果は、圧縮ファイルに格納されます。

サイレント・インストール応答ファイル

Installation Startup Kit には、サンプル応答ファイル (`.res`) が含まれています。これらのファイルは、サイレント・インストールを実行するためのテンプレートとして使用できるサンプルです。サンプル応答ファイルは、ルート・レベルの `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` にあります。

関連タスク:

- 171 ページの『応答ファイルを使用したサイレント・インストール』
- 96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』
- 133 ページの『コマンド・ライン・ツールを使用する前提条件の検査』
- 195 ページの『Installation Manager のログ・ファイルの表示』

関連資料:

- 160 ページの『サイレント・インストール』

複数インスタンスのサポート

InfoSphere MDM の複数インスタンスは、アプリケーションをクラスター環境にインストールすることによってサポートされます。

WebSphere Application Server セル内のクラスター・ノードのすべての InfoSphere MDM アプリケーション・インスタンスは、同じバージョンの InfoSphere MDM 製品コードでデプロイし、同じバージョンの InfoSphere MDM カスタマイズ・コードを保持する必要があります。

同じ物理マシン (または LPAR) を使用して、異なるバージョンの InfoSphere MDM 製品コードを実行している 2 つ目の InfoSphere MDM アプリケーション・インス

タンスをデプロイするには、2 つ目の WebSphere Application Server セル、デプロイメント・マネージャー、およびノード・プロファイルを作成する必要があります。

単純な機能テスト環境を構成するには、同じ WebSphere Application Server セルおよびノードを使用して、同じバージョンの InfoSphere MDM 製品コードと異なるバージョンの InfoSphere MDM カスタマイズ・コードを持つ、InfoSphere MDM の複数インスタンスをデプロイすることができます。ただし、いくつかの制約が適用されます。WebSphere Application Server セル内のいずれかの InfoSphere MDM インスタンスをアンインストールすると、他の InfoSphere MDM インスタンスは機能しなくなります。この構成は、実稼働環境では試行しないでください。

関連タスク:

150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』

86 ページの『カスタム・デプロイメントの準備』

インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト

InfoSphere MDM をインストールする際、デフォルトのユーザーおよびユーザー・グループがアプリケーション・サーバーに作成されます。

ユーザー - スタンドアロン (DB2 と共に) インストールの場合のみ

次の表に、スタンドアロン (DB2 と共に) インストールの際にインストール・アプリケーションによって作成される、デフォルトのユーザー・アカウントとパスワードをリストします。カスタム・インストールの際には、任意のユーザー名とパスワードの値を定義できます。

表 3. InfoSphere MDM ユーザー・アカウント

ユーザー名	パスワード	説明
mdmins11	mdmins11	Linux または UNIX オペレーティング・システムでスタンドアロン・インストールを実行する場合、このユーザー名とパスワードの組み合わせが IBM DB2 データベース用に作成されます。 重要: セキュリティ上の理由から、デフォルトの mdmadmin パスワードを使用する場合は、インストール後にユーザー・パスワードを変更することをお勧めします。
db2admin	db3Admin	Microsoft Windows オペレーティング・システムでスタンドアロン・インストールを実行する場合、このユーザー名とパスワードの組み合わせが IBM DB2 データベース用に作成されます。 重要: セキュリティ上の理由から、デフォルトの db2admin パスワードを使用する場合は、インストール後にデータベース・パスワードを変更することをお勧めします。

InfoSphere MDM のカスタム・インストールを始める前に、セキュリティーを有効にした IBM WebSphere Application Server プロファイルを作成します。ユーザー名とパスワードは、どんなものにしてもかまいません。

グループ

次の表に、インストール・アプリケーションが作成するグループとロールをリストします。IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を使用して、これらのグループにユーザーを追加できます。

表 4. InfoSphere MDM ユーザー・グループ

InfoSphere MDM グループ	説明
mdm_admin	スーパーユーザーと同等の管理ロール。
DataSteward	このロールは、ユーザー・インターフェース・コンポーネントがインストールされている場合だけ使用可能です。
mdm_default	このロールは、ユーザーを指定した権限付与を行わなくても、ユーザーがアプリケーション・サーバー・コンテナにアクセスできるようにします。
mdm_all_ops	このロールは、ユーザーがすべての InfoSphere MDM 操作にアクセスできるようにします。
mdm_all_cvws	このロールは、ユーザーがすべての複合ビューにアクセスできるようにします。
mdm_all_ixns	このロールは、ユーザーがすべての InfoSphere MDM 対話にアクセスできるようにします。
mdm_all_segs_rw	このロールは、すべてのセグメントへの読み取りおよび書き込みアクセスを許可します。
mdm_all_segs_ro	このロールは、すべてのセグメントへの読み取り専用アクセスを許可します。
ServiceConsumer	このロールはすべての認証済みユーザーにマップされ、すべてのエントリー・ポイント・モジュールと関連付けられます。
ServiceProvider	このロールは 1 人のデフォルト・ユーザー mdm にマップされます。このロールは、エントリー・ポイントとみなされないすべてのモジュールと関連付けられます。

スタンドアロン (DB2 と共に) インストールで使用されるその他のデフォルト

スタンドアロン (DB2 と共に) インストール・タイプを使用する場合、インストーラーはいくつかのデフォルト値を使用します。

(サーバー・デプロイメントのために) Linux または UNIX へのインストールを行っている場合、以下のデフォルトが使用されます。

- DB2 データベース名: MDM11DB
- DB2 ホーム・ディレクトリー: /home/mdmins11

(ワークステーションへのデプロイメントのために) Microsoft Windows にインストールを行っている場合、以下のデフォルトが使用されます。

- DB2 データベース名: MDM11DB

ヒント: セキュリティ上の理由から、インストールの完了後、これらのデフォルト・アカウントのパスワードが固有であり、デフォルト値から変更されていることを確認してください。パスワードの変更については、関連する WebSphere Application Server および DB2 の資料を参照してください。

関連概念:

- 88 ページの『カスタム・インストールに関するアカウントの前提条件』
- 191 ページの『基本インストールの検証』




関連タスク:

- 70 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』
- 79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に)のインストール』
- 68 ページの『DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備』
- 95 ページの『新規ユーザーの作成および MDM グループへのユーザーの追加』

関連資料:

- 97 ページの『データベース・ユーザー・アカウントおよび接続』

関連情報:

-  ユーザーの管理
-  運用サーバーのユーザー・セキュリティの使用可能化
-  仮想 MDM のユーザーおよびユーザー・グループの構成

パスワードのストレージと露出

インストールの際、パスワードは WebSphere Application Server 暗号化を使用することによって暗号化されます。

すべてのユーザー・インターフェース・アプリケーションとクライアント・アプリケーションには、MDM 運用サーバーに接続するためのユーザー名とパスワードがあります。これらのパスワードも、WebSphere Application Server 暗号化メカニズムを使用することによって暗号化されます。アプリケーション・サーバーでいずれかのパスワードが変更された場合は、それぞれのコンポーネント・プロパティ・ファイルでも同様に変更を適用する必要があります。

サイレント・インストールに使用できる応答ファイルをインストーラーが生成すると、それらのファイルにはユーザー・パスワードが非暗号化テキストで含まれているということを認識しておいてください。ファイルに格納された非暗号化テキストのパスワードが組織のポリシーに反する場合は、グラフィカル・インストール・モードを使用してください。

関連情報:

-  セキュア MDM 環境の構成

WebSphere Application Server によるパスワードの暗号化

インストール後にプロパティ・ファイルにあるユーザー名とパスワードを変更する必要がある場合、以下のタスクを使用して新しいパスワードを暗号化できます。

このタスクについて

プロパティ・ファイルに平文でパスワードが格納されないようにするため、WebSphere Application Serverを使用してパスワードを暗号化できます。

手順

1. mypassword.txt というテキスト・ファイルを作成します。
2. このファイルに `mypassword=user_password` という行を追加し、ファイルを保存します。
3. 以下のコマンドを実行して、パスワード値をエンコードします。
 - Microsoft Windows の場合: `$NODE_HOME\bin\PropFilePasswordEncoder.bat path\mypassword.txt mypassword`
 - Linux および UNIX の場合: `$NODE_HOME/bin/PropFilePasswordEncoder.sh path/mypassword.txt mypassword`

ここで、`$NODE_HOME` は WebSphere Application Server ノードのホーム・ディレクトリーを、`path` は mypassword.txt ファイルのディレクトリー場所をそれぞれ表します。

4. mypassword.txt ファイルを開き、暗号化されたパスワード値をプロパティ・ファイルのパスワード・フィールドにコピーします。

関連情報:

 [セキュア MDM 環境の構成](#)

ディレクトリー構造

InfoSphere MDM をインストールして使用するために理解する必要があるディレクトリーは 3 つあり、それは、インストール・ディレクトリー、共用ディレクトリー、アプリケーション・サーバー・ディレクトリーです。

IBM Installation Manager を実行する際、インストール・パスを選択します。このパスとルート・ディレクトリーは、インストール・トピックで `MDM_INSTALL_HOME` として定義されます。`MDM_INSTALL_HOME` には、インストール済みパッケージに固有のリソースが入ります。このディレクトリー内には、インストールに選択した各コンポーネントのサブディレクトリーがあります。また、インストール対象のオペレーティング・システムに固有のディレクトリーもあります。

MDMShared ディレクトリーには、複数のインストール済みパッケージ・グループで共用されるリソース・ファイルが含まれます。内容としては、IBM Installation Manager スクリプト、Java カスタム・コード・ライブラリー、IBM Rational Application Developer などを実行するために必要なリソースが含まれる可能性があります。このディレクトリーについて詳しくは、IBM Installation Manager のオンライン資料を参照してください。

インストール済みコンポーネントのデプロイ先となるアプリケーション・サーバー・パスは、インストール・トピックで `WAS_PROFILE_HOME` として定義されます。

MDM_INSTALL_HOME

このインストール・ディレクトリーの内容としては、以下の表にリストされているサブディレクトリーがあります (ただし、この限りではありません)。インストールするフィーチャーに応じて、表示されるディレクトリーは異なります。

表 5. `MDM_INSTALL_HOME` ディレクトリー

ディレクトリー	説明
<code>aix, linux, solaris, win32, win64, zlinux</code>	これらのディレクトリーには、オペレーティング・システム固有のファイルが入ります。
<code>BatchProcessor</code>	バッチ・プロセッサ・ツールを実行するために必要なサブディレクトリーとファイルが入ります。バッチ・プロセッサは、主に物理 MDM データを処理するために設計されています。
<code>com.ibm.mdm.tools</code>	OSGi バンドルが入ります。MDM ワークベンチ・ワークスペースでこれらのバンドルを使用し、参照モデルと Java クラス参照を解決できるように構成できます。
データベース	静的スキーマ・ファイルが入ります。
<code>documentation</code>	<code>/nl/</code> サブディレクトリーに <code>messages.properties</code> ファイルが入ります。このファイルは、実行時にインストーラーが使用します。例えば、インストーラーの進捗モニターが使用するメッセージが入ります。
<code>EnterpriseIntegrator</code>	InfoSphere MDM Healthcare Point of Service Integrator 検索アプリケーションの構成と使用に必要なサブディレクトリーおよびファイルが入ります。
<code>eventManagmentClient</code>	イベント・マネージャー・コンポーネントをサポートするためのサブディレクトリーとファイルが入ります。イベント・マネージャーは、MDM 内のイベントとアクティビティを検出できるトリガー・コンポーネントです。
<code>InstallableApps</code>	任意のインストール済みユーザー・アプリケーションのサブディレクトリーとファイルが入ります。アプリケーションとしては、Data Stewardship UI、品目保守 UI、Inspector、Web Reports などがあります。
<code>IVT</code>	インストール検証テストを実行するために使用するサブディレクトリーとスクリプトが入ります。
<code>logs</code>	インストール・プロセスで記録されるログが入ります。
<code>ManagementAgent</code>	構成管理エージェントの実行に使用するサブディレクトリーとファイルが入ります。構成管理エージェントは、幾つかの MDM フィーチャーを構成および管理するために使用します。
<code>ManagementConsole</code>	管理コンソールが使用するサブディレクトリーとファイルが入ります。管理コンソールは、管理エージェントをサポートするユーザー・インターフェースです。

表 5. MDM_INSTALL_HOME ディレクトリー (続き)

ディレクトリー	説明
MDMCollector	IBM Support Assistant Data Collector を実行するために使用するサブディレクトリーとファイルが入ります。
mds	このディレクトリーには、仮想 MDM (以前の IBM Initiate Master Data Service®) 用ファイルが入ります。Java および Web サービス SDK の例が、/lib/sdk/examples ディレクトリーにインストールされます。 また、/scripts ディレクトリーには madconfig コーティリティーなどのユーティリティーが入ります。
MessageBrokerSuite	Message Broker コンポーネントの実装および管理に使用するサブディレクトリーと構成ファイルが入ります。通常、Message Broker コンポーネントは仮想実装環境で、ソース・システム、運用サーバー、MDM データベースの間のメッセージングをサポートするために使用されます。
PCDS	Patient Clinical Data Search ユーザー・インターフェースをサポートするサブディレクトリーとファイルが入ります。
プロパティー	このディレクトリーのコンテンツである入力パラメーターは、MDM ワークベンチから MDM データベースおよびサーバーをリセットする際に使用します。
サンプル	開発環境で使用できるマッピングとソース・コード・ファイルが含まれています。
temp	すべてのデータベース・ログが入ります。インストール後にデータベースをリセットすると、すべての一時 SQL ファイルをコピーするためにこのディレクトリーが使用されます。
tmp	インストール・プロセスで使用される一時ファイルが入ります。
Uninstall	このディレクトリーには、MDM コンポーネントをアンインストールするために必要なスクリプトが入ります。
utils	共通エンティティー名のインスタンス秘密鍵生成プログラムのアセットが入ります。

関連概念:

180 ページの『クライアント・アプリケーションと個々のコンポーネントのインストール』

MAD_ROOTDIR と MAD_HOMEDIR の使用

MAD_ROOTDIR と MAD_HOMEDIR は、どちらも IBM Initiate Master Data Service のユーザーが精通している用語と変数です。InfoSphere MDM のインストールと運用サーバーに関するこれらの用語の定義が変更されています。

製品の以前のバージョン (バージョン 11.0 より前) では、すべてのバイナリー・ファイルを含むインストール済みのファイルは `MAD_ROOTDIR` にありました。すべてのインスタンス構成情報は、`MAD_HOMEDIR` に含まれていました。しかし現在は、ある意味で 2 つのディレクトリーのコンテンツが結合されています。インストール済みのバイナリー・ファイルと運用サーバーの構成情報は、両方とも `MAD_ROOTDIR` に含まれています。純粋な `MAD_HOMEDIR` の概念は無効になりました。

ドキュメンテーションの中で、`MDM_INSTALL_HOME` は、すべての InfoSphere MDM フィーチャーがインストールされているルート・パスを表します。

インストール・プロセス中、`MDM_INSTALL_HOME` ディレクトリーに作業パス `MAD_ROOTDIR` が作成されます。資料では、パスは `MDM_INSTALL_HOME/mds` と記載されます。このパスには、運用サーバーのインストール環境の構成が含まれ、ここからすべての仮想 MDM 関連ツールとユーティリティーが実行されます。

`WAS_PROFILE_HOME` へのデプロイ中に、関連があるバイナリー・ファイルと構成のコピーがランタイムの `MAD_ROOTDIR` に作成されます。ある意味では、このロケーションがインスタンスのディレクトリーになります。このランタイム構成へのパスは、WebSphere Application Server JVM カスタム・プロパティー・ファイルでは `mad.root.dir` プロパティーと記載されます。

`MDM_INSTALL_HOME` の構成は、コマンド行ツールをサポートするために主にここに格納されます。`WAS_PROFILE_HOME` の構成は、実行時に運用サーバーによって使用されます。`WAS_PROFILE_HOME` のデプロイされたファイルを編集すると、実行中の運用サーバーの変更に影響を与えます。

重要: IBM Initiate Master Data Service のユーザーは、複数のインスタンスをサポートする単一のインストール・ディレクトリーの概念が有効でなくなったことも覚えておいてください。必要な InfoSphere MDM のすべてのインスタンスに対して、個別のインストールが必要です。例えば、実動用、テスト用、およびトレーニング用のインスタンスが必要な場合、`WAS_HOME_PROFILE` 内に 3 つの別個のインストール・ディレクトリー、および 3 つの MDM 運用サーバーとデータベースのデプロイメントを個別に作成する必要があります。

メッセージ・ブローカー・コンポーネントのトピックでは、`MAD_ROOTDIR` と `MAD_HOMEDIR` の両方の用語と変数が引き続き使用されます。

第 3 章 製品のインストール

InfoSphere MDM のインストールには、カスタムとスタンドアロン (IBM DB2 と共に) の 2 つのメインパスがあります。各デプロイメント・スタイルのための手順は、すべての InfoSphere MDM エディションで同じです。

始める前に

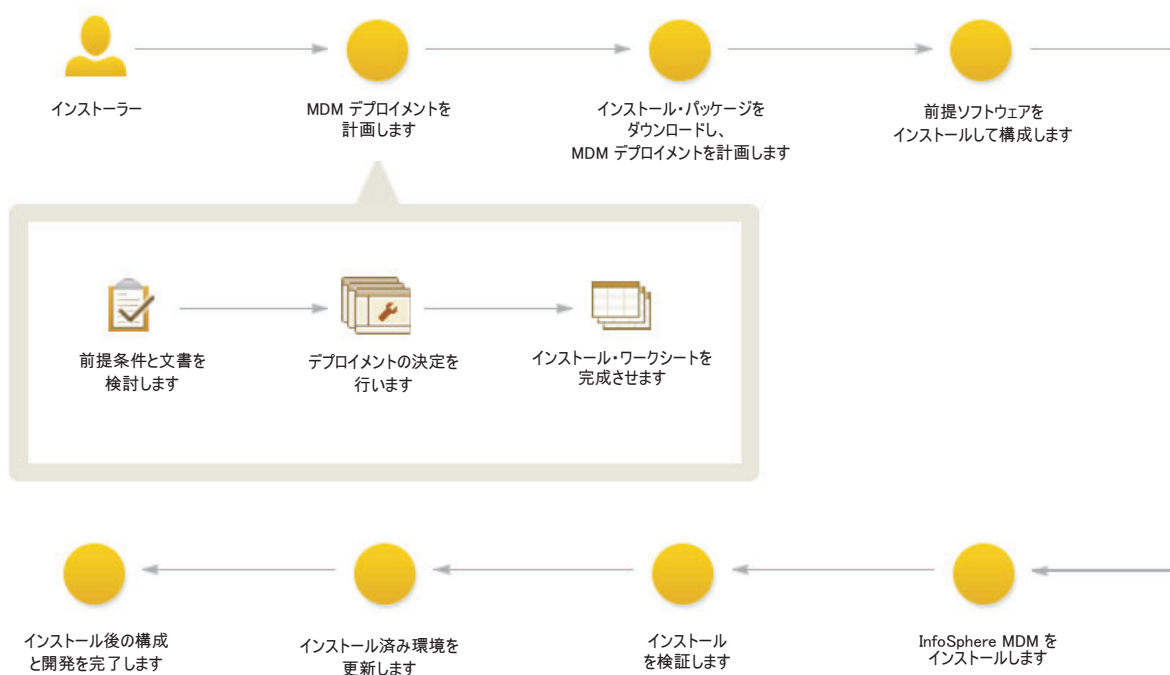


図 2. InfoSphere MDM のインストールの概要

重要: InfoSphere MDM のインストール・プロセスを開始する前に、既知の問題を確認してください。インストールに関する既知の問題の中には、特定のプリインストール構成タスクの実行を必要とするものがあります。これらの構成タスクを完了できなかった場合、結果としてインストールに失敗する可能性があります。

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- InfoSphere MDM に関する既知の問題を確認していること。
- インストールすることを計画しているコンポーネントのハードウェア要件とソフトウェア要件を使用環境が満たしていること。
- インストール・ワークシートが完成していること。
- InfoSphere MDM オファリングへのアクセス権限があること。
- 準備手順が完了していること。

このタスクについて

カスタム・デプロイメント・スタイルを使用してデプロイするか、またはいずれかのスタンドアロン (DB2 と共に) デプロイメント・スタイルを使用してデプロイするかの決定は、インストールの目的に大きく依存します。

- DB2 以外のデータベースを使用する、プリインストールされたデータベースを使用する、またはクラスター環境を使用する環境にデプロイする場合には、カスタム・デプロイメント・スタイルを使用します。
- すべてのデフォルトのインストール値を使用して IBM WebSphere Application Server および DB2 にデプロイされた InfoSphere MDM をインストールする場合には、スタンドアロン・サーバー (DB2 と共に) デプロイメント・スタイルを使用します。
- 新しい InfoSphere MDM 開発環境を Microsoft Windows ワークステーションにインストールする場合には、スタンドアロン・ワークステーション (DB2 と共に) デプロイメント・スタイルを使用します。

使用する環境やデプロイメント・スタイルに関係なく、すべての InfoSphere MDM インストールをグラフィカル・モードまたはサイレント・モードのどちらでも実行できます。

手順

カスタム・デプロイメント・スタイルを使用してインストールすることを計画している場合は、次のようにします。

1. 必要なりポジトリリーを IBM Installation Manager に追加します。
2. アプリケーションと各コンポーネントをインストールします。
スタンドアロン (DB2 と共に) デプロイメント・スタイルを使用してインストールすることを計画している場合は、次のようにします。
3. スタンドアロン・サーバーまたはスタンドアロン・ワークステーションのどちらをインストールするかを決定します。
4. デプロイメント・タイプ固有の手順を使用します。

次のタスク

最後のインストーラー・パネルに表示される成功メッセージは、検証テストがインストール・プロセスの一環として自動的に実行されたことを示します。ログ・ファイルでインストールが正常に完了したことを確認することもできます。インストールが成功しなかった場合は、ログ・ファイルを調べ、トラブルシューティング・トピックのユーザー支援情報を使用してください。

インストール後に、フィーチャーを追加または削除したり (例えば、アプリケーションや別の言語翻訳の追加)、構成設定を変更したりする場合、再度 IBM Installation Manager を実行して「変更」を選択することができます。

関連概念:

23 ページの『スタンドアロンまたはカスタム・インストール・デプロイメント・タイプ』

191 ページの『基本インストールの検証』

関連タスク:

インストールの計画

インストールを開始するには、その前に、InfoSphere MDM デプロイメント・スタイルに関する重要な決定を行う必要があります。重要なインストール情報を計画および収集するのに役立つ、いくつかのインストールおよび構成ワークシートも用意されています。

スタンドアロンまたはカスタム・インストール・デプロイメント・タイプ

IBM InfoSphere Master Data Management は、スタンドアロン・インストール (DB2 と共に)、またはカスタム・インストールのいずれかを使用してインストールできます。

InfoSphere MDM 各種エディションは、マスター・データ機能をバンドルしており、IBM Installation Manager を使用してインストールされます。IBM WebSphere Application Server、IBM DB2 (DB2 データベースを使用する場合)、IBM Rational Application Developer (InfoSphere MDM Workbench を使用する場合) などの追加ソフトウェアも IBM Installation Manager によってインストールされます。

選択するインストール・タイプは、以下のような多くの考慮事項に応じて決まります。

- クリーンなサーバーまたはワークステーションにインストールしているかどうか
- 既存のデータベースおよびアプリケーション・サーバーがインストールされているかどうか
- コンポーネントをデプロイするサーバーまたはワークステーションの数
- インストールするメッセージング・サーバー
- インストール・プロセスで採用する自動化の度合い

関連タスク:

21 ページの『第 3 章 製品のインストール』

スタンドアロン・インストール・デプロイメント・タイプ

スタンドアロン・インストールでは、InfoSphere MDM、IBM WebSphere Application Server、および IBM DB2 を、IBM Installation Manager の 1 回の実行でインストールします。

スタンドアロン・ワークステーション・インストールでは、追加で InfoSphere MDM Workbench および IBM Rational Application Developer が含まれます。

スタンドアロン・インストール・デプロイメント・タイプは、インストールを完了してから最初のトランザクションを実行するまでの時間が最も短くなります。

サーバーまたはワークステーションへのスタンドアロン・インストールは、InfoSphere MDM Standard Edition、 Advanced Edition、 および Enterprise Edition でサポートされています。

重要: スタンドアロン・インストール・デプロイメントは、クリーンなサーバー、またはクリーンなワークステーションで実行する必要があります。サーバーまたはワークステーションのマシンには、InfoSphere MDM コンポーネント、IBM WebSphere Application Server、または IBM DB2 がインストール済みであってはなりません。これは、つまり、ワークステーションとサーバー両方のスタンドアロン・インストールを同じマシンで実行できないことを意味します。これらは、それぞれ類似した部分をインストールしようとするので、競合が発生するためです。

以下の場合に、サーバーまたはワークステーションへのスタンドアロン・インストールを使用します。

- 短時間で稼働させる必要がある。
- 新しい IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows データベースの使用を計画している。
- IBM WebSphere Application Server を初めてインストールする。
- Microsoft Windows (ワークステーションのみ)、IBM AIX® (サーバーのみ)、Linux (サーバーのみ)、または Solaris (サーバーのみ) オペレーティング・システムにインストールする予定である。

スタンドアロン・インストールでは、すべての InfoSphere MDM 運用サーバーとデータベース機能が単一のターゲット・コンピューターにインストールされ、グラフィカル・モードまたはサイレント・モードで実行できます。

スタンドアロン・インストールは、ランチパッドを使用して開始されます。ランチパッドが開いたら、スタンドアロン・サーバー・インストールまたはスタンドアロン・ワークステーション・インストールのどちらを使用するかを選択できます。それを選択すると、以下の 2 つのアクションのいずれかが実行されます。

- IBM Installation Manager がまだインストールされていない場合は、それをインストールします。
- IBM Installation Manager がインストールされている場合は、それを開始します。IBM Installation Manager が最新版でなかった場合は、自動的に更新が始まります。

インストールの完了後、戻って「インストールの変更」オプションを使用し、追加のコンポーネントをインストールすることを選択できます。

関連資料:

9 ページの『IBM Installation Manager によりインストールされるフィーチャー』

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に):

スタンドアロン・サーバー・インストールは、サーバーに InfoSphere MDM エディション、IBM WebSphere Application Server、および IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows をインストールするように選択していることを意味します。

この図は、スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) を示しています。

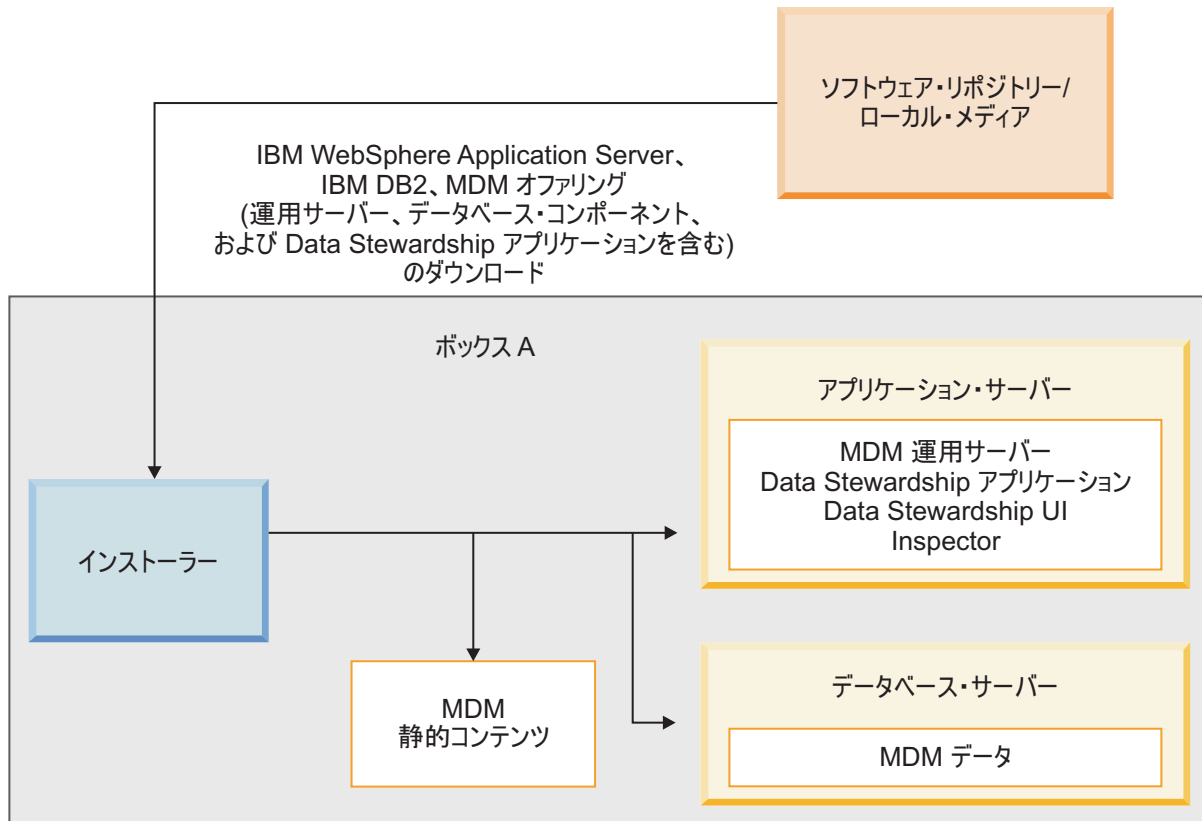


図 3. スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) では、IBM Installation Manager は以下の処理を実行します。

1. IBM WebSphere Application Server (Network Deployment) を、デフォルト・メッセージングと IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows と共にインストールする。
2. InfoSphere MDM オペレーショナル・サーバー、データベース・コンポーネント、および 2 つの Data Stewardship アプリケーション (InfoSphere MDM Data Steward UI および InfoSphere MDM Inspector) をインストールする。MDM 静的コンテンツは、インストーラーがインストール・ディレクトリー (`MDM_INSTALL_HOME`) に抽出するコンテンツです。静的コンテンツには、バッチ・プロセッサ、管理エージェント、管理コンソール、MDM コレクター、MDM 構成スクリプト (`madconfig` ユーティリティ・スクリプト) などのクライアント・アプリケーションや、デフォルト設定を使用する他のアプリケーションが含まれることがあります。
3. IBM WebSphere Application Server プロファイルを自動で作成し、データベース、アプリケーション・サーバー、および Data Stewardship アプリケーションを構成する。
4. インストール・プロセスは最後に、MDM コンポーネントをアプリケーション・サーバーにデプロイする。

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) が完了した後で、変更オプションを使用してさらにコンポーネントをインストールできます。

関連タスク:

70 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』

関連資料:

9 ページの『IBM Installation Manager によりインストールされるフィーチャー』

スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に):

スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) は、InfoSphere MDM エディション、IBM WebSphere Application Server、IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows、IBM Rational Application Developer、および InfoSphere MDM Workbench を Microsoft Windows または Linux ワークステーションにインストールするように選択していることを意味します。

この図は、スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) を示しています。サーバーのシナリオと同じように、IBM WebSphere Application Server (基本デプロイメント)、IBM DB2、使用する InfoSphere MDM エディション、および InfoSphere MDM Workbench をダウンロードします。

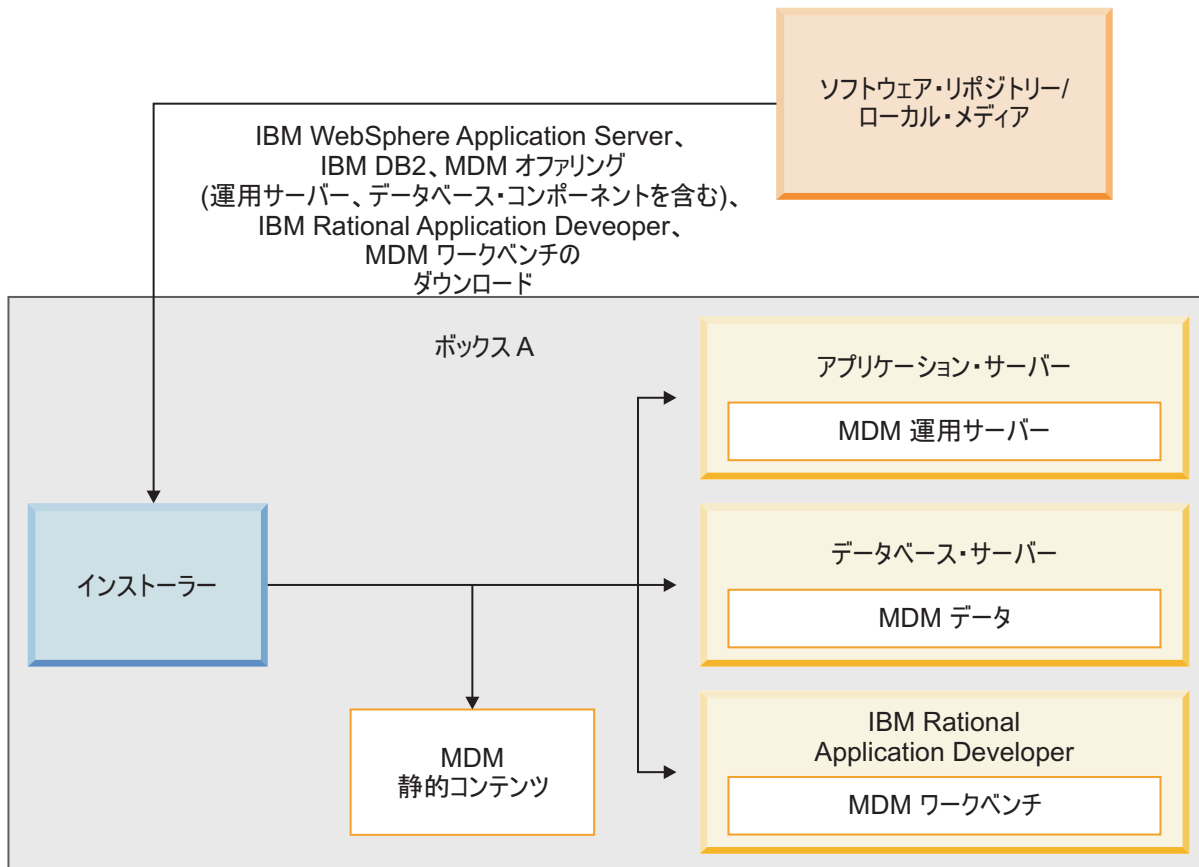


図4. スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に)

DB2 付きのスタンドアロン・ワークステーション・インストールでは、IBM Installation Manager は以下の処理を実行します。

1. IBM WebSphere Application Server (基本デプロイメント) を、デフォルト・メッセージング、IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows、および IBM Rational Application Developer と共にインストールする。
2. InfoSphere MDM Workbench を IBM Rational Application Developer にインストールする。
3. MDM 運用サーバーおよびデータベース・コンポーネントをインストールする。MDM 静的コンテンツは、インストーラーがインストール・ディレクトリー (*MDM_INSTALL_HOME*) に抽出するコンテンツです。静的コンテンツには、バッチ・プロセッサ、管理エージェント、管理コンソール、MDM コレクター、MDM 構成スクリプト (**madconfig** ユーティリティー・スクリプト) などのクライアント・アプリケーションや他のアプリケーションが含まれることがあります。
4. IBM WebSphere Application Server プロファイルを自動で作成し、データベース、アプリケーション・サーバー、および Data Stewardship アプリケーションをデフォルト設定で構成する。
5. アプリケーション・サーバーに InfoSphere MDM コンポーネントをデプロイする。

関連タスク:

79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のインストール』

関連資料:

9 ページの『IBM Installation Manager によりインストールされるフィーチャー』

カスタム・インストール・デプロイメント・タイプ

カスタム・インストールは、可能性のあるほぼすべてのデプロイメント・シナリオに InfoSphere MDM をデプロイします。大部分の InfoSphere MDM デプロイメントでは、カスタム・インストール・デプロイメント・タイプを必要とします。

カスタム・インストールは、以下のどの条件においても InfoSphere MDM のデプロイに使用します。

- デプロイメントが IBM DB2 for z/OS、Microsoft SQL Server、または Oracle データベースを使用する。
- 既にインストールおよび構成が完了しているデータベースの使用を計画している。
- クラスタ環境でのインストール。
- IBM WebSphere Application Server がインストールされているサーバーまたはワークステーションにインストールしており、Deployment Manager (DMgr) が実行中である。
- 構成済みの IBM WebSphere Application Server クラスタにインストールしており、すべてのノード・エージェントが実行中である。
- WebSphere MQ がインストールされており、リスナーが実行中である。
- 1 つの InfoSphere MDM オファリング (Standard Edition、Advanced Edition、または Enterprise Edition など) のみをインストールしている。

カスタム・インストールを実行すると、InfoSphere MDM アプリケーションおよびユーザー・インターフェース・アプリケーションの複数のターゲット・サーバーを選択することも、単一のターゲット・サーバーにすべてをインストールすることもできます。カスタム・インストールは、グラフィカル・モードまたはサイレント・モードで実行できます。

以下の図は、クラスター環境でのカスタム・デプロイメントを示しています。

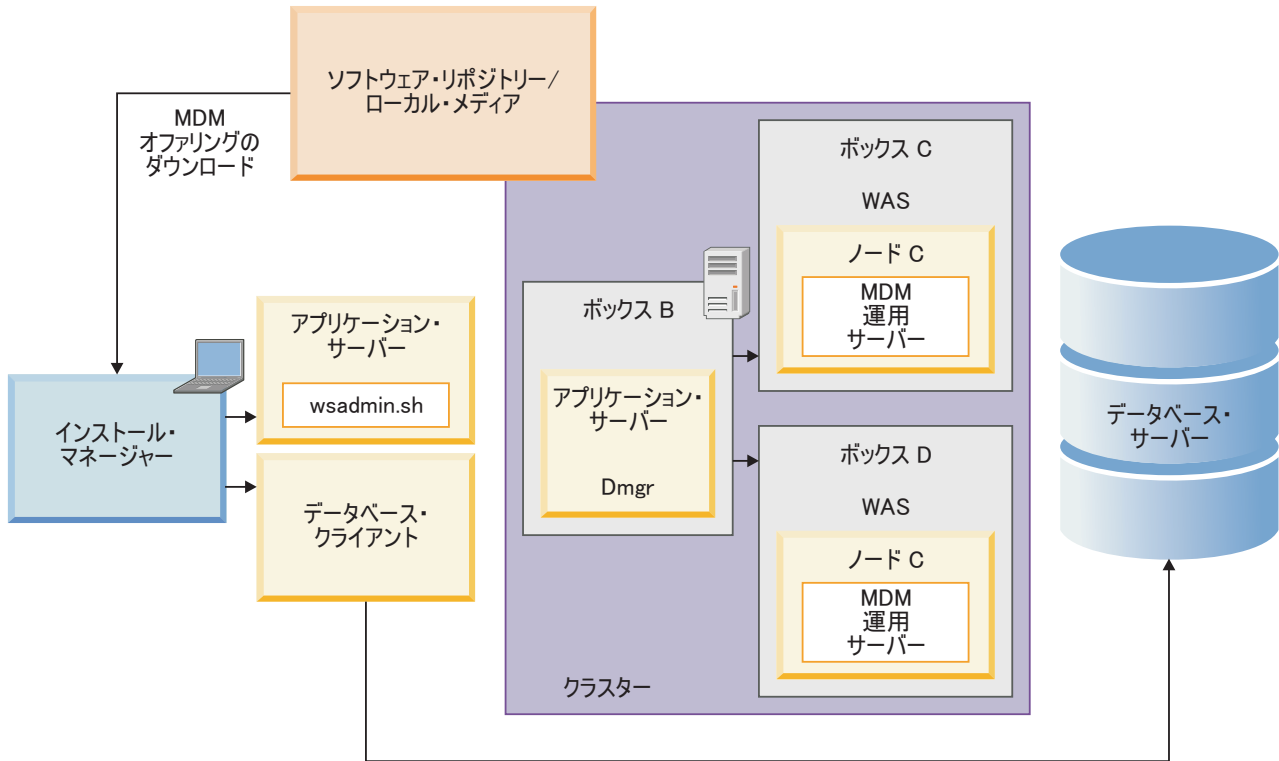


図 5. クラスター環境でのカスタム・インストール

InfoSphere MDM インストールが完了した後、戻ってインストール・オプションを変更して、追加コンポーネントをインストールすることもできます。

関連概念:

29 ページの『高可用性環境のサポート』

関連タスク:

86 ページの『カスタム・デプロイメントの準備』

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

グラフィカル・インストールまたはサイレント・インストール

InfoSphere MDM をグラフィカル・モードまたはサイレント・モードでインストールできます。使用している環境にはどちらのインストール方法が適切か考慮してください。

グラフィカル・モード

IBM Installation Manager を実行しているコンピューターがグラフィカル・ユーザー・インターフェースをレンダリングできる場合、優先されるオプションはグラフィカル・モードです。IBM Installation Manager によって、フィーチャーや基本パラメーター構成を順番に選択できる一連の画面が表示され、インストール開始前に選択したオプションの要約が示されます。

サイレント・モード

複数のコンピューターに同じインストールを行う計画の場合、サイレント・オプションを考慮することがあります。サイレント・インストールはコマンド行から開始し、応答ファイルを使用します。このオプションでは、インストール・オプションを指定する必要はありません。代わりに、応答ファイルからインストール・オプションが読み取られます。応答ファイルは、手動で作成することも、グラフィカル・インストール・ウィザードを使用して作成することもできます。応答ファイルは、ソフトウェアをインストールせずに作成でき、またインストール中に作成することができます。インストール・プロセスで取られたステップや発生したエラーは、ファイルに記録されます。

関連資料:

160 ページの『サイレント・インストール』

高可用性環境のサポート

高可用性環境での InfoSphere MDM のインストール済み環境をサポートするために、複数のホスト・サーバーに複数インスタンスを構成することができます。この構成を実施することによって、1 つのサーバーまたはインスタンスがダウンした場合に、他のサーバーまたはインスタンスでトラフィックの処理を続行することができます。

ヒント: InfoSphere MDM を高可用性環境にデプロイするには、カスタム・インストール・パスを使用してデプロイする必要があります。

MDM 運用サーバーは IBM WebSphere Application Server コンテナを使用するので、単一サーバーにデプロイすることも、コンテナ内に構成されたクラスターにデプロイすることも可能です。クラスターは、サーバー上に事前構成することができます。インストーラーでは、クラスター環境を検出し、カスタム・インストールを使用してその環境にデプロイすることができます。

高可用性とクラスター環境の要件に対応する方法をより深く理解するために、インストールを開始する前にインストール・シナリオを確認してください。

関連概念:

51 ページの『インストール・シナリオ』

27 ページの『カスタム・インストール・デプロイメント・タイプ』

関連タスク:

84 ページの『カスタム・デプロイメントのインストール』

インストールおよび構成のワークシート

インストール・ワークシートには、InfoSphere MDM のインストール・プロセス中に指定する必要がある値がすべてリストされています。各コンポーネントをインストールする前に、インストール・ワークシートの作成を完了しておくこと、インストールの計画、時間の節約、およびインストールと構成のプロセス時の一貫性の強制に役立てることができます。

DB2 付きのスタンドアロン・インストールを実行する場合、インストール・アプリケーションはデフォルトの構成をいくつか使用します。そうすることで、ユーザーが入力する必要のある量を制限しています。

これらのワークシートを実装を計画しているランタイム環境ごとに再利用します。例えば、実稼働環境、テスト環境、およびトレーニング環境が存在する場合があります。

これらのワークシートを使用して、アプリケーションおよびコンポーネントに関する重要な詳細情報 (IBM Installation Manager で定義する基本構成設定を含む) を集めてください。IBM Installation Manager の外部で必要になる、運用サーバー、ユーザー・アプリケーション、またはコンポーネントの構成手順は、個々のアプリケーションまたはコンポーネントのトピックで説明されています。

関連タスク:

70 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』

79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のインストール』

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』

インストール・ディレクトリー・ワークシート

このワークシートを使用して、InfoSphere MDM をインストールするホストのルート・ディレクトリーを記録します。

後でさらにランタイム環境をインストールする場合、それらが、初期環境で使用されたデータベースと同じデータベースを指さない場合があります。複数のランタイム環境をインストールする場合、インストール・ワークシートを再使用して、環境ごとに固有のディレクトリー値を定義します。

Microsoft Windows 上にインストールする場合、

- Windows レジストリーに書き込むために、IBM Installation Manager を管理者モードで実行する必要があります。管理者モードは、IBM AIX、Linux、または Solaris では使用されません。
- Microsoft Windows 7 オペレーティング・システムの場合、仮想化されていないディレクトリーに MDM をインストールする必要があります。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager に表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表 6. InfoSphere MDM インストール・ディレクトリー・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
既存のパッケージ・グループの使用	<p>InfoSphere MDM コンポーネントを既存の Eclipse シェルまたはディレクトリーにインストールする場合は、このオプションを選択します。このオプションを選択した場合、ディレクトリー名は変更できません。</p> <p>以前に IBM Installation Manager を使用して他の製品 (例えば、IBM Rational Application Developer) をインストールした場合は、このオプションを選択しないでください。</p> <p>InfoSphere MDM Workbench は IBM Rational Application Developer と同じパッケージ・グループにインストールする必要があります。</p>	
新規パッケージ・グループの作成	<p>このオプションはデフォルト設定です。IBM Installation Manager によって、選択したルート・ディレクトリーの下にデフォルトの IBM/MDM ディレクトリーが作成されます。また、ディレクトリーに任意の名前を付けることもできます。</p> <p>例えば、<code>MDM_INSTALL_HOME/IBM/MDM_test</code> や <code>MDM_INSTALL_HOME/IBM/MDM_prod</code> です。</p>	

DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート

このデータ・ソース・ワークシートを使用して、MDM 運用サーバーを接続する IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows または IBM DB2 for z/OS データ・ソースのパラメーターを指定します。

仮想 MDM の場合、IBM AIX、Linux、または Solaris のすべてのデータ・ソース情報は `MDM_INSTALL_HOME/conf` ディレクトリーにある `odbc.ini` ファイルに保管されます。物理 MDM では、データ・ソース情報を保管する必要はありません。

データベースとユーザー・アカウントに名前を定義する場合、関連付けられるデータベース・インスタンス、ユーザー・アカウント、およびデータ・ソース構成に同じ名前を付けることを検討します。また、名前に InfoSphere MDM のバージョンを

含めることもできます。この命名規則を使用すると、組織内の他のメンバーや IBM ソフトウェア・サポートが、インスタンス、アカウント、データベースの間のマッピングを理解するために役立ちます。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager に表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表 7. IBM DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
データベース・タイプ	DB2 for Linux, UNIX, and Windows と DB2 for z/OS は、いずれも InfoSphere MDM の全エディションでサポートされます。	
データベース・ホスト名	データベースがインストールされているホストの完全修飾アドレスを識別します。デフォルトは localhost です。	
データベース・ポート	データベース・ポートを識別します。または指定されているデフォルト・ポート番号を使用します。DB2 のデフォルトは 50000 です。	
データベース・ユーザー名	データベース・ユーザー名には DBA 特権がなければなりません。 ユーザー名およびパスワードの、長さ制限とサポートされる文字は、オペレーティング・システムで課される制限に応じて異なります。 スタンドアロン・インストールを使用して InfoSphere MDM をインストールすると、DB2 データベースのユーザー名およびパスワードはデフォルトで、Linux および UNIX の場合は mdminst11 に、Microsoft Windows の場合は db2admin になります。	
データベース・パスワード	データベース・ユーザー名のパスワードを指定します。	

表 7. IBM DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
データベース名	<p>InfoSphere MDM データベースを識別する名前を指定します。デフォルトは MDMDB です。</p> <p>名前は 12 文字以下の英数字で構成する必要があります。名前に、下線 (_) 文字を使用できます。その他の文字はサポートされません。</p>	
データベース・ホーム	<p>カスタム・インストールの場合、データベースがインストールされている場所の完全修飾ディレクトリーを指定します。SQLLIB 親ディレクトリーを指定します。以下に例を示します。</p> <p>Windows: C:\%Program Files\IBM\SQLLIB</p> <p>AIX、Linux、または Solaris: /home/db2inst1/sqllib</p>	
データベース・スキーマ	<p>データベース・スキーマ名を指定します。デフォルトでは、スキーマ名はデータベース・アプリケーション・ユーザーと同じです。</p>	
MDM データベースの手動インストール	<p>物理 MDM データベースを手動でインストールすることを計画している場合は、「手動データベース・インストールのためのスクリプトを抽出する (Extract scripts for manual database installation)」オプションを選択できます。インストール・アプリケーションは、手動インストールの完了を可能にするスクリプトを抽出します。</p> <p>このオプションを選択しても、仮想 MDM 表はインストールされます。</p> <p>このパラメーターを使用できるのは、MDM データベースが他のコンポーネントなしで単独でインストールされている場合のみです。</p>	

表 7. IBM DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
表スペースの名前	<p>事前に表スペースを作成している場合、それらの名前をインストール・アプリケーションに指定できるようにメモしておく必要があります。以下の表スペースが必要です (括弧内はデフォルト名):</p> <ul style="list-style-type: none"> • 4K 表スペース (TBS4K) • 8K 表スペース (TBS8K) • 16K 表スペース (TBS16K) • 索引スペース (INDEXSPACE) • EME 表スペース (EMESPACE1) • PME 表スペース (EMESPACE2) • LongSpace (LONGSPACE) 	

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

98 ページの『DB2 データベースの準備』

Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシート

Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシートを使用して、MDM 運用サーバー の接続先のデータ・ソースのパラメーターを識別します。

InfoSphere MDM Standard Edition の場合、IBM AIX®、Linux、または Solaris のすべてのデータ・ソース情報は `MDM_INSTALL_HOME/conf` ディレクトリーにある `odbc.ini` ファイルに保管されます。

データベースとユーザー・アカウントに名前を定義する場合、関連付けられるデータベース・インスタンス、ユーザー・アカウント、およびデータ・ソース構成に同じ名前を付けることを検討します。また、名前に InfoSphere MDM のバージョンを含めることもできます。この命名規則を使用すると、組織内の他のメンバーや IBM ソフトウェア・サポートが、インスタンス、アカウント、データベースの間のマッピングを理解するために役立ちます。

重要: ビジネス管理、Data Stewardship、および Product Management ユーザー・アプリケーションでは、Microsoft SQL Server データベースとの併用はサポートされていません。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager に表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表 8. Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
データベース・タイプ	Microsoft SQL Server は、InfoSphere MDM Standard Edition のみでサポートされます。タイプは MSSQLU である必要があります。	
データベース・ホスト名	データベースがインストールされているホストの完全修飾アドレスを識別します。デフォルトは localhost です。	
データベース・ポート	データベース・ポートを識別します。または指定されているデフォルト・ポート番号を使用します。Microsoft SQL Server のデフォルトは 1433 です。	
データベース・ユーザー名	データベース・ユーザー名には DBA 特権がなければなりません。 ユーザー名およびパスワードの、長さ制限とサポートされる文字は、オペレーティング・システムで課される制限に応じて異なります。	
データベース・パスワード	データベース・ユーザー名のパスワードを指定します。	
データベース名	MDM データベースを識別する名前を指定します。デフォルトは MDMDB です。	
データベース・サーバー名	MDM データベース・インスタンスの接続先のデータベース・サーバーの名前を指定します。	
データベース・ファイル・グループ	データベースのファイル・グループの名前を指定します。ファイル・グループとは、データベース内のオブジェクト (ファイルのコレクション) をグループ化する論理構造です。Microsoft SQL Server では、ファイル・グループは、データ配置と管理用タスク (バックアップ操作とリストア操作など) に役立つために使用されます。	

表 8. Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
Windows ネイティブ認証の使用	<p>運用サーバーが Microsoft Windows の資格情報を使用して、データベースから認証を受けるかどうかを選択します。デフォルトは、SQL Server の資格情報の使用です。</p> <p>Windows 認証を使用する予定の場合、データベース管理者は、ログイン・ユーザーのデフォルト・スキーマを IBM Installation Manager が使用するスキーマに設定しなければなりません。</p>	
MDM データベースの手動インストール	<p>物理 MDMデータベースを手動でインストールする場合は、このオプションを選択して、手動インストールで使用されるスクリプトを解凍します。</p> <p>このオプションを選択しても、仮想 MDM 表はインストールされます。</p>	

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

102 ページの『Microsoft SQL Server データベースの準備』

Oracle データ・ソース・ワークシート

Oracle データ・ソース・ワークシートを使用して、MDM 運用サーバーの接続先のデータ・ソースのパラメーターを明確にします。

InfoSphere MDM Standard Edition の場合、IBM AIX、Linux、または Solaris のすべてのデータ・ソース情報は `MDM_INSTALL_HOME/conf` ディレクトリーにある `odbc.ini` ファイルに保管されます。

データベースとユーザー・アカウントに名前を定義する場合、関連付けられるデータベース・インスタンス、ユーザー・アカウント、およびデータ・ソース構成に同じ名前を付けることを検討します。また、名前に InfoSphere MDM のバージョンを含めることもできます。この命名規則を使用すると、組織内の他のメンバーや IBM ソフトウェア・サポートが、インスタンス、アカウント、データベースの間のマッピングを理解するために役立ちます。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager に表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表9. Oracle データ・ソース・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
データベース・タイプ	Oracle はすべての InfoSphere MDM エディションでサポートされています。	
データベース・ホスト名	データベースがインストールされているホストの完全修飾アドレスを識別します。デフォルトは localhost です。	
データベース・ポート	データベース・ポートを識別します。または指定されているデフォルト・ポート番号を使用します。Oracle のデフォルトは 1521 です。	
データベース・ユーザー名	データベース・ユーザー名には DBA 特権がなければなりません。Oracle の場合、DB ユーザー名およびスキーマ名を同じにする必要があります。 ユーザー名およびパスワードの、長さ制限とサポートされる文字は、オペレーティング・システムで課される制限に応じて異なります。	
データベース・パスワード	データベース・ユーザー名のパスワードを指定します。	
データベース名	データベース名を指定します。	
データベース・ホーム	データベースがインストールされている場所の完全修飾ディレクトリーを指定します。以下に例を示します。 Windows: C:¥App¥oracle¥product ¥11.2.0¥db_1 IBM AIX、Linux、または Solaris: /home/mdm/oracle/product/11.2.0/db_1	

表9. Oracle データ・ソース・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
MDM データベースの手動インストール	<p>物理 MDM データベースを手動でインストールすることを計画している場合は、 「手動データベース・インストールのためのスクリプトを抽出する (Extract scripts for manual database installation)」 オプションを選択できます。インストール・アプリケーションは、手動インストールの完了を可能にするスクリプトを抽出します。</p> <p>このオプションを選択しても、仮想 MDM 表はインストールされます。</p> <p>このオプションが使用可能となるのは、MDM データベースが他のコンポーネントなしで単独でインストールされているときだけです。</p>	
表スペースの名前	<p>事前に表スペースを作成している場合、それらの名前をインストール・アプリケーションに指定できるようにメモしておく必要があります。以下の表スペースが必要です (括弧内はデフォルト名):</p> <ul style="list-style-type: none"> • 4K 表スペース (TBS4K) • 8K 表スペース (TBS8K) • 16K 表スペース (TBS16K) • 索引スペース (INDEXSPACE) • EME 表スペース (EMESPACE1) • PME 表スペース (EMESPACE2) • LongSpace (LONGSPACE) 	

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

104 ページの『Oracle データベースの準備』

WebSphere Application Server インストール・ワークシート

IBM WebSphere Application Server 構成ワークシートを使用して、MDM 運用サーバー をホストするために使用するアプリケーション・サーバー用のパラメーターを特定します。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager に表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表 10. IBM WebSphere Application Server インストール・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
デプロイメント・タイプ	<p>デプロイメント・タイプを指定し、IBM WebSphere Application Server プロファイル名を指定します。Network Deployment Edition または Base Edition (unmanaged) を選択できます。</p> <p>Network Deployment は、サーバーまたはクラスター・インストールに使用します。Base デプロイメントは、通常、ワークステーションまたはデモンストレーション・インストールに使用します。</p> <p>Network Deployment を選択した場合、インストーラーで一連のコマンドが IBM WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロセスに対して実行され、アプリケーション・サーバーの構成とアプリケーションのデプロイが行われます。デプロイメント・マネージャーとノード・エージェントが構成され実行されてからでなければ、デプロイメントを始められません。例えば、プロファイル名 Dmgr01 を使用します。</p> <p>Network Deployment を選択した場合、インストーラーは IBM WebSphere Application Server クラスターに対しても実行することができます。インストール・プログラムは、自動的にクラスターを検出します。クラスターを構成している場合、デフォルトでは、クラスターにアプリケーションをデプロイします。代わりに、アプリケーションを単一サーバーにデプロイするように選択できます。</p> <p>Base を選択すると、オペレーショナル・サーバーは IBM WebSphere Application Server Base の server1 にデプロイされます。インストーラーで一連のコマンドが server1 に対して実行され、アプリケーション・サーバーが構成されてアプリケーションがデプロイされます。server1 が実行中であることを確認してから、デプロイメントを始めてください。例えば、プロファイル名 AppSrv1 を使用します。</p>	

表 10. IBM WebSphere Application Server インストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
IBM WebSphere Application Server ホーム	IBM WebSphere Application Server をインストールする完全修飾ディレクトリを指定します。Linux および UNIX のデフォルトは、/opt/IBM/WebSphere/AppServer です。Microsoft Windows のデフォルトは、C:%Program Files (x86)%IBM%WebSphere%AppServer です。	
IBM WebSphere Application Server プロファイル・ホーム	基本デプロイメントを使用する場合、アプリケーション・サーバー・プロファイルのホーム・ディレクトリの絶対パスを指定します。Linux および UNIX のデフォルトは、/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles です。Microsoft Windows のデフォルトは、C:%Program Files (x86)%IBM%WebSphere%AppServer%profiles です。	
既存の Deployment Manager にフェデレート (Federate into an existing Deployment Manager)	新しく作成した管理対象ノードを既存の Deployment Manager にフェデレートする場合、「 既存の Deployment Manager にフェデレート (Federate into an existing Deployment Manager) 」オプションを選択します。	
Deployment Manager プロファイル名 (Deployment Manager profile name)	Deployment Manager のプロファイルの名前を入力します。その名前がまだ使用されていないことを確認してください。これが適用可能となるのは、デプロイメント・タイプが Network Deployment であり、「 既存の Deployment Manager にフェデレート (Federate into an existing Deployment Manager) 」オプションが選択されている場合だけです。	
Deployment Manager プロファイル・ホーム (Deployment Manager profile home)	Deployment Manager プロファイルのホーム・ディレクトリの絶対パスを指定します。	
ホスト名	IBM WebSphere Application Server がインストールされるホストの完全修飾アドレスを指定します。デフォルトは localhost です。	

表 10. IBM WebSphere Application Server インストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
SOAP ポート	リモート・デプロイメントを使用している場合は、リモート・コンピューター上のデプロイメント・マネージャーの SOAP ポートを指定します。デフォルトは 8879 です。	
ユーザー名	IBM WebSphere Application Server ユーザー名を指定します。このユーザーには、管理特権がなければなりません。	
パスワード	IBM WebSphere Application Server ユーザー・パスワード。	
セル	InfoSphere MDM をデプロイする IBM WebSphere Application Server セルを指定します。 既に IBM WebSphere Application Server がインストールされて構成されている場合は、インストール・プロセス中に「 ホスト詳細の取得 (Retrieve Host Details) 」をクリックし IBM Installation Manager に、セル、ノード、およびサーバーの情報を取得させることができます。	
ノード	InfoSphere MDM をデプロイする IBM WebSphere Application Server セルを指定します。 IBM Installation Manager でセルを選択した後、そのセル内のすべてのノードがリストで使用可能になります。	
サーバー	InfoSphere MDM をデプロイするサーバーを指定します。 IBM Installation Manager でノードを選択した後、そのノードで使用可能なすべてのサーバーがリストに表示されます。 デプロイメントのために新しいサーバーを作成する場合は、構成パネルで新しい名前を指定でき、指定した名前のサーバーがインストール処理中に IBM WebSphere Application Server に作成されます。	

表 10. IBM WebSphere Application Server インストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
管理対象ノードのプロファイル名 (Managed node profile name)	管理対象ノードのプロファイル名を入力します。その名前がまだ使用されていないことを確認してください。これが適用可能となるのは、デプロイメント・タイプが Network Deployment の場合だけです。	
管理対象ノードのプロファイル・ホーム (Managed node profile home)	管理対象ノードのプロファイルのホーム・ディレクトリーの絶対パスを指定します。	
クラスターへの MDM アプリケーションのインストール	既存の WebSphere Application Server クラスターがある場合は、構成パネルでこのオプションを使用できます。 InfoSphere MDM アプリケーションをクラスター環境にインストールする場合は、このオプションを選択します。	
クラスター	クラスター環境にインストールしている場合は、アプリケーションをデプロイするクラスターを選択します。	

関連概念:

89 ページの『アプリケーション・サーバーのインストールおよびセットアップ』

InfoSphere MDM アプリケーション構成ワークシート

アプリケーション構成ワークシートを使用して、MDM 運用サーバーのパラメーターを明確にします。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager の「アプリケーションの構成」パネルに表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表 11. MDM アプリケーションのインストール・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
MDM アプリケーション名	MDM 運用サーバーの名前を指定します。この名前は IBM WebSphere Application Server で使用されます。デフォルトは E001 です。	

表 11. MDM アプリケーションのインストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
MDM ユーザー名	このインスタンスの InfoSphere MDM が MDM クライアント・アプリケーションとユーザー・インターフェースにログインする際に使用される、ユーザー名を指定します。 注: このユーザーは、InfoSphere MDM インスタンスを管理する WebSphere Application Server admin ユーザーではないので、そのユーザー名と一致している必要はありません。	
MDM ユーザー・パスワード	MDM ユーザーのパスワードを指定します。	
RMI ポート	リモート・メソッド呼び出し (RMI) レジストリー・サービスが他のサービスからの接続のために listen するポートを指定します。クラスター環境では、すべてのノードで同じ RMI ポートを使用して通信を行う必要があります。デフォルトは 9999 です。 注: MDM 運用サーバーは、RMI を使用して、トランザクション要求および応答を送受信します。	
マッチング・スタイル	確率的マッチング・スタイルか決定論的マッチング・スタイルのいずれを使用するかを指定します。	
複数のタイム・ゾーンへのデプロイメントを使用可能にする (Enable multiple time zone deployment)	このオプションは、いくつかのタイム・ゾーンでアプリケーションが実行される場合、またはタイム・ゾーンごとにデータの値が時間に依存する場合に選択します。	
デフォルト・タイム・ゾーン (Default time zone)	クライアントのデフォルト・タイム・ゾーンをリストから選択します。タイム・ゾーンを指定しない場合は、アプリケーション・サーバーのタイム・ゾーンが使用されます。	

表 11. MDM アプリケーションのインストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
メッセージング	<p>実装のメッセージング・タイプを指定します。</p> <p>内部 WebSphere メッセージングを使用する場合は、「IBM WebSphere Default Messaging」を選択します。</p> <p>おそらくほとんどの仮想 MDM 構成で、「IBM WebSphere Default Messaging」が選択され、Message Brokers フィーチャーがインストールされるでしょう。</p> <p>IBM WebSphere MQ は別個のエンタープライズ製品であるため、InfoSphere MDM をインストールする前にインストールする必要があります。IBM WebSphere MQ を選択する場合、以下のパラメーターの値を指定します。</p>	
メッセージ・キュー・ホーム	<p>メッセージ・キュー・ホームの完全修飾ディレクトリーを指定します。Linux および UNIX のデフォルトは、/usr/mqm です。Microsoft Windows のデフォルトは、C:\Program Files (x86)\IBM\WebSphere\MQ です。</p>	
キュー・マネージャー名	<p>キュー・マネージャーの名前を指定します。例えば、CUSTOMER.QUEUE.MANAGER です。</p>	
MQ ホスト名	<p>WebSphere MQ をホスティングしているサーバーの名前を指定します。</p>	
MQ ポート	<p>WebSphere MQ が listen するポート番号を指定します。</p>	
チャンネル名	<p>チャンネル名を指定します。チャンネルはキュー・マネージャー間のメッセージの送信に使用されます。</p>	
ユーザー名	<p>WebSphere MQ ユーザー名を指定します。</p>	

表 11. MDM アプリケーションのインストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
パスワード	パスワードを指定します。	
メッセージング・サーバーの構成 (Configure Messaging Server)	このオプションは、パラメーターをデプロイしてメッセージング・サーバーを構成する場合に選択します。	

関連情報:

☞ 複数タイム・ゾーンのサポート

☞ 確率的マッチング・スタイルと決定論マッチング・スタイル

ユーザー・アプリケーションのインストール・ワークシート

このワークシートを使用して、インストールを計画しているユーザー・アプリケーションのパラメーターを記録します。

ユーザー・アプリケーションごとにこのワークシートを再使用するか、またはワークシートにアプリケーション間の相違点をメモします。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager に表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表 12. ユーザー・アプリケーションのインストール・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
デプロイメント・タイプ	IBM WebSphere Application Server のデプロイメントが基本かネットワークのいずれであるかを指定します。 Network Deployment は、サーバーまたはクラスター・インストールに使用します。 Base デプロイメントは、通常、ワークステーションまたはデモンストレーション・インストールに使用します。	
IBM WebSphere Application Server プロファイル・ホーム	基本デプロイメントを使用する場合、アプリケーション・サーバー・プロファイルのホーム・ディレクトリーの絶対パスを指定します。デフォルトは /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles です。	
ホスト名	MDM 運用サーバーがデプロイされている IBM WebSphere Application Server の名前を指定します。	

表 12. ユーザー・アプリケーションのインストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
SOAP ポート	MDM 運用サーバーのポート番号を指定するか、デフォルトの 8879 を使用します。	
ユーザー名	このアプリケーションの管理ユーザー名を指定します。	
パスワード	管理ユーザー・パスワードを指定します。	
セル	アプリケーションをデプロイする IBM WebSphere Application Server セルを指定します。IBM WebSphere Application Server が既にインストールされて構成されている場合は、インストール・プロセス中に「 ホスト詳細の取得 (Retrieve Host Details) 」をクリックして、セル、ノード、およびサーバーの情報を取得します。	
ノード	アプリケーションをデプロイする IBM WebSphere Application Server ノードを指定します。	
サーバー	アプリケーションをデプロイする IBM WebSphere Application Server サーバーを指定します。	
クラスターへの MDM アプリケーションのインストール	既存の WebSphere Application Server クラスターがある場合は、構成パネルでこのオプションを使用できます。このオプションは、クラスター環境に InfoSphere MDM アプリケーションをインストールする場合に選択します。	
クラスター	クラスター環境にインストールしている場合は、アプリケーションをデプロイするクラスターを選択します。	

関連タスク:

181 ページの『Business Administration UI のインストール』

183 ページの『Data Stewardship UI のインストール』

185 ページの『品目保守 UI のインストール』

関連情報:

- ☛ Inspector のインストール
- ☛ Enterprise Viewer のインストール
- ☛ Web Reports のインストール
- ☛ Provider Direct のインストール

ユーザー・アプリケーションと運用サーバーの関連付け:

特定のユーザー・アプリケーションは、仮想または物理のいずれかの MDM 構成をサポートするように設計されています。

次の表では、ユーザー・アプリケーションを、それらがサポートしている InfoSphere MDM 構成と関連付けています。

表 13. InfoSphere MDM ユーザー・アプリケーション

仮想 MDM アプリケーション	物理 MDM アプリケーション
InfoSphere MDM Inspector	InfoSphere MDM Business Administration
InfoSphere MDM Enterprise Viewer	InfoSphere MDM Data Stewardship
InfoSphere MDM Web Reports	InfoSphere MDM Product Maintenance
InfoSphere MDM Provider Direct	
InfoSphere MDM Pair Manager	

注: すべてのユーザー・アプリケーションが IBM Installation Manager パネルからインストールされるわけではありません。

関連資料:

- 9 ページの『IBM Installation Manager によりインストールされるフィーチャー』
- 2 ページの『インストール要件』

履歴インストール・ワークシート

このワークシートを使用して、履歴トリガー構成のパラメーターを記録します。

履歴トリガーは物理 MDM 運用サーバーによって使用されます。

物理 MDM データベース履歴表のデータを生成するトリガーは 2 セットあります。最初のセットは、コア表およびドメイン表用です。2 番目のセットは、構成管理表用です。各セットは履歴トリガーと削除トリガーで構成されます。

以下の表にリストされているパラメーターは、IBM Installation Manager に表示されるプロンプトやフィールドと同一です。

表 14. 履歴インストール・ワークシート

パラメーター	説明	ご使用の値
業種	<p>この実装でサポートされる業種タイプを指定します。1 つのタイプのみ指定できます。</p> <p>サポートされる業種タイプは 4 つあります。各オプションによって、その業種タイプのコード表とデータがインストールされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 保険 - 業務の種類が生命保険、健康保険、年金保険、公的年金、損害保険などの場合にこのオプションを選択します。 • 銀行 - 業務の種類が小口金融、商業銀行、クレジット・カード、融資などの場合にこのオプションを選択します。 • 通信 - 業務の種類が無線、ケーブル・テレビ、衛星テレビ、インターネット、電話サービスなどの場合にこのオプションを選択します。 • 製造 - 業務の種類が精密工作機械、航空宇宙、電気、加熱、機械などの場合にこのオプションを選択します。 	

表 14. 履歴インストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
履歴トリガー	<p>履歴トリガー・オプションは 3 つあります。1 つだけ指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし。トリガーを何もインストールしない場合にこのオプションを選択します。このオプションを選択すると、履歴がデータベースに保管されません。 • 単純。更新トリガーのみをインストールする場合にこのオプションを選択します。データベースのレコードが更新されるときに、そのレコードのコピー (更新される前のもの) が履歴表に追加されます。レコードの過去のバージョンが履歴表に保管されます。 • 複合。挿入および更新の両方のトリガーをインストールする場合にこのオプションを選択します。データベースにレコードが追加されるとき、またはデータベースのレコードが更新されるときに、レコードのコピーが履歴表に追加されます。レコードの現在と過去の両方のバージョン・コピーが履歴表に保管されます。 	

表 14. 履歴インストール・ワークシート (続き)

パラメーター	説明	ご使用の値
大/小文字を区別する検索	<p>デフォルトでは、契約、品目、およびカテゴリーの名前を検索する場合、大文字小文字の区別はありません。探索で大/小文字の区別制限を設定する場合にのみ、「大/小文字を区別する検索を有効にする (Enable case-sensitive searches)」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。</p> <p>このフィーチャーは一度アクティブ化されると、データベース・オブジェクトが作成されて、オプションを非アクティブ化することはできません。</p>	
コード表言語	<p>定義済みリストおよびエラー・メッセージに使用される変換済みのコード表値は、物理 MDM 運用サーバーに含まれています。</p> <p>英語がデフォルトの言語です。</p>	
アプリケーション・リソース言語	<p>ユーザー・インターフェースをインストールするための対応言語翻訳を指定します。</p>	

関連情報:

 [大/小文字を区別しない検索](#)

インストール・シナリオ

幾つかの共通のインストール・シナリオがあるので、InfoSphere MDM を類似した環境にインストールする際のガイドラインとして使用できます。こうしたシナリオは可能性のあるすべての構成や環境に対応しているわけではありませんが、複数の製品およびマシンが関係するカスタム・インストールにおける基本的なステップを示しています。

インストールの前に、選択したシステムが、必要なオペレーティング・システム、ハードウェア、ソフトウェア、通信、ディスク、およびメモリーの各要件を満たしていることを確認してください。

こうしたシナリオでは、以下のタスクが完了していることを前提としています。

- 68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』
- 87 ページの『IBM Installation Manager の準備』

- Installation Startup Kit のインストール

インストールを開始する前に、以下の条件が満たされていることを確認してください。

- Dmgr ノード・エージェントがデプロイされ、実行されていることを確認してください。
- AppSrv ノード・エージェントがデプロイされ、実行されていることを確認してください。いくつかのインストール・シナリオでは、WebSphere Application Server AppSrv プロファイルは server1 と呼ばれています。
- `JAVA_HOME` および `PATH` 環境変数が各マシン上で正しく設定されていることを確認してください。
- WebSphere Application Server Network Deployment の場合、`DB2_JDBC_DRIVER_PATH` アプリケーション・サーバー変数のターゲットが、マシンの DB2 JDBC ドライバーが含まれる各ノードであることを確認してください。WebSphere Application Server Base を使用している場合は、このことは当てはまりません。
- Dmgr 処理のためのマシンのホスト名および SOAP ポート番号を確認してください。
- アプリケーション・サーバーのホスト名とブートストラップ・ポート番号を確認してください。このアプリケーション・サーバーには、InfoSphere MDM を実行した結果として、以前に IBM Installation Manager アプリケーションがインストールされています。

関連概念:

29 ページの『高可用性環境のサポート』

関連タスク:

150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』

86 ページの『カスタム・デプロイメントの準備』

シナリオ: IBM DB2 データベースおよび IBM WebSphere MQ メッセージングを使用した、WebSphere Application Server クラスターへの InfoSphere MDM のインストール

このシナリオを、DB2 データベースおよび IBM WebSphere MQ メッセージングを使用して、InfoSphere MDM を WebSphere Application Server クラスターにインストールする際のリファレンスとして使用してください。このシナリオが当てはまるのは、Microsoft Windows、Linux、または UNIX オペレーティング・システム上の DB2 です。

このシナリオを完了するには、4 つの手順が必要です。

1. アプリケーション・サーバーを準備します。
2. DB2 データベースを準備します。
3. IBM WebSphere MQ メッセージングを準備します。
4. InfoSphere MDM をインストールします。

このシナリオでは、トポロジーは次のようになります。

- マシン A:

- WebSphere Application Server Deployment Manager
- DB2 クライアント・ソフトウェア
- IBM Installation Manager および InfoSphere MDM
- マシン B、C、D:
 - WebSphere Application Server 管理対象ノード
 - DB2 クライアント・ソフトウェア
- マシン E:
 - DB2 データベース
- マシン F:
 - IBM WebSphere MQ

IBM DB2 データベースの準備:

この手順を使用して、このシナリオ実行の 2 番目のステップとして DB2 データベースをインストールして準備します。

このタスクについて

この手順によって生じるトポロジーでは、マシン E が DB2 ソフトウェアおよびデータベースをホストし、マシン A、B、C、D には DB2 クライアント・ソフトウェアが含まれます。

手順

1. DB2 データベースをインストールします。ガイドとして IBM DB2 インストール文書を使用します。
 - a. DB2 をマシン E にインストールします。
 - b. DB2 クライアント・ソフトウェアをマシン A、B、C、D にインストールします。
 - c. DB2 クライアントをマシン A にカタログし、マシン E にある DB2 データベースに接続します。このステップをマシン B、C、D に関して繰り返します。
2. Installation Startup Kit に備わっているスクリプトを使用して、データベースとスペースを作成します。

ヒント: ダウンロードした InfoSphere MDM パッケージ・ファイル disk1.zip から、Installation Startup Kit を抽出できます。

3. マシン A の PATH に DB2 クライアントの `$HOME/sql1lib/bin` が含まれていることを確認します。このステップは、SQL スクリプトの実行時に IBM Installation Manager が `$HOME/sql1lib/bin/db2` ユーティリティを実装するために必要となります。

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

98 ページの『DB2 データベースの準備』

関連資料:

31 ページの『DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート』

WebSphere Application Server Network Deployment の準備:

このインストール・シナリオを実行する最初のステップは、アプリケーション・サーバーをインストールして準備することです。

このタスクについて

この手順によって生じるトポロジーでは、マシン A には WebSphere Application Server Deployment Manager が、マシン B、C、D には WebSphere Application Server 管理対象ノードが含まれます。

手順

1. WebSphere Application Server をマシン A、B、C、D にインストールして構成します。ガイドとして、WebSphere Application Server Network Deployment 資料を使用してください。
2. 2 つの WebSphere Application Server クラスターを作成します。CLUSTER1 は MDM 運用サーバー用で、CLUSTER2 はユーザー・アプリケーション用です。
3. クラスターの各ノード用に、DB2_JDBC_DRIVER_PATH WebSphere Application Server 環境変数を作成します。このパスは、それぞれのマシンの JDBC ドライバーを指す必要があります。例えば、DB2 クライアントと JDBC ドライバーが `$USER_HOME/sql1lib/java` にインストールされている場合、DB2_JDBC_DRIVER_PATH が `$USER_HOME` となるように指定します。
4. すべての管理対象ノードが正しく同期されていることを確認してから、InfoSphere MDM のインストールを開始します。
5. InfoSphere MDM インストールを開始する前に、WebSphere Application Server Deployment Manager ホスト名と SOAP ポートを把握していることを確認してください。WebSphere Application Server 構成ワークシートを使用して、使用している値を記録してください。
6. InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、クラスターが開始されていることを確認してください。

関連概念:

89 ページの『アプリケーション・サーバーのインストールおよびセットアップ』

関連タスク:

90 ページの『管理対象サーバー・デプロイメントのための WebSphere Application Server Network Deployment の準備』

100 ページの『クラスター環境で InfoSphere MDM を使用するために DB2 データベースを準備するには』

関連資料:

39 ページの『WebSphere Application Server インストール・ワークシート』

IBM WebSphere MQ の準備:

この手順を使用して、このシナリオ実行の 3 番目のステップとして、IBM WebSphere MQ をインストールして準備します。

手順

1. IBM WebSphere MQ をマシン F にインストールします。ガイドとして IBM WebSphere MQ インストール文書を使用します。
2. WebSphere MQ キュー・マネージャー、チャンネル、およびキューを `custSetupMQServer.mqsc` スクリプトと `ChannelAuth.mqsc` スクリプトを使用して作成します。これらのスクリプトは、Installation Startup Kit に含まれていません。

ヒント: ダウンロードしたパッケージ・ファイル `disk1.zip` から、Installation Startup Kit を抽出できます。

関連資料:

43 ページの『InfoSphere MDM アプリケーション構成ワークシート』

11 ページの『カスタム・インストールのための Installation Startup Kit』

InfoSphere MDM のインストール:

この手順を使用して、このシナリオ実行の最後のステップとして、InfoSphere MDM および選択した任意のユーザー・アプリケーションをインストールします。

このタスクについて

InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、アプリケーション・サーバーとデータベースが開始されていることを確認します。

手順

1. IBM Installation Manager をマシン A で始動し、InfoSphere MDM オファリングを選択します。プロンプトに従って続行します。
2. InfoSphere MDM インストールのホーム・ディレクトリーと共用ディレクトリーを指定します。例えば、MDM_INSTALL ホームとして `/usr/IBM/MDM/E001/mdm` を、共用ディレクトリーとして `/usr/IBM/MDM/E001/Shared` を指定します。
3. 「MDM データベース」、「MDM 運用サーバー (MDM Operational Server)」、およびインストールする任意のユーザー・アプリケーションまたは他のフィーチャーを選択します。例えば、「アプリケーション」フィーチャーを選択して、すべてのユーザー・アプリケーションをインストールするか、特定のアプリケーションを選択してインストールします。
4. 「データベース構成 (Database Configuration)」パネルで、データベース・タイプとデータベース・パラメーターを指定します。「**テスト接続**」または「**接続テスト不要 (No connection test required)**」を選択して、データベース接続をテストするかどうかを選択できます。
5. 「WebSphere Application Server 構成 (WebSphere Application Server Configuration)」パネルで、アプリケーション・サーバー・パラメーターを指定します。「**ホスト詳細の取得 (Retrieve Host Details)**」を選択して、セル、ノード、およびサーバーの情報を入手します。「**クラスターへの MDM アプリケーションのインストール (Install MDM application on cluster)**」を選択します。「**クラスター**」リストから `CLUSTER1` を選択します。

6. 「アプリケーションの構成」パネルで、「IBM WebSphere MQ」メッセージングを選択し、パラメーターを入力します。「メッセージング・サーバーの構成 (Configure messaging server)」オプションをクリアして、IBM Installation Manager がマシン A 上にキュー・マネージャーを作成しないようにします (キュー・マネージャーはマシン F で使用可能なためです)。
7. 各ユーザー・アプリケーション構成パネルで、パラメーターを指定します。「クラスターへの MDM アプリケーションのインストール (Install MDM application on cluster)」を選択します。「クラスター」リストから CLUSTER2 を選択します。
8. 「インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)」をクリックして、前提条件検査を実行します。エラーや警告を検討して修正してから、「再チェック (Recheck)」をクリックします。
9. 検証チェックが成功したら、「インストール」をクリックします。
10. インストールの完了後、ログを表示して、インストール検証ツールを使用します。

関連概念:

87 ページの『IBM Installation Manager の準備』

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

191 ページの『基本インストールの検証』

関連タスク:

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

インストールのトラブルシューティング

シナリオ: Oracle データベースおよび WebSphere デフォルト・メッセージングを使用した、WebSphere Application Server クラスターへの InfoSphere MDM のインストール

このシナリオを、WebSphere Application Server クラスターへの InfoSphere MDM インストールを計画および処理する際のリファレンスとして使用してください。このシナリオでは、Oracle データベースおよび WebSphere デフォルト・メッセージングを使用します。

このシナリオを完了するには、3 つの手順が必要です。

1. アプリケーション・サーバーを準備します。
2. Oracle データベースを準備します。
3. InfoSphere MDM をインストールします。

このシナリオでは、トポロジーは次のようになります。

- マシン A:
 - WebSphere Application Server Deployment Manager
 - Oracle クライアント・ソフトウェア
 - IBM Installation Manager および InfoSphere MDM
- マシン B、C、D:
 - WebSphere Application Server 管理対象ノード
 - Oracle クライアント・ソフトウェア

- マシン E:
 - Oracle データベース

Oracle データベースの準備:

この手順を使用して、このシナリオ実行の 2 番目のステップとして Oracle データベースをインストールして準備します。

このタスクについて

この手順によって生じるトポロジでは、マシン E が Oracle ソフトウェアおよびデータベースをホストし、マシン A、B、C、D には Oracle クライアント・ソフトウェアが含まれます。

手順

1. Oracle データベースをインストールします。ガイドとして、Oracle インストール文書を使用します。
 - a. Oracle をマシン E にインストールします。
 - b. マシン A、B、C、D に、Oracle クライアント・ソフトウェアをインストールします。
 - c. マシン E 上のリモート Oracle データベース・サーバーに接続するために、マシン A 上の TNS 名を指します。
2. Installation Startup Kit に備わっているスクリプトを使用して、データベースと表スペースを作成します。

ヒント: ダウンロードした InfoSphere MDM パッケージ・ファイル disk1.zip から、Installation Startup Kit を抽出できます。

重要: InfoSphere MDM を Oracle と共にインストールする場合は、DB ユーザー名とスキーマ名を同じにする必要があります。

3. Oracle クライアントの sqlplus がマシン A の PATH に含まれていることを確認します。このステップは、SQL スクリプトの実行時に IBM Installation Manager が sqlplus ユーティリティを実装するために必要となります。

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

104 ページの『Oracle データベースの準備』

関連資料:

36 ページの『Oracle データ・ソース・ワークシート』

WebSphere Application Server Network Deployment の準備:

この手順を使用して、このシナリオ実行の最初のステップとしてアプリケーション・サーバーをインストールして準備します。

このタスクについて

この手順によって生じるトポロジでは、マシン A には WebSphere Application Server Deployment Manager が、マシン B、C、D には WebSphere Application Server 管理対象ノードが含まれます。

手順

1. WebSphere Application Server をマシン A、B、C、D にインストールして構成します。ガイドとして、WebSphere Application Server Network Deployment 資料を使用してください。
2. MDM 運用サーバー用に CLUSTER1 という WebSphere Application Server クラスターを作成します。
3. クラスターの各ノード用に、ORACLE_JDBC_DRIVER_PATH WebSphere Application Server 環境変数を作成します。このパスは、それぞれのマシンの JDBC ドライバーを指す必要があります。例えば、Oracle クライアントと JDBC ドライバーが \$USER_HOME/jdbc/lib/ojdbc6.jar にインストールされている場合、ORACLE_JDBC_DRIVER_PATH が \$USER_HOME となるように指定します。
4. すべての管理対象ノードが正しく同期されていることを確認してから、InfoSphere MDM のインストールを開始します。
5. InfoSphere MDM インストールを開始する前に、WebSphere Application Server Deployment Manager ホスト名と SOAP ポートを把握していることを確認してください。WebSphere Application Server 構成ワークシートを使用して、使用している値を記録してください。
6. InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、クラスターが開始されていることを確認してください。

関連概念:

89 ページの『アプリケーション・サーバーのインストールおよびセットアップ』

関連タスク:

90 ページの『管理対象サーバー・デプロイメントのための WebSphere Application Server Network Deployment の準備』

107 ページの『クラスター環境で InfoSphere MDM を使用するために Oracle データベースを準備するには』

関連資料:

39 ページの『WebSphere Application Server インストール・ワークシート』

InfoSphere MDM のインストール:

この手順を使用して、このシナリオ実行の最後のステップとして、InfoSphere MDM および選択した任意のユーザー・アプリケーションをインストールします。

このタスクについて

InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、アプリケーション・サーバーとデータベースが開始されていることを確認します。

手順

1. IBM Installation Manager をマシン A で始動し、InfoSphere MDM オファリングを選択します。プロンプトに従って続行します。

2. InfoSphere MDM インストールのホーム・ディレクトリーと共用ディレクトリーを指定します。例えば、MDM_INSTALL ホームとして /usr/IBM/MDM/E001/mdm を、共用ディレクトリーとして /usr/IBM/MDM/E001/Shared を指定します。
3. 「**MDM データベース**」、 「**MDM 運用サーバー (MDM Operational Server)**」、 およびインストールする任意のユーザー・アプリケーションまたは他のフィーチャーを選択します。例えば、「**アプリケーション**」フィーチャーを選択して、すべてのユーザー・アプリケーションをインストールするか、特定のアプリケーションを選択してインストールします。
4. 「データベース構成 (Database Configuration)」パネルで、データベース・タイプとデータベース・パラメーターを指定します。「**テスト接続**」または「**接続テスト不要 (No connection test required)**」を選択して、データベース接続をテストするかどうかを選択できます。
5. 「WebSphere Application Server 構成 (WebSphere Application Server Configuration)」パネルで、アプリケーション・サーバー・パラメーターを指定します。「**ホスト詳細の取得 (Retrieve Host Details)**」を選択して、セル、ノード、およびサーバーの情報を入手します。「**クラスターへの MDM アプリケーションのインストール (Install MDM application on cluster)**」を選択します。「**クラスター**」リストから CLUSTER1 を選択します。
6. 「**アプリケーションの構成**」パネルで、「**IBM WebSphere デフォルト・メッセージング (IBM WebSphere Default Messaging)**」を選択します。
7. 各ユーザー・アプリケーション構成パネルで、パラメーターを指定します。「**クラスターへの MDM アプリケーションのインストール (Install MDM application on cluster)**」を選択します。「**クラスター**」リストから CLUSTER1 を選択します。
8. 「**インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)**」をクリックして、前提条件検査を実行します。エラーや警告を検討して修正してから、「**再チェック (Recheck)**」をクリックします。
9. 検証チェックが成功したら、「**インストール**」をクリックします。
10. インストールの完了後、ログを表示して、インストール検証ツールを使用します。

関連概念:

87 ページの『IBM Installation Manager の準備』

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

191 ページの『基本インストールの検証』

関連タスク:

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

インストールのトラブルシューティング

シナリオ: SQL Server データベースを使用した Windows 上の WebSphere Application Server Network Deployment への InfoSphere MDM のインストール

このシナリオを、WebSphere Application Server Network Deployment への InfoSphere MDM の仮想 MDM デプロイメントを計画および処理する際のリファレンスとして使用してください。このシナリオでは、Microsoft SQL Server データベ

ースと IBM WebSphere MQ メッセージングを使用します。このシナリオは、Microsoft Windows オペレーティング・システムを対象としています。

制約事項: このシナリオは SQL サーバーを使用する Windows システム上のもので、仮想 MDM フィーチャーだけがサポートされます。このシナリオでは物理 MDM はサポートされません。

このシナリオを完了するには、4 つの手順が必要です。

1. アプリケーション・サーバーを準備します。
2. SQL Server データベースを準備します。
3. IBM WebSphere MQ メッセージングを準備します。
4. InfoSphere MDM をインストールします。

このシナリオでは、トポロジは次のようになります。

- マシン A:
 - WebSphere Application Server Deployment Manager および WebSphere Application Server 管理対象ノード
 - IBM WebSphere MQ
 - IBM Installation Manager および InfoSphere MDM
- マシン B:
 - SQL Server データベース

Microsoft SQL Server データベースの準備:

このシナリオ実行の 2 番目のステップは、SQL サーバー・データベースをインストールして準備することです。

手順

1. SQL Server データベースをマシン B にインストールします。ガイドとして、Microsoft SQL Server のインストール資料を使用してください。
2. InfoSphere MDM Installation Startup Kit に備わっているスクリプトを使用して、データベースと表スペースを作成します。

ヒント: ダウンロードした InfoSphere MDM パッケージ・ファイル disk1.zip から、Installation Startup Kit を抽出できます。

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

102 ページの『Microsoft SQL Server データベースの準備』

関連資料:

34 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシート』

WebSphere Application Server Network Deployment の準備:

このシナリオ実行の最初のステップは、アプリケーション・サーバーをインストールして準備することです。

このタスクについて

この手順の結果として生成されるトポロジーでは、マシン A に WebSphere Application Server Deployment Manager と管理対象ノードが含まれます。

手順

1. WebSphere Application Server をマシン A にインストールして構成します。ガイドとして、WebSphere Application Server Network Deployment の資料を使用してください。
2. 管理対象ノードが正しく同期されていることを確認してから、InfoSphere MDM のインストールを開始します。
3. InfoSphere MDM インストールを開始する前に、WebSphere Application Server Deployment Manager ホスト名と SOAP ポートを把握していることを確認してください。WebSphere Application Server 構成ワークシートを使用して、使用している値を記録してください。
4. InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、アプリケーション・サーバーが開始されていることを確認します。

関連概念:

89 ページの『アプリケーション・サーバーのインストールおよびセットアップ』

関連タスク:

90 ページの『管理対象サーバー・デプロイメントのための WebSphere Application Server Network Deployment の準備』

関連資料:

39 ページの『WebSphere Application Server インストール・ワークシート』

IBM WebSphere MQ の準備:

この手順を使用して、このシナリオ実行の 3 番目のステップとして、IBM WebSphere MQ をインストールして準備します。

手順

1. IBM WebSphere MQ をマシン A にインストールします。ガイドとして IBM WebSphere MQ インストール文書を使用します。
2. WebSphere MQ キュー・マネージャー、チャンネル、およびキューを `custSetupMQServer.mqsc` スクリプトと `ChannelAuth.mqsc` スクリプトを使用して作成します。これらのスクリプトは、Installation Startup Kit に含まれていません。

ヒント: ダウンロードしたパッケージ・ファイル `disk1.zip` から、Installation Startup Kit を抽出できます。

InfoSphere MDM のインストール:

この手順を使用して、このシナリオ実行の最後のステップとして、InfoSphere MDM および選択した任意のユーザー・アプリケーションをインストールします。

このタスクについて

InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、アプリケーション・サーバーとデータベースが開始されていることを確認します。

手順

1. IBM Installation Manager をマシン A で始動し、InfoSphere MDM オフライングを選択します。プロンプトに従って続行します。
2. InfoSphere MDM インストールのホーム・ディレクトリーと共用ディレクトリーを指定します。例えば、MDM_INSTALL ホームとして c:\Program Files\IBM\MDM\E001\mdm を、共用ディレクトリーとして c:\Program Files\IBM\MDM\E001\Shared を指定します。
3. 「MDM データベース」、 「MDM 運用サーバー (MDM Operational Server)」、およびインストールする任意のユーザー・アプリケーションまたは他のフィーチャーを選択します。例えば、「アプリケーション」フィーチャーを選択して、すべてのユーザー・アプリケーションをインストールするか、特定のアプリケーションを選択してインストールします。

ヒント: このシナリオは SQL サーバーを使用する Windows システム上のものなので、仮想 MDM ユーザー・アプリケーションだけを選択できます。このシナリオでは物理 MDM はサポートされません。

4. 「データベース構成 (Database Configuration)」パネルで、データベース・タイプとデータベース・パラメーターを指定します。「**テスト接続**」または「**接続テスト不要 (No connection test required)**」を選択して、データベース接続をテストするかどうかを選択できます。
5. 「WebSphere Application Server 構成 (WebSphere Application Server Configuration)」パネルで、アプリケーション・サーバー・パラメーターを指定します。「**ホスト詳細の取得 (Retrieve Host Details)**」を選択して、セル、ノード、およびサーバーの情報を入手します。「**サーバーの MDM インスタンスを確認 (Verify MDM Instance on Server)**」をクリックして、InfoSphere MDM インスタンスがまだ存在していないことを確認します。
6. 「アプリケーションの構成」パネルで、「**IBM WebSphere MQ**」メッセージングを選択し、パラメーターを入力します。「**メッセージング・サーバーの構成 (Configure messaging server)**」オプションを選択状態のままにして、マシン A 上にキュー・マネージャーを作成するように IBM Installation Manager に指示します。
7. 各ユーザー・アプリケーション構成パネルで、パラメーターを指定します。
8. 「**インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)**」をクリックして、前提条件検査を実行します。エラーや警告を検討して修正してから、「**再チェック (Recheck)**」をクリックします。
9. 検証チェックが成功したら、「**インストール**」をクリックします。
10. インストールの完了後、ログを表示して、インストール検証ツールを使用します。

関連概念:

87 ページの『IBM Installation Manager の準備』

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

191 ページの『基本インストールの検証』

関連タスク:

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』
インストールのトラブルシューティング

シナリオ: Windows に InfoSphere MDM ワークベンチをインストールしてから、リモート運用サーバーに接続する

リモート InfoSphere MDM 運用サーバーおよびリモート・データベース・インスタンスに接続する Microsoft Windows 上に InfoSphere MDM 開発環境 (MDM ワークベンチ) インストールを計画およびデプロイしている場合は、このシナリオを解説書として使用してください。

このシナリオで概説されるステップは、InfoSphere MDM ワークベンチの構成およびデプロイメントの物理 MDM の局面にフォーカスしています。

重要: このシナリオでは、リモート・マシンに既に運用サーバーがインストール済みであることを想定しています。

このシナリオを完了するには、以下の手順を実行します。

1. ローカル・マシンで、MDM ワークベンチをインストールします。
2. ローカル MDM ワークベンチのインスタンスを、リモート・アプリケーション・サーバーに接続するように構成します。
3. ローカル MDM ワークベンチのインスタンスを、リモート・データベースに接続するように構成します。
4. 開発作業が完了したら、変更内容を MDM ワークベンチからリモート InfoSphere MDM インスタンスにデプロイします。

このシナリオでは、トポロジーは次のようになります。

- マシン A (ローカル Microsoft Windows マシン):
 - IBM Installation Manager および InfoSphere MDM ワークベンチ
 - IBM Rational Application Developer
- マシン B (AIX サーバー・マシン):
 - WebSphere Application Server Deployment Manager および WebSphere Application Server 管理対象ノード
 - IBM Installation Manager および InfoSphere MDM 運用サーバー
 - IBM DB2 データベース

関連タスク:

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

ローカル InfoSphere MDM 開発環境のインストール:

MDM ワークベンチおよび IBM Rational Application Developer (RAD) をインストールしてローカル InfoSphere MDM 開発環境を準備します。

始める前に

Rational Application Developer を既にインストールしている場合は、MDM ワークベンチと Rational Application Developer を同じパッケージ・グループにインストールしていることを確認してください。

ヒント: この手順で解説するステップのビデオによるデモンストレーションを見るには、<http://youtu.be/96CkbrwASik> を参照してください。

手順

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. MDM ワークベンチと Rational Application Developer リポジトリを IBM Installation Manager に追加します。
 - a. 「ファイル」 > 「設定」をクリックします。「設定」ダイアログが開きます。
 - b. 「リポジトリの追加...」をクリックします。
 - c. InfoSphere MDM インストール・イメージが入っているディレクトリーから、MDM ワークベンチの .inf ファイルを選択します。
 - d. 「リポジトリの追加...」をクリックします。
 - e. InfoSphere MDM インストール・イメージが入っているディレクトリーから、Rational Application Developer の .inf ファイルを選択します。
 - f. 「OK」をクリックします。
3. IBM Installation Manager のホーム画面で、「インストール」をクリックします。
4. 2 番目の「パッケージのインストール」パネルで、MDM ワークベンチをインストールするインストール・ディレクトリーを選択します。デフォルト以外のディレクトリーにインストールする場合は、MDM ワークベンチを選択して、「インストール・ディレクトリー」フィールドの「参照」をクリックします。

注: Microsoft Windows 7 オペレーティング・システムの場合、仮想化されていないディレクトリーに MDM ワークベンチをインストールする必要があります。

5. 「次へ」をクリックします。
6. 言語パネルでは、デフォルトで「英語」が選択されています。
 - 英語以外の言語を使用する場合は、対象の言語を選択して「次へ」をクリックします。
7. インストールする「**IBM Rational Application Developer for WebSphere Software**」および「**IBM InfoSphere Master Data Management Workbench**」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
8. もう一度「次へ」をクリックして「ライセンス」パネルを表示します。ご使用条件を確認し、受諾して、「次へ」をクリックします。
9. 残りの Installation Manager パネルに入力し、インストールの要約情報を確認してから、「**インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)**」をクリックして前提条件検査を実行します。エラーや警告を検討して修正してから、「**再チェック (Recheck)**」をクリックします。
10. 検証チェックが成功したら、「インストール」をクリックします。

11. 「完了」をクリックして IBM Installation Manager を閉じます。

関連タスク:

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

リモート・サーバー接続の構成:

MDM ワークベンチのサーバー・ビューに、リモート・アプリケーション・サーバーに接続するための新しい項目を作成します。

手順

1. ローカル・マシンで MDM ワークベンチを開きます。
2. サーバー・ビューを開きます。
3. サーバー・ビューで右クリックして、「New」 > 「Server」を選択します。
「Define a New Server」ダイアログが開きます。
4. サーバー・タイプおよびバージョン（「IBM」 > 「WebSphere Application Server v8.5.5.2」など）を選択します。
5. リモート・サーバーのホスト名を入力します。
6. サーバー名を入力します。
7. サーバー・ランタイム環境を選択して、「Next」をクリックします。
8. 「Manually provide connection settings」（リモート・サーバーでは常に選択済み）を選択し、正しいポート番号で接続設定を構成します。少なくとも 1 つの接続タイプを選択し、正しいポートが指定されていることを確認する必要があります。
9. 「Security is enabled on this server」を選択してから、ユーザー ID とパスワードを指定します。
10. アプリケーション・サーバー名を入力します。
11. 「Test Connection」をクリックしてすべての接続設定が正しいことを確認し、その後「Finish」をクリックします。

関連概念:

89 ページの『アプリケーション・サーバーのインストールおよびセットアップ』

リモート・データベース接続の構成:

InfoSphere MDM 開発をテストしたり、生成された任意の SQL を実行できるようにするために、リモート・データベースへの接続を構成します。

手順


1. MDM ワークベンチで、「Data」パースペクティブを開きます。
2. 「Data Source Explorer」ビューで、「Database Connections」を右クリックします。
3. 「New...」をクリックします。「New Connection」ダイアログが開きます。
4. 「Connection Parameters」画面で、リモート・データベース・インスタンスの詳細を入力します。
 - a. データベース・マネージャー・タイプを選択します。
 - b. JDBC ドライバーを選択します。

- c. データベース名を入力します。
 - d. ホスト・アドレスとポート番号を入力します。
 - e. クライアント認証ユーザー名およびパスワードを指定します。
 - f. デフォルト・スキーマ名を入力します。
 - g. 接続 URL を確認します。
5. リモート・データベース・インスタンスの構成後、「**Test Connection**」をクリックして設定が正しいことを確認します。
 6. 「**終了**」をクリックします。

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

関連情報:

 デプロイメントの準備のための SQL スクリプトの実行

リモート InfoSphere MDM インスタンスへのローカル変更のデプロイ:

このシナリオでは、MDM ワークベンチ開発プロセスは通常のプロセスと同じですが、WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を使用して、リモート運用サーバーに CBA をデプロイする必要があります。

手順




1. MDM ワークベンチ開発タスクを完了させます。
2. プロジェクトを CBA に追加した後で、プロジェクト用のコードが生成されていることを確認します。
3. リモート・データベース・インスタンスに対応する MDMSHaredResources/sql ディレクトリー内の SQL スクリプトを実行します。
4. MDM ワークベンチで、CBA プロジェクトを右クリックして「**Export**」をクリックします。
5. エクスポートの宛先として「**OSGi**」 > 「**OSGi Composite Bundle (CBA)**」を選択します。エクスポートするバンドルに、運用サーバーのモジュール・バンドルが含まれていることを確認します。

重要: カスタマイズ済みのバンドルのみエクスポートしてください (InfoSphere MDM のコア参照バンドルはエクスポートしないでください)。CBA のエクスポート時にすべてのバンドルを選択した場合、コア・バンドルが重複します。

6. 「**Browse**」をクリックして CBA ファイルの保存場所を選択し、「**Finish**」をクリックします。
7. リモート WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を開いて、ナビゲーション・フレームで「**Environment**」 > 「**OSGi bundle repositories**」 > 「**Internal bundle repository**」をクリックし、表の上部にある「**New**」をクリックします。
8. ローカル・ファイル・システムを選択し、MDM ワークベンチからエクスポートした CBA を保存した場所を参照して「**OK**」をクリックし、次に「**Save directly to the master configuration**」をクリックします。
9. ナビゲーション・フレームで、「**Applications**」 > 「**Application Types**」 > 「**Business-level applications**」をクリックします。

10. InfoSphere MDM アプリケーションをクリックして、EBA デプロイ済み資産 (例: com.ibm.mdm.server.app_0001.eba) を選択します。このステップには数分かかることがあります。
11. 右側の列で、「**Extensions for this composition unit**」をクリックしてから、表の上部にある「**Add**」をクリックします。
12. インポートした CBA の横にあるチェック・ボックスを選択してから、表の上部にある「**Add**」をクリックします。次のページを読み込むのに数分かかることがあります。
13. 「**Save directly to the master configuration**」をクリックします。そうすると、構成単位ページに戻ります。
14. ページの下部付近にある「**Update to latest deployment**」をクリックして、変更のプレビューを確認し、「**OK**」をクリックします。拡張 CBA では、「**Not deployed**」からバージョン番号への変更が表示されるはずですが。
15. オプション・ウィザードの各ページでデフォルト・オプションを受け入れて「**Next**」をクリックし、「**Finish**」をクリックします。
16. 「**Save directly to the master configuration**」をクリックします。
17. リモート InfoSphere MDM ビジネス・レベル・アプリケーション (BLA) を再始動します。

関連情報:

-  追加および拡張のデプロイ
-  デプロイメントの準備のための SQL スクリプトの実行
-  管理コンソールから運用サーバーへの CBA のデプロイ

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)

このセクションのタスクを実行して、IBM DB2 と共にスタンドアロン InfoSphere MDM サーバーをインストールします。

このタスクについて

DB2 付きのスタンドアロン・サーバー・インストールを実行すると、InfoSphere MDM エディション、IBM WebSphere Application Server、および IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows をサーバーにデプロイできます。

DB2 付きのスタンドアロン・インストールは、UNIX および Linux の場合は root ユーザーとして、Microsoft Windows の場合は管理者ユーザーとして実行する必要があります。

重要: InfoSphere MDM のインストール・プロセスを開始する前に、既知の問題を確認してください。インストールに関する既知の問題の中には、特定のプリインストール構成タスクの実行を必要とするものがあります。これらの構成タスクを完了できなかった場合、結果としてインストールに失敗する可能性があります。

インストール・ファイルの獲得と解凍

InfoSphere MDM のインストール用のインストール・メディアは、ダウンロード可能なインストール・イメージ・ファイルとして入手可能です。

このタスクについて

IBM InfoSphere Master Data Management のダウンロード・ページを使用して、ライセンス交付を受けたご使用のエディションおよびバージョンに必要なパーツを判別できます。システム要件トピックの情報を使用して、WebSphere Application Server およびフィックスパックのサポートされるバージョンを判別します。

重要: InfoSphere MDM のインストールを開始するには、その前に、ライセンス交付を受けたご使用のエディションおよびバージョンに必要な、すべての最新インストール・パッケージとフィックスパックをダウンロードしていることを確認します。

手順

IBM Passport Advantage®からインストール・イメージ・ファイルを取得する場合は、MDM という名前のディレクトリーにファイルをダウンロードして抽出します。ファイルを抽出すると、それらはダウンロードしたパーツを反映するようにフォルダー構造に配置されます。

関連タスク:

69 ページの『ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始』

関連資料:

2 ページの『インストール要件』

関連情報:

 InfoSphere MDM のシステム要件

 IBM InfoSphere Master Data Management のダウンロード

DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)、または スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) を開始する前に、プランニング・ステップを完了し、前提条件を満たしていることを確認します。これらのステップは、スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) の場合にのみ該当します。

このタスクについて

スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) デプロイメント・タイプは、クリーンなサーバーまたはクリーンなワークステーションで実行する必要があります。

手順

- システム要件およびインストールに影響を及ぼす可能性がある潜在的な問題については、README ファイルを確認してください。
- サポートされる製品フィーチャーまたはこのリリースの機能強化に関する情報については、リリース情報を読んでください。

- インストール・ワークシートを確認して完成させてください。
- 68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』のタスクを完了します。
- 2 ページの『インストール要件』を確認します。
- 23 ページの『スタンドアロン・インストール・デプロイメント・タイプ』を確認します。
- 動的ホスト構成プロトコル (DHCP) 環境にインストールする場合は、`/etc/hosts` ファイルにホスト IP を設定する必要があります。ご使用のホストが静的 IP を使用する場合、この設定は不要です。また、カスタム・インストールの場合も、この設定は不要です。
- スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) では、root ユーザーとしてログインしていることと、IBM DB2、InfoSphere MDM、および IBM WebSphere Application Server がいずれも root を使用してインストールされることを想定しています。

重要: root ユーザーとしてインストールを実行するには、IBM Installation Manager を管理モードでインストールする必要があります。IBM Installation Manager を管理モードでインストールするには、root ユーザーとしてログインし、`install` コマンドを実行します。

次のタスク

ランチパッドを使用してインストールを開始する手順に進みます。スタンドアロン (DB2 と共に) デプロイメント・タイプのインストール手順を使用します。

関連概念:

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

関連タスク:

『ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始』

70 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』

79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のインストール』

関連資料:

14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始

ランチパッドを使用して、スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) プロセスを開始します。これは、スタンドアロン・サーバー (DB2 と共に) のインストールと、スタンドアロン・ワークステーション (DB2 と共に) のインストールを開始する唯一の方法です。

始める前に

ランチパッドは、スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) またはスタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) の開始点とし

て使用されるブラウザー・ベースのアプリケーションです。ランチパッドは、Mozilla Firefox ブラウザーを必要とします。

ヒント: Firefox が使用不可の場合、ランチパッドを使用できない可能性があります。ランチパッドを使用できない場合は、以下のようにします。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. IBM Installation Manager を管理者モードでインストールします。
3. すべてのスタンドアロン (DB2 と共に) の InfoSphere MDM インストール・リポジトリを手動で構成します。

ランチパッド から、以下のことを行うことができます。

- インストール・プロセスの開始
- インストール・プロセスの終了

重要: ランチパッドが開始するためには、正しい場所にインストール・メディアがなければなりません。68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』を参照してください。

手順

1. InfoSphere MDM メディアをダウンロードしたディレクトリーに移動し、Disk1 を開きます。以下に例を示します。 `download_path/MDM/disk1`
2. `download_path/MDM/disk1` から、以下のスクリプトのいずれか 1 つを使用してランチパッドを開始します。
 - Microsoft Windows: `launchpad.exe` - Microsoft Windows の場合、スクリプトを右クリックして、「管理者として実行」を選択します。
 - Linux および UNIX: `launchpad.sh` - root ユーザーとして実行します。

関連タスク:

187 ページの『InfoSphere MDM Workbench のインストール』

68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』

68 ページの『DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備』

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)

Linux、UNIX、または Windows で、スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) を実行するには、この手順を使用します。スタンドアロン・サーバー・インストールは、クリーン・サーバーに IBM InfoSphere Master Data Management エディション、IBM WebSphere Application Server、および IBM DB2 for Linux, UNIX, or Windows をインストールするように選択していることを意味します。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- インストールを行うサーバーに、MDM、IBM WebSphere Application Server、および IBM DB2 の既存のインスタンスがないこと。
- InfoSphere MDM、IBM WebSphere Application Server、および IBM DB2 オフラインリングに対するアクセス権があること。

Microsoft Windows 上にインストールする場合、

- Windows レジストリーに書き込むために、IBM Installation Manager を管理者モードで実行する必要があります。管理者モードは、IBM AIX、Linux、または Solaris では使用されません。
- Microsoft Windows 7 オペレーティング・システムの場合、仮想化されていないディレクトリーに MDM をインストールする必要があります。

ランチパッドが開始するためには、正しい場所にインストール・メディアがなければなりません。68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』を参照してください。

スタンドアロン・インストールでは、インストール・アプリケーションがデフォルトの構成値を自動的に使用します。インストールを開始する前にデフォルト値を知りたい場合、構成ワークシートを確認できます。

サーバー・インストールの場合、IBM WebSphere Application Server Network Deployment を使用する必要があります。

重要: スタンドアロン・インストールは、アプリケーション・サーバーの特定の TCP または SOAP ポートを使用するように構成されています。インストールを成功させるためには、TCP または SOAP ポートの 50000 から 50002 および 60000 から 60004 が使用中でないことをまず確認してください。

手順

1. `download_path/MDM/disk1` から、以下のスクリプトのいずれか 1 つを使用してランチパッドを開始します。
 - Microsoft Windows: `launchpad.exe` - Microsoft Windows の場合、スクリプトを右クリックして、「管理者として実行」を選択します。
 - Linux および UNIX: `launchpad.sh` - root ユーザーとして実行します。
 2. 「パッケージのインストール」パネルで、以下の項目が選択されていることを確認します。
 - IBM WebSphere Application Server Network Deployment
 - IBM DB2
 - InfoSphere MDM Standard Edition または Advanced Edition
- 重要:** 事前選択されたコンポーネントのいずれかをクリアすると、インストール・モードが自動的にスタンドアロン・インストールからカスタム・インストールに変更されます。
3. 「次へ」をクリックします。
 4. ご使用条件を確認し、受諾したら「次へ」をクリックします。
 5. 既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新しいパッケージ・グループを作成するかを選択します。

ヒント: 何を選択すればよいか不明な場合には、デフォルトを受け入れてください。ほとんどのインストールでは、新しいパッケージ・グループを作成する必要があります。

重要: IBM Rational Application Developer がインストールされている場合は、InfoSphere MDM を同じパッケージ・グループにインストールしないでください。「**新規パッケージ・グループの作成**」を選択します。

6. 同じパネルで、各コンポーネントのインストール先となる「**インストール・ディレクトリー**」を定義します。デフォルト以外のディレクトリーにコンポーネントをインストールするようにする場合は、そのコンポーネントを選択し、「**インストール・ディレクトリー**」フィールドの「**参照**」をクリックします。

ディスク・スペース情報を確認して、「**次へ**」をクリックします。

7. 言語パネルでは、常に「**英語**」が選択されています。
 - a. 英語に加えて他のいずれかの言語をサポートする場合には、それらを選択します。
 - b. あるパッケージは他のパッケージよりも多くの言語をサポートします。より多くの言語が必要な場合、「**一部のパッケージでのみサポートされる翻訳 (Translations Supported by Only Some Packages)**」の三角アイコンをクリックして、必要な各言語を追加で選択します。
 - c. 「**次へ**」をクリックします。
8. フィーチャー・パネルで「**Data Stewardship UI**」または「**Inspector**」を選択します (これらのユーザー・アプリケーションの一方または両方をインストールする場合)。
9. インストールの要約情報をレビューして詳細情報が正確であることを確認してから、「**インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)**」をクリックして前提条件検査を実行します。この検査は、使用する環境と構成が、インストールを正常に完了させるために十分であることを確認するために役立ちます。「**詳細の表示**」をクリックして、各結果についての詳細を表示します。
10. 前提条件チェックでの警告やエラーと取り組むための修正アクションを実行してから、「**インストール**」をクリックします。
11. インストールが完了したら、「**開始するプログラム (Which program do you want to start)**」 ペインで「**なし**」をクリックします。
12. 最後の IBM Installation Manager パネルで、ログ・ファイル・ビューアーを開く場合は「**ログ・ファイルの表示 (View Log Files)**」をクリックします。
13. 「**終了**」をクリックして IBM Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

最後のインストーラー・パネルに表示される成功メッセージは、検証テストがインストール・プロセスの一環として自動的に実行されたことを示します。ログ・ファイルでインストールが正常に完了したことを確認することもできます。インストールが成功しなかった場合は、ログ・ファイルを調べ、トラブルシューティング・トピックのユーザー支援情報を使用してください。

次のタスク

インストール後に、フィーチャーを追加または削除したり (例えば、アプリケーションや別の言語翻訳の追加)、構成設定を変更したりする場合、再度 IBM Installation Manager を実行して「**変更**」を選択することができます。

インストーラーによって作成されるユーザー名とパスワードのリストについては、スタンドアロン・インストール・デプロイメント中に作成されるデフォルトのユーザー・アカウントに関するトピック (関連参照トピックを参照) を参照してください。

関連概念:

24 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

191 ページの『基本インストールの検証』

関連タスク:

222 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) のアンインストール』

インストールのトラブルシューティング

68 ページの『DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備』

関連資料:

14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) に関する前提条件検査

InfoSphere MDM インストーラー・アプリケーションは、各スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) を開始する間に、特定の前提条件が満たされていることを確認するためのテストを実行します。

前提条件検査ツールは、いずれかの前提条件が満たされていないことが原因で正常に完了できないインストールが開始されることを防ぐのに役立ちます。

ヒント: 「インストール構成のレビュー (Installation Configuration Review)」パネルで「インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)」をクリックすることにより、Installation Manager 内から前提条件検査を実行します。

スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) の実行時に、インストール・アプリケーションは以下の前提条件検査を実行します。

表 15. システムの検査

前提条件検査	説明	解決方法
インストールのディスク・スペースの検証	この検査では、InfoSphere MDM、および WebSphere Application Server のプロファイルやデータベースなどの、スタンドアロン (DB2 と共に) デプロイメントに必要なすべてのソフトウェアをインストールするのに十分なディスク・スペースがあることを検証します。	インストールのターゲット・マシンに、少なくとも 32 GB のディスク・スペースがあることを確認します。

表 15. システムの検査 (続き)

前提条件検査	説明	解決方法
インストール・アプリケーションを実行するためのメモリの検証	この検査では、インストールを実行するのに十分なメモリーがあることを検証します。これは警告メッセージです。	インストール先のシステムに、少なくとも 8 GB の RAM があることを確認します。 注: この警告は無視することを選択できますが、インストールが失敗する可能性があります。

表 16. データベースの検査

前提条件検査	説明	解決方法
データベース・インスタンスの検査	この検査は、データベースがまだ存在していないことを検証します。スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) には、データベースがまだ存在していない環境が必要です。	インストール環境にデータベースが既に存在する場合、インストールの実行を試みる前にそのデータベースを削除してください。
データベース名の検査	この検査では、データベース名が有効であることを検証します。	データベース名は 12 文字以下の英数字で構成する必要があります。名前に、下線 (_) 文字を使用できます。その他の文字はサポートされません。
データベース・ユーザーの検証	この検査では、インストール・パネルに指定されたデータベース・ユーザーが存在するかどうかを判別します。このユーザーは、システムに既に存在してはなりません。これは警告メッセージです。	データベース・ユーザーが既に存在する場合は、そのユーザーを削除してください。スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) では、インストール中にユーザーが作成されます。あるいは、db2admin データベース・ユーザーが同じデフォルト・パスワードを保持していることを確認します。 注: この警告は無視することを選択できますが、インストールが失敗する可能性があります。
Global Security Kit v8 の検証	この検査では、前の DB2 インストール済み環境の Global Security Kit ライブラリーが存在するかどうかを判別します。 Global Security Kit ライブラリーが存在し、インストールされているバージョンが InfoSphere MDM の最小要件を下回る場合、この検査は失敗します。 Global Security Kit ライブラリーのバージョンが正しくない場合、DB2 データベース・マネージャーは開始できません。	Global Security Kit ライブラリー・フォルダー (GSK8¥1ib64) を削除してから、インストールを続行してください。 ヒント: Microsoft Windows の場合、システム変数内でパスを調べて C:¥Program Files¥IBM¥GSK8¥1ib64 のようなディレクトリー・パスを探すことにより、GSK8 フォルダーを見つけることができます。

表 16. データベースの検査 (続き)

前提条件検査	説明	解決方法
ODBC データ・ソース検査	<p>この検査は、ODBC データ・ソースが Microsoft Windows レジストリー内に存在するかどうかを調べます。ODBC データ・ソースが既に存在している場合、この検査はエラーで失敗します。</p> <p>注: Windows 以外のシステムでは、この検査は常に成功します。</p>	<p>使用する Windows レジストリーに ODBC データ・ソースが存在している場合には、以下の方法でそのデータ・ソースを削除してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コマンド regedit を実行して、Windows Registry Editor を開きます。 2. HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ODBC\ODBC.INI エントリーを見つけます。 3. ODBC.INI を展開して、ODBC データ・ソースのエントリーを見つけてから、それを右クリックして「削除」を選択します。 4. ODBC.INI の下で、ODBC データ・ソースのエントリーを選択します。表示ペインに、すべてのサブエントリーが示されます。 5. サブエントリーのリストで、ODBC データ・ソースのエントリーを見つけます。そのエントリーを右クリックして、「削除」を選択します。

表 17. 運用サーバーの検査

前提条件検査	説明	解決方法
SOAP ポートの検証	<p>この検査では、SOAP の必須のポート番号が使用可能であるかどうかを判別します。必須のポート番号 8879 および 8880 がいずれも使用可能でなければなりません。</p>	<p>SOAP が、ポート 8879 および 8880 の両方を使用可能であることを確認します。</p>

関連資料:

97 ページの『データベース・ユーザー・アカウントおよび接続』

関連情報:

 [InfoSphere MDM system requirements](#)

スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に)

このセクションのタスクを実行して、IBM DB2 と共にスタンドアロン InfoSphere MDM ワークステーションをインストールします。

このタスクについて

スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) では、InfoSphere MDM エディション、IBM WebSphere Application Server、IBM DB2 for Linux, UNIX, and Windows、IBM Rational Application Developer および InfoSphere MDM Workbench を Microsoft Windows ワークステーションにデプロイできます。

使用するワークステーションは、Microsoft Windows または Linux オペレーティング・システムでなければなりません。その他のオペレーティング・システムでは、スタンドアロン・ワークステーション・インストールはサポートされていません。DB2 付きのスタンドアロン・インストールは、Linux の場合は root ユーザーとして、Microsoft Windows の場合は管理者ユーザーとして実行する必要があります。

重要: InfoSphere MDM のインストール・プロセスを開始する前に、既知の問題を確認してください。インストールに関する既知の問題の中には、特定のプリインストール構成タスクの実行を必要とするものがあります。これらの構成タスクを完了できなかった場合、結果としてインストールに失敗する可能性があります。

インストール・ファイルの獲得と解凍

InfoSphere MDM のインストール用のインストール・メディアは、ダウンロード可能なインストール・イメージ・ファイルとして入手可能です。

このタスクについて

IBM InfoSphere Master Data Management のダウンロード・ページを使用して、ライセンス交付を受けたご使用のエディションおよびバージョンに必要なパーツを判別できます。システム要件トピックの情報を使用して、WebSphere Application Server およびフィックスパックのサポートされるバージョンを判別します。

重要: InfoSphere MDM のインストールを開始するには、その前に、ライセンス交付を受けたご使用のエディションおよびバージョンに必要な、すべての最新インストール・パッケージとフィックスパックをダウンロードしていることを確認します。

手順

IBM パスポート・アドバンテージからインストール・イメージ・ファイルを取得する場合は、MDM という名前のディレクトリーにファイルをダウンロードして抽出します。ファイルを抽出すると、それらはダウンロードしたパーツを反映するようにフォルダー構造に配置されます。

関連タスク:

69 ページの『ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始』

関連資料:

2 ページの『インストール要件』

関連情報:

 [InfoSphere MDM のシステム要件](#)

 [IBM InfoSphere Master Data Management のダウンロード](#)

DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備

スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)、または スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) を開始する前に、プランニング・ステップを完了し、前提条件を満たしていることを確認します。これらのステップは、スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) の場合にのみ該当しません。

このタスクについて

スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) デプロイメント・タイプは、クリーンなサーバーまたはクリーンなワークステーションで実行する必要があります。

手順

- システム要件およびインストールに影響を及ぼす可能性がある潜在的な問題については、README ファイルを確認してください。
- サポートされる製品フィーチャーまたはこのリリースの機能強化に関する情報については、リリース情報を読んでください。
- インストール・ワークシートを確認して完成させてください。
- 68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』のタスクを完了します。
- 2 ページの『インストール要件』を確認します。
- 23 ページの『スタンドアロン・インストール・デプロイメント・タイプ』を確認します。
- 動的ホスト構成プロトコル (DHCP) 環境にインストールする場合は、`/etc/hosts` ファイルにホスト IP を設定する必要があります。ご使用のホストが静的 IP を使用する場合、この設定は不要です。また、カスタム・インストールの場合も、この設定は不要です。
- スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) では、root ユーザーとしてログインしていることと、IBM DB2、InfoSphere MDM、および IBM WebSphere Application Server がいずれも root を使用してインストールされることを想定しています。

重要: root ユーザーとしてインストールを実行するには、IBM Installation Manager を管理モードでインストールする必要があります。IBM Installation Manager を管理モードでインストールするには、root ユーザーとしてログインし、`install` コマンドを実行します。

次のタスク

ランチパッドを使用してインストールを開始する手順に進みます。スタンドアロン (DB2 と共に) デプロイメント・タイプのインストール手順を使用します。

関連概念:

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

関連タスク:

69 ページの『ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始』

70 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』

79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のインストール』

関連資料:

14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始

ランチパッドを使用して、スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) プロセスを開始します。これは、スタンドアロン・サーバー (DB2 と共に) のインストールと、スタンドアロン・ワークステーション (DB2 と共に) のインストールを開始する唯一の方法です。

始める前に

ランチパッドは、スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) またはスタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) の開始点として使用されるブラウザ・ベースのアプリケーションです。ランチパッドは、Mozilla Firefox ブラウザーを必要とします。

ヒント: Firefox が使用不可の場合、ランチパッドを使用できない可能性があります。ランチパッドを使用できない場合は、以下のようにします。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. IBM Installation Manager を管理者モードでインストールします。
3. すべてのスタンドアロン (DB2 と共に) の InfoSphere MDM インストール・リポジトリを手動で構成します。

ランチパッド から、以下のことを行うことができます。

- インストール・プロセスの開始
- インストール・プロセスの終了

重要: ランチパッドが開始するためには、正しい場所にインストール・メディアがなければなりません。68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』を参照してください。

手順

1. InfoSphere MDM メディアをダウンロードしたディレクトリーに移動し、Disk1 を開きます。以下に例を示します。 `download_path/MDM/disk1`
2. `download_path/MDM/disk1` から、以下のスクリプトのいずれか 1 つを使用してランチパッドを開始します。
 - Microsoft Windows: `launchpad.exe` - Microsoft Windows の場合、スクリプトを右クリックして、「管理者として実行」を選択します。
 - Linux および UNIX: `launchpad.sh` - root ユーザーとして実行します。

関連タスク:

187 ページの『InfoSphere MDM Workbench のインストール』

68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』

スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のインストール

この手順を使用して、スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) を実行します。スタンドアロン・ワークステーション・インストールは、Microsoft Windows または Linux のオペレーティング・システムでのみサポートされています。スタンドアロン・ワークステーション・インストールは、クリーン・ワークステーションに IBM InfoSphere Master Data Management エディション、IBM WebSphere Application Server、IBM DB2 for Linux, UNIX, or Windows、InfoSphere MDM Workbench、および IBM Rational Application Developer (RAD) をインストールするように選択していることを意味します。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- インストールを行うサーバーに、MDM、IBM WebSphere Application Server、および IBM DB2 の既存のインスタンスがないこと。
- InfoSphere MDM、IBM WebSphere Application Server、IBM DB2、IBM Rational Application Developer (RAD)、および MDM Workbench オファリングに対するアクセス権があること。

Microsoft Windows 上にインストールする場合、

- Windows レジストリーに書き込むために、IBM Installation Manager を管理者モードで実行する必要があります。管理者モードは、IBM AIX、Linux、または Solaris では使用されません。
- Microsoft Windows 7 オペレーティング・システムの場合、仮想化されていないディレクトリーに MDM をインストールする必要があります。

必要な 32 ビット・ライブラリーが 64 ビット・オペレーティング・システムでも使用可能であることを確認します。

ランチパッドが開始するためには、正しい場所にインストール・メディアがなければなりません。68 ページの『インストール・ファイルの獲得と解凍』を参照してください。

このタスクについて

DB2 付きのスタンドアロン・インストールでは、インストール・アプリケーションがデフォルトの構成値を自動的に使用します。インストールを開始する前にデフォルト値を知りたい場合、構成ワークシートを確認できます。

ワークステーション・インストールの場合、IBM WebSphere Application Server 基本デプロイメントを使用する必要があります。

重要: スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) は、アプリケーション・サーバーの特定の TCP または SOAP ポートを使用するように構成されています。インストールを成功させるためには、TCP または SOAP ポートの 50000 から 50002 および 60000 から 60004 が使用中でないことをまず確認してください。

手順

1. ご使用のシステムが、このトピックの前のセクションにリストしている前提条件を満たしていることを確認してください。
2. `download_path/MDM/disk1` から、以下のスクリプトのいずれか 1 つを使用してランチパッドを開始します。
 - Microsoft Windows: `launchpad.exe` - Microsoft Windows の場合、スクリプトを右クリックして、「**管理者として実行**」を選択します。
 - Linux および UNIX: `launchpad.sh` - root ユーザーとして実行します。
3. 「パッケージのインストール」パネルで、以下の項目が選択されていることを確認します。

- IBM Installation Manager
- IBM DB2
- IBM WebSphere Application Server
- IBM Rational Application Developer (RAD)
- InfoSphere MDM Standard Edition または Advanced Edition
- InfoSphere MDM Workbench

重要: 事前選択されたコンポーネントのいずれかをクリアすると、インストール・モードが自動的にスタンドアロン・インストールからカスタム・インストールに変更されます。

4. 「次へ」をクリックします。
5. Eclipse 拡張のパネルで、Eclipse の既存のインストール環境を拡張するかどうかを定義し、「次へ」をクリックします。
6. ご使用条件を確認し、受諾したら「次へ」をクリックします。
7. 既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新しいパッケージ・グループを作成するかを選択します。

ヒント: 何を選択すればよいか不明な場合には、デフォルトを受け入れてください。ほとんどのインストールでは、新しいパッケージ・グループを作成する必要があります。

重要: IBM Rational Application Developer がインストールされている場合は、InfoSphere MDM を同じパッケージ・グループにインストールしないでください。「**新規パッケージ・グループの作成**」を選択します。

8. 同じパネルで、各コンポーネントのインストール先となる「**インストール・ディレクトリー**」を定義します。デフォルト以外のディレクトリーにコンポーネントをインストールするようにする場合は、そのコンポーネントを選択し、「**インストール・ディレクトリー**」フィールドの「**参照**」をクリックします。

ディスク・スペース情報を確認して、「次へ」をクリックします。

9. 言語パネルでは、常に「英語」が選択されています。
 - a. 英語に加えて他のいずれかの言語をサポートする場合には、それらを選択します。
 - b. あるパッケージは他のパッケージよりも多くの言語をサポートします。より多くの言語が必要な場合、「**一部のパッケージでのみサポートされる翻訳**

(Translations Supported by Only Some Packages)」の三角アイコンをクリックして、必要な各言語を追加で選択します。

- c. 「次へ」をクリックします。
10. フィーチャー・パネルで、インストールする InfoSphere MDM のフィーチャー、アプリケーション、およびオプションのコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。
11. ユーザー資格情報のパネルで、WebSphere Application Server およびデータベース・インスタンスのための接続資格情報を指定します。
12. インストールの要約情報をレビューして詳細情報が正確であることを確認してから、「インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)」をクリックして前提条件検査を実行します。この検査は、使用する環境と構成が、インストールを正常に完了させるために十分であることを確認するために役立ちます。「詳細の表示」をクリックして、各結果についての詳細を表示します。
13. 前提条件チェックでの警告やエラーと取り組むための修正アクションを実行してから、「インストール」をクリックします。
14. 「ヘルプ・システムの共通構成 (Help System Common Configurations)」パネルで、IBM Rational Application Developer (RAD) ヘルプにアクセスする方法についてのオプションを 1 つ選択し、「次へ」をクリックします。
15. 「インストール (Install)」をクリックします。
16. 最後の IBM Installation Manager パネルで、ログ・ファイル・ビューアーを開く場合は「ログ・ファイルの表示 (View Log Files)」をクリックします。
17. 「終了」をクリックして IBM Installation Manager を閉じます。

次のタスク

最後のインストーラー・パネルに表示される成功メッセージは、検証テストがインストール・プロセスの一環として自動的に実行されたことを示します。ログ・ファイルでインストールが正常に完了したことを確認することもできます。インストールが成功しなかった場合は、ログ・ファイルを調べ、トラブルシューティング・トピックのユーザー支援情報を使用してください。

インストール後に、フィーチャーを追加または削除したり (例えば、アプリケーションや別の言語翻訳の追加)、構成設定を変更したりする場合、再度 IBM Installation Manager を実行して「変更」を選択することができます。

インストーラーによって作成されるユーザー名とパスワードのリストについては、スタンドアロン・インストール・デプロイメント中に作成されるデフォルトのユーザー・アカウントに関するトピック (関連参照トピックを参照) を参照してください。

関連概念:

26 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に)』

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

191 ページの『基本インストールの検証』

関連タスク:

223 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のアンインストール』

インストールのトラブルシューティング

68 ページの『DB2 付きのスタンドアロン・インストールの準備』

関連資料:

14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

5 ページの『64 ビットのオペレーティング・システムに必要な 32 ビット・ライブラリー』

スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) に関する前提条件検査

InfoSphere MDM インストーラー・アプリケーションは、各スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) を開始する間に、特定の前提条件が満たされていることを確認するためのテストを実行します。

前提条件検査ツールは、いずれかの前提条件が満たされていないことが原因で正常に完了できないインストールが開始されることを防ぐのに役立ちます。

ヒント: 「インストール構成のレビュー (Installation Configuration Review)」パネルで「インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)」をクリックすることにより、Installation Manager 内から前提条件検査を実行します。

スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) の実行時に、インストール・アプリケーションは以下の前提条件検査を実行します。

表 18. システムの検査

前提条件検査	説明	解決方法
インストールのディスク・スペースの検証	この検査では、InfoSphere MDM、および WebSphere Application Server のプロファイルやデータベースなどの、スタンドアロン (DB2 と共に) デプロイメントに必要なすべてのソフトウェアをインストールするのに十分なディスク・スペースがあることを検証します。	インストールのターゲット・マシンに、少なくとも 32 GB のディスク・スペースがあることを確認します。
インストール・アプリケーションを実行するためのメモリーの検証	この検査では、インストールを実行するのに十分なメモリーがあることを検証します。これは警告メッセージです。	インストール先のシステムに、少なくとも 8 GB の RAM があることを確認します。 注: この警告は無視することを選択できますが、インストールが失敗する可能性があります。

表 19. データベースの検査

前提条件検査	説明	解決方法
データベース・インスタンスの検査	この検査は、データベースがまだ存在していないことを検証します。スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) には、データベースがまだ存在していない環境が必要です。	インストール環境にデータベースが既に存在する場合、インストールの実行を試みる前にそのデータベースを削除してください。
データベース名の検査	この検査では、データベース名が有効であることを検証します。	データベース名は 12 文字以下の英数字で構成する必要があります。名前に、下線 (_) 文字を使用できます。その他の文字はサポートされません。
データベース・ユーザーの検証	この検査では、インストール・パネルに指定されたデータベース・ユーザーが存在するかどうかを判別します。このユーザーは、システムに既に存在してはなりません。これは警告メッセージです。	データベース・ユーザーが既に存在する場合は、そのユーザーを削除してください。スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) では、インストール中にユーザーが作成されます。あるいは、db2admin データベース・ユーザーが同じデフォルト・パスワードを保持していることを確認します。 注: この警告は無視することを選択できますが、インストールが失敗する可能性があります。
Global Security Kit v8 の検証	この検査では、前の DB2 インストール済み環境の Global Security Kit ライブラリーが存在するかどうかを判別します。 Global Security Kit ライブラリーが存在し、インストールされているバージョンが InfoSphere MDM の最小要件を下回る場合、この検査は失敗します。 Global Security Kit ライブラリーのバージョンが正しくない場合、DB2 データベース・マネージャーは開始できません。	Global Security Kit ライブラリー・フォルダー (GSK8¥lib64) を削除してから、インストールを続行してください。 ヒント: Microsoft Windows の場合、システム変数内でパスを調べて C:¥Program Files¥IBM¥GSK8¥lib64 のようなディレクトリー・パスを探すことにより、GSK8 フォルダーを見つけることができます。

表 19. データベースの検査 (続き)

前提条件検査	説明	解決方法
ODBC データ・ソース検査	<p>この検査は、ODBC データ・ソースが Microsoft Windows レジストリー内に存在するかどうかを調べます。ODBC データ・ソースが既に存在している場合、この検査はエラーで失敗します。</p> <p>注: Windows 以外のシステムでは、この検査は常に成功します。</p>	<p>使用する Windows レジストリーに ODBC データ・ソースが存在している場合には、以下の方法でそのデータ・ソースを削除してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コマンド regedit を実行して、Windows Registry Editor を開きます。 2. HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ODBC\ODBC.INI エントリーを見つけます。 3. ODBC.INI を展開して、ODBC データ・ソースのエントリーを見つけてから、それを右クリックして「削除」を選択します。 4. ODBC.INI の下で、ODBC データ・ソースのエントリーを選択します。表示ペインに、すべてのサブエントリーが示されます。 5. サブエントリーのリストで、ODBC データ・ソースのエントリーを見つけます。そのエントリーを右クリックして、「削除」を選択します。

表 20. 運用サーバーの検査

前提条件検査	説明	解決方法
SOAP ポートの検証	<p>この検査では、SOAP の必須のポート番号が使用可能であるかどうかを判別します。必須のポート番号 8879 および 8880 がいずれも使用可能でなければなりません。</p>	<p>SOAP が、ポート 8879 および 8880 の両方を使用可能であることを確認します。</p>

関連資料:

97 ページの『データベース・ユーザー・アカウントおよび接続』

関連情報:

 [InfoSphere MDM system requirements](#)

カスタム・デプロイメントのインストール

このセクションのタスクを実行して、InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントをインストールします。

このタスクについて

カスタム・インストールは、可能性のあるほぼすべてのデプロイメント・シナリオに InfoSphere MDM をデプロイします。大部分の InfoSphere MDM デプロイメントでは、カスタム・インストール・デプロイメント・タイプを必要とします。

カスタム・インストールは、Oracle または Microsoft SQL Server データベースを使用する場合や、クラスター環境でインストールする場合に必要な方法です。カスタム・インストールでは、IBM DB2 データベースもサポートされます。

カスタム・インストールは、UNIX および Linux で非 root ユーザーとして実行する必要があります。

重要: InfoSphere MDM のインストール・プロセスを開始する前に、既知の問題を確認してください。インストールに関する既知の問題の中には、特定のプリインストール構成タスクの実行を必要とするものがあります。これらの構成タスクを完了できなかった場合、結果としてインストールに失敗する可能性があります。

関連概念:

29 ページの『高可用性環境のサポート』

インストール・ファイルの獲得と解凍

InfoSphere MDM のインストール用のインストール・メディアは、ダウンロード可能なインストール・イメージ・ファイルとして入手可能です。

このタスクについて

IBM InfoSphere Master Data Management のダウンロード・ページを使用して、ライセンス交付を受けたご使用のエディションおよびバージョンに必要なパーツを判別できます。システム要件トピックの情報を使用して、WebSphere Application Server およびフィックスパックのサポートされるバージョンを判別します。

重要: InfoSphere MDM のインストールを開始するには、その前に、ライセンス交付を受けたご使用のエディションおよびバージョンに必要な、すべての最新インストール・パッケージとフィックスパックをダウンロードしていることを確認します。

手順

IBM パスポート・アドバンテージからインストール・イメージ・ファイルを取得する場合は、MDM という名前のディレクトリーにファイルをダウンロードして抽出します。ファイルを抽出すると、それらはダウンロードしたパーツを反映するようにフォルダー構造に配置されます。

関連タスク:

69 ページの『ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始』

関連資料:

2 ページの『インストール要件』

関連情報:

 InfoSphere MDM のシステム要件

カスタム・デプロイメントの準備

InfoSphere MDM をインストールする前に、プランニング・ステップを完了し、前提条件を満たしていることを確認します。これらのステップは、カスタム・インストールにのみ適用できます。

このタスクについて

重要: これらのステップは、DB2 インストール済み環境で、スタンドアロン・サーバーを、または DB2 インストール済み環境でスタンドアロン・ワークステーションを実行することを計画している場合は、必要ありません。スタンドアロン・インストール済み環境の準備に関するセクションを参照してください。

- システム要件およびインストールに影響を及ぼす可能性がある潜在的な問題については、README ファイルを確認してください。
- サポートされる製品フィーチャーまたはこのリリースの機能強化に関する情報については、リリース情報を読んでください。
- インストール・シナリオのセクションを確認し、使用するインストール・トポロジーを決定してください。
- インストール・ワークシートを確認して完成させてください。
- インストール・メディアをセットアップしてください。
- オファリングのデプロイメントごとに異なるデータベース・ユーザーを使用してください。
- IBM DB2 データベースの使用を計画している場合は、以下の項目に注意してください。
 - インストールのために、データベース・スキーマ・ユーザー用に制限付きユーザーをシステムに 1 つ以上セットアップします。DB2 はオペレーティング・システムを使用して新規ユーザーを認証するため、制限付きシェルを使う mdmdb1 などのユーザー ID を使用します。このユーザーは、いずれかの DB2 グループのメンバーである必要はありません。
 - DB2 のインストール ID およびスキーマ ID の両方に単一の ID を使用して、単純なインストールを行うこともできます。デフォルトの ID は db2inst1 です。詳しくは、ご使用の DB2 の資料を参照してください。

これらの一般的な前提条件に加えて、InfoSphere MDM をインストールするための特定の前提条件タスクがあります。これらのタスクについては、後続のトピックで概要を示します。

関連概念:

27 ページの『カスタム・インストール・デプロイメント・タイプ』

51 ページの『インストール・シナリオ』

13 ページの『複数インスタンスのサポート』

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

関連タスク:

21 ページの『第 3 章 製品のインストール』

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

関連資料:

2 ページの『インストール要件』

IBM Installation Manager の準備

InfoSphere MDM の各エディションのすべてのコンポーネントが、IBM Installation Manager を使用してインストールされます。

IBM Installation Manager は、定義済みのリポジトリを使用して、インストールに使用できるパッケージを判別します。これらのリポジトリはインストール・メディアを指しています。

IBM Installation Manager リポジトリにオファリングを手動で追加する必要があります。

ランチパッドは InfoSphere MDM ダウンロードに含まれており、スタンドアロン・サーバーおよびワークステーションのインストール用に IBM Installation Manager を開始するために使用できます。IBM Installation Manager が既にインストールされている場合、ランチパッドはそのバージョン番号を検査します。現行バージョンでなければ自動的に更新されます。IBM Installation Manager がインストールされていない場合、ランチパッドはそのインストールを開始します。

カスタム・インストールを計画している場合は、続いて IBM Installation Manager のインストールとリポジトリの追加のためのタスクを実行してください。スタンドアロン・サーバーまたはスタンドアロン・ワークステーションのインストールを計画している場合、これらのタスクを行う必要はありません。

関連タスク:

150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』

IBM Installation Manager のインストール:

以下の手順は、IBM Installation Manager がインストールされていない場合に使用します。

このタスクについて

LaunchPad を使用してインストールを開始する場合、Launchpad は IBM Installation Manager を自動的にインストールします。このケースでは、このタスクを完了させる必要はありません。

IBM Installation Manager は、管理者モードでインストールしないでください。

手順

1. 使用する InfoSphere MDM のバージョンとエディションに対応したパスポート・アドバンテージのページから、IBM Installation Manager パッケージをダウンロードします。
2. 圧縮ファイルを解凍します。
3. コマンド・プロンプトから次のコマンドを実行して、非 admin モードでインストールします。

- Microsoft Windows システムの場合: userinst.exe
 - Linux、AIX、または Solaris システムの場合: userinst
4. インストール・ウィザードを完了します。

次のタスク

続けてオフリングを IBM Installation Manager に追加します。

IBM Installation Manager へのオフリングの追加:

この手順を使用して、IBM Installation Manager によってインストールされるオフリングのリストに InfoSphere MDM を追加します。

始める前に

このタスクは、カスタム・インストールを実行している場合に実行します。スタンドアロン・サーバー・インストール、またはスタンドアロン・ワークステーション・インストールを実行している場合、このタスクを行う必要はありません。

IBM Installation Manager がインストールされていて、それが admin モードでインストールされていないことを確認します。

手順

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. 「ファイル」 > 「設定」をクリックします。
3. 「設定」ダイアログで、「リポジトリ」 > 「リポジトリの追加」を選択します。
4. 「リポジトリの追加」ダイアログで、「参照」をクリックします。
5. インストールする InfoSphere MDM パッケージを見つけて選択します。例えば、`download_path/MDM/disk1/diskTag.ini` などです。
6. IBM WebSphere Application Server、IBM DB2、InfoSphere MDM Workbench などの追加のオフリングをすべて追加します。
7. 「リポジトリの追加」ダイアログで、「OK」をクリックします。
8. 「設定」ダイアログで、「OK」をクリックします。

次のタスク

MDM 運用サーバー およびアプリケーションの準備とインストールを続行します。

カスタム・インストールに関するアカウントの前提条件

カスタム・インストールの開始前に、特定のアカウントの前提条件を満たしておく必要があります。

- ログオンは、IBM WebSphere Application Server のディレクトリーおよびバイナリー・ファイルを所有するアカウントで行う必要があります。このアカウントからデータベースの JDBC ドライバーにアクセスできる必要があります。準備に関する各トピックの説明は、サーバーにローカル・インストールを行うことを前提にしています。
- InfoSphere MDM を非 root ユーザーとしてインストールします。

- IBM WebSphere Application Server の場合は *wasadmin* ID を使用します。この ID は、DB2 クライアントまたは DB2 インスタンスを所有し、mqm 管理グループのメンバーでなければなりません。
- DB2 の場合:
 - インストール方法としては、データベース・スキーマ・ユーザー用に 1 人以上の制限付きユーザーをシステムにセットアップすることをお勧めします。DB2 はオペレーティング・システムを使用して新規ユーザーを認証するため、制限付きシェルを持つ *mdmdb1* などのユーザー ID が最良の選択です。このユーザーは、いずれかの DB2 グループのメンバーである必要はありません。
 - DB2 のインストール ID およびスキーマ ID の両方に単一の ID を使用して、単純なインストールを行うこともできます。デフォルトの ID は *db2inst1* です。IBM DB2 について詳しくは、製品資料を参照してください。
 - InfoSphere MDM のそれぞれのデプロイメントごとにデータベース・ユーザーおよびスキーマが異なっている必要があります。デプロイメントごとにデータベースが異なる必要はありません。
 - IBM WebSphere Application Server にインストールする場合は、*server* という名前のサーバー、または *cluster* という名前のクラスターが IBM WebSphere Application Server で使用されていないことを確認してください。*server* および *cluster* という名前は、InfoSphere MDM インストールで使用されます。

関連タスク:

133 ページの『コマンド・ライン・ツールを使用する前提条件の検査』

関連資料:

97 ページの『データベース・ユーザー・アカウントおよび接続』

14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

アプリケーション・サーバーのインストールおよびセットアップ

カスタム・インストールを実行して InfoSphere MDM をインストールすることを計画している場合、インストール・プロセスを開始する前にアプリケーション・サーバーを準備する必要があります。

InfoSphere MDM コンポーネントは WebSphere Application Server 内で実行されます。アプリケーション・サーバーによって、各コンポーネント間の通信、認証、およびロギングのためのインフラストラクチャーが提供されます。

注: スタンドアロン・インストールの実行を計画している場合、アプリケーション・サーバーは自動的にインストールされて構成されます。

新規アプリケーション・サーバーを準備することも既存のアプリケーション・サーバーを再使用することもできます。

InfoSphere MDM インストールのためにアプリケーション・サーバーを準備する前に、以下の前提条件を確認してください。

- 前提ソフトウェアがインストールされており、環境が正しくセットアップされていることを確認します。

- システム・パスに DB2 または Oracle のデータベース・ユーティリティを設定します。Microsoft SQL Server の場合、このステップは不要です。
- アプリケーション・サーバー構成のワークシートを確認し、インストール・プロセス中に要求される基本パラメーターについて理解します。このワークシートにより、インストールの完了に必要な基本情報を確認できます。複数インスタンスの場合、ワークシートをコピーし、デプロイメントごとに個別のワークシートを用意します。
- アプリケーション・サーバーを準備する際に、wasadmin ID を使用します。DB2 を使用する場合、この ID は DB2 クライアントまたは DB2 インスタンスを所有していなければなりません。メッセージングに WebSphere MQ を使用する場合、この ID は WebSphere MQ mqm グループのメンバーである必要があります。このグループは WebSphere MQ を管理するために使用されます。
- IBM WebSphere Application Server の WAS_HOME と JAVA_HOME Java パスをセットアップしたことを確認してください。
- *server* という名前のサーバー、または *cluster* という名前のクラスターがないことを確認してください。

重要: カスタム・インストールの場合、WebSphere Application Server Deployment Manager (Dmgr) JVM ヒープ・サイズ引数を 512MB および 1024MB に設定してください。これは、品目保守 UI をインストールする予定の場合には特に重要です。ヒープ・サイズを増やすには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を開き、「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」に移動します。
2. 「サーバー・インフラストラクチャー」の下で、「Java およびプロセス管理」を展開して、「プロセス定義」をクリックします。
3. 「追加プロパティ」の下で、「Java 仮想マシン」をクリックします。
4. 初期ヒープ・サイズを 512 MB、最大ヒープ・サイズを 1024 MB にそれぞれ設定します。
5. 「OK」をクリックし、変更を保存して、変更内容とノードを同期させます。

関連タスク:

150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』

関連資料:

39 ページの『WebSphere Application Server インストール・ワークシート』

管理対象サーバー・デプロイメントのための WebSphere Application Server Network Deployment の準備:

管理対象サーバー・デプロイメントのために IBM WebSphere Application Server Network Deployment をセットアップします。

このタスクについて

この手順は、InfoSphere MDM カスタム・インストールでのみ使用します。

注: スタンドアロン・インストールを計画している場合、この手順は必要ありません。

この手順では、IBM WebSphere Application Server が既にインストールされていることを想定しています。

手順

1. デプロイメント・マネージャー (dmgr) を作成します。
 - a. コマンド・プロンプトを開いて、IBM WebSphere Application Server のインストール・ディレクトリーを参照します。
 - b. コマンド・ライン・プロンプトで、`WAS_HOME\bin` ディレクトリーから次のコマンドを実行します。

Microsoft Windows の場合: `manageprofiles.bat -create -profileName dmgrName -profilePath WAS_PROFILE_HOME\dmgrName -templatePath WAS_HOME\profileTemplates\management -serverType DEPLOYMENT_MANAGER -enableAdminSecurity true -adminUserName userName -adminPassword password`

Linux または UNIX の場合: `manageprofiles.sh -create -profileName dmgrName -profilePath WAS_PROFILE_HOME/dmgrName -templatePath WAS_HOME/profileTemplates/management -serverType DEPLOYMENT_MANAGER -enableAdminSecurity true -adminUserName userName -adminPassword password`

2. `WAS_HOME\bin` ディレクトリーから次のコマンドを実行して、デプロイメント・マネージャーを開始します。 Microsoft Windows の場合: `startManager.bat -profileName dmgrProfileName`。 Linux および UNIX の場合: `startManager.sh -profileName dmgrProfileName`
3. デプロイメント・マネージャーに割り当てられているポートを検出します。
 - a. `profiles/dmgrProfileName/logs/AboutThisProfile.txt` ファイルを開きます。
 - b. 管理 SOAP コネクタ・ポートの項目を見つけて、その番号をメモします。
 - c. Integrated Solutions Console (管理コンソール) ポートの項目を見つけて、その番号をメモします。
4. `WAS_HOME\bin` ディレクトリーから次のコマンドを実行して、デプロイメント・マネージャーに接続されるノードを作成します。

Microsoft Windows の場合: `manageprofiles.bat -create -profileName profileName -profilePath WAS_PROFILE_HOME\profileName -templatePath WAS_HOME\profileTemplates\managed -hostName hostName -nodeName NodeName -cellName cellName -dmgrHost dmgrHost -dmgrPort dmgrPort -dmgrAdminUserName userName -dmgrAdminPassword password`

Linux または UNIX の場合: `manageprofiles.sh -create -profileName profileName -profilePath WAS_PROFILE_HOME/profileName -templatePath WAS_HOME/profileTemplates/managed -hostName hostName -nodeName NodeName -cellName cellName -dmgrHost dmgrHost -dmgrPort dmgrPort -dmgrAdminUserName userName -dmgrAdminPassword password`

ここで、

- `nodeProfileName` - ノードの名前。

- *username* - ステップ 1 で指定したユーザー。
 - *password* - ステップ 1 で指定したパスワード。
 - *dmgrPort* - ステップ 3b の管理 SOAP コネクタ・ポート番号。
5. *WAS_HOME*\bin ディレクトリーから次のコマンドを実行してノードを開始します。Microsoft Windows の場合: `startNode.bat -profileName nodeProfileName`。Linux および UNIX の場合: `startNode.sh -profileName nodeProfileName`
 6. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を開いて、ノード同期を有効にします。
 - a. ブラウザーを開いて、`https://localhost:port/ibm/console` に移動します。ポート番号は、ステップ 3c の Integrated Solutions Console ポート番号です。
 - b. 接続が信頼されていないことを示す警告が表示された場合、そのメッセージを無視するか、必要に応じてブラウザーの例外に追加することができます。
 - c. ステップ 1 の資格情報を使用してログインします。
 - d. 「システム管理 (System administration)」 > 「コンソール設定 (Console Preferences)」を表示します。
 - e. 「ノードと変更を同期化 (Synchronize changes with Nodes)」を選択して、「適用」をクリックします。
 7. Integrated Solutions Console で、データベース・ドライバー・パスを設定します。
 - a. 「環境」 > 「WebSphere 変数」に移動します。
 - b. データベース・タイプに指定されているドライバー・パス項目ごとに、項目をクリックします。例えば、**DB2_JDBC_DRIVER_PATH**、**ORACLE_JDBC_DRIVER_PATH**、**MICROSOFT_JDBC_DRIVER_PATH** です。
 - c. データベース・クライアント・インストール・ディレクトリーの親ディレクトリーへのパスを入力し、「OK」をクリックします。

ヒント: 単一スラッシュをダブルスラッシュに置き換えます。例えば、パスが `C:/IBM/SQLLIB` であれば、`C://IBM//SQLLIB` と入力します。

以下に例を示します。

- DB2 の場合は、`DB2_HOME/SQLLIB` を使用します。
 - Oracle の場合は、`ORACLE_HOME/jdbc/lib` を使用します。
 - Microsoft SQL Server の場合は、`SQL_PLUS_HOME` を使用します。
- d. 「マスター構成に直接保存 (Save directly to the master configuration)」を選択します。

非管理対象サーバーのための WebSphere Application Server Network Deployment の準備:

非管理対象サーバー・デプロイメントのために、IBM WebSphere Application Server Network Deployment をセットアップします。

このタスクについて

この手順は、InfoSphere MDM カスタム・インストールでのみ使用します。

スタンドアロン・インストールを計画している場合、この手順は必要ありません。

この手順では、IBM WebSphere Application Server が既にインストールされていることを想定しています。

手順

1. ノードに **server1** という名前のサーバーが作成される非管理対象ノードをアプリケーション・サーバーで作成します。*WAS_HOME*¥bin ディレクトリーから、次のコマンドを使用します。

```
Microsoft Windows の場合: manageprofiles.bat -create -profileName  
nodeProfileName -templatePath profileTemplates¥default -federateLater  
false -dmgrAdminUserName username -enableAdminSecurity true  
-adminUserName username -adminPassword password
```

```
Linux または UNIX の場合: manageprofiles.sh -create -profileName  
nodeProfileName -templatePath profileTemplates/default -federateLater  
false -dmgrAdminUserName username -enableAdminSecurity true  
-adminUserName username -adminPassword password
```

非管理対象サーバーを使用する場合、ノード・サーバーの名前は **server1** です。

2. *WAS_HOME*¥bin ディレクトリーから次のコマンドを使用して、ノードを開始します。Microsoft Windows の場合: startServer.bat -server1。Linux および UNIX の場合: startServer.sh -server1
3. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開いて、データベース・ドライバー・パスを設定します。
 - a. 「環境」 > 「WebSphere 変数」に移動します。
 - b. データベース・タイプに指定されているドライバー・パス項目ごとに、項目をクリックします。例えば、**DB2_JDBC_DRIVER_PATH**、**ORACLE_JDBC_DRIVER_PATH**、**MSSQLSERVER_JDBC_DRIVER_PATH** です。
 - c. データベース・インストール・ディレクトリーの親ディレクトリーへのパスを入力して、「OK」をクリックします。単一の円記号を二重円記号に置き換えます。例えば、パスが *C:¥IBM¥SQLLIB* であれば、*C:¥¥IBM* と入力します。
 - d. 「マスター構成に直接保存 (Save directly to the master configuration)」を選択します。

基本デプロイメントのための WebSphere Application Server の準備:

基本デプロイメントのために IBM WebSphere Application Server をセットアップします。

このタスクについて

基本デプロイメントを使用する計画の場合、IBM Installation Manager で *server1* という名前の IBM WebSphere Application Server プロファイルが作成されます。このプロファイルを使用する場合は、インストールの前にプロファイルを作成する必要はありません。

重要: *server1* を、Microsoft Windows サービスとして登録しないでください。登録した場合、InfoSphere MDM デプロイメント・モジュールのインストール・プロセス中に、IBM Installation Manager は *server1* を再始動することができません。

この手順は、InfoSphere MDM カスタム・インストールでのみ使用します。

スタンドアロン・インストールを計画している場合、この手順は必要ありません。

この手順では、アプリケーション・サーバーが既にインストールされていることを想定しています。

手順

1. IBM WebSphere Application Server 基本プロファイルを作成します。

- プロファイル管理ツールを使用して基本プロファイルを作成する手順は、次のとおりです。
 - a. *WAS_HOME*/bin/ProfileManagement ディレクトリーに移動し、プロファイル管理ツールを実行します。
 - Microsoft Windows の場合、*pmt.bat* を実行します。
 - Linux および UNIX の場合、*pmt.sh* を実行します。
 - b. 「環境の選択 (Environment Selection)」パネルで「アプリケーション・サーバー (Application Server)」をクリックした後、「次へ」をクリックします。
 - c. 「プロファイル作成オプション (Profile Creation Options)」パネルで、「標準プロファイル作成 (Typical profile creation)」を選択して「次へ」をクリックします。

ヒント: デフォルト構成を使用しない場合、オプションで「拡張プロファイルの作成 (Advanced profile creation)」を選択して、構成の詳細を指定します。この手順では、標準的なプロファイルの作成を想定しています。

- d. 「管理セキュリティ (Administrative Security)」パネルで、「管理セキュリティを使用可能にする (Enable administrative security)」オプションが選択されていることを確認します。ユーザー名とパスワードを追加して、「次へ」をクリックします。
 - e. 要約を確認し、「作成」をクリックします。プロファイル管理ツールは、基本プロファイルを作成します。
- コマンド行を使用して基本プロファイルを作成するには、以下のコマンドを実行します。

注: *WAS_HOME*、*was_user*、および *was_password* を正しい値で置き換えてください。

- UNIX および Linux システムの場合:


```
WAS_HOME/bin/manageprofiles.sh -create -templatePath
WAS_HOME/profileTemplates/default -enableAdminSecurity true
-adminUserName was_user -adminPassword was_password
```

– Windows システムの場合:

```
WAS_HOME\bin\manageprofiles.bat -create -templatePath
WAS_HOME\profileTemplates\default -enableAdminSecurity true
-adminUserName was_user -adminPassword was_password
```

注: 以下のオプション・パラメーターを使用すると、プロファイル作成コマンドにさらに詳細を指定できます。

- デフォルト・プロファイル・パスを使用しない場合は、コマンドに `-profilePath profile_path` を追加できます。
 - デフォルト・プロファイル名を使用しない場合は、コマンドに `-profileName profile_name` を追加できます。
2. 基本プロファイルを作成した後で、サーバーを始動します。ファースト・ステップ・コンソールまたはコマンド行を使用できます。例: `/opt/IBM/WebSphere/AppServerBASE/profiles/AppSrv01/bin/startServer.sh server1`

新規ユーザーの作成および MDM グループへのユーザーの追加:

この手順を使用して、IBM WebSphere Application Server ユーザーを作成し、そのユーザーを InfoSphere MDM グループに追加します。

このタスクについて

IBM Installation Manager によって、すべてのグループと、必要な権限および特権を持つ MDM admin ユーザー (mdmadmin) が作成されます。この手順を使用して、新規ユーザーを追加します。

制約事項: インストール前に mdmadmin ユーザーを作成しなければならない場合 (アプリケーション・サーバーがサード・パーティーによりセットアップおよび制御され、フェデレーテッド・リポジトリからすべてのユーザー・アカウントを継承する場合など)、mdmadmin パスワードが 16 文字以下であることを確認します。これより長いパスワードは、認証のためにアプリケーション・サーバーに渡される前に、仮想 MDM API で 16 文字に切り捨てられます。その結果、仮想 MDM クライアントでは認証が失敗します。

ユーザー・アカウントおよびグループのトピックで、使用可能なグループに関する情報を参照してください。

手順




1. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) で、「ユーザーおよびグループ」 > 「ユーザーの管理」に移動し、「作成」をクリックします。
2. 「ユーザーの作成」ページで、ユーザー ID、名前、およびパスワードを入力します。
3. 「グループ・メンバーシップ」をクリックします。
4. 「グループ・メンバーシップ」ページで、検索キー「*」でグループを検索対象とし、「検索」をクリックします。
5. 「使用可能」列で、ユーザーを追加するグループを強調表示し、「追加」をクリックしてグループを「マップ先 (Mapped To)」列に移動します。

6. 「グループ・メンバーシップ」 ページで、「閉じる」をクリックします。
7. 「ユーザーの作成」 ページで、「作成」をクリックします。

関連資料:

14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

関連情報:

-  ユーザーの管理
-  運用サーバーのユーザー・セキュリティの使用可能化
-  仮想 MDM のユーザーおよびユーザー・グループの構成

MDM 内のチャンネル用セキュリティ役割の変更:

MDM 内のセキュリティ・メカニズムには、いくつかのチャンネル役割の構成があります。

MDM では、呼び出し元の役割が以下のそれぞれの製品の構成で構成済みの場合のみ、これらのチャンネルからの要求を受け付けます。

- /IBM/DWLCommonServices/Security/TrustedClientMode/Batch/roles
- /IBM/DWLCommonServices/Security/TrustedClientMode/EventManager/roles
- /IBM/DWLCommonServices/Security/TrustedClientMode/OtherChannels/roles

これらの構成には、デフォルトではデフォルト値の `mdm_admin` があります。新規ユーザーが作成され、`mdm_admin` 役割に割り当てられていない場合、これらの構成を更新して、作成されたユーザーの有効な役割を構成する必要があります。

詳しくは、「セキュリティ・サービスの定義」トピックを参照してください。

データベースのインストールおよびセットアップ

InfoSphere MDM のカスタム・インストールをサポートするためにデータベースを準備します。この手順は、カスタム・インストールを実行する場合に完了させる必要があります。

このタスクについて

注: スタンドアロン・インストールの実行を計画している場合には、データベースが自動的に作成されるので、このタスクを行う必要はありません。

データベースとユーザー・アカウントに名前を定義する場合、関連付けられるデータベース・インスタンス、ユーザー・アカウント、およびデータ・ソース構成に同じ名前を付けることを検討します。また、その名前に InfoSphere MDM のバージョンを含めることもできます。例えば、これらの要素のそれぞれに実動データベースの `mdmprod_113` という名前を付けることができます。この命名規則を使用すると、組織内の他のメンバーや IBM ソフトウェア・サポートが、インスタンス、アカウント、データベースの間のマッピングを理解するために役立ちます。

手順

1. 関連参照としてリストされている該当のデータベース・ワークシートの作成を完了させます。
2. データベース・ソフトウェアをインストールし、データベース・ユーザー・アカウントを適切なアクセス権で作成します。データベース・ベンダーの提供する資料を使用して、インストールを完了させます。データベース・ソフトウェアをインストールする前に、データベース・ユーザー・アカウントのトピックを確認してください。

注: スタンドアロン・サーバーおよびスタンドアロン・ワークステーションのインストールでは、IBM DB2 ラッパーがインストールされます。カスタム・インストールの場合、標準 DB2 インストール・メディアを使用してください。

3. オプションで、disk1.zip ダウンロードから Installation Startup Kit を抽出できます。このツールキットには MDM データベースの作成に使用できるスクリプトが備わっていますが、それらは必須のものではありません。

注: Installation Startup Kit を抽出しない場合、InfoSphere MDM のインストール中に、インストール・アプリケーションから警告が表示されます。

4. MDM データベースを以下のいずれかの方法で作成します。
 - データベース・タイプに対応する Installation Startup Kit スクリプトを実行します。これらのスクリプトは、ご使用の InfoSphere MDM のエディションに必要な適切な表スペース、バッファ・プール、およびエンコード指定を自動的に作成します。これらの設定の一部の詳細は、関連参照のトピックを参照してください。
 - 別の方式を使用して、手動でデータベースを作成します。

注: 必要なデータベース構成と設定値については、関連参照のトピックを参照してください。

関連タスク:

150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』

関連資料:

31 ページの『DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート』

36 ページの『Oracle データ・ソース・ワークシート』

34 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシート』

11 ページの『カスタム・インストールのための Installation Startup Kit』

データベース・ユーザー・アカウントおよび接続:

すべてのインストールで、少なくとも 1 つのデータベース・ユーザー・アカウントが必要です。

データベースのブートストラップ (通常、インストール中に行われます)、アップグレード処理、新規エンティティ・タイプの定義、実装定義されるセグメントの作成を行うには、データベース・ユーザー・アカウントに特定の権限が付与されている必要があります。このプライマリー・ユーザー・アカウントには、以下の権限が必要です。

- 表の作成および表のドロップ

- 索引の作成および索引のドロップ
- 選択、挿入、更新、および削除

データベースがブートされ、エンティティ・タイプと実装定義されるセグメントが構成された後、必要に応じて、ユーザー・アカウントを制限することもできます。制限されたユーザー・アカウントが持つ権限は、選択、挿入、更新、および削除のみです。

ユーザーが複数のデータベースへのアクセス権限を持たないようにするため、データベース・ユーザーとデータベース間の 1 対 1 関係を構成することを考慮します。このモデルによって、1 データベース・ユーザーが別の表をドロップすることを防止できるセキュリティー・レイヤーが提供されます。

データベース・ユーザー・アカウント資格情報を記録してください。この情報は、インストールを完了するために必要になります。

データベース接続数は、運用サーバーおよび使用する計画であるエンティティ・マネージャーによって使用される接続の合計です。一部の運用サーバーや InfoSphere MDM Workbench 処理では、処理が完了すると接続はクローズするため、より多くのデータベース接続が必要になります。構成では、このような処理のためにより多くの接続を許可します。

関連概念:

88 ページの『カスタム・インストールに関するアカウントの前提条件』

関連資料:

14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

139 ページの『カスタム・インストールに関する前提条件検査』

73 ページの『スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) に関する前提条件検査』

DB2 データベースの準備:

この手順を使用して、InfoSphere MDM のインストールのために IBM DB2 データベースをセットアップします。

始める前に

- これらのステップは、データベースが既にインストール済みであることを想定しています。
- MDM データベースを作成するには、DB2 をインストールしたときに作成した admin ユーザー・アカウントを使用して DB2 にログインする必要があります。
- IBM DB2 Enterprise Server Edition がインストールされている必要があります。

このタスクについて

重要: z/OS 上に InfoSphere MDM をインストールする場合は、データベース準備ステップをスキップして 154 ページの『z/OS でのインストール』に進んでください。

手順

1. ダウンロードしたパッケージ・ファイル `disk1.zip` から、Installation Startup Kit を抽出します。
2. `CreateDB.sql` スクリプトを変更します。
 - a. `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/SQLServer/dd1/` ディレクトリー (`STARTUPKIT_INSTALL_HOME` は抽出されたキットの場所) に移動します。
 - b. テキスト・エディターで `CreateDB.sql` ファイルを開きます。
 - c. スクリプト内の変数の値を、スクリプトの先頭の記述に従って置き換えます。変数は `<>` で囲まれています (例えば `<DBNAME>`)。例えば、`CreateDB.sql` の `<TERRITORY>` 変数を、該当する国別コードに置き換える必要があります。アメリカ合衆国でインストールを行う場合は、`<TERRITORY>` を `US` に置き換えます。
3. DB2 admin ユーザー・アカウントに変更します。

Microsoft Windows の場合:

- a. 「スタート」メニューを開き、「すべてのプログラム」 > 「IBM DB2」 > 「DB2COPY1」 (デフォルト) に移動します。
- b. 「コマンド ウィンドウ」でシフトを押しながら右クリックして、「別のユーザーとして実行...」を選択します。
- c. DB2 admin ユーザー名とパスワードを入力します。

Linux および UNIX の場合:

- a. Linux または UNIX ターミナルを開きます。
 - b. コマンド・ライン・プロンプトで、`su - user` を入力します。ここで `user` は DB2 admin ユーザーです。
4. `CreateDB.sql` スクリプトを実行して、データベースを作成します。
 - a. `CreateDB.sql` ファイルのあるディレクトリーに移動します。
 - b. 該当のコマンドを実行します。
 - Microsoft Windows の場合: `db2 -td; -f CreateDB.sql`
 - Linux および UNIX の場合: `db2 -tvf STARTUPKIT_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/DB2/Standard/dd1/CreateDB.sql`

重要: この手順の残りのステップはオプションです。表スペースを手動で作成しない場合には、以下のステップを省略できます。この場合、表スペースは、インストールの際にインストール・アプリケーションによって自動的に作成されます。

5. `CreateTS.sql` スクリプトを変更します。
 - a. テキスト・エディターで `CreateTS.sql` ファイルを開きます。
 - b. スクリプト内の変数の値を、スクリプトの先頭の記述に従って置き換えます。変数は、`<>` で囲まれています (例: `<DBNAME>` または `<TABLE_MDS4K>`)。

重要: このファイルで変数に置き換わる値は、データベースのセットアップ時に使用した値と一致していなければなりません。そうでないと、インストーラーは正常に実行できません。
6. `CreateTS.sql` を実行して表スペースを作成します。

- a. 該当のコマンドを実行します。
 - **Microsoft Windows** の場合: `db2 -td; -f CreateTS.sql`
 - **Linux および UNIX** の場合: `db2 -tvf STARTUPKIT_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/DB2/Standard/dd1/CreateTS.sql`
7. `CreateTS.sql` を実行した後で、表スペースの設定が予期したとおりであることを検証します。

Microsoft Windows の場合:

- コマンド・プロンプトを開き、`db2cmd` と入力します
- コマンド「`db2 connect to MDMDB user DBUSER using DB2PWD`」を使用して、データベースに接続します。
- 接続したら、「`db2 list tablespaces`」と入力します。

Linux および UNIX の場合:

- 新しい端末を開いて、「`db2`」と入力します。
- コマンド「`db2 connect to MDMDB user DBUSER using DB2PWD`」を使用して、データベースに接続します。
- 接続したら、「`db2 list tablespaces`」と入力します。

関連資料:

31 ページの『DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース・ワークシート』

InfoSphere MDM とは別のサーバーに DB2 データベースを準備するには:

データベースと InfoSphere MDM インストールが異なるサーバー上にある環境へのデプロイメント用に IBM DB2 データベースをセットアップします。

手順

1. InfoSphere MDM をインストールしようとしているマシンで、以下のことを行う必要があります。
 - a. DB2 クライアント・ソフトウェアをインストールします。
 - b. ローカル・サーバーにリモート・データベースをカタログします。プレースホルダーを適切な値に置き換えて以下のコマンドを使用します。

```
db2 catalog tcpip node <NODE_NAME> remote <DB_SERVER> server <PORT_NUMBER>
db2 catalog db <DB_NAME> as <DB_NAME> at node <NODE_NAME> authentication server
```
2. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を使用し、ローカル・マシン上の DB2 インスタンスのホームを指定して、ノード・レベルをターゲットにした WebSphere Application Server 環境変数 `DB2_JDBC_DRIVER_PATH` を作成する。

クラスター環境で InfoSphere MDM を使用するために DB2 データベースを準備するには:

InfoSphere MDM がクラスター環境にある環境へのデプロイメント用に DB2 データベースをセットアップします。

手順

1. DB2 クライアント・ソフトウェアをインストールします。
2. クラスター内のすべてのマシンでデータベースをカタログします。
3. DB2_JDBC_DRIVER_PATH WebSphere Application Server 環境変数を作成し、クラスター内のすべてのノードに対して、そのマシンのローカルに存在する DB2 のホームに設定します。

関連タスク:

198 ページの『新しいノードを既存のクラスターに追加する』

DB2 for z/OS 用のデータベース・ユーザー権限の構成:

InfoSphere MDM のデプロイメントで IBM DB2 for z/OS を使用している場合、データベース・ユーザー ID が MDM データベースにおける BINDADD 特権を保持していることを確認する必要があります。

このタスクについて

DB2 Wire Protocol ドライバーは、接続を予定するすべてのサーバーに適切なパッケージが存在していないと、適切に機能しません。ドライバーがパッケージを作成し、バインドするには、データベース・ユーザー ID に BINDADD 特権が必要です。

注: デフォルトでは、パッケージは 200 個の動的セクションを含んでおり、NULLID という名前のコレクションに作成されます。

バインド・パッケージが正しい位置に配置されていない場合、運用サーバーで InfoSphere MDM データ・ソースへの接続をテストしている間に、以下のメッセージが表示されます。

```
java.sql.SQLException: [IBM][DB2 JDBC Driver]Bind process is not active.  
Please ensure that the user has permissions to create packages.  
Packages cannot be created in an XA Connection. DSRA0010E: SQL State = HY000, Error Code = 0.
```

手順

1. データベース管理者 (DBA) ユーザーとしてログインします。
2. MDM データベースに接続します。
3. データベース・ユーザー (*dbuser*) に BINDADD 特権を付与します。
4. DBA ユーザー・アカウントからログアウトします。
5. データベース・ユーザー・アカウントを使用してログインします。データベース・ユーザー・アカウントが DB2 Wire Protocol ドライバーを使用してデータベースに接続すると、自動的に正しいパッケージが作成されます。

関連情報:

 The DB2 Wire Protocol Driver and Packages

バインド処理がアクティブではありません

DB2 ユーティリティー・パスの設定:

IBM DB2 データベースを使用する場合、システム・パスにデータベースのユーティリティーを設定する必要があります。

手順

コマンド行で、DB2 データベースのユーティリティをシステムの PATH 変数に追加します。

以下に例を示します。

```
export PATH=DB2_HOME/sql1lib/bin:$PATH
```

次のタスク

また、エクスポートした行をユーザー・プロファイルに追加することもできます。

Microsoft SQL Server データベースの準備:

InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、Microsoft SQL Server データベースをセットアップします。

このタスクについて

MDM データベースを作成するには、Windows 認証を使用するか、Microsoft SQL Server のインストール時に作成した管理ユーザー・アカウントを使用して、Microsoft SQL Server にログインする必要があります。

Windows 認証を使用する予定の場合、データベース管理者は、ログイン・ユーザーのデフォルト・スキーマを IBM Installation Manager が使用するスキーマに設定しなければなりません。

手順

1. Installation Startup Kit に用意されている CreateDB.sql スクリプトを変更します。

ヒント: ダウンロードしたパッケージ・ファイル disk1.zip から、Installation Startup Kit を抽出できます。

- a. `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/SQLServer/dd1/` ディレクトリー (`STARTUPKIT_INSTALL_HOME` は抽出されたキットの場所) に移動します。
 - b. テキスト・エディターで `CreateDB.sql` ファイルを開きます。
 - c. スクリプト内の変数の値を、スクリプトの先頭の記述に従って置き換えます。変数は `<>` で囲まれています (例えば `<DBNAME>`)。
2. sa ユーザーを使用することにより、`CreateDB.sql` スクリプトを実行してデータベースを作成します。

SQL 認証ではなく Windows 認証を使用してデータベースにアクセスするときは、次のオプションのいずれかを実行する必要があります。

- クライアントと SQL Server が同じドメインに存在する場合、クライアントが使用するログイン・ユーザーを SQL Server セキュリティー・ログインに追加する必要があります。
 - クライアントと SQL Server が異なるドメインに存在する場合、その 2 つのドメインはトラステッド・ドメインでなければなりません。
3. 実行中の SQL Server のインスタンスの `/Binn` ディレクトリーに `sqljdbc.dll` ファイルをコピーします。

- SQL Server 32 ビットを使用する場合、sqljdbc.dll ファイルは `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/SQLServer JTA/win32` にあります。
 - SQL Server 64 ビットを使用する場合、このファイルは `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/SQLServer JTA/win64_amd64` にあります。
4. JDBC ドライバーによって使用される XA ストアード・プロシージャをインストールします。 `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/SQLServer JTA` ディレクトリーから、`instjdbc.sql` スクリプトを sa ユーザーとして実行します。
 5. XA トランザクションで MS DTC を有効にします。

Windows 7 および Windows 2008 の場合

- a. デスクトップで「スタート」アイコンをクリックし、次のオプションのいずれかを使用して「コンポーネント サービス」を開きます。
 - 「検索の開始」ボックスに `dcomcnfg` と入力します。
 - 「検索の開始」ボックスに `%windir%/system32/comexp.msc` と入力します。
- b. 「コンピューター」 > 「マイ コンピューター」 > 「**Distributed Transaction Coordinator**」に移動します。
- c. 「ローカル DTC」を右クリックして「プロパティ」を選択します。
- d. 「ローカル DTC のプロパティ」ダイアログで、「セキュリティ」タブを開きます。
- e. 「**XA トランザクションを有効にする**」を選択してから、「OK」をクリックします。このステップで MS DTC サービスが再始動します。
- f. 「ローカル DTC のプロパティ」ダイアログで「OK」をクリックして、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- g. MS DTC の変更と同期させるために、Microsoft SQL Server を再始動します。Microsoft オペレーティング・システムのレジストリーで `XATransactions=1` であることを確認します。

関連資料:

34 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソース・ワークシート』

InfoSphere MDM とは異なるサーバー上の Microsoft SQL Server データベースの準備:

InfoSphere MDM インストール済み環境とは別のサーバー上にある場合に、Microsoft SQL Server データベースをセットアップします。

手順

MDM のインストールを計画しているマシンに、Microsoft SQL Server クライアントをインストールします。

このクライアントをインストールすると、クライアント・アカウントがデータベース・ユーザー・アカウントに自動的に追加されます。ご使用の IBM WebSphere Application Server 環境に `MSSQLSERVER_JDBC_DRIVER_PATH` を設定する必要はありません。

InfoSphere MDM をクラスター環境で使用するための Microsoft SQL Server データベースの準備:

クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール時に、Microsoft SQL Server データベースをセットアップします。

手順

InfoSphere MDM コンポーネントをインストールすることを計画しているすべてのマシンに、Microsoft SQL Server クライアントをインストールします。このクライアントをインストールすると、クライアント・アカウントがデータベース・ユーザー・アカウントに自動的に追加されます。ご使用の IBM WebSphere Application Server 環境に MSSQLSERVER_JDBC_DRIVER_PATH を設定する必要はありません。

Oracle データベースの準備:

InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、Oracle データベースをセットアップします。

始める前に

- これらのステップは、データベースが既にインストール済みであることを想定しています。
- MDM データベースを作成するには、Oracle のインストール時に作成したデータベース管理者のユーザー・アカウントで Oracle にログインする必要があります。
- InfoSphere MDM を Oracle と共にインストールするには、データベース・ユーザー名とスキーマ名を同じにする必要があります。

手順

1. 文字セット UTF-8 を使用していることを確認します。そうでない場合は、コマンド「**CREATE DATABASEname...CHARACTER SET AL32UTF8**」を使用してデータベースを作成してください。
2. Unicode 用の文字長のセマンティクスを設定します。変数 `NLS_LANG_SEMANTICS` を `CHAR` に設定する必要があります (デフォルト設定は `BYTE`)。コマンド「**ALTER SYSTEM SET NLS_LENGTH_SEMANTICS=CHAR SCOPE=BOTH**」を実行します。
3. Oracle クライアントで無線接続ドライバーを使用している場合、運用サーバーに接続するユーザーに `NLS_LANG` 変数を設定する必要があります。その変数を `NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8` に設定します。

重要: この手順の残りのステップは**オプション**です。表スペースを手動で作成しない場合には、以下のステップを省略できます。この場合、表スペースは、インストールの際にインストール・アプリケーションによって自動的に作成されます。

4. Installation Startup Kit に用意されている `create_schema_ora.sql` スクリプトを変更します。

ヒント: ダウンロードしたパッケージ・ファイル `disk1.zip` から、Installation Startup Kit を抽出できます。

- a. `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/Oracle/Standard/dd1/` ディレクトリー (`STARTUPKIT_INSTALL_HOME` は抽出されたキットの場所) に移動します。
- b. テキスト・エディターで `create_schema_ora.sql` ファイルを開きます。ファイルには、以下の変数が含まれており、適切な値に置き換える必要があります。
- c. データベースが Microsoft Windows で作成されている場合、`<TABLESPACE_LOCATION>` 変数を表スペースの場所で置き換えてください。場所の値は、「`<ORACLE_HOME>¥<DBNAME>`」という構文に従う必要があります。

重要: Microsoft Windows でデータベースを作成している場合は、ファイル・パス内のすべてのスラッシュ文字 (/) を円記号 (¥) に変更することも必要です。

- d. `<ORACLE_HOME>/oradata` フォルダ内、`<DBNAME>` 値と同じ名前を持つ空のサブフォルダを作成します。
- e. 次のように、表スペース名をセットアップします。
 - デフォルト表スペースの値を使用するには、`create_schema_ora.sql` スクリプト内の変数の値を、スクリプトの先頭の記述に従って置き換えます。変数は、次のように不等号括弧 `< >` で囲まれます。
 - `<DBNAME>` - データベース名。
 - `<NEWPASSWORD>` - データベースのパスワード。
 - `<INDEX_SPACE>` - 索引データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が `IDXSPACE` であることを予期しています。
 - `<LONG_SPACE>` - CLOB および XML データ・タイプの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が `LOBSPACE` であることを予期しています。
 - `<TABLE_SPPMD>` - Probabilistic Matching Engine ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が `EMESPACE1` であることを予期しています。
 - `<TABLE_SPPMI>` - Probabilistic Matching Engine 索引データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が `EMESPACE2` であることを予期しています。
 - `<TABLE_MDS4K>` - 4K ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が `TBS4K` であることを予期しています。
 - `<TABLE_SPACE>` - 8K ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が `TBS8K` であることを予期しています。
 - `<TABLE_SPMDS>` - 16K 仮想 MDM ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が `TBS16K` であることを予期しています。
 - カスタマイズされた表スペース名を使用する手順は、次のとおりです。
 - 1) カスタム表スペース名を使用するデータベースを作成します。
 - 2) InfoSphere MDM インストール入力応答ファイルを作成または編集して、カスタム表スペース名が InfoSphere MDM インストーラーにマップされるように、表スペース名の変数を変更します。

```
<data key='user.L2.long.space.ora.com.ibm.mdm.advanced' value='LOBSPACE' />
<data key='user.L2.index.space.ora.com.ibm.mdm.advanced' value='IDXSPACE' />
<data key='user.L2.eme.sppmd.space.com.ibm.mdm.advanced' value='EMESPACE1' />
<data key='user.L2.eme.sppmi.space.com.ibm.mdm.advanced' value='EMESPACE2' />
```

重要: InfoSphere MDM にはサンプルのインストール入力応答ファイルが用意されており、このファイルを、カスタマイズした表スペースを定義するように変更できます。サンプル入力応答ファイルについて詳しくは、160 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

- 3) InfoSphere MDM インストーラーを GUI モードまたはサイレント・モードのいずれかで開始します。その際に、開始コマンドに引数 `IBMIM -input ./mdm_input.res` (ここで、`mdm_input.res` はサイレント入力応答ファイルの名前) を組み込んで、インストーラーが変更後の入力応答ファイルのパラメーターを使用するようにします。
5. スクリプト `create_schema_ora.sql` を実行して、Oracle スキーマを作成します。

次のタスク

`create_schema_ora.sql` スクリプトの実行を省略した場合、Oracle データベース・システムを変更する必要があります。

- `create_schema_ora.sql` スクリプト内で、`ALTER SYSTEM SET open_cursors` ステートメントが `ALTER SYSTEM SET open_cursors = 1500 SCOPE=BOTH;` として設定されていることを確認します。
- `GRANT CREATE SEQUENCE TO SCHEMA;` (`SCHEMA` をスキーマ名で置き換える) として、明確に権限付与が行われていることを確認します。
- Oracle `CURSOR_SHARING` プロパティを `CURSOR_SHARING=FORCE` に構成します。

関連資料:

36 ページの『Oracle データ・ソース・ワークシート』

InfoSphere MDM とは別のサーバーに Oracle データベースを準備するには:

データベースと InfoSphere MDM インストールが異なるサーバー上にある環境へのデプロイメント用に Oracle データベースをセットアップします。

手順

1. InfoSphere MDM をインストールしようとしているマシンに Oracle クライアントをインストールします。
2. クライアント・マシンの TNS エントリーがデータベース・サーバーを指すようにします。
3. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を使用して、環境変数 `ORACLE_JDBC_DRIVER_PATH` を作成し、ローカル・マシンの Oracle データベースのホームを指定して、ノード・レベルをターゲットにします。

クラスター環境で InfoSphere MDM を使用するために Oracle データベースを準備するには:

InfoSphere MDM のクラスター環境へのインストールをサポートするように、Oracle データベースをセットアップします。

手順

1. すべてのマシンに Oracle クライアントをインストールします。
2. TNS エントリがデータベース・サーバー・マシンを指すようにします。
3. 環境変数 ORACLE_JDBC_DRIVER_PATH WebSphere Application Server を作成し、クラスター内のすべてのノードに対して、そのマシンのローカルに存在する Oracle データベースのホームに設定します。

関連タスク:

198 ページの『新しいノードを既存のクラスターに追加する』

Oracle ユーティリティーのパスの設定:

Oracle データベースを使用する場合、システム・パスにデータベースのユーティリティーを設定する必要があります。

手順

コマンド行で、Oracle データベースのユーティリティーをシステムの PATH 変数に追加します。

以下に例を示します。

```
export ORACLE_HOME=ORACLE_HOME
export PATH=$ORACLE_HOME/bin:$PATH
```

次のタスク

また、エクスポートした行をユーザー・プロファイルに追加することもできます。

Standard Edition でインストールされる ODBC ドライバー:

InfoSphere MDM Standard Edition をインストールする際にインストール・アプリケーションによって適用される ODBC ドライバーは、定義したデータベース・タイプによって決定されます。

ワイヤー・ドライバーによって、仮想 MDM 構成をサポートする運用サーバーで、データベースと通信してスキーマにデータを書き込むことができます。このケースでは、バルク・ロード操作を使用可能にするために、運用サーバー・ホストで該当のデータベース・クライアントのインストールが必要になります。

運用サーバーには、以下の ODBC ドライバーが組み込まれています。その他のドライバーはサポートされません。

- Oracle Wire
- Oracle Net
- IBM DB2 Wire (DB2 and DB2 for z/OS)
- Microsoft SQL Server Wire

Oracle データベースの場合は、インストール・プロセス中に **madconfig** ユーティリティに渡されるプロパティによって、Oracle Wire ドライバーと Oracle Net ドライバーのどちらをインストールするかが決まります。データベース・ホストに空の値が渡された場合は、Oracle Net ドライバーがインストールされます。つまり、Oracle クライアントを運用サーバー・ホストにインストールすることが必要になります。

ヒント: Microsoft Windows プラットフォームにインストールするとき、インストール・アプリケーションで作成する代わりに分離された ODBC データ・ソースを手動で作成する場合には、コマンド `madconfig.bat register_odbc` を実行して ODBC ドライバーが正常に登録されるようにする必要があります。

関連タスク:

158 ページの『Oracle 非ワイヤード・ドライバーのサポートの有効化』

物理 MDM データベース の手動インストール:

物理 MDM データベースを DB2 for UNIX または Linux、DB2 for z/OS、および Oracle に手動でインストールできます。

このタスクについて

どのような場合でも、IBM Installation Managerを使用して物理 MDM データベースを作成することができます。ただし、手動でインストールするオプションもあります。

仮想 MDM データベースは、IBM Installation Manager を使用すると必ずインストールされます。

重要: InfoSphere MDM Advanced Edition (物理 MDM) では、コア・データベースが必要です。コア・データベースは、一部の InfoSphere MDM Standard Edition (仮想 MDM) トランザクションが正しく処理を行うためにも必要になります。IBM Installation Manager を使用して InfoSphere MDM をインストールする場合、必要なコア・データベース・コンポーネントが自動的にインストールされます。Microsoft SQL Server データベースを使用している場合は、SQL サーバー用にサポートされる唯一のエディションが InfoSphere MDM Standard Edition (仮想 MDM 実装) である点に注意してください。

手動インストールを開始するには、その前に、以下の詳細を確認して、表スペースの作成およびトリガーのインストールに関する必要な決定を下してください。

表スペース

UNIX または Linux 上の DB2 データベースおよび Oracle データベースの場合は、ユーザー・データ用、ユーザー索引用、およびユーザー・ラージ・オブジェクト用の表スペースを作成して、データベースのパフォーマンスを改善できます。ブレースホルダー値が、該当するスクリプトに `TABLE_SPACE`、`INDEX_SPACE`、および `LONG_SPACE` として提供されます。提供されているスクリプト内の表スペース・サイズは、ユーザーの実稼働環境に適合するサイズに調整できます。

InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン には 2 つの個別の表スペースがあります。InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン 表スペース

の名前は `TABLE_SPACE` および `INDEX_SPACE` と同じだが、表スペース名の最後に文字 `E` が追加されている必要があります。

トリガー

InfoSphere MDM インストールでは、2 つのタイプのトリガー (単純トリガーおよび複合トリガー) が提供されています。インストールするトリガーのタイプについて、以下のいずれかを選択します。

- **単純トリガー:** 基本表が作成、更新、または削除されるときに、現行データの *前* イメージのコピーが `HISTORY` 表に作成されます。この `HISTORY` 表には古いレコードのみが格納され、基本表内の現行レコードは含まれていません。単純トリガーのインストールを選択した場合は、更新の単純トリガーをインストールする必要があります。また、任意指定である削除の単純トリガーもインストールできます。
- **複合トリガー:** 基本表が挿入、更新、または削除されるときに、現行データの *前* イメージと *後* イメージのコピーが基本表から `HISTORY` 表に作成されます。この `HISTORY` 表には、すべての古いレコードと、基本表内の現行レコードが格納されています。複合トリガーのインストールを選択した場合は、挿入および更新のトリガーをインストールする必要があります。オプションで、複合削除トリガーもインストールできます。
- **なし:** ヒストリー・トリガーはインストールされません。

複数タイム・ゾーン (UTC)

アプリケーションが異なるタイム・ゾーンの間で実行されている場合、またはデータに異なるタイム・ゾーンでの時間の値がある場合、複数タイム・ゾーン・フィーチャーを使用可能に設定する必要があります。

このフィーチャーは、一度アクティブ化されると非アクティブ化できません。

複数タイム・ゾーン・フィーチャーが不要な場合は、InfoSphere MDM のインストール時に使用不可に設定する必要があります。

大/小文字の区別を切り替え可能な検索機能

契約、品目、およびカテゴリーを、名前を基準にして大/小文字の区別を制限しないで検索する機能を追加できます。大/小文字を区別しないフィーチャーは、一度アクティブ化されると非アクティブ化できません。DB2 UDB、DB2 for z/OS バージョン 9 以降、および Oracle で利用可能です。

手順

1. IBM Installation Manager を開いて、「**Install**」をクリックします。
2. 「Installation Packages」リストで、「**InfoSphere MDM Standard Edition or Advanced Edition**」を選択して「**Next**」をクリックします。
3. フィーチャー・リストで、「**InfoSphere MDM Standard Edition or Advanced Edition**」を展開して、「**MDM Database**」だけが選択されていることを確認します。「次へ」をクリックします。
4. 「データベース構成 (Database Configuration)」フィールドに、データベース・タイプ、場所、および接続の詳細を指定して、「**手動データベース・インストールのためのスクリプトを抽出する (Extract scripts for manual database installation)**」を選択します。「**インストール (Install)**」をクリックします。

IBM Installation Manager は仮想 MDM データをインストールし、物理 MDM データのインストールに使用できる SQL スクリプトを抽出します。

5. SQL スクリプトを実行し、物理 MDM データをインストールします。
6. スクリプトが完了し、物理 MDM データがインストールされたら、IBM Installation Manager を再度開いて、「**Modify**」をクリックします。
7. 「Features」リストで、既に選択されている「**MDM Database**」フィーチャーに加えて「**MDM Operational Server**」を選択し、「**Next**」をクリックします。
8. 「**Install**」をクリックして、物理 MDM データベース のインストールを完了します。

DB2 for z/OS と接続するために WebSphere Application Server で XA 構成を設定する:

以下の手順は、MDM データベースを DB2 for z/OS に手動でインストールする場合に、IBM WebSphere Application Server で XA 構成を設定するために使用します。

このタスクについて

注: この手順に記載されたサンプルの値は、ご使用のサーバー環境に合わせて変更してください。

手順

1. root ユーザーとして UNIX システムにログインし、DB2 インスタンス・ディレクトリーにアクセスします。以下に例を示します。 `cd /usr/opt/db2_10_01/instance`
2. このインスタンス・ディレクトリーから以下のコマンドを実行して、インスタンスを作成します。 `db2icrt -s client db2inst`
3. インスタンスが作成されたら、インスタンス・ユーザー (この例の場合、db2inst1) としてログインし、z/OS データベースをカタログします。
4. DB2 for z/OS からクライアントの `<DB2_HOME>/sqlllib/java` フォルダに `db2jcc_license_cisuz.jar` をコピーします。
5. 以下の行を CLASSPATH に追加します。
`<DB2_HOME>/sqlllib/java/db2jcc.jar:<DB2_HOME>/sqlllib/java/db2jcc_license_cisuz.jar`

関連タスク:

118 ページの『TSO および JCL を使用した DB2 for z/OS へのコア・データベースの手動インストール』

z/OS データベースの作成およびインストール:

サブシステムを作成し、それにデータベースを関連付ける場合、InfoSphere MDM が DB2 for z/OS 上で開発されたものであり、Unicode データが使用されていて、複数の言語がサポートされていることに留意してください。また、XA 構成を設定する必要もあります。

Unicode を扱うためには 2 つのセットアップ・オプションがあり、いずれかを選択できます。

•

1. **DSNZPARM** で **UNICODE** パラメーターを使用して DB2 for z/OS サブシステムを 1 つセットアップします。例:

```
Unicode CCSID = 1208 CCSID of Unicode UTF-8 data.  
DEF ENCODING SCHEME = UNICODE  
LOCALE LC_CTYPE = UNI  
APPLICATION ENCODING = UNICODE
```

2. デフォルトの DB2 for z/OS サブシステムで作業し、すべての MDM パッケージを **LOCALE LC_CTYPE = UNI.** を使用して Unicode で再バインドします。これは **UPPER** および **LOWER** などの集約関数のために必要です。
- 新規 DB2 サブシステムを使用する場合、**DSNHDECP** マクロ・パラメーター **LC_TYPE** を含むすべての **DSNZPARM** を Unicode に設定します。Unicode データベースおよびアクセス・プランは、全機能のために必要です。
 - スペースの割り振り: 物理オブジェクトを作成する前に、**DASD** 上にスペースを確保する必要があります。ストレージ割り振りを簡素化するため、**SMS** 下でストレージ・グループを使用することを推奨します。すべての **z** データ・ファイルに対して **HLQ MDMIBM** を作成します。
 - 表スペースおよび索引スペース: 保守を容易にし、パフォーマンスの問題を回避するため、表と関連索引は異なる表スペースと索引スペースに分離してください。小さい表の場合、セグメント化された表スペースを使用し、大きな表については、**SIMPLE** 表スペースを使用します。また、パーティション化された表スペースを使用することもできます。
 - 許可および修飾子: 1 つの許可 **ID** ですべてのオブジェクトを作成し、アクセスします。
 - バッファ・プール: バッファ・プールが存在しない場合は、それを作成する必要があります。最小サイズは 1000 です。バッファ・プールを作成するためのサンプル SQL ステートメント: **ALTER BUFFERPOOL (bp3) VPSIZE (1000);**

DB2 for z/OS 用の XA 構成

WebSphere Application Server JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの手順を必ず完了してください。この手順は、DB2 for z/OS に対して WebSphere Application Server が正しく機能するために必要な作業です。

DB2 for z/OS での接続特権の付与:

以下の手順は、物理 MDM データベースを DB2 for z/OS に手動でインストールする場合に必要な接続特権を付与するために使用します。

手順

1. 表スペースおよび初期データベースの作成では、インストール・ユーザーに **SYSADM** が付与されていることを確認してください。
2. インストール・ユーザーに、以下のリストの特権が付与されていることを確認してください。

重要: 手順に記載されたサンプルの値は、ご使用のサーバー環境に合わせて変更してください。

- **GRANT CREATETAB, CREATETS ON DATABASE DSNCB04 TO <USER_ID>;**
- **GRANT USE OF BUFFERPOOL BP0 TO <USER_ID>;**
- **GRANT USE OF STOGROUP SYSDEFLT TO <USER_ID>;**

- GRANT USE OF TABLESPACE DSNDB04.SYSDEFLT TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PLAN DSNESPCS TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PLAN DSNESPRR TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PLAN DSNEDCL TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PLAN DSNHYCRD TO <USER_ID>;
- GRANT SELECT ON SYSIBM.SYSDUMMY1 TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PLAN DSNTIA<DB2 VERSION> TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PROCEDURE SYSPROC.DSNWZP TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PROCEDURE SYSPROC.DSNWSPM TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PACKAGE DSNUTILS.DSNUTILS TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PROCEDURE SYSPROC.DSNUTILS TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PACKAGE DSNUTILU.DSNUTILU TO <USER_ID>;
- GRANT EXECUTE ON PROCEDURE SYSPROC.DSNUTILU TO <USER_ID>;

関連タスク:

118 ページの『TSO および JCL を使用した DB2 for z/OS へのコア・データベースの手動インストール』

Oracle データベースの設定:

物理 MDM データベースを Oracle に手でインストールする際、create_schema_ora.sql スクリプトの実行を省略する場合は、Oracle データベース・システムを変更する必要があります。

create_schema_ora.sql スクリプト内で、ALTER SYSTEM SET open_cursors ステートメントが次のように設定されていることを確認してください。

```
ALTER SYSTEM SET open_cursors = 1500 SCOPE=BOTH;
```

また、GRANT CREATE SEQUENCE TO <SCHEMA>; として特別に権限付与が行われていることも確認してください。

DB2 for Linux または DB2 for UNIX での 物理 MDM データベース の手動インストール:

DB2 for Linux または DB2 for UNIX で 物理 MDM データベース を手でインストールできます。

構成および管理データベースのインストールと、コア・ドメイン・データベースのインストールの指示は別々に用意されています。

インストールの開始前に、データベースの手動インストールについて参照してください。

コア・データベースの DB2 for UNIX または DB2 for Linux への手動インストール:

DB2 for UNIX または Linux に、コア物理 MDM データベースをインストールします。

手順

1. *MDM_INSTALL_HOME*/database/CoreData/Full/DB2/Standard/dd1 ディレクトリーに移動します。
2. プレースホルダー値をデータベースで使用する値に置き換えることにより、このディレクトリー内のスクリプトを編集します。

要確認: ほとんどのスクリプトを実行するには、次のコマンド構文を使用します。

```
db2 -tvf SCRIPT_NAME -l LOG_FILE_NAME
```

ここで、*SCRIPT_NAME* は実行しているスクリプトの名前、*LOG_FILE_NAME* はコマンドのログが記録される履歴ファイルの名前です。異なるコマンド構文を使用する必要がある場合、構文は手順に示されています。

以下のプレースホルダー値を変更します。

- a. *DBNAME* を、使用するデータベース名に置き換えます。
- b. *TERRITORY* をテリトリーに置き換えます。
- c. 以下の表スペースのプレースホルダーを置き換えます。
 - *<INDEX_SPACE>* - 索引データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *IDXSPACE* であることを予期しています。
 - *<LONG_SPACE>* - CLOB および XML データ・タイプの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *LOBSPACE* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPPMD>* - Probabilistic Matching Engine ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *EMESPACE1* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPPMI>* - Probabilistic Matching Engine 索引データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *EMESPACE2* であることを予期しています。
 - *<TABLE_MDS4K>* - 4K ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *TBS4K* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPACE>* - 8K ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *TBS8K* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPMDS>* - 16K 仮想 MDM ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *TBS16K* であることを予期しています。
- d. *SCHEMA* を、データベース・アセットの保持用に割り当てられたスキーマ名に置き換えます。
- e. *DBUSER* を、スキーマを所有するデータベース・ユーザー ID に置き換えます。
- f. *DTYPE* プレースホルダー値を、以下の値のいずれか (小文字) に変更します。
 - banking
 - insurance
 - telco

- manufacturing
- g. *CONFIG_LANG* を、使用する構成言語に変更。
- 例えば、英語の場合は *en*、フランス語の場合は *fr* です。
- h. *CODE_LANG* を、ロードする任意の追加コード表データの言語に変更。
- 例えば、日本語の場合は *ja*、フランス語の場合は *fr* です。
3. *CreateDB.sql* スクリプトを実行する DBA 特権があることを確認します。
 4. *CreateDB.sql* ファイルを実行することによって、データベースおよび表スペースを作成し、許可されたユーザーおよびスキーマに必要な特権を付与します。
 5. *CreateTS.sql* ファイルを実行することによって、表スペースを作成し、許可されたユーザーおよびスキーマに必要な特権を付与します。このスクリプトでは、InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン データベース・オブジェクト用の追加表スペースが 4 つ作成されます。2 つの表スペースの名前は、*TABLE MDS4K*、*TABLE_SPACE*、*TABLE SPMDS*、*TABLE SPPMI*、*LONG SPACE*、および *INDEX_SPACE* に基づいて作成されます。必要に応じて、名前を変更できます。
 6. 上記で作成したデータベースに接続する。
 7. *MDM_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/DB2/Standard/ddl* でコマンド行から、以下のスクリプトをリストされた順序で実行します。
 - a. *CreateTables.sql*: すべての基本表および 1 次キー定義を作成します。
 - b. *CreateTables_H.sql*: すべての履歴表および 1 次キー定義を作成します。
 - c. *CreateIndexes.sql*: ユニーク索引制約を含むすべての索引を作成します。
 - d. *CreateFK.sql*: すべての外部キーを作成します。
 - e. *CreateCHK.sql*: すべてのチェック制約を作成します。
 8. 複数タイム・ゾーン機能を有効にする必要があるかどうかを以下のようにして判断します。

アプリケーションが異なるタイム・ゾーンの間で実行されている場合、またはデータに異なるタイム・ゾーンでの時間の値がある場合、複数タイム・ゾーン・フィーチャーを使用可能に設定する必要があります。

複数タイム・ゾーン・フィーチャーが不要な場合は、InfoSphere MDM のインストール時に使用不可に設定する必要があります。

 - 複数タイム・ゾーン機能を有効にするには、以下の手順を実行します。
 - a. *.ddl* サブディレクトリーに移動します。
 - b. コマンド行から、以下のスクリプトを実行します。


```
Create_function_utc_enabled.sql
```
 - 複数タイム・ゾーン機能を無効にするには、以下の手順を実行します。
 - a. *.ddl* サブディレクトリーに移動します。
 - b. コマンド行から、以下のスクリプトを実行します。


```
Create_function_utc_disabled.sql
```
 9. 複合トリガーまたは単純トリガー用のスクリプトを実行します。

要確認: トリガーを作成するためにスクリプトを実行するには、次のコマンド構文を使用します。

```
db2 -v -td@ -f SCRIPT_NAME -l LOG_FILE_NAME
```

ここで、*SCRIPT_NAME* は実行しているスクリプトの名前、*LOG_FILE_NAME* はコマンドのログが記録される履歴ファイルの名前です。異なるコマンド構文を使用する必要がある場合、構文は手順に示されています。

- 単純トリガーをインストールするには、以下のスクリプトを実行します。
 - a. `CreateTriggers_simple.sql`: 単純トリガーをインストールします。
 - b. **オプション:** `CreateTriggers_delete_simple.sql`: 削除の単純トリガーをインストールします。
 - 複合トリガーをインストールするには、以下のスクリプトを実行します。
 - a. `CreateTriggers_compound.sql`: 挿入および更新の複合トリガーをインストールします。
 - b. **オプション:** `CreateTriggers_delete_compound.sql`: 削除の複合トリガーをインストールします。
10. *DTYPE* プレースホルダーに入力された業界の英語データ、および *CONFIG_LANG* プレースホルダーに入力された言語での構成データをコード表に設定するには、`ImpReqData.sql` スクリプトを実行します。
 11. 構成マネージャー表に英語データを設定するために、*DEL_DATA_PATH* プレースホルダーにデータ・パス (ディレクトリーの場所を変更していなければ、パスは「data」です) が、*DEL_DATA_LOGS* プレースホルダーにログが入力されます。`ImpReqDataCfgMgr.sql` スクリプトを実行します。
 12. コード表データの追加セットをインストールします。*DTYPE* プレースホルダーに入力された業界、および *CODE_LANG* プレースホルダーに入力された言語コードについては、以下のスクリプトを実行します。

```
ImpCodeTableData.sql
```

英語を含む、インストールするすべての言語に対して、このステップを繰り返します。

13. **オプション:** 大/小文字を区別しない検索を有効にするには、以下のスクリプトを実行します。

```
Insensitive_search_enabled.sql
```

ドメイン・データベースの DB2 for Linux または DB2 for UNIX への手動インストール:

DB2 にドメイン・データベースを手動でインストールします。

始める前に

インストールを開始する前に、以下を確認してください。

- コア・データベースが作成済みであり、それに対する適切なレベルのアクセス権限があることを確認してください。ドメイン・データベース・アセットが同じデータベースに追加されます。

- トピック『物理 MDM データベースの手動インストール』を参照し、コア・データベースをインストールしたときと同じ決定をオプションのステップで行ってください。

手順

1. *MDM_INSTALL_HOME*/database/Full/DB2/Standard/dd1 ディレクトリーに移動します。
2. 以下のように、プレースホルダー値をデータベースで使用する値に置き換えることにより、このディレクトリー内のすべてのスクリプトを編集します。
 - a. *DBNAME* を、使用するデータベース名に置き換えます。
 - b. *SCHEMA* を、データベース・アセットの保持用に割り当てられたスキーマ名に置き換えます。
 - c. *TABLE_SPACE* を、基本および履歴表データを格納する表スペース名に置き換えます。
 - d. *INDEX_SPACE* を、索引付きデータを格納する表スペース名に置き換えます。
 - e. *LONG_SPACE* を、CLOB や XML などの長いユーザー列データを格納する表スペース名に置き換えます。
 - f. *DBUSER* を、スキーマを所有するデータベース・ユーザー ID に置き換えます。
 - g. *DTYPE* プレースホルダー値を、以下の値のいずれか (小文字) に変更します。
 - banking
 - insurance
 - telco
 - manufacturing
 - h. *CONFIG_LANG* を、使用する構成言語に変更。例えば、英語の場合は en、フランス語の場合は fr です。
 - i. *CODE_LANG* を、ロードする任意の追加コード表データの言語に変更。例えば、日本語の場合は ja、フランス語の場合は fr です。

重要: CreateDB.sql ステートメントは、InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン用の 2 つの別個の表スペース (*TABLE_SPACE* および *INDEX_SPACE*) を作成します。

3. 作成したコア・データベースに接続します。

要確認: ほとんどのスクリプトを実行するには、次のコマンド構文を使用します。

```
db2 -tvf SCRIPT_NAME -l LOG_FILE_NAME
```

ここで、*SCRIPT_NAME* は実行しているスクリプトの名前、*LOG_FILE_NAME* はコマンドのログが記録される履歴ファイルの名前です。異なるコマンド構文を使用する必要がある場合、構文は手順に示されています。

4. 以下のスクリプトを *MDM_INSTALL_HOME*/database/Full/DB2/Standard/dd1 のコマンド行からリストされている順に実行します。
 - CreateTables.sql: すべての基本表および 1 次キー定義を作成します。

- CreateTables_H.sql: すべての履歴表および 1 次キー定義を作成します。
 - CreateIndexes.sql: ユニーク索引制約を含むすべての索引を作成します。
 - CreateFK.sql: すべての外部キーを作成します。
 - CreateCHK.sql: すべてのチェック制約を作成します。
 - Create_eME.sql: すべての InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン・オブジェクトを作成します。このスクリプトでは、実際の表スペースの 2 つのプレースホルダーおよび索引スペース名を置き換える必要があります。
5. 複合トリガーまたは単純トリガー用のスクリプトを実行します。

要確認: トリガーを作成するためにスクリプトを実行するには、次のコマンド構文を使用します。

```
db2 -v -td@ -f SCRIPT_NAME -l LOG_FILE_NAME
```

ここで、*SCRIPT_NAME* は実行しているスクリプトの名前、*LOG_FILE_NAME* はコマンドのログが記録される履歴ファイルの名前です。異なるコマンド構文を使用する必要がある場合、構文は手順に示されています。

- 単純トリガーをインストールするには、以下を実行します。
 - CreateTriggers_simple.sql 単純トリガーをインストールします。
 - オプション: CreateTriggers_delete_simple.sql 削除の単純トリガーをインストールします。
 - 複合トリガーをインストールするには、以下のスクリプトを実行します。
 - CreateTriggers_compound.sql 挿入および更新の複合トリガーをインストールします。
 - オプション: CreateTriggers_delete_compound.sql 削除の複合トリガーをインストールします。
6. *DTYPE* プレースホルダーに入力された業界の英語データ、および *CONFIG_LANG* プレースホルダーに入力された言語での構成データをコード表に設定するには、スクリプトの *ImpReqData.sql* を実行します。
7. 構成マネージャー表に英語データを設定するために、*DEL_DATA_PATH* プレースホルダーにデータ・パス (ディレクトリーの場所を変更していなければ、パスは「data」です) が、*DEL_DATA_LOGS* プレースホルダーにログが入力されます。 *ImpReqDataCfgMgr.sql* スクリプトを実行します。
8. コード表データの追加セットをインストールします。 *DTYPE* プレースホルダーに入力された業界、および *CODE_LANG* プレースホルダーに入力された言語コードについては、以下のスクリプトを実行します。

```
ImpCodeTableData.sql
```

英語を含む、インストールするすべての言語に対して、このステップを繰り返します。

- 9. コア・データベースで大/小文字を区別しない検索を有効にした場合は、スクリプトの *Insensitive_search_enabled.sql* を実行する必要があります。
- 10. インストールが完了したことを確認するには、インストール・ログ・ファイルをチェックします。

DB2 for z/OS での 物理 MDM データベース の手動インストール:

DB2 for z/OS で 物理 MDM データベース を手動でインストールできます。

注: 以下のタスクは、AIX クライアント・アプリケーション・サーバーにインストールしていることを想定しています。

インストールを開始する前に、『物理 MDM データベースの手動インストール』トピック (z/OS データベースの作成およびインストールに関する注意と情報を含む)を確認し、提示されているすべての問題について検討してください。

TSO および JCL を使用した DB2 for z/OS へのコア・データベースの手動インストール:

ジョブ制御言語 (JCL) を使用して、DB2 for z/OS に InfoSphere MDM コア・データベースを手動でインストールできます。

始める前に

このタスクには、多数のプレースホルダー値が含まれています。開始する前に、必要なシステム情報が揃っているか確認してください。必要に応じて、この情報についてシステム管理者または開発者に連絡してください。

InfoSphere MDM のすべてのファイルとライブラリーを保管するために 3 GB スペースが割り振られた、MDMHLQ というメインフレーム高位修飾子 (HLQ) を作成するか、システム管理者または開発者が作成していることを確認してください。HLQ は、インストール時にのみ必要とされ、インストールが完了した後で除去することができます。

このタスクについて

これらのステップでは、AIX クライアント・アプリケーション・サーバーを使用していることが想定されています。

ヒント: 以下の手順で定義されている FTP コマンドは、AIX から z/OS ISPF 宛ての環境を想定しています。異なる環境から作業するには、それに応じてコマンドを変換する必要があります。

手順

1. `MDM_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/DB2/ZOS/pds/dd1lib` ディレクトリに移動して、以下のステップを実行します。
 - a. DDLs を作成してメインフレームに転送するために、スクリプト `.netrc` を変更します。
 - b. `USER` を、メインフレームに FTP でファイル転送する権限がある名前に置き換えます。
 - c. `PASSWORD` を、許可ユーザーのパスワードに置き換えます。
 - d. `HOSTNAME` をメインフレームのホスト名に置き換えます。
 - e. `MDMHLQ` を、メインフレームへのインストール用に作成した HLQ で置き換えます。

- f. ファイルのアクセス権が 600 であることを確認してください。これではない場合、コマンド `chmod 600 .netrc` を実行します。この `.netrc` ファイルは、`$HOME` ディレクトリー内になければなりません。
- g. 次のコマンドを実行します。


```
echo "%$ transferddl" | ftp hostname
```

`MDMHLQ.MIHDDL.LIB` ライブラリーが、メインフレームでシステムに追加されま
す。
2. `MDM_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/DB2/ZOS/pds/jc1lib` ディレクトリーに移動して、以下のステップを実行します。
 - a. DDLs を作成してメインフレームに転送するために、スクリプト `.netrc` を変更します。
 - b. `USER` を、メインフレームに FTP でファイル転送する権限がある名前に置き換えます。
 - c. `PASSWORD` を、許可ユーザーのパスワードに置き換えます。
 - d. `HOSTNAME` をメインフレームのホスト名に置き換えます。
 - e. `MDMHLQ` を、メインフレームへのインストール用に作成した `HLQ` で置き換えます。
 - f. ファイルのアクセス権が 600 であることを確認してください。これではない場合、コマンド `chmod 600 .netrc` を実行します。この `.netrc` ファイルは、`$HOME` ディレクトリー内になければなりません。
 - g. 次のコマンドを実行します。


```
echo "%$ transferjc1" | ftp hostname
```

`MDMHLQ.MIHJCL.LIB` ライブラリーが、メインフレームでシステムに追加されま
す。
3. `MDM_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/DB2/ZOS/pds` ディレクトリーに移動して、以下のステップを実行します。
 - a. DDLs を作成してメインフレームに転送するために、スクリプト `.netrc` を変更します。
 - b. `USER` を、メインフレームに FTP でファイル転送する権限がある名前に置き換えます。
 - c. `PASSWORD` を、許可ユーザーのパスワードに置き換えます。
 - d. `HOSTNAME` をメインフレームのホスト名に置き換えます。
 - e. ファイルのアクセス権が 600 であることを確認してください。これではない場合、コマンド `chmod 600 .netrc` を実行します。この `.netrc` ファイルは、`$HOME` ディレクトリー内になければなりません。
 - f. 次のコマンドを実行します。


```
echo "%$ transferbins" | ftp hostname
```
4. データベース・サーバーで TSO にログインします。
5. TSO/ISPF を使用して `MDMHLQ.MIHDDL.LIB` に移動し、以下のようにデータ・セット内のスクリプトを一度に 1 つずつ編集します。
 - a. `DBA ACCOUNT` を、`DBADM` 権限のある `DB` アカウントに置き換えます。
 - b. `USER ACCOUNT` を適切な権限レベルのユーザー・アカウントに置き換えます。

- c. *STOGROUP_NAME* をストレージ・グループ名に置き換えます。
- d. *db_prefix* を、データベース管理権限によって割り当てられる 3 文字のデータベース接頭部で置き換えます。
- e. *VCATNAME* を実際の *VCAT* 名に置き換えます。

詳細については、*MDMHLQ.MIHDDL.LIB* ライブラリー・データ・セット・メンバーの *CREATE STOGROUP* ステートメントを参照してください。

- 6. TSO/ISPF を使用して *MDMHLQ.MIHJCL.LIB* を参照し、データ・セット・メンバー *MDMICOR* を変更して、以下のプレースホルダー値をご使用のデータベースで使用するのに適切な値に置き換えます。
 - a. *JOB NAME* をジョブの名前に置き換えます。
 - b. *db-hlq* を、有効な DSN 高位修飾子値に置き換えます。
 - c. *SYSTEM* を有効な DB2 サブシステム ID に置き換えます。
 - d. *USRQ* を、ユーザー・アカウントの高位修飾子に置き換えます。
 - e. *MDMHLQ* を、メインフレームへのインストール用に作成した *HLQ* で置き換えます。
 - f. *PLANNAME* をユーティリティー *DSNTEP2* の DB2 プランに置き換えます。
 - g. デフォルトでは複数時間帯 (MTZ) は使用不可になっています。MTZ を使用可能にするには、*JCL MDMICOR* 内の行 *//SYSIN DD DSN=MDMHLQ.MIHDDL.LIB (Z08CRUTE),DISP=SHR* をコメント化します (ステップ 8 を参照)。*MDMICOR* ジョブでは、戻りコード 0 または 4 は、*JCL* が正常に実行したことを示します。
 - h. *sub* コマンドを使用して *MDMICOR JCL* を実行依頼します。戻りコード 0 または 4 は、*JCL* が正常に実行したことを示します。

関連タスク:

110 ページの『DB2 for z/OS と接続するために WebSphere Application Server で XA 構成を設定する』

111 ページの『DB2 for z/OS での接続特権の付与』

DB2 for z/OS でのドメイン・データベースの手動インストール:

いくつかのプレースホルダーの値を編集して、DB2 for z/OS にドメイン・データベースを手動でインストールします。

始める前に

インストールを開始する前に、以下を確認してください。

- コア・データベースが作成済みであり、それに対する適切なレベルのアクセス権限があることを確認してください。ドメイン・データベース・アセットが同じデータベースに追加されます。
- トピック『物理 MDM データベースの手動インストール』を参照し、コア・データベースをインストールしたときと同じ決定をオプションのステップで行ってください。

このタスクには、多数のプレースホルダー値が含まれています。開始する前に、必要なシステム情報が揃っているか確認してください。必要に応じて、この情報についてシステム管理者または開発者に連絡してください。

メインフレームでは、*MDMHLQ* という高位修飾子 (HLQ) に InfoSphere MDM のすべてのファイルおよびライブラリーを保管するために 3GB のスペースが割り振られます。

このタスクについて

ヒント: 以下の手順で定義されている FTP コマンドは、AIX から z/OS ISPF 宛ての環境を想定しています。異なる環境から作業するには、それに応じてコマンドを変換する必要があります。

手順

1. *WAS.jar* が展開された *MDM/database/Full/DB2/ZOS/pds/ddllib* ディレクトリーに移動します。
2. 次のステップを実行することにより、DDLs を作成してメインフレームに転送するように、スクリプト *.netrc* を変更します。
 - a. *USER* を、メインフレームに FTP でファイル転送する許可ユーザー名に変更します。
 - b. *PASSWORD* を、そのユーザーのパスワードに変更します。コマンドを実行する前に、ファイルのアクセス権が 600 であることを確認してください。これではない場合、コマンド `chmod 600 .netrc` を実行します。この *.netrc* ファイルは、*\$HOME* ディレクトリー内になければなりません。
 - c. *MDMHLQ* を、メインフレームでのインストール用に作成した HLQ の名前で置き換えます。
 - d. 次のコマンドを実行します。

```
echo "¥$ transferddl" | ftp host-name
```

ライブラリー *MDMHLQ.MDMJCL.LIB* が、メインフレームでシステムに追加されません。
3. *MDM/database/Full/DB2/ZOS/pds/jcllib* ディレクトリーに移動し、以下のステップを実行することにより、DDL を作成してメインフレームに転送するように、スクリプト *.netrc* を変更します。
 - a. *USER* を、メインフレームに FTP でファイル転送する許可ユーザー名に置き換えます。
 - b. *PASSWORD* を、そのユーザーのパスワードに置き換えます。
 - c. *HOSTNAME* を、メインフレームのホスト名に変更します。
 - d. *MDMHLQ* を、メインフレームでのインストール用に作成した HLQ の名前で置き換えます。
 - e. ファイルのアクセス権が 600 であることを確認してください。これではない場合、コマンド `chmod 600 .netrc` を実行します。この *.netrc* ファイルは、*\$HOME* ディレクトリー内になければなりません。
 - f. 次のコマンドを実行します。

```
echo "¥$ transferjcl" | ftp host-name
```

ライブラリー *MDMHLQ.MDMJCL.LIB* が、メインフレームでシステムに追加されません。
4. データベース・サーバーで TSO にログオンします。

5. TSO/ISPF を使用して *MDMHLQ.MDMDDL.LIB* を参照し、データ・セット内のスクリプトを一度に 1 つずつ編集して、以下のプレースホルダー値をご使用のデータベースで使用するのに適切な値に置き換えます。
 - a. *DBA ACCOUNT* を、DBADM 権限のある DB アカウントに置き換えます。例えば、CHG コマンド: CHG 'DBA ACCOUNT' 'DB2OPER' a11 を実行します。
 - b. *USER ACCOUNT* を適切な権限レベルのユーザー・アカウントに置き換えます。
 - c. *STOGROUP_NAME* をストレージ・グループ名に置き換えます。
 - d. *db_prefix* を、データベース管理権限によって割り当てられる 3 文字のデータベース接頭部で置き換えます。
 - e. *MDMHLQ* を、メインフレームでのインストール用に作成した HLQ の名前で置き換えます。
 - f. *VCATNAME* を実際の VCAT 名に置き換えます。

詳しくは、*MDMHLQ.MDMDDL.LIB* ライブラリーのデータ・セット・メンバー @01crdb 内の CREATE STOGROUP ステートメントを参照してください。
6. TSO/ISPF を使用して *MDMHLQ.MDMJCL.LIB* に移動し、データ・セット・メンバー *MDMIDOM* を編集して、以下のプレースホルダー値をご使用のデータベースに適した値に置き換えます。
 - a. *JOB NAME* をジョブの名前に置き換えます。
 - b. *db-hlq* を、有効な DSN 高位修飾子値に置き換えます。
 - c. *SYSTEM* を有効な DB2 サブシステム ID に置き換えます。
 - d. *USRQ* を、ユーザー・アカウントの高位修飾子に置き換えます。
 - e. *PLANNAME* をユーティリティー DSNTEP2 の DB2 プランに置き換えます。
 - f. *MDMHLQ* を、メインフレームでのインストール用に作成した HLQ の名前で置き換えます。
 - g. sub コマンドを使用して *MDMIDOM JCL* を実行依頼します。戻りコード 0 または 4 は、JCL が正常に実行したことを示します。

Microsoft SQL Server へのコア・データベースの手動インストール:

以下の手順を使用して、完全なコア・データベースを Microsoft SQL Server に手動でインストールします。

このタスクについて

インストールを開始する前に、物理 MDM データベースの手動インストールについて参照してください。

手順

1. *MDM_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/SQL Server/dd1* ディレクトリーに移動します。
2. プレースホルダー値を、データベースで使用する値に置き換えることにより、このディレクトリー内のすべてのスクリプトを編集します。以下のプレースホルダーを変更します。
 - *db_name* をデータベースの名前に変更

- *MDMSEFG* をファイル・グループの名前に変更
 - *Logical_FG_Namex* を、ファイル・グループに追加する新規ファイルの名前に変更 (x は、複数のファイル・グループを作成または追加する必要がある場合の 1 から始まる数値)
 - *location* をファイル・グループ「file」の場所に変更。次に例を示します。
 - Microsoft SQL Server 2008R2: C:/Program Files/Microsoft SQL Server/MSSQL10_50.MSSQLSERVER/MSSQL/DATA
 - Microsoft SQL Server 2012: C:/Program Files/Microsoft SQL Server/MSSQL11.DBSQL2/MSSQL/DATA
 - *dbuser* をデータベース・オブジェクト所有者に変更
 - *password* をデータベース・ユーザーのパスワードに変更
 - *schema* をオブジェクト所有者に変更
 - *CODE_LANG* を、ロードする任意の追加コード表データの言語に変更 (例えば、日本語の場合は *ja* を使用、フランス語の場合は *fr* を使用)
 - *CONFIG_LANG* を、使用する構成言語に変更 (例えば、英語の場合は *en* を使用、フランス語の場合は *fr* を使用)
 - *DTYPE* を、ロードするデータのタイプに変更。値として *banking*、*insurance*、*manufacturing*、*telco* のいずれかを小文字で指定します。
 - *mds_home* を仮想 MDM 運用サーバーのロケーションに変更
 - *datasource_name* をデータベースの名前に変更
 - *dbadmin user* をデータベース・ユーザーの名前に変更
 - *dbadmin password* をデータベース・ユーザーのパスワードに変更
3. *MDM_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/SQL Server/ddl* ディレクトリーのコマンド行から、コマンドをリストされた順序で実行します。
- a. `Sqlcmd -S Server Name-U dbadmin user-P dbadmin password-i Create_DB.sql > logfile name`
 - b. `Sqlcmd -S Server Name -U dbuser -P password -d db_name -i CreateTable.sql > logfile name`
 - c. `Sqlcmd -S Server Name -U dbuser -P password -d db_name -i CreateFK.sql > logfile name`
 - d. `Sqlcmd -S Server Name -U dbuser -P password-d db_name -i CreateIndexes.sql > logfile name`
 - e. `Sqlcmd -S Server Name -U dbuser -P password -d db_name -i CreateCHK.sql > logfile name`
4. IBM Installation Manager を使用してデータをロードします。「インストールするフィーチャー (features to install)」パネルで、「**MDM データベース**」を選択します。

Oracle での 物理 MDM データベースの手動インストール:

Oracle で 物理 MDM データベースを手動でインストールできます。

インストールを開始する前に、物理 MDM データベースの手動インストールに関するトピックを参照してください。

Oracle へのコア・データベースの手動インストール:

Oracle にコア・データベースを手動でインストールします。

手順

1. *MDM_INSTALL_HOME*/database/CoreData/Full/Oracle/Standard/dd1 ディレクトリに移動します。
2. プレースホルダー値を、データベースで使用する値に置き換えることにより、このディレクトリ内のすべてのスクリプトを編集します。以下のプレースホルダーを変更します。
 - a. *DBNAME* をデータベースの名前に変更
 - b. *SCHEMA* を、必要な特権があるデータベース・ユーザーに変更。
 - c. *NEWPASSWORD* を、スキーマ・ユーザーのパスワードに変更。
 - d. 以下の表スペースのプレースホルダーを置き換えます。
 - *<INDEX_SPACE>* - 索引データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *IDXSPACE* であることを予期しています。
 - *<LONG_SPACE>* - CLOB および XML データ・タイプの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *LOBSPACE* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPPMD>* - Probabilistic Matching Engine ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *EMESPACE1* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPPMI>* - Probabilistic Matching Engine 索引データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *EMESPACE2* であることを予期しています。
 - *<TABLE_MDS4K>* - 4K ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *TBS4K* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPACE>* - 8K ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *TBS8K* であることを予期しています。
 - *<TABLE_SPMDS>* - 16K 仮想 MDM ユーザー表データの表スペース名。インストール・アプリケーションは、値が *TBS16K* であることを予期しています。
 - e. *TABLESPACE_LOCATION* を、表スペースが作成されるロケーションに変更。通常、これは *ORACLE_HOME* にあるデータベース・ディレクトリ内にします。例えば、*D:/Oracle/product/10.2.0/oradata/MDMDB* などです。ここで、*MDMDB* はデータベース名であり、*10.2.0* は使用する Oracle のバージョンです。
 - f. *DTYPE* を、ロードされるデータのタイプに変更。以下の値のいずれかを小文字で指定します。
 - banking
 - insurance
 - telco
 - manufacturing

- g. *CONFIG_LANG* を、使用する構成言語に変更。例えば、英語の場合は *en*、フランス語の場合は *fr* です。
 - h. *CODE_LANG* を、ロードする任意の追加コード表データの言語に変更。例えば、日本語の場合は *ja*、フランス語の場合は *fr* を使用します
 - i. *DBUSER* を DBA 権限があるデータベース・ユーザーに変更
 - j. *DBPASSWORD* を、データベース・ユーザーのパスワードに変更
3. *MDM_INSTALL_HOME/database/CoreData/Full/Oracle/Standard/dd1* でコマンド行から、以下のコマンドをリストされた順序で実行します。
- a. `sqlplus DBUSER/DBPASSWORD@DBNAME @create_schema_ora.sql`>>
LOG_FILE_NAME は、データベース・スキーマを作成します。
 - b. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_tables_ora.sql`>>
LOG_FILE_NAME は、基本表および 1 次キー定義を作成します。
 - c. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_hist_tables_ora.sql`>>
LOG_FILE_NAME は、履歴表および 1 次キー定義を作成します。
 - d. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_ix_ora.sql`>> *LOG_FILE_NAME*
は、ユニーク索引制約を含むすべての索引を作成します。
 - e. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_fk_ora.sql`>> *LOG_FILE_NAME*
は、外部キーを作成します。
 - f. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_chk_ora.sql`>> *LOG_FILE_NAME*
は、チェック制約を作成します。
 - g. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_eME_ora.sql`>> *LOG_FILE_NAME*
は、InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン オブジェクトを作成します。
4. アプリケーションが異なるタイム・ゾーンの間で実行されている場合、またはデータに異なるタイム・ゾーンでの時間の値がある場合、複数タイム・ゾーン・フィーチャーを使用可能に設定する必要があります。複数タイム・ゾーン・フィーチャーが必要ない場合は、データベースのインストール時に使用不可に設定する必要があります。
- 複数タイム・ゾーン機能を有効にするには、以下の手順を実行します。
 - a. *.ddl* サブディレクトリーに移動します。
 - b. コマンド行から、以下のスクリプトを実行します。


```
sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME

@Create_function_utc_enabled.sql >> LOG_FILE_NAME
```
 - 複数タイム・ゾーン機能を無効にするには、以下の手順を実行します。
 - a. *.ddl* サブディレクトリーに移動します。
 - b. コマンド行から、以下のスクリプトを実行します。


```
sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME

@Create_function_utc_disabled.sql >> LOG_FILE_NAME
```
5. 複合トリガーまたは単純トリガー用のコマンドを実行します。
- 単純トリガーをインストールするには、以下のスクリプトを実行します。

- sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_triggers_simple_ora.sql>> LOG_FILE_NAME は、単純トリガーをインストールします。
 - オプション: sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_delete_triggers_simple_ora.sql>> LOG_FILE_NAME は、削除の単純トリガーをインストールします。
- 複合トリガーをインストールするには、以下のスクリプトを実行します。
 - sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_triggers_compound_ora.sql>> LOG_FILE_NAME は、挿入および更新の複合トリガーをインストールします。
 - オプション: sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_delete_triggers_compound_ora.sql>> LOG_FILE_NAME は、削除の複合トリガーをインストールします。
6. ImpReqData.script ファイルをシェル・スクリプトに変換し、そのシェル・スクリプトをコマンド行から実行します。このスクリプトでは、必須のコード表および必須のシステム構成表に、プレースホルダー *DTYPE* に入力された業界の英語コード表データ、およびプレースホルダー *CONFIG_LANG* に入力された言語での構成データが取り込まれます。
 7. 英語以外の言語用のコード表データをインストールするかどうかを選択します。
 - 製品の英語版のみをインストールする場合は、このステップはスキップします。
 - *DTYPE* プレースホルダーに入力された業界の英語以外の言語用コード表データ、および *CODE_LANG* プレースホルダーに入力された言語コードをインストールするには、Imp_CodeTables_Data.script ファイルをシェル・スクリプトに変換し、コマンド行からこのシェル・スクリプトを実行します。インストールする言語ごとに、このステップを繰り返します。
 8. オプション: 大/小文字を区別しない検索を有効にするには、以下のスクリプトを実行します。


```
sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @Insensitive_search_enabled.sql >> LOG_FILE_NAME
```

重要: create_schema_ora.sql ステートメントは、InfoSphere MDM 確率的マッピング・エンジン 用の 2 つの別個の表スペース (*TABLE_SPACE>E* および *INDEX_SPACE>E*) を作成します。

ドメイン・データベースの Oracle への手動インストール:

いくつかのプレースホルダーの値を置き換え、いくつかのコマンドを実行して、Oracle にドメイン・データベースを手動でインストールします。

始める前に

インストールを開始する前に、以下を確認してください。

- コア・データベースが作成済みであり、それに対する適切なレベルのアクセス権限があることを確認してください。ドメイン・データベース・アセットが同じデータベースに追加されます。
- トピック『物理 MDM データベースの手動インストール』を参照し、コア・データベースをインストールしたときと同じ決定をオプションのステップで行ってください。

手順

1. *MDM_INSTALL_HOME/database/Full/Oracle/Standard/ddl* ディレクトリーに移動します。
2. 以下のように、プレースホルダー値をデータベースで使用する値に置き換えることにより、このディレクトリー内のすべてのスクリプトを編集します。
 - a. *DBNAME* をデータベースの名前に置き換えます。
 - b. *SCHEMA* を、データベース・アセットの保持用に割り当てられたスキーマ名に置き換えます。
 - c. *NEWPASSWORD* を、スキーマ・ユーザーのパスワードに変更。
 - d. *TABLE_SPACE* を、基本および履歴表データを格納する表スペース名に変更。
 - e. *INDEX_SPACE* を、索引付きデータを格納する表スペース名に変更。
 - f. *LONG_SPACE* を、CLOB や XML などのロング・ユーザー列データを格納する表スペースに変更
 - g. *TABLESPACE_LOCATION* を、表スペースが作成されるロケーションに変更。通常、これは *ORACLE_HOME* にあるデータベース・ディレクトリー内になります。例えば、*D:/Oracle/product/10.2.0/oradata/MDMDB* などです。ここで、*MDMDB* はデータベース名であり、*10.2.0* は使用する Oracle のバージョンです。
 - h. *DTYPE* を、ロードされるデータのタイプに変更。以下の値のいずれかを小文字で指定します。
 - banking
 - insurance
 - telco
 - manufacturing
 - i. *CONFIG_LANG* を、使用する言語に変更。例えば、英語の場合は *en*、フランス語の場合は *fr* です。
 - j. *CODE_LANG* を、ロードする任意の追加コード表データの言語に変更。例えば、日本語の場合は *ja*、フランス語の場合は *fr* を使用します
3. *MDM_INSTALL_HOME/database/Full/Oracle/Standard/ddl* でコマンド行から、以下のコマンドをリストされた順序で実行します。
 - a. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_tables_ora.sql>>`
LOG_FILE_NAME は、基本表および 1 次キー定義を作成します。
 - b. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_hist_tables_ora.sql>>`
LOG_FILE_NAME は、履歴表および 1 次キー定義を作成します。
 - c. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_ix_ora.sql>>` *LOG_FILE_NAME*
は、ユニーク索引制約を含むすべての索引を作成します。
 - d. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_fk_ora.sql>>` *LOG_FILE_NAME*
は、外部キーを作成します。
 - e. `sqlplus SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME> @create_chk_ora.sql>>`
LOG_FILE_NAME は、チェック制約を作成します。

- f. sqlplus *SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_eME_ora.sql*>> *LOG_FILE_NAME* は、InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン オブジェクトを作成します。

重要: 次のステップで *create_eME_ora.sql* スクリプトを実行する前に、このスクリプトを編集して、プレースホルダー *TABLE_SPACE* および *INDEX_SPACE* を、InfoSphere MDM 確率的マッチング・エンジン データベース・オブジェクトに作成された表スペース名および索引スペース名に置き換えます。

4. 複合トリガーまたは単純トリガー用のスクリプトを実行します。
- 単純トリガーをインストールするには、以下を実行します。
 - sqlplus *SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_triggers_simple_ora.sql*>> *LOG_FILE_NAME* は、単純トリガーをインストールします。
 - **オプション:** sqlplus *SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_delete_triggers_simple_ora.sql*>> *LOG_FILE_NAME* は、削除の単純トリガーをインストールします。
 - 複合トリガーをインストールするには、以下のスクリプトを実行します。
 - sqlplus *SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_triggers_compound_ora.sql*>> *LOG_FILE_NAME* は、挿入および更新の複合トリガーをインストールします。
 - **オプション:** sqlplus *SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @create_delete_triggers_compound_ora.sql*>> *LOG_FILE_NAME* は、削除の複合トリガーをインストールします。
5. ImpReqData.script ファイルをシェル・スクリプトに変換し、そのシェル・スクリプトをコマンド行から実行します。このスクリプトでは、必須のコード表および必須のシステム構成表に、プレースホルダー *DTYPE* に入力された業界の英語コード表データ、およびプレースホルダー *CONFIG_LANG* に入力された言語での構成データが取り込まれます。
6. 英語以外の言語用のコード表データをインストールするかどうかを選択します。
- 製品の英語版のみをインストールする場合は、このステップはスキップします。
 - *DTYPE* プレースホルダーに入力された業界の英語以外の言語用コード表データ、および *CODE_LANG* プレースホルダーに入力された言語コードをインストールするには、Imp_CodeTables_Data.script ファイルをシェル・スクリプトに変換し、コマンド行からこのシェル・スクリプトを実行します。インストールする言語ごとに、このステップを繰り返します。
7. 構成マネージャー表に英語データを設定するために、*DEL_DATA_PATH* プレースホルダーにデータ・パス (ディレクトリーの場所を変更していなければ、パスは「/data」です) が、*DEL_DATA_LOGS* プレースホルダーにログが入力されません。ImpReqDataCfgMgr.script ファイルをシェル・スクリプトに変換し、そのシェル・スクリプトをコマンド行から実行します。このスクリプトは、必要なシステム構成表に英語データを設定します。
8. コア・データベースで大/小文字を区別しない検索を有効にした場合は、以下のスクリプトを実行する必要があります。

Sqlplus *SCHEMA/NEWPASSWORD@DBNAME @Insensitive_search_enabled.sql* >> *LOG_FILE_NAME*

InfoSphere MDM インストールのための Solaris システムの準備

Solaris オペレーティング・システム上にインストールする場合は、インストールを開始する前に、この手順を実行する必要があります。

このタスクについて

以下の手順を実行しないと、InfoSphere MDM のインストールが完了までに 8 時間以上かかる可能性があります。この場合は、インストールがタイムアウトになるか、インストールが破損した状態で完了してしまいます。

手順

デプロイメント・マネージャーの Java 仮想マシン引数を設定します。

1. WebSphere Application Server プロファイル (デプロイメント・マネージャーとノード) を作成します。
2. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開き、「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「Java およびプロセス管理」 > 「プロセス定義」 > 「Java 仮想マシン」に移動します。
3. 「構成」タブの「汎用 JVM 引数」フィールドに、引数 `-XX:MaxPermSize=384m` を入力します。「適用」をクリックし、「マスター構成に直接保管」をクリックします。
4. ノードとデプロイメント・マネージャーを再始動します。
T シリーズで、以下の手順を実行します。
5. `WAS_PROFILE_HOME/deployment manager properties` ディレクトリーに移動し、`soap.client.props` ファイルを開きます。
6. `com.ibm.SOAP.requestTimeout` の値を 180 から 1800 に変更します。
`com.ibm.SOAP.requestTimeout=1800`
7. ノードとデプロイメント・マネージャーを再始動します。

WebSphere Application Server の組み込みメッセージングの構成

InfoSphere MDM アプリケーションは、Message Driven Beans (MDB) を使用します。これは、エンタープライズ・バンドル・アーカイブ (EBA) の始動時に、それらに関連付けられている活動化仕様と JMS プロバイダーを探します。

JMS プロバイダーが存在しない場合、MDB はタイムアウトになり、始動に失敗します。インストールおよび構成プロセスを簡略化するため、InfoSphere MDM インストールでは、JMS プロバイダーおよびエンジンが自動的に構成されます。

既存の WebSphere Application Server 組み込みメッセージング (メッセージ・バス) が既に構成済みである、または InfoSphere MDM を z/OS にインストールする場合、インストールを開始する前に実行しなければならないステップがいくつかあります。

z/OS にインストールしており、既存のメッセージング・バスがない場合は、InfoSphere MDM のインストール後に実行しなければならないステップがあります。ポスト・インストール構成は、z/OS 以外のオペレーティング・システムでは必要ありません。

関連タスク:

156 ページの『インストール後に z/OS でメッセージ・バスを構成』

z/OS 上の InfoSphere MDM インストール用の既存の WebSphere Application Server メッセージング・バスの準備:

z/OS 上に InfoSphere MDM をインストールしている場合、InfoSphere MDM インストールのデータベース・ユーザーは、表および表スペースを作成する権限を保持していなければなりません。保持していない場合、WebSphere Application Server はサービス統合バス (SIB) 表を正常に作成できない可能性があります。

このタスクについて

既存の WebSphere Application Server メッセージング・バスがあり、表および表スペースの作成権限を保持しないユーザーとしてインストールを行っている場合、InfoSphere MDM インストールを開始する前に以下のステップを実行する必要があります。

既存のメッセージング・バスがない場合は、まずは InfoSphere MDM のインストールから開始し、その後 156 ページの『インストール後に z/OS でメッセージ・バスを構成』のステップを実行してください。

手順

1. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開きます。
2. 「サービス統合 (Service Integration)」 > 「バス (Buses)」 > **ご使用のアプリケーション・バス** > 「バス・メンバー (Bus Members)」に移動します。
3. バス・メンバーのページで、**ご使用のアプリケーション・バス・メンバー** > **ご使用のアプリケーション SIB サーバー** > 「メッセージ・ストア (Message Store)」をクリックします。
4. 「表の作成 (Create tables)」オプションをクリアして、WebSphere Application Server が SIB 表の作成を試行しないようにします。
5. 「スキーマ名」が、ご使用の InfoSphere MDM スキーマを指していることを確認します。そうでない場合は、スキーマ名を変更します。
6. 「適用」をクリックしてから、「**マスター構成に直接保存 (Save directly to the master configuration)**」をクリックします。
7. アプリケーション・サーバーを停止します。
8. ZSIB.sql ファイルでスキーマ、接頭部、およびデータベース所有者を変更して、ご使用のインスタンス用の SIB 表を作成します。このファイルでは、**<SCHEMA>** をご使用のスキーマ名に、**<PREFIX>** を 3 文字の接頭部に、**<DBA ACCOUNT>** をデータベース所有者に置き換えます。SQL を DB 所有者として実行します。
9. ノードを同期して、アプリケーション・サーバーを始動します。

関連タスク:

154 ページの『z/OS でのインストール』

InfoSphere MDM インストール用の既存の WebSphere Application Server メッセージング・バスの準備:

z/OS 以外のオペレーティング・システムにインストールしている場合、特別な権限が必要ないため、インストーラーは正常に SIB 表を作成できます。既存のメッセージング・バスで InfoSphere MDM のインスタンスを指している場合、メッセージ・データ・ソースおよびメッセージ・ストアのスキーマ名が InfoSphere MDM スキーマを指していることを確認してください。

このタスクについて

この手順を使用して、インストールを開始する前に、メッセージ・スキーマで InfoSphere MDM スキーマを指します。

手順

1. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開きます。
2. 「サービス統合 (Service Integration)」 > 「バス (Buses)」 > **ご使用のアプリケーション・バス** > 「バス・メンバー (Bus Members)」に移動します。
3. バス・メンバーのページで、**ご使用のアプリケーション・バス・メンバー** > **ご使用のアプリケーション SIB サーバー** > 「メッセージ・ストア (Message Store)」をクリックします。
4. 「スキーマ名」が、ご使用の InfoSphere MDM スキーマを指していることを確認します。そうでない場合は、スキーマ名を変更します。
5. 「適用」をクリックしてから、「マスター構成に直接保存 (Save directly to the master configuration)」をクリックします。
6. ノードを同期して、アプリケーション・サーバーを再始動します。

InfoSphere MDM メッセージング・サーバー・コンポーネントの手動インストール

IBM Installation Managerを使用して InfoSphere MDMメッセージング・サーバー・コンポーネントを作成することも、手動でインストールすることもできます。

このタスクについて

IBM Installation Manager を実行して MDM 運用サーバー・コンポーネントをインストールする予定のマシンと同じマシンに IBM WebSphere MQ が存在する場合は、インストーラーを使用して InfoSphere MDM メッセージング・コンポーネントをインストールしてください。

MDM アプリケーション構成パネルで、WebSphere Application Server のデフォルトのメッセージング・プロバイダーではなく、WebSphere MQ メッセージング・プロバイダーを選択した場合、IBM Installation Manager は、デフォルトで InfoSphere MDM メッセージング・サーバー・コンポーネントをインストールします。

手順

1. ダウンロードした InfoSphere MDM パッケージの保存先ディレクトリーにナビゲートします。

2. disk1.zip を開いて、任意のディレクトリーにサブフォルダー StartUpToolkit を抽出します。ここでは、このディレクトリーの場所を `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` と表しています。

3. `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` ディレクトリーから、`custSetupMQServer.mqsc` スクリプトを取得します。

4. 以下のスクリプトを実行することによって (`MDM1011.QMANAGER` を任意の選択した名前に置き換える)、InfoSphere MDM メッセージング・サーバー・コンポーネントで使用されるキュー・マネージャーを作成して開始します。

```
/usr/mqm/crtmqm MDM1011.QMANAGER
```

既存のキュー・マネージャーを使用するつもりの場合は、このステップをスキップしてください。

5. 以下のスクリプトを実行することによって、キュー・マネージャーを開始します。

```
/usr/mqm/strmqm MDM1011.QMANAGER
```

6. `custSetupMQServer.mqsc` スクリプト内の `CHANNEL_NAME` プレースホルダーを、使用する WebSphere MQ チャネルの実際の値に置き換えて、`custSetupMQServer.mqsc` を準備します。

7. 以下のスクリプトを実行することによって、InfoSphere MDM メッセージング・サーバー・コンポーネント構成オブジェクトを作成します。

```
/usr/mqm/runmqsc < $HOME/custSetupMQServer.mqsc MDM1011.QMANAGER
```

`custSetupMQServer.mqsc` スクリプト内の `CHANNEL_NAME` プレースホルダーを、使用される WebSphere MQ チャネルの実際の値に置き換えてください。

8. 以下のスクリプトを実行することによって、イベント・ブローカーのサポートを使用可能にします。

```
/usr/mqm/runmqsc < /usr/mqm/java/bin/MQJMS PSQ.mqsc MDM1011.QMANAGER
```

9. 以下のスクリプトを実行することによって、イベント・ブローカーを開始します。

```
/usr/mqm/strmqbrk -m MDM1011.QMANAGER
```

10. 以下のスクリプトを実行することによって、キュー・リスナーを開始します。

```
/usr/mqm/runmlsr -m MDM1011.QMANAGER -t TCP -p 1414&
```

WebSphere MQ リスナー・ポートには、どの有効なポート番号でも使用できません。

ロケールおよび文字エンコードのターゲット・コンピューターへの設定

グローバル化設定は、インストール時に物理的な運用サーバーに自動的に設定されます。仮想構成を持つ運用サーバーの場合、インストール後に手動で行う必要がある設定がいくつかあります。

使用するデータベース・タイプに該当する `create database` スクリプトを実行する際に、Unicode 設定が行われます。言語設定はインストール時に行われます。以下の手順は、米国英語以外の言語の実装を計画している場合に、運用サーバーに設定を追加するために使用します。

運用サーバーによって作成されるログ・ファイルは、ASCII エンコードです。ASCII に含まれないコード・ポイントは、標準の Unicode 形式の U+XXXX です。

create database スクリプトによって、以下の Unicode 項目が設定されたことを確認します。

- Microsoft SQL Server: 新しい MAD_DBTYPE は「mssqlu」
- Oracle: CREATE DATABASE *dname*...CHARACTER SET AL32UTF8。また、Unicode 用の文字長のセマンティクスも設定する必要があります。変数の NLS_LANG_SEMANTICS を CHAR に設定します (デフォルト設定は BYTE)。使用するコマンド
ALTER SYSTEM SET NLS_LENGTH_SEMANTICS=CHAR SCOPE=BOTH

Oracle クライアントを利用した無線接続ドライバーを使用する場合、この変数を運用サーバーに接続するユーザーにも設定する必要があります。(無線接続ドライバーは、Oracle クライアント・ライブラリーを使用します。)

NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8

- IBM DB2: CREATE DATABASE *dname* USING CODESET UTF-8 TERRITORY *territory code*。例: create database prod using codeset UTF-8 territory us。ここで prod はデータベース名、us は地域です。

MDM 運用サーバーのインストール後に、使用する仮想 MDM 構成に MAD_ENCODING 変数を手動で設定する必要があります。この変数は、com.ibm.mdm.mds.jni.cfg 構成ファイルに設定されます。

変換されたストリングは /smt ディレクトリーに保管されます。これらのファイル (fr_FR.smt や en_US.smt など) には、クライアントに返される対話メッセージが含まれています。また、変換されたストリングに言語を設定するには、com.initiate.server.system.cfg 構成ファイルに MAD_SMTLIST 環境変数も設定する必要があります。この変数は、該当の *.smt ファイルを指しています。複数の言語を使用する場合、変数のプロパティーで 1 つのコンマによって各言語を区切ることができます。

MAD_SMTLIST オプションが複数の言語 (smtcode) に設定されると、運用サーバーでは複数の言語 (ストリング) を同時にロードできる可能性があります。ただし、InfoSphere MDM コンポーネントでは 1 回につき 1 つの言語のみのストリングが表示されます。例えば、同じ 1 つの運用サーバーが、フランス語のクライアントにフランス語のメッセージ、英語のクライアントに英語のメッセージを送信するように構成されます。

クライアント・ソフトウェアが代替言語を使用するように構成されていない場合、運用サーバー・レベルの情報のみが選択された言語で返されます。MDM データベース内に保管された日付などのデータの変換またはグローバル化は、ユーザー・アプリケーションで表示される際は変換されません。それどころか、この情報は送信元から受信されたロケールで表示されます。

コマンド・ライン・ツールを使用する前提条件の検査

カスタム InfoSphere MDM デプロイメントをインストールする前に、Installation Startup Kit に含まれている前提条件検査のコマンド・ライン・ツールを実行します。

このタスクについて

前提条件検査のコマンド・ライン・ツールは、前提条件が満たされていないことが原因で正常に完了できないインストールが開始されることを防ぐのに役立ちます。このツールには、環境をテストして期待される前提条件が満たされていることを確認する機能、さらにはログ、構成ファイル、およびデータベースに格納されたメタデータから基本データと拡張データを収集する機能があります。

注: 前提条件検査のコマンド・ライン・ツールには、IBM Support Assistant Data Collector で提供される機能が含まれています。

手順

1. ダウンロードした InfoSphere MDM パッケージの保存先ディレクトリーにナビゲートします。
2. disk1.zip を開いて、任意のディレクトリーにサブフォルダー StartupToolkit を抽出します。ここでは、このディレクトリーの場所を `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` と表しています。
3. Installation Startup Kit の前提条件検査プログラムのディレクトリー `STARTUPKIT_INSTALL_HOME¥PrereqCheckingTool¥MDMCollector¥isadc` にナビゲートします。
4. 次のようにして、前提条件検査のスクリプトを実行します。
 - Microsoft Windows では、`isadc.bat` を実行します。
 - Linux や UNIX では、`isadc.sh` を実行します。

前提条件検査のコマンド・ライン・ツールによって、以下のステップが順に示されます。

- インストールの前提条件を検査する。
- 基本データを収集する。
- 拡張データを収集する。

関連概念:

88 ページの『カスタム・インストールに関するアカウントの前提条件』

関連資料:

11 ページの『カスタム・インストールのための Installation Startup Kit』

139 ページの『カスタム・インストールに関する前提条件検査』

InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール

この手順を使用して、カスタム・インストールを実行します。カスタム・インストールは、Oracle または Microsoft SQL Server データベースを使用する場合や、クラスター環境でインストールする場合に必要な方法です。IBM DB2 データベースを使用する場合にもカスタム・インストールを使用できます。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM WebSphere Application Server およびデータベースの準備を含む、すべてのインストール準備タスクを完了したこと。

- IBM Installation Manager をインストールして、必要なりポジトリーを追加したこと。
- IBM WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャーとノードが開始されていること。
- データベースが開始されていること。
- ワークステーションに InfoSphere MDM Workbench をインストールする場合は、IBM Rational Application Developer をインストールしたこと。

Microsoft Windows 上にインストールする場合、

- Windows レジストリーに書き込むために、IBM Installation Manager を管理者モードで実行する必要があります。管理者モードは、IBM AIX、Linux、または Solaris では使用されません。
- Microsoft Windows 7 オペレーティング・システムの場合、仮想化されていないディレクトリーに MDM をインストールする必要があります。

重要: カスタム・インストールの場合、WebSphere Application Server Deployment Manager (Dmgr) JVM ヒープ・サイズ引数を 512MB および 1024MB に設定してください。これは、品目保守 UI をインストールする予定の場合には特に重要です。ヒープ・サイズを増やすには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を開き、「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」に移動します。
2. 「サーバー・インフラストラクチャー」の下で、「Java およびプロセス管理」を展開して、「プロセス定義」をクリックします。
3. 「追加プロパティー」の下で、「Java 仮想マシン」をクリックします。
4. 初期ヒープ・サイズを 512 MB、最大ヒープ・サイズを 1024 MB にそれぞれ設定します。
5. 「OK」をクリックし、変更を保存して、変更内容とノードを同期させます。

このタスクについて

注: クラスター・デプロイメントにインストールする場合、クラスター環境へのインストールに直接進んでください。

注: z/OS システムにインストールする場合、154 ページの『z/OS でのインストール』に直接進んでください。

IBM Rational Application Developer がインストールされている場合は、InfoSphere MDM を同じパッケージ・グループにインストールしないでください。

手順

1. このトピックにある前述の前提条件のリストを検討して、必要な準備ステップをすべて完了したことを確認します。それらのステップはオプションではありません。
2. IBM Installation Manager を開始します。
3. IBM Installation Manager ホーム画面で、「インストール」をクリックします。

4. 「パッケージのインストール」パネルで、InfoSphere MDM エディションと必要な追加パッケージ (ワークステーションをインストールする場合には Workbench など) を選択します。「次へ」をクリックします。
5. ご使用条件を確認し、受諾したら「次へ」をクリックします。
6. 既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新しいパッケージ・グループを作成するかを選択します。

ヒント: 何を選択すればよいか不明な場合には、デフォルトを受け入れてください。ほとんどのインストールでは、新しいパッケージ・グループを作成する必要があります。

重要: IBM Rational Application Developer がインストールされている場合は、InfoSphere MDM を同じパッケージ・グループにインストールしないでください。「新規パッケージ・グループの作成」を選択します。

7. 同じパネルで、各コンポーネントのインストール先となる「インストール・ディレクトリー」を定義します。デフォルト以外のディレクトリーにコンポーネントをインストールするようにする場合は、そのコンポーネントを選択し、「インストール・ディレクトリー」フィールドの「参照」をクリックします。

ディスク・スペース情報を確認して、「次へ」をクリックします。

8. 言語パネルでは、常に「英語」が選択されています。
 - a. 英語に加えて他のいずれかの言語をサポートする場合には、それらを選択します。
 - b. あるパッケージは他のパッケージよりも多くの言語をサポートします。より多くの言語が必要な場合、「一部のパッケージでのみサポートされる翻訳 (Translations Supported by Only Some Packages)」の三角アイコンをクリックして、必要な各言語を追加で選択します。
 - c. 「次へ」をクリックします。
9. フィーチャー・パネルで、インストールする InfoSphere MDM のフィーチャー、アプリケーション、およびオプションのコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。
10. 次のパネルのセットで、以下のように構成情報を入力します。

ヒント: ガイダンスとして、完成したインストール・ワークシートを使用します。それらの各構成パネルを移動する際に、画面に緑色のチェック・マークまたは赤色の x が表示されて、そのパネルが正常に完了したかどうかを示されません。

- a. 「データベース構成 (Database Configuration)」パネルで、次のようにします。
 - データベースの詳細情報を入力します。データベース・ホームの値が有効な場合、「テスト接続」ボタンがアクティブになります。
 - 「テスト接続」をクリックします。テストが成功するためには、データベースがアクセス可能で、実行している必要があります。
 - 接続テストが正常に終了した後、表スペースをセットアップできます。「既存の表スペースの使用 (Use existing tablespaces)」または「新しい表

スペースの作成 (**Create new tablespaces**)」のいずれかを選択します。新しい表スペースの作成を選択する場合は、新しい名前を定義する必要があります。

- b. 「**ヒストリー構成 (History Configuration)**」パネルで、ビジネス要件のために必要な業種、トリガー、および言語のオプションを選択します。
- c. 「**WebSphere Application Server 構成 (WebSphere Application Server Configuration)**」パネルで、次のようにします。
 - アプリケーション・サーバーをセットアップするために使用した情報を入力します。
 - 「**ホスト詳細の取得 (Retrieve Host Details)**」を選択して、セル、ノード、およびサーバーの情報を入手します。取得したセル、ノード、およびサーバーを選択するには、それぞれのドロップダウン・リストを使用します。異なる値を指定する必要がある場合には、その値をフィールドに入力できます。
 - 「**サーバーの MDM インスタンスを確認 (Verify MDM Instance on Server)**」をクリックします。
- d. 「**アプリケーションの構成**」パネルで、次のようにします。
 - 新しいアプリケーション名、ユーザー・パスワード、および RMI ポートを入力します。インストール・アプリケーションは、これらの詳細情報を使用して InfoSphere MDM をセットアップします。
 - マッチング・スタイルとして、「**確率的マッチング (Probabilistic matching)**」または「**決定論的マッチング (Deterministic matching)**」のどちらかを選択します。
 - いくつかのタイム・ゾーンでアプリケーションが実行される場合、またはタイム・ゾーンごとにデータの値が時間に依存する場合は、「**複数のタイム・ゾーンへのデプロイメントを使用可能にする (Enable multiple time zone deployment)**」を選択し、「**デフォルト・タイム・ゾーン (Default time zone)**」を選択します。
 - このインストールに使用するメッセージ・タイプを選択します。IBM WebSphere MQ を選択した場合は、WebSphere MQ インスタンスの詳細を入力するように求められます。

ヒント: IBM Installation Manager を実行するマシンとは異なるマシンに WebSphere MQ がインストールされている場合は、インストーラーがキュー・マネージャーを作成しないように、「**メッセージング・サーバーの構成 (Configure messaging server)**」オプションを必ずクリアしておいてください。キュー・マネージャーを作成する場合は、このオプションを選択したままにしておきます。

- e. 「**インストール構成のレビュー (Install Configuration Review)**」パネルで、次のようにします。
 - インストール・タイプを選択します。アプリケーション・コンポーネントを、メインのインストール・プロセスの一部として自動的に構成するか、またはメインのインストールの後にスクリプトを実行して後で構成するかを選択できます。

注: 構成をインストールから分離する方法については、このページの最後にある関連トピックを参照してください。

- 「プロパティ」見出しを展開して、このインストールのために構成した詳細情報をレビューします。
- 「**インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)**」をクリックして、いくつかの前提条件検査を実行します。この検査は、使用する環境と構成が、インストールを正常に完了させるために十分であることを確認するために役立ちます。
- 前提条件検証テストの結果を確認します。「**詳細の表示**」をクリックして各テストの詳細情報を表示し、示されているリンクから各結果のログ・ファイルとヘルプを表示します。

ヒント: 「詳細の表示」をクリックして、「**警告を無視します。リスクについて理解しています。(Ignore the warning. I understand the risks.)**」を選択することにより、警告を無視できます。エラーは無視できません。

- 必要であれば、警告やエラーに対応するための修正アクションを実行してから、「**状況の再チェック (Recheck Status)**」をクリックします。
- チェックが成功したら、「**インストール**」をクリックします。

インストール・アプリケーションは、InfoSphere MDM をインストールします。構成によっては、インストール・プロセスに相当の時間がかかることがあります。

11. 最後の IBM Installation Manager パネルで、ログ・ファイル・ビューアーを開く場合は「**ログ・ファイルの表示 (View Log Files)**」をクリックします。
12. 「**終了**」をクリックして IBM Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

最後のインストーラー・パネルに表示される成功メッセージは、検証テストがインストール・プロセスの一環として自動的に実行されたことを示します。ログ・ファイルでインストールが正常に完了したことを確認することもできます。インストールが成功しなかった場合は、ログ・ファイルを調べ、トラブルシューティング・トピックのユーザー支援情報を使用してください。

次のタスク

インストール後に、フィーチャーを追加または削除したり (例えば、アプリケーションや別の言語翻訳の追加)、構成設定を変更したりする場合、再度 IBM Installation Manager を実行して「**変更**」を選択することができます。

関連概念:

27 ページの『カスタム・インストール・デプロイメント・タイプ』

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

191 ページの『基本インストールの検証』

関連タスク:

86 ページの『カスタム・デプロイメントの準備』

154 ページの『z/OS でのインストール』

インストールのトラブルシューティング

カスタム・インストールに関する前提条件検査

InfoSphere MDM インストーラー・アプリケーションはテストを実行して、各カスタム・インストールを開始する前に、特定の前提条件が満たされていることを確認します。

前提条件検査ツールは、いずれかの前提条件が満たされていないことが原因で正常に完了できないインストールが開始されることを防ぐのに役立ちます。

ヒント: 「インストール構成のレビュー (Installation Configuration Review)」パネルで「インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)」をクリックすることにより、Installation Manager 内から前提条件検査を実行します。

カスタム・インストールの実行時に、インストール・アプリケーションは以下の前提条件検査を行います。

表 21. システムの検査

前提条件検査	説明	解決方法
インストールのディスク・スペースの検証	この検査では、InfoSphere MDM を <code>MDM_INSTALL_HOME</code> ディレクトリにインストールするのに十分なディスク・スペースがあることを検証します。	<code>MDM_INSTALL_HOME</code> ロケーションに、少なくとも 2 GB の使用可能なディスク・スペースがあることを確認します。
インストール・アプリケーションを実行するためのメモリの検証	この検査では、インストールを実行するのに十分なメモリーがあることを検証します。これは警告メッセージです。	インストール先のシステムに、少なくとも 8 GB の RAM があることを確認します。 注: この警告は無視することを選択できますが、インストールが失敗する可能性があります。

表 22. データベースの検査

前提条件検査	説明	解決方法
データベースのバージョンの検証	この検査では、データベースのバージョンがサポートされていることを検証します。	このインストールのデータベースが、InfoSphere MDM システム要件にリストされているデータベース・バージョンのいずれかであることを確認します。
データベースのディスク・スペースの検証	この検査では、MDM データベースのデフォルトのデータベース・ロケーション (データベース・ホーム・フォルダー) に使用可能なディスク・スペースが十分にあることを検証します。	データベースに少なくとも 6 GB のディスク・スペースがあることを確認します。 注: この要件は、データベース作成の基本的なディスク・スペース要件のみを考慮していません。

表 22. データベースの検査 (続き)

前提条件検査	説明	解決方法
データベースのパラメーターの検証	<p>この検査では、データベースに接続を試みることにより、すべてのデータベース接続の資格情報 (ホスト、ポート、ユーザー、およびパスワードなど) が正しいことを検証します。また、データベースの文字セットが Unicode (UTF-8) であることも、この検査で検証されます。</p>	<p>指定されたデータベース・ユーザーが、ホスト名、ポート、および指定されたデータベース資格情報を使用してデータベースに接続できることを確認します。これらの各パラメーターは正しくなければならず、必須の JAR を使用してクライアントをデータベース・サーバーに接続できなければなりません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DB2 データベースの場合、コード・セットが UTF-8 であることを確認します。 • Oracle データベースの場合、NLS_CHARACTERSET の値が AL32UTF8 であることを確認します。 <p>この検査が失敗した具体的な理由の詳細については、ログ・ファイルを参照してください。</p>
データベース・バッファ・プールの検証	<p>この検査では、データベース・バッファ・プールが InfoSphere MDM システム要件を満たしているかどうかを判別します。</p>	<p>データベース・バッファ・プールが InfoSphere MDM システム要件を満たしていることを確認します。</p> <p>この検査が失敗した具体的な理由の詳細については、ログ・ファイルを参照してください。</p>

表 22. データベースの検査 (続き)

前提条件検査	説明	解決方法
データベース・ユーザー権限の検証	この検査では、指定されたデータベース・ユーザーが存在すること、必要な権限を保持していることを検証します。	<p>インストールに使用されているデータベース・ユーザーが、必要なすべての権限を保持していることを確認します。</p> <p>この検査が失敗した具体的な理由の詳細については、ログ・ファイルを参照してください。</p> <p>MDM データベース・ユーザーは、表スペース、表、トリガー、関数、ビュー、プロシージャ、およびシーケンスの作成および編集が可能でなければなりません。必要なデータベース権限の詳細については、InfoSphere MDM Startup Toolkit をインストールして、データベース・セットアップ・スクリプトが実行する操作を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DB2: <code>STARTUP_TOOLKIT_HOME</code> <code>¥database¥CoreData</code> <code>¥Full¥DB2¥Standard</code> <code>¥ddl¥CreateTS.sql</code> • Oracle: <code>STARTUP_TOOLKIT_HOME</code> <code>¥database¥CoreData</code> <code>¥Full¥Oracle</code> <code>¥Standard¥ddl</code> <code>¥create_schema_ora.sql</code> <p>注: 権限は DB2 および Oracle に固有です。</p>
表スペース定義の検証	この検査では、データベースに必要なデータベース表スペースが存在することを検証します。	<p>表スペースが正しいことを確認してください。</p> <p>欠落している表スペースの詳細については、ログ・ファイルを参照してください。</p> <p>注: 表スペースは、DB2 および Oracle に固有です。</p>

表 22. データベースの検査 (続き)

前提条件検査	説明	解決方法
ODBC データ・ソース検査	<p>この検査は、ODBC データ・ソースが Microsoft Windows レジストリー内に存在するかどうかを調べます。ODBC データ・ソースが既に存在している場合、この検査はエラーで失敗します。</p> <p>注: Windows 以外のシステムでは、この検査は常に成功します。</p>	<p>使用する Windows レジストリーに ODBC データ・ソースが存在している場合には、以下の方法でそのデータ・ソースを削除してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コマンド regedit を実行して、Windows Registry Editor を開きます。 2. HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ODBC\ODBC.INI エントリーを見つけます。 3. ODBC.INI を展開して、ODBC データ・ソースのエントリーを見つけてから、それを右クリックして「削除」を選択します。 4. ODBC.INI の下で、ODBC データ・ソースのエントリーを選択します。表示ペインに、すべてのサブエントリーが表示されます。 5. サブエントリーのリストで、ODBC データ・ソースのエントリーを見つけます。そのエントリーを右クリックして、「削除」を選択します。
データベース状態の検査	<p>この検査では、データベース・スキーマ内に既存の MDM データ表が存在していないことを確認します。スキーマに既に内容が含まれている場合には、警告メッセージが表示されます。</p> <p>ヒント: MDM データが既に含まれているデータベースには、InfoSphere MDM のインストールを試行しないでください。既存のデータベースに上書きインストールすると、インストールが失敗した場合にデータを失うことがあります。</p>	<p>InfoSphere MDM をインストールする前に、データベースが空のスキーマで開始していることを確認してください。インストールによって MDM 表が作成されます。</p> <p>アップグレード・インストールを実行する場合には、『前のバージョンからのアップグレード』トピックを参照してください (このトピックの最後にある関連リンクをご覧ください)。</p> <p>注: この警告を無視することも選択できますが、インストールが失敗した場合にデータが失われる可能性があります。</p>

表 23. 運用サーバーの検査

前提条件検査	説明	解決方法
<p>WebSphere Application Server バージョンの検証</p>	<p>この検査では、正しいバージョンの WebSphere Application Server がインストールされ、使用可能になっていることを検証します。</p> <p>この検証では、次の 2 つの障害のシナリオが考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 接続できない - インストール検証ツールが WebSphere Application Server に接続できません。 • バージョンが古い - WebSphere Application Server のバージョンがサポートされていません。 	<p>障害メッセージで、検証検査が接続できないことが示される場合、指定した接続の詳細をダブルチェックしてください。接続に失敗した理由がログ・ファイルに示されます。</p> <p>障害メッセージにバージョンがサポートされていないことが示される場合、正しいバージョンの WebSphere Application Server をインストールする必要があります。検出されたバージョンと必要なバージョンの両方がログ・ファイルに示されます。</p>
<p>プロファイルのディスク・スペースの検証</p>	<p>この検査では、InfoSphere MDM 運用サーバーを <i>MDM_INSTALL_HOME</i> ロケーションにインストールするのに十分なディスク・スペースがあることを検証します。この検証に失敗すると、警告のプロンプトが出されます。</p>	<p><i>MDM_INSTALL_HOME</i> ロケーションに使用可能なディスク・スペースが十分であることを確認します。</p> <p>必要なディスク・スペースの量は、インストールするように選択したフィーチャーに応じて異なります。インストールの具体的な要件の詳細については、ログ・ファイルを参照してください。</p> <p>注: この警告は無視することを選択できますが、インストールが失敗する可能性があります。</p>

表 23. 運用サーバーの検査 (続き)

前提条件検査	説明	解決方法
SOAP 接続タイムアウトの検証	この検査では、 <code>soap.client.props</code> ファイルが存在すること、および SOAP 接続タイムアウトの値 (<code>com.ibm.SOAP.requestTimeout</code>) が十分であることを検証します。この検証に失敗すると、警告のプロンプトが出されます。	<p><code>soap.client.props</code> ファイルが見つからないことを示す警告メッセージが表示される場合、ログ・ファイルで詳細を参照してください。</p> <p>SOAP 接続タイムアウトの値の長さが十分でないことを示す警告メッセージが表示される場合、<code>com.ibm.SOAP.requestTimeout</code> の値を以下のいずれかの 1 つの値に設定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1800 以上の数値 • 0 (タイムアウトが発生しないことを示す) <p>注: この警告は無視することを選択できますが、インストールが失敗する可能性があります。</p>
WebSphere Application Server の状況の検証	この検査は、WebSphere Application Server が稼働中であることを検証します。	WebSphere Application Server が稼働していることを確認してください。この検査が失敗した理由の詳細については、ログ・ファイルを参照してください。

関連タスク:

133 ページの『コマンド・ライン・ツールを使用する前提条件の検査』

関連資料:

97 ページの『データベース・ユーザー・アカウントおよび接続』

関連情報:

 [InfoSphere MDM system requirements](#)

 [旧バージョンからのアップグレード](#)

構成とインストールの分離

InfoSphere MDM インストール・アプリケーションを使用して、製品をインストールまたは変更すると同時に、後で製品の構成に使用できる構成プロパティ・ファイルを生成することができます。

このタスクについて

標準の InfoSphere MDM インストール・プロセスでは、インストールの実行と同時に、デプロイメントの主なプロパティを構成することになります。しかし、分離機能を使用すると、アプリケーション・プロパティ、データベース、ユーザー・インターフェース、その他の主なプロパティや変数の構成から、インストールを分離できます。

制約事項: 構成分離機能を使用できるのは、カスタム・インストール・タイプを使用している場合だけです。スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) では、構成とインストールの分離がサポートされていません。

構成をインストールから分離するオプションを選択した場合、IBM Installation Manager セッションで行った選択を追跡するいくつかのプロパティ・ファイルがインストール・アプリケーションによって生成されます。これらのプロパティ・ファイルは、`MDM_INSTALL_HOME/properties` に保管されます。生成されたこれらのプロパティ・ファイルは、手動で編集して製品構成を変更してから、スクリプトを使用して新しい構成を既存のインスタンスに適用できます。この適用は、全体を再インストールすることなく行えます。

インストール済みの製品を変更して新規コンポーネントを組み込む場合にも構成分離機能を使用することができます。分離オプションを選択した場合は、必ず、後で `madconfig` スクリプトを実行して IBM Installation Manager の「変更」セッションを開始し、変更を完了させる必要があります。

手順

1. ランチパッドまたは IBM Installation Manager を開始して、カスタム・インストールを始めます。インストール・アプリケーションのパネルを入力し、デプロイメントの詳細を通常どおりに指定します。
2. 「インストール構成のレビュー (Install Configuration Review)」パネルの「インストール・タイプ (Install Type)」の下で、「インストール後に InfoSphere MDM コンポーネントを構成するスクリプトを手動で実行する (Manually run the scripts to configure InfoSphere MDM components after installation)」のオプションを選択します。
3. 「インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)」をクリックして、インストール検査のチェックを実行します。
4. 検査チェックのエラーがあればそれを修正してから、「インストール」をクリックしてインストールを実行します。インストールが完了すると、InfoSphere MDM がインストールされ、インストールすることを選択したフィーチャーに応じて、以下のプロパティ・ファイルの一部または全部がインストール・アプリケーションによって `MDM_INSTALL_HOME/properties` に生成されます。

db.properties

MDM データベース・フィーチャーが IBM Installation Manager を介してインストールされる場合、このプロパティ・ファイルが作成されます。これにはデータベース・インスタンスの構成の詳細情報が含まれています。

app.properties

MDM アプリケーション・フィーチャーが IBM Installation Manager を介してインストールされる場合、このプロパティ・ファイルが作成されます。これには InfoSphere MDM 運用サーバー・インスタンスの構成の詳細情報が含まれています。

<user interface>.properties

IBM Installation Manager で選択したユーザー・インターフェース・アプリケーションのコンポーネントに応じて、いくつかのプロパティ・フ

ファイルが作成されます。これらのファイルには、InfoSphere MDM ユーザー・インターフェース・アプリケーションのコンポーネントの構成に関する詳細情報が含まれています。

MDM_isInstalled.properties

このプロパティ・ファイルには、どの InfoSphere MDM コンポーネントがインストールされたかに関する構成情報が保管されます。このファイルには、各コンポーネントに、各フィーチャーがインストールされている (YES) かインストールされていない (NO) かをトラッキングするキーと値のペアがあります。

MDM_Rollback.properties

このプロパティ・ファイルは、インストールのロールバックが生じる重大なエラーが生じた場合に使用されます。これには、各 InfoSphere MDM コンポーネントの詳細と、そのフィーチャーの状態が保管されます。このファイルには、各コンポーネントに、各フィーチャーが正常にインストールされている (YES)、部分的にインストールされている (PARTIAL)、またはインストールされていない (NO) のいずれであるかをトラッキングする鍵/値のペアがあります。

インストール・アプリケーションでエラーが発生したためにいずれかのコンポーネントの状況が PARTIAL となった場合、エラーが修正されてインストールが再実行された後に、インストール・アプリケーションは部分的にインストールされたコンポーネントだけをロールバックして、そのコンポーネントと失敗した他のコンポーネントのインストールを再実行します。

このファイルはまた、各コンポーネントのインストール中に実行されるターゲットのセットを保守します。これらのターゲットは、ロールバック・プロセスの管理に役立ちます。

MDM_Variables.properties

このプロパティ・ファイルは、InfoSphere MDM のインストール中に作成されたデフォルトのプロパティ・ファイルです。プロパティ `user.L2.mdm.feature.list` の値には、IBM Installation Manager で選択されたフィーチャーのリストが含まれます。

5. 構成変更が必要な場合は、`MDM_INSTALL_HOME/properties` 内の 1 つ以上のプロパティ・ファイルを編集して、必要な変更を反映させます。
6. 次の `madconfig` スクリプトを実行して、プロパティ・ファイルで定義された新しい構成を適用します。
 - Microsoft Windows システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.bat Configure_MasterDataManagement
```
 - Linux や UNIX システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.sh Configure_MasterDataManagement
```

ヒント: 構成スクリプトの実行中に問題が発生した場合は、ログ・ファイルを参照して問題解決の手段を講じてから、そのスクリプトを再実行します。

InfoSphere MDM 製品は、プロパティ・ファイル内の値に基づいて、`madconfig` スクリプトによって再構成されます。

7. オプション: Configure_MasterDataManagement madconfig スクリプトを使用して適用された製品構成全体を削除するには、以下の madconfig スクリプトを実行してすべての構成ファイルを削除します。

- Microsoft Windows システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.bat Uninstall_MDM
```

- Linux や UNIX システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.sh Uninstall_MDM
```

重要: Uninstall_MDM madconfig スクリプトを実行する際には、注意が必要です。Uninstall_MDM を実行すると、特定のコンポーネントの構成だけではなく、すべてのフィーチャーの構成が削除されます。

8. オプション: Configure_MasterDataManagement madconfig スクリプトを使用して適用された個々のフィーチャーの構成を削除するには、以下のようになります。

- a. IBM Installation Manager を開いて、「変更」を選択します。
- b. フィーチャーの選択パネルで、フィーチャーを削除します。
- c. madconfig スクリプトを実行して、新しい製品構成を構成します。

- Microsoft Windows システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.bat Configure_MasterDataManagement
```

- Linux や UNIX システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.sh Configure_MasterDataManagement
```

関連概念:

180 ページの『クライアント・アプリケーションと個々のコンポーネントのインストール』

関連タスク:

197 ページの『インストール済み環境の変更』

構成の分離のシナリオ:

このトピックでは、構成の分離スクリプトが役に立つ例をいくつか示します。

インストールを変更してコンポーネントを追加

シナリオ

- IBM Installation Manager の初期セッションで、MDM データベース・フィーチャーと MDM アプリケーション・フィーチャーをインストールして構成しました。
- その後、インストール実施者が、この InfoSphere MDM インスタンスには Business Administration UI アプリケーションと Data Stewardship UI アプリケーションが追加が必要であると判断しました。

対処法

- IBM Installation Manager を「変更」モードで実行し、パネルに入力して Business Administration フィーチャーと Data Stewardship フィーチャーを追加します。
- Configure_MasterDataManagement madconfig スクリプトを実行します。

結果 スクリプトによって、InfoSphere MDM インスタンスが追加のユーザー・インターフェース・アプリケーションを使用するように構成されました。

障害によりコンポーネントが部分的にインストールされた後のインストールの修正シナリオ

- IBM Installation Manager の初期セッションで、MDM データベース・フィーチャーと MDM アプリケーション・フィーチャーをインストールし、「インストール後に **InfoSphere MDM コンポーネントを構成するスクリプトを手動で実行する (Manually run the scripts to configure InfoSphere MDM components after installation)**」オプションを選択しました。
- コンポーネントを構成するために、Configure_MasterDataManagement madconfig スクリプトを実行しました。
- MDM データベースの構成中にエラーが発生してインストールが停止したため、MDM データベースが部分的にインストールされた状態になりました。

対処法 ログを確認して問題を修正し、Configure_MasterDataManagement madconfig スクリプトを再実行します。

結果 スクリプトを再実行すると、部分的にインストールされた MDM データベース・コンポーネントがアンインストールされ、新しい構成で再インストールされます。 MDM アプリケーションも構成可能です。

失敗したコンポーネントのインストールのロールバックとコンポーネントの再構成シナリオ

- IBM Installation Manager の初期セッションで、MDM データベース・フィーチャーと MDM アプリケーション・フィーチャーをインストールし、「インストール後に **InfoSphere MDM コンポーネントを構成するスクリプトを手動で実行する (Manually run the scripts to configure InfoSphere MDM components after installation)**」オプションを選択しました。
- コンポーネントを構成するために、Configure_MasterDataManagement madconfig スクリプトを実行しました。
- MDM データベースは正常にインストールされましたが、MDM アプリケーション・コンポーネントのインストール中にエラーが発生したため、MDM アプリケーションが部分的にインストールされた状態でインストールが停止しました。

対処法 ログを確認して問題を修正し、Configure_MasterDataManagement madconfig スクリプトを再実行します。

結果 スクリプトを再実行すると、部分的にインストールされた MDM アプリケーション・コンポーネントがロールバックされ、新しい構成で再インストールされます。 MDM データベース・コンポーネントには何も実行されません。これは、最初のインストール試行で正しく構成されているからです。

新規インストールでの既存 MDM データベースの指定

InfoSphere MDM をインストールし、既存の MDM データベースと連携するように構成することができます。

このタスクについて

この機能は、既存のデータベースが InfoSphere MDM インストールと同じリリース・バージョンである場合にのみ利用できます。既存の MDM データベースが現行のアプリケーション・バージョンより古いリリースのものである場合は、以下の手順ではなく、アップグレード資料を参照してください。

重要: この手順では、IBM Installation Manager はまだ既存の MDM データベースにリンクされておらず、InfoSphere MDM フィーチャーはまだインストールされていないものと想定しています。

手順

1. 以下のようにして、IBM Installation Manager を既存の MDM データベースにリンクします。
 - a. IBM Installation Manager を開始します。
 - b. 「インストール」モードを選択します。
 - c. フィーチャー・パネルで、「**MDM データベース**」コンポーネントだけを選択します。
 - d. データベース構成パネルで、既存の MDM データベースのパラメーターを指定します。詳細については、『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』を参照してください。
 - e. データベース構成パネルを離れる前に、「**手動データベース・インストールのためのスクリプトを抽出する (Extract scripts for manual database installation)**」オプションを選択します。
 - f. インストール・ウィザードを完了します。IBM Installation Manager はファイナルを抽出して構成しますが、既存のデータベースには何の変更も適用しません。
 - g. IBM Installation Manager を終了します。
2. 以下のようにして、InfoSphere MDM 運用サーバーをインストールし、既存のデータベースに接続します。
 - a. IBM Installation Manager を開始します。
 - b. 「変更」モードを選択します。
 - c. フィーチャー・パネルで、「**MDM 運用サーバー (MDM Operational Server)**」コンポーネントだけを選択します。
 - d. 構成パネルで、InfoSphere MDM インストールの詳細を指定します。詳細については、『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』のトピックを参照してください。
 - e. インストール・ウィザードを完了します。IBM Installation Manager は、運用サーバー・コンポーネントをデプロイして構成し、MDM データベースの構成と管理表を更新して新規デプロイメント・インスタンスを作成し、新たにインストールした運用サーバーに接続します。運用サーバーとデータベー

ス・コンポーネントの接続が完了したら、IBM Installation Manager は、インストール検証テスト (IVT) を実行します。

関連タスク:

旧バージョンからのアップグレード

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』

クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール

以下の手順を使用して、クラスター環境への InfoSphere MDM のカスタム・インストールを実行します。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM WebSphere Application Server およびデータベースの準備を含む、すべてのインストール準備タスクを完了したこと。
- IBM Installation Manager をインストールして、必要なりポジトリを追加したこと。
- IBM WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャーとノードが開始されていること。
- データベースが開始されていること。
- ワークステーションに InfoSphere MDM Workbench をインストールする場合は、IBM Rational Application Developer をインストールしたこと。

Microsoft Windows 上にインストールする場合、

- Windows レジストリーに書き込むために、IBM Installation Manager を管理者モードで実行する必要があります。管理者モードは、IBM AIX、Linux、または Solaris では使用されません。
- Microsoft Windows 7 オペレーティング・システムの場合、仮想化されていないディレクトリーに MDM をインストールする必要があります。

重要: カスタム・インストールの場合、WebSphere Application Server Deployment Manager (Dmgr) JVM ヒープ・サイズ引数を 512MB および 1024MB に設定してください。これは、品目保守 UI をインストールする予定の場合には特に重要です。ヒープ・サイズを増やすには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を開き、「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」に移動します。
2. 「サーバー・インフラストラクチャー」の下で、「Java およびプロセス管理」を展開して、「プロセス定義」をクリックします。
3. 「追加プロパティー」の下で、「Java 仮想マシン」をクリックします。
4. 初期ヒープ・サイズを 512 MB、最大ヒープ・サイズを 1024 MB にそれぞれ設定します。
5. 「OK」をクリックし、変更を保存して、変更内容とノードを同期させます。

このタスクについて

ヒント: クラスター・インストールを開始する前に、インストール・シナリオを確認してください。シナリオはご使用の環境に必ずしも完全に適合するとは限りませんが、インストールのガイドラインになります。

手順

1. このトピックにある前述の前提条件のリストを検討して、必要な準備ステップをすべて完了したことを確認します。それらのステップはオプションではありません。
2. アプリケーション・サーバーに関する次の項目が完了していることを確認します。
 - a. クラスター内の必要なマシンそれぞれに WebSphere Application Server がインストールされている。
 - b. WebSphere Application Server 内に必要なクラスターが作成されている。
 - c. DB2 または Oracle データベースを使用する場合は、JDBC_DRIVER_PATH 環境変数を設定する必要があります。
 - d. すべての管理対象ノードを同期させます。
 - e. WebSphere Application Server のホスト名とポートをインストール・ワークシートにメモします。
3. 必要なマシンにデータベースとデータベース・クライアント・ソフトウェアがインストールされていること、およびデータベースが開始されていることを確認します。
4. IBM WebSphere MQ メッセージングを使用する場合は、クラスター内の各マシンでこれらのステップを実行します。IBM WebSphere デフォルト・メッセージングを使用する場合は、次のステップに進んでください。
 - a. WebSphere MQ がインストールされていることを確認します。
 - b. `custSetupMQServer.mqsc` スクリプトと `ChannelAuth.mqsc` スクリプトを実行して、WebSphere MQ キュー・マネージャー、チャンネル、およびキューを作成します。これらのスクリプトは、Installation Startup Kit (ダウンロード・パッケージ・ファイル `disk1.zip` から抽出可能) に含まれています。
5. IBM Installation Manager を開いて、「インストール」をクリックします。
6. 「パッケージのインストール」パネルで、エディションを選択し、「次へ」をクリックします。
7. プロンプトに従って続行し、ご使用条件への同意、インストール・ロケーションの選択、および言語の選択を行います。
8. 以下のようにして、InfoSphere MDM インストール環境の詳細を構成します。

ヒント: ガイダンスとして、完成したインストール・ワークシートを使用します。それらの各構成パネルを移動する際に、画面に緑色のチェック・マークまたは赤色の x が表示されて、そのパネルが正常に完了したかどうかを示されません。

- a. 「データベース構成 (Database Configuration)」パネルで、次のようにします。

- データベースの詳細情報を入力します。データベース・ホームの値が有効な場合、「**テスト接続**」ボタンがアクティブになります。
 - 「**テスト接続**」をクリックします。テストが成功するためには、データベースがアクセス可能で、実行している必要があります。
 - 接続テストが正常に終了した後、表スペースをセットアップできます。「**既存の表スペースの使用 (Use existing tablespaces)**」または「**新しい表スペースの作成 (Create new tablespaces)**」のいずれかを選択します。新しい表スペースの作成を選択する場合は、新しい名前を定義する必要があります。
- b. 「**ヒストリー構成 (History Configuration)**」パネルで、ビジネス要件のために必要な業種、トリガー、および言語のオプションを選択します。
- c. 「**WebSphere Application Server 構成 (WebSphere Application Server Configuration)**」パネルで、次のようにします。
- アプリケーション・サーバーをセットアップするために使用した情報を入力します。
 - 「**ホスト詳細の取得 (Retrieve Host Details)**」を選択して、セル、ノード、およびサーバーの情報を入手します。取得したセル、ノード、およびサーバーを選択するには、それぞれのドロップダウン・リストを使用します。異なる値を指定する必要がある場合には、その値をフィールドに入力できます。
 - 「**サーバーの MDM インスタンスを確認 (Verify MDM Instance on Server)**」をクリックします。
- d. 「**アプリケーションの構成**」パネルで、次のようにします。
- 新しいアプリケーション名、ユーザー・パスワード、および RMI ポートを入力します。インストール・アプリケーションは、これらの詳細情報を使用して InfoSphere MDM をセットアップします。
 - マッチング・スタイルとして、「**確率的マッチング (Probabilistic matching)**」または「**決定論的マッチング (Deterministic matching)**」のどちらかを選択します。
 - いくつかのタイム・ゾーンでアプリケーションが実行される場合、またはタイム・ゾーンごとにデータの値が時間に依存する場合は、「**複数のタイム・ゾーンへのデプロイメントを使用可能にする (Enable multiple time zone deployment)**」を選択し、「**デフォルト・タイム・ゾーン (Default time zone)**」を選択します。
 - このインストールに使用するメッセージ・タイプを選択します。IBM WebSphere MQ を選択した場合は、WebSphere MQ インスタンスの詳細を入力するように求められます。
- ヒント:** IBM Installation Manager を実行するマシンとは異なるマシンに WebSphere MQ がインストールされている場合は、インストーラーがキュー・マネージャーを作成しないように、「**メッセージング・サーバーの構成 (Configure messaging server)**」オプションを必ずクリアしておいてください。キュー・マネージャーを作成する場合は、このオプションを選択したままにしておきます。
- e. 「**インストール構成のレビュー (Install Configuration Review)**」パネルで、次のようにします。

- インストール・タイプを選択します。アプリケーション・コンポーネントを、メインのインストール・プロセスの一部として自動的に構成するか、またはメインのインストールの後にスクリプトを実行して後で構成するかを選択できます。
- 「プロパティ」見出しを展開して、このインストールのために構成した詳細情報をレビューします。
- 「インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)」をクリックして、いくつかの前提条件検査を実行します。この検査は、使用する環境と構成が、インストールを正常に完了させるために十分であることを確認するために役立ちます。
- 前提条件検証テストの結果を確認します。「詳細の表示」をクリックして各テストの詳細情報を表示し、示されているリンクから各結果のログ・ファイルとヘルプを表示します。

ヒント: 「詳細の表示」をクリックして、「警告を無視します。リスクについて理解しています。(Ignore the warning. I understand the risks.)」を選択することにより、警告を無視できます。エラーは無視できません。

- 必要であれば、警告やエラーに対応するための修正アクションを実行してから、「状況の再チェック (Recheck Status)」をクリックします。
- チェックが成功したら、「インストール」をクリックします。

インストール・アプリケーションは、InfoSphere MDM をインストールします。構成によっては、インストール・プロセスに相当の時間がかかることがあります。

9. 最後の IBM Installation Manager パネルで、ログ・ファイル・ビューアーを開く場合は「ログ・ファイルの表示 (View Log Files)」をクリックします。
10. 「終了」をクリックして IBM Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

最後のインストーラー・パネルに表示される成功メッセージは、検証テストがインストール・プロセスの一環として自動的に実行されたことを示します。ログ・ファイルでインストールが正常に完了したことを確認することもできます。インストールが成功しなかった場合は、ログ・ファイルを調べ、トラブルシューティング・トピックのユーザー支援情報を使用してください。

次のタスク

インストール後に、フィーチャーを追加または削除したり (例えば、アプリケーションや別の言語翻訳の追加)、構成設定を変更したりする場合、再度 IBM Installation Manager を実行して「変更」を選択することができます。

関連概念:

30 ページの『インストールおよび構成のワークシート』

87 ページの『IBM Installation Manager の準備』

89 ページの『アプリケーション・サーバーのインストールおよびセットアップ』

51 ページの『インストール・シナリオ』

191 ページの『基本インストールの検証』

13 ページの『複数インスタンスのサポート』

関連タスク:

96 ページの『データベースのインストールおよびセットアップ』

『z/OS でのインストール』

197 ページの『インストール済み環境の変更』

インストールのトラブルシューティング

198 ページの『新しいノードを既存のクラスターに追加する』

z/OS でのインストール

IBM DB2 for z/OS を使用してインストールする場合は、この手順を使用します。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- InfoSphere MDM オファリングを IBM Installation Manager に追加したこと。
- データベースおよびアプリケーション・サーバーを作成するための準備タスクを完了していること。
- 130 ページの『z/OS 上の InfoSphere MDM インストール用の既存の WebSphere Application Server メッセージング・バスの準備』を完了したこと。
- IBM WebSphere Application Server (デプロイメント・マネージャーとノード) およびデータベースが開始されていること。

このタスクについて

このプロセスには、2 つの異なるセッションが必要です。最初のセッションで、物理 MDM データベースの手動インストールに使用する JCL を抽出して実行します。

物理データベース・ロードが完了した後、2 番目のインストール・セッションで、MDM データベースの仮想部分、運用サーバー、および選択した他のフィーチャーをインストールします。

手順

最初のセッションで、物理 MDM JCL を抽出して実行します。 **Installation Startup Kit** を解凍して、InfoSphere MDM DB2 for z/OS 資産を `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` ディレクトリーに抽出します。

1. ダウンロードした InfoSphere MDM パッケージの保存先ディレクトリーにナビゲートします。
2. `disk1.zip` を開いて、任意のディレクトリーにサブフォルダー `StartUpToolkit` を抽出します。ここでは、このディレクトリーの場所を `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` と表しています。
3. `STARTUPKIT_INSTALL_HOME` に移動します。
4. `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/CoreData/Full/DB2/ZOS/pds` ディレクトリーおよび `STARTUPKIT_INSTALL_HOME/Full/DB2/ZOS/pds` ディレクトリーにある MDM 運

用サーバー z/OS アセットを z/OS システムにコピーします。
2 番目のセッションでは、**MDM 運用サーバー**、および他のフィーチャーをインストールします。

5. IBM Installation Manager を始動して、ホーム・パネルの「**インストール (Install)**」をクリックします。
6. 「パッケージのインストール」パネルで、エディションを選択し、「次へ」をクリックします。
7. プロンプトに従って続行し、ご使用条件への同意、インストール・ロケーションの選択、および言語の選択を行います。

重要: IBM Rational Application Developer がインストールされている場合は、InfoSphere MDM を同じパッケージ・グループにインストールしないでください。「パッケージのインストール」パネルで、「**新規パッケージ・グループの作成 (Create a new package group)**」を選択してください。

8. 「**MDM 運用サーバー (MDM Operational Server)**」、「**MDM データベース**」、およびインストールする他のフィーチャーを選択します。
9. 構成情報を入力します。
 - データベース構成パネルで、「**DB2 Z/OS**」を選択します。
 - IBM WebSphere Application Server 構成では、アプリケーション・サーバーの準備で使用した情報を入力するようにしてください。mdmadmin ユーザーとパスワードを使用します。パネルを終了する前に、「**サーバーの MDM インスタンスを確認 (Verify MDM Instance on Server)**」をクリックします。
 - 「Messaging Server」パネルで、「**IBM WebSphere Default Messaging**」または「**MQ Messaging Provider**」を選択します。SIB 表を手動で WebSphere Application Server にインストールする方法については、WebSphere Application Server オンライン資料の『データ・ストア・テーブルの作成』トピックを参照してください。
10. インストールの要約情報をレビューして詳細情報が正確であることを確認してから、「**インストール要件の確認 (Verify Installation Requirements)**」をクリックして前提条件検査を実行します。この検査は、使用する環境と構成が、インストールを正常に完了させるために十分であることを確認するために役立ちます。
11. 前提条件チェックでの警告やエラーと取り組むための修正アクションを実行してから、「**インストール**」をクリックします。
12. 最後の IBM Installation Manager パネルで、ログ・ファイル・ビューアーを開く場合は「**ログ・ファイルの表示 (View Log Files)**」をクリックします。
13. 「**終了**」をクリックし、IBM Installation Manager を閉じます。

次のタスク

最後のインストーラー・パネルに表示される成功メッセージは、検証テストがインストール・プロセスの一環として自動的に実行されたことを示します。ログ・ファイルでインストールが正常に完了したことを確認することもできます。インストールが成功しなかった場合は、ログ・ファイルを調べ、トラブルシューティング・トピックのユーザー支援情報を使用してください。

関連タスク:

134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』
150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』
130 ページの『z/OS 上の InfoSphere MDM インストール用の既存の WebSphere Application Server メッセージング・バスの準備』

インストール後に z/OS でメッセージ・バスを構成

既存の WebSphere 組み込みメッセージング (メッセージ・バス) がない場合は、インストール前に作成し、InfoSphere MDM を z/OS にインストールした後でこの手順を実行する必要があります。

このタスクについて

インストールの完了後、「インストール検証テストが成功しませんでした (Install Verification Test did not pass)」というエラーが表示されます。以下のステップを実行する場合は、このエラーを無視できます。

手順

1. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開きます。
2. 「サービス統合 (Service Integration)」 > 「バス (Buses)」 > **ご使用のアプリケーション・バス** > 「バス・メンバー (Bus Members)」に移動します。
3. バス・メンバーのページで、**ご使用のアプリケーション・バス・メンバー** > **ご使用のアプリケーション SIB サーバー** > 「メッセージ・ストア (Message Store)」をクリックします。
4. 「表の作成 (Create tables)」オプションをクリアします。
5. 「適用」をクリックしてから、「**マスター構成に直接保存 (Save directly to the master configuration)**」をクリックします。
6. ノードを同期して、アプリケーション・サーバーを再始動します。サーバーを停止することで、WebSphere Application Server が SIB 表を作成して接続を試みることを防止できます。
7. ZSIB.sql ファイルでスキーマ、接頭部、およびデータベース所有者を変更して、ご使用のインスタンス用の SIB 表を作成します。このファイルでは、`<SCHEMA>` をご使用のスキーマ名に、`<PREFIX>` を 3 文字の接頭部に、`<DBA ACCOUNT>` をデータベース所有者に置き換えます。SQL を DB 所有者として実行します。

注: `<PREFIX>` の値は、通常、スキーマ名の末尾 3 文字です。
8. アプリケーション・サーバーを再始動します。
9. `MDM_INSTALL_HOME/IVT` ディレクトリーから、Verify.sh スクリプトを実行します。例えば、コマンド「`verify.sh DB_Schema DB_Password WAS_user WAS_password`」を使用します。
10. インストール応答ファイルを表示して、IVT が成功したことを確認します。

応答ファイルは、`MDM_INSTALL_HOME/IVT/testCases/xml/response` ディレクトリーおよび `MDM_INSTALL_HOME/IVT/testCases/xml_virtual/response` ディレクトリーに入っています。

関連概念:

Oracle RAC へのインストール

仮想 MDM を使用して Oracle Real Application Clusters (RAC) 上にインストールする場合は、この手順を使用します。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM WebSphere Application Server およびデータベースのインストールおよび準備を含む、すべてのインストール準備タスクを完了したこと。
- IBM Installation Manager のインストールと、必要なリポジトリの追加を完了したこと。
- IBM WebSphere Application Server (デプロイメント・マネージャーとノード) およびデータベースが開始されていること。

手順

1. IBM Installation Manager を起動して、「インストール」をクリックします。
 - a. 「パッケージのインストール」パネルで、エディションを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. プロンプトに従って続行し、ご使用条件への同意、インストール・ローゼーションの選択、および言語の選択を行います。
 - c. 「MDM データベース」フィーチャーと「MDM 運用サーバー (MDM Operational Server)」フィーチャーを選択し、「次へ」をクリックします。
 - d. 構成パネルに入力し、「次へ」をクリックします。
 - e. 「インストール (Install)」をクリックします。インストール・アプリケーションは、SID を使用して ODBC データ・ソースを作成し、**madconfig bootstrap_datasource** ターゲットを実行して仮想 MDM 表をすべて作成します。

ヒント: このタスクの親トピックで、先行するサブステップの実行の詳細について参照してください。

2. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開いて、「資源」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。
 - a. 「データ・ソース」ページで、MDM データ・ソースの名前をクリックします。
 - b. 次の「データ・ソース」ページで、「カスタム・プロパティ」をクリックします。
 - c. SID を選択して「削除」をクリックし、SID を削除します。
 - d. 「新規」をクリックし、serviceName の新規カスタム・プロパティ「名前」と、「値」を追加します。
 - e. 「OK」をクリックします。
3. 以下のコマンドを native.war/scripts ディレクトリーから実行します。InfoSphere MDM のクラスター・デプロイメントの場合は、クラスター内の各マシンでこれらのコマンドを実行する必要があります。
 - `madconfig remove_datasource -Dmad.db.dsn=DB_NAME_MDM_INSTANCE_ID`

- `madconfig create_datasource -Dmad.db.type=oracle -Dmad.db.host=DB_HOST -Dmad.db.port=DB_PORT -Dmad.db.service=SERVICE_NAME -Dmad.db.dsn=DB_NAME_MDM_INSTANCE_ID`

このコマンドを実行すると、SID の入力を求めるプロンプトが出されます。このプロンプトは空白のままにして、Enter キーを押してください。

次のタスク

必ず、インストール・ログを確認して、このプロセスが正常に完了したことを確認してください。

ログの確認後、仮想データが正常にロードされなかったことが判明した場合は、**madconfig** ユーティリティーを使用して、データを再ロードするかブートストラップを実行することができます。

Oracle 非ワイヤード・ドライバーのサポートの有効化

仮想 MDM を使用していて、非ワイヤードの Oracle データベース・ドライバーを使用する予定の場合は、InfoSphere MDM データベースとフィーチャーをインストールした後に、以下の手順を実行してください。

始める前に

159 ページの『リモート Windows サーバーへの MDM ネイティブ・コンポーネント・フィーチャーのデプロイ』の手順を完了します。

手順

1. ネイティブ Oracle クライアントとドライバーをインストールし、ネイティブ EAR ファイルをデプロイしたマシン上で、以下の手順を実行します。

- オペレーティング・システムの環境変数を以下のように構成します。

```
ORACLE_HOME=PATH_TO_ORACLE_HOME
```

- オペレーティング・システムの環境変数を以下のように構成します。

- Microsoft Windows の場合: `LIB=PATH_TO_ORACLE_HOME/lib`

- IBM AIX の場合: `LIBPATH=PATH_TO_ORACLE_HOME/lib`

- その他のオペレーティング・システムの場合:

```
LD_LIBRARY_PATH=PATH_TO_ORACLE_HOME/lib
```

2. `native.war/scripts` ディレクトリーに移動して、以下のコマンドを実行します。

- `madconfig remove_datasource -Dmad.db.dsn=DB_NAME_MDM_INSTANCE_ID`

- `madconfig create_datasource -Dmad.db.type=oracle -Dmad.db.dsn=DB_NAME_MDM_INSTANCE_ID -Dmad.db.server=TNS_NAME`

create_datasource コマンドを実行すると、データベース・ホストを入力するよう求めるプロンプトが出されます。このプロンプトは空白のままにして、Enter キーを押すことができます。

3. クラスタ環境の場合は、各クラスタ・メンバー上でこの手順を繰り返します。

関連資料:

リモート Windows サーバーへの MDM ネイティブ・コンポーネント・フィーチャーのデプロイ

Master Data Management ネイティブ・コンポーネント・フィーチャーは、仮想 MDM 構成が正常な作動するために必要とされる ODBC データ・ソースです。Microsoft Windows オペレーティング・システムにおいて WebSphere Application Server クラスタに MDM 運用サーバー をインストールし、仮想 MDM 構成を実装する計画の場合、運用サーバーのインストール後に幾つかのステップを実行する必要があります。

このタスクについて

インストーラーによって `madconfig create_datasource target` が自動的に実行され、Ant エージェントを使用してリモート・サーバー上に ODBC データ・ソースが作成されます。ただし、Ant エージェントには Windows レジストリーを変更する許可がありません。

マシン A で IBM Installation Manager および WebSphere Application Server Deployment Manager を実行し、他のマシン (B、C、D など) にある管理対象ノードに運用サーバーと仮想構成をデプロイする必要がある場合には、この手順を使用します。この手順によって、IBM Installation Manager を初めて実行して運用サーバーをインストールした後に、それぞれのリモート Windows サーバー上に ODBC データ・ソースが手動で作成されます。

手順

1. マシン A で IBM Installation Manager を実行し、MDM 運用サーバーをインストールします。
2. マシン B で、`WAS_PROFILE_HOME¥installedApps¥YOUR_CELL_NAME¥MDM-native-IDENTIFIER.ear¥native.war¥scripts` ディレクトリーに移動します。
3. コマンド行プロンプトを開きます。
4. コマンド「`madconfig.bat register_odbc`」を入力します。
5. 次のコマンドを入力します。`madconfig.bat create_datasource -Dmad.db.type=DBTYPE -Dmad.db.name=DBNAME -Dmad.db.port=DBPORT -Dmad.db.host=DBHOST -Dmad.db.dsn=DSN`

ここで、

- **DBTYPE:** ご使用のデータベース・タイプです。マシン B で、DB2、ORACLE、MSSQLU のいずれかを指定します。
- **DBHOST:** マシン B におけるデータベース・ホスト名または IP アドレスです。
- **DBPORT:** マシン B におけるデータベース・ポートです。
- **DBNAME:** マシン B におけるデータベース名で、`mdmins11` などです。
- **DSN:** データ・ソース名です。DSN 命名規則は `DB_NAME_MDM_INSTANCE_IDENTIFIER` です。`MDM_INSTANCE_IDENTIFIER` は、マシン A のインストール時に「アプリケ

ーションの構成」パネルに入力した「**MDM アプリケーション名 (MDM application name)**」値と一致しなければなりません。

6. クラスタ内にある追加のマシン (例えば、C と D) ごとに、ステップ 2 - 5 を繰り返します。

サイレント・インストール

IBM Installation Manager は、対話式インストール・プログラムを実行している場合に、プロパティ・ファイルを生成できます。サイレント・インストールを実行するために、このファイルを編集することも、またはユーザー独自のファイルを作成することもできます。

サンプルのサイレント・モード応答ファイルが `STARTUP_INSTALL_HOME/StartupKit` ディレクトリーに用意されています。

ヒント: ダウンロードしたパッケージ・ファイル `disk1.zip` から、`Installation Startup Kit` を抽出できます。

オペレーティング・システム固有のファイルをサポートされているシステムで利用できます。

IBM WebSphere Application Server では、以下のサンプルのサイレント・モード応答ファイルを使用できます。

- `standalone_install_server.res` - MDM 運用サーバー、MDM データベース、IBM DB2 データベース・サーバー、および WebSphere Application Server Network Deployment をインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
- `standalone_install_workstation.res` - MDM 運用サーバー、MDM データベース、IBM DB2 データベース・サーバー、WebSphere Application Server、IBM Rational Application Developer (RAD)、および InfoSphere MDM Workbenchをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
- `install_single_servers_aix.res` - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
 - プラットフォーム: AIX
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere Application Server のデフォルトのメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (単一サーバー):
mdm-s1-E001
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー):
mdm-s2-E001
 - 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - Inspector デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
 - Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
 - Web Reports デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**

- `install_cluster_aix_mq.res` - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
 - プラットフォーム: AIX
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere MQ のメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL01**
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Inspector デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Web Reports デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
- `install_single_servers_linux.res` - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
 - プラットフォーム: Linux
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere Application Server のデフォルトのメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s1-E001**
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - Inspector デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
 - Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
 - Web Reports デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
- `install_cluster_linux_mq.res` - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの MDM 運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
 - プラットフォーム: Linux
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere MQ のメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL01**
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Inspector デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Web Reports デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**

- `install_single_servers_win.res` - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの MDM 運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。応答ファイルに検証エラーがある場合、Windows のサイレント・インストールでは、理由の標識を表示せずにシャットダウンする可能性があります。インストールがシャットダウンした場合は、ログ・ファイルを確認して理由を探します。
 - プラットフォーム: Microsoft Windows 7
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere Application Server のデフォルトのメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s1-E001**
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - Inspector デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
 - Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
 - Web Reports デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
- `install_cluster_win_mq.res` - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの MDM 運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
 - プラットフォーム: Microsoft Windows 7
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere MQ のメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL01**
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Inspector デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Web Reports デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
- `install_single_servers_solaris.res` - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの MDM 運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
 - プラットフォーム: Solaris
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere Application Server のデフォルトのメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s1-E001**
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**

- 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s2-E001**
- Inspector デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
- Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
- Web Reports デプロイメント・ターゲット (単一サーバー): **mdm-s3-E001**
- **install_cluster_solaris_mq.res** - 次のパラメーターを使用するカスタム・インストール・デプロイメント・タイプの MDM 運用サーバーをインストールする場合は、この応答ファイルを使用します。
 - プラットフォーム: Solaris
 - メッセージング・プロバイダー: WebSphere MQ のメッセージング・プロバイダー
 - MDM 運用サーバーのデプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL01**
 - ビジネス管理 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Data Stewardship UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - 品目保守 UI デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Inspector デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Enterprise Viewer デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**
 - Web Reports デプロイメント・ターゲット (クラスター): **mdm-CL02**

関連概念:

28 ページの『グラフィカル・インストールまたはサイレント・インストール』

関連タスク:

197 ページの『InfoSphere MDM インストール・ログの表示』

インストールのトラブルシューティング

225 ページの『サイレント・モードでのアンインストール』

関連資料:

11 ページの『カスタム・インストールのための Installation Startup Kit』

サイレント・モードの応答ファイルのカスタマイズ

サイレント・モードのインストール応答ファイルをカスタマイズするには、この手順を使用します。

このタスクについて

重要: 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、`<.../>` の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

サイレント・モードでの作業と、応答ファイルの使用について詳しくは、IBM Installation Manager のオンライン資料を参照してください。

手順

1. 応答ファイルを開きます。
2. 応答ファイルに次の行が含まれている場合は、削除するかコメント化してください。

```
<data key='user.L2.db.driver.path,com.ibm.mdm.rdm' value='${DB2_JDBC_DRIVER_PATH}/java'/>
```

重要: この行が応答ファイルに残っていると、その応答ファイルを使用したサイレント・インストールは失敗します。

3. ホーム・ディレクトリーと共有リソース・ディレクトリーを指定します。
 - a. MDM_INSTALL_HOME ディレクトリーを指定するには、以下の行を応答ファイルに追加します。

```
<profile id='IBM InfoSphere Master Data Management'  
  installLocation='/usr/IBM/MDM/H087/mdm' />  
<data key='eclipseLocation' value='/usr/IBM/MDM/H087/mdm' />
```

ここで、`usr/IBM/MDM/H087/mdm` はインストール・ホーム・ディレクトリーです。

- b. Installation Manager の共有リソース・ディレクトリーを指定するには、以下のようになります。

```
<preference name='com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache'  
  value='/usr/IBM/MDM/H087/Shared' />
```

ここで、`usr/IBM/MDM/H087/Shared` は Installation Manager の共有リソース・ディレクトリーです。

4. 以下の行を追加して、InfoSphere MDM オファリングのバージョンとインストールするフィーチャーを指定します。

```
<offering id='com.ibm.mdm.advanced' version='<offering_version>'  
  profile='IBM InfoSphere Master Data  
  Management'  
  features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.feature,  
  com.ibm.im.mdm.app.feature' installFixes='none' />
```

ここで、`<offering_version>` は InfoSphere MDM のバージョン番号です。

バージョン番号を確認するには、インストール・メディア・フォルダー (`download_path/MDM/disk1/`) 内で `diskTag.inf` ファイルを見つけます。`disk1/diskTag.inf` を開いて、`diskSetOfferingVersion` の値をコピーし、`<offering_version>` プレースホルダーの代わりとして使用します。

5. 以下の行を追加して、1 回の IBM Installation Manager セッションでインストールするフィーチャーを指定します。

```
<offering id='com.ibm.mdm.advanced' version='<offering_version>'  
  profile='IBM InfoSphere Master Data  
  Management'  
  features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.  
  feature, com.ibm.im.mdm.app.feature' installFixes='none'>
```

ここで、

```
features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.feature,com.ibm.im.mdm.app.  
feature'
```

は、インストールする特定のフィーチャーです。ガイダンスとして、166 ページの『サイレント・インストールでのフィーチャーの指定例』を参照してください。

`com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature` は、フィーチャー・リストに必ず含めてください。このフィーチャーは、インストーラーのロギング・システムに対して複数言語サポートを提供する内部フィーチャーです。

6. データベース・パラメーターを指定します。ご使用のデータベースに該当するデータベース・パラメーターのトピックをガイダンスとして利用してください。これらのトピックは、関連参照リンクにリストされています。

応答ファイルで、以下のパラメーターは変更しないでください。

```
<data key='user.L2.db.vertype,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2UDBNT_V82_1'/>
<data key='user.L2.mdm.mad.type.db2,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2'/>
<data key='user.L2.mdm.mad.type.db2z,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2Z'/>
>
<data key='user.L2.mdm.mad.type.oracle,com.ibm.mdm.advanced' value='ORACLE'/>
```

7. WebSphere Application Server のパラメーターを指定します。この手順の末尾にリストされているアプリケーション・サーバー・パラメーターのトピックをガイドランスとして利用してください。
8. メッセージ・サーバーのパラメーターを指定します。

- a. メッセージ・サーバーのタイプを指定します。

- WebSphere Application Server デフォルト・メッセージングを指定してインストールする場合、以下のように指定します。

```
<data key='user.L2.messaging.type,com.ibm.mdm.advanced' value='WEM'/>
```

- IBM WebSphere Message Queue を指定してインストールする場合、以下のように指定します。

```
<data key='user.L2.messaging.type,com.ibm.mdm.advanced' value='WMQ'/>
```

- b. WebSphere MQ のあるマシンと Installation Manager が InfoSphere MDM のサイレント・インストールを実行しているマシンとが同じである場合、またはインストール・アプリケーションによってメッセージ・キューとトピックが作成されるようにする場合には、次のようにします。

```
<data key='user.config.messaging.server,com.ibm.mdm.advanced' value='true'/>
```

- c. WebSphere MQ がリモート・マシン上にある場合、またはインストール・アプリケーションによるメッセージ・キューやトピックの作成を無効にする場合には、次のようにします。

```
<data key='user.config.messaging.server,com.ibm.mdm.advanced' value='false'/>
```

ヒント: メッセージ・キューの作成が無効になっている (value='false') サイレント・インストールを実行する前に、メッセージ・キューおよびトピックが事前に作成済みであることを確認してください。これらのキューとトピックは、custSetupMQServer.mqsc スクリプトを実行して手動で作成できます。

9. この InfoSphere MDM のインストール環境で使用される検索とマッチングのエンジンを指定します。

- Probabilistic Matching Engine の場合:

```
<data key="user.L2.engine.type,com.ibm.mdm.advanced" value="PME"/>
```

- Deterministic Matching Engine (MDM Classic Matching Engine) の場合:

```
<data key="user.L2.engine.type,com.ibm.mdm.advanced" value="DME"/>
```

次のタスク

インストーラーのフラッシュ画面を無効にして、サイレント・インストールを実行する手順に進みます。

関連タスク:

225 ページの『サイレント・モードでのアンインストール』

171 ページの『応答ファイルを使用したサイレント・インストール』

サイレント・インストールでのフィーチャーの指定例:

応答ファイルを編集し、サイレント・インストール時にインストールするフィーチャーを正確に指定する必要があります。

重要: 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、`<.../>` の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

応答ファイルの `<offering id=.../>` セクションにある以下の行でフィーチャーを指定します。

```
features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.feature,com.ibm.im.mdm.app.feature'
```

以下に例を示します。

```
<offering id='com.ibm.mdm.advanced' version='version.timestamp' profile='IBM InfoSphere Master Data Management' features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.feature,com.ibm.im.mdm.app.feature' installFixes='none'>
```

例 1: MDM データベースと InfoSphere MDM 運用サーバーのインストール

データベースと運用サーバーのみをインストールするには、以下の行を追加します。

```
features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.feature,com.ibm.im.mdm.app.feature'
```

例 2: MDM データベース、InfoSphere MDM 運用サーバー、ユーザー・アプリケーションのインストール

データベース、運用サーバー、およびすべてのユーザー・アプリケーションとフィーチャーをインストールするには、以下の行を含めます。

```
features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.feature,com.ibm.im.mdm.app.feature,com.ibm.mdm.ba.webapp.feature,com.ibm.mdm.ds.webapp.feature,com.ibm.mdm.pui.webapp.feature,com.ibm.mdm.inspector.webapp.feature,com.ibm.mdm.ev.webapp.feature,com.ibm.mdm.wb.webapp.feature,com.ibm.mdm.pd.webapp.feature,com.ibm.im.mdm.message.broker.feature,com.ibm.im.mdm.ei.feature,com.ibm.im.mdm.eutc,com.ibm.mdm.ba.webapp.sample.feature'
```

サイレント・インストールで使用する DB2 のデータベース・パラメーター:

サイレント・インストールの応答ファイルで、IBMDB2 データベースのパラメーターを指定する必要があります。

DB2 データベースを使用する場合は、応答ファイルに以下の行を入力します。`value=` を、データベースで使用する特定の値に変更してください。

重要: 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、`<.../>` の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

データベース・タイプ

```
<data key='user.db.type,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2' />
<data key='user.db.type.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2' />
```

DB2 クライアントのデータベース・カタログ内のデータベース別名

```
<data key='user.db.name,com.ibm.mdm.advanced' value='MDM11E' />
<data key='user.db.name.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='MDM11E' />
```


データベース名

```
<data key='user.db.name.remote,com.ibm.mdm.advanced' value='YOURDBASENAME' />
<data key='user.db.name.remote.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='YOURDBASENAME' />
```

データベース・スキーマ名

```
<data key='user.db.schema,com.ibm.mdm.advanced' value='SCHEMANAME' />
<data key='user.db.schema.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='SCHEMANAME' />
```

データベース・サーバーのホスト名

```
<data key='user.db.host,com.ibm.mdm.advanced' value='your.host.com' />
<data key='user.db.host.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='your.host.com' />
```

データベース・サーバーのポート番号

```
<data key='user.db.port,com.ibm.mdm.advanced' value='50000' />
<data key='user.db.port.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='50000' />
```

データベース・ユーザー名 (スキーマ名と同じにしてください)

```
<data key='user.db.user,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.db.user.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
```

データベース・パスワード

```
<data key='user.db.password,com.ibm.mdm.advanced' value='' />
<data key='user.db.password.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='' />
```

DB2 クライアントのホーム・ディレクトリー

```
<data key='user.db2.home,com.ibm.mdm.advanced' value='/home/ws8admin' />
<data key='user.db2.home.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='/home/ws8admin' />
```

データベース JDBC の URL

```
<data key='user.user.db.url,com.ibm.mdm.advanced' value='jdbc:db2://HOSTNAME:PORT/
DBASENAME' />
<data key='user.user.db.url.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='jdbc:db2://HOSTNAME:PORT/
DBASENAME' />
```

応答ファイルで、以下のパラメーターは変更しないでください。

```
<data key='user.L2.db.verttype,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2UDBNT_V82_1' />
<data key='user.L2.mdm.mad.type.db2,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2' />
<data key='user.L2.mdm.mad.type.db2z,com.ibm.mdm.advanced' value='DB2Z' />
>
```

サイレント・インストールで使用する Microsoft SQL Server のデータベース・パラメーター:

サイレント・インストールの応答ファイルで、Microsoft SQL Server データベースのパラメーターを指定する必要があります。

SQL Server データベースを使用する場合は、応答ファイルに以下の行を入力します。value= を、データベースで使用する特定の値に変更してください。

重要: 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、<.../> の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

データベース・タイプ

```
<data key='user.db.type,com.ibm.mdm.advanced' value='MSSQLU' />
<data key='user.db.type.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='MSSQLU' />
```

データベース名

```
<data key='user.db.name,com.ibm.mdm.advanced' value='YOURDBASENAME' />
<data key='user.db.name.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='YOURDBASENAME' />
<data key='user.db.name.remote,com.ibm.mdm.advanced' value='YOURDBASENAME' />
<data key='user.db.name.remote.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='YOURDBASENAME' />
```

データベース・ユーザー名 (スキーマ名と同じにしてください)

```
<data key='user.db.user,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.db.user.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
```

データベース・パスワード

```
<data key='user.db.password,com.ibm.mdm.advanced' value='' />
<data key='user.db.password.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='' />
```

データベース JDBC の URL

```
<data key='user.user.db.url,com.ibm.mdm.advanced'
value='jdbc:ibm:sqlserver://HOSTNAME:PORT/
DBASENAME' />
<data key='user.user.db.url.cm,com.ibm.mdm.advanced'
value='jdbc:ibm:sqlserver://HOSTNAME:PORT/
DBASENAME' />
```

データベース・ホスト名

```
<data key='user.db.host,com.ibm.mdm.advanced' value='DBHOSTNAME' />
<data key='user.db.host.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='DBHOSTNAME' />
```

データベース・ポート

```
<data key='user.db.port,com.ibm.mdm.advanced' value='1433' />
<data key='user.db.port.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='1433' />
```

データベース・スキーマ名

```
<data key='user.db.schema,com.ibm.mdm.advanced' value='SCHEMANAME' />
<data key='user.db.schema.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='SCHEMANAME' />
```

データベースのホーム・ディレクトリー

```
<data key='user.L2.db.home,com.ibm.mdm.advanced' value='DBHOMEDIR' />
```

追加パラメーター

```
<data key='user.db.servername,com.ibm.mdm.advanced' value='SERVERNAME' />
<data key='user.db.filegroup,com.ibm.mdm.advanced' value='FILEGROUPNAME_FG' />
<data key='user.db.auth.native,com.ibm.mdm.advanced' value='false' />
```

Windows ネイティブ認証を使用する場合は、`user.db.auth.native` を `true` に設定してください。

サイレント・インストールで使用する Oracle のデータベース・パラメーター:

サイレント・インストールの応答ファイルで、Oracle データベースのパラメーターを指定する必要があります。

Oracle データベースを使用する場合は、応答ファイルに以下の行を入力します。`value=` を、データベースで使用する特定の値に変更してください。

重要: 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、`<.../>` の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

データベース・タイプ

```
<data key='user.db.type.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='ORACLE' />
<data key='user.db.type,com.ibm.mdm.advanced' value='ORACLE' />
```

Oracle クライアント TNS 名

```
<data key='user.db.name.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='TNSNAME' />
<data key='user.db.name,com.ibm.mdm.advanced' value='TNSNAME' />
```

Oracle サーバーのデータベース名

```
<data key='user.db.name.remote,com.ibm.mdm.advanced' value='DBASENAME' />
<data key='user.db.name.remote.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='DBASENAME' />
```

データベース・ユーザー名 (スキーマ名と同じにしてください)

```
<data key='user.db.user.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.db.user,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
```

データベース・ユーザー・パスワード

```
<data key='user.db.password.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='DBPASSWORD' />
<data key='user.db.password,com.ibm.mdm.advanced' value='DBPASSWORD' />
```

データベース JDBC の URL

```
<data key='user.user.db.url,com.ibm.mdm.advanced'
value='jdbc:oracle:thin:@HOSTNAME:PORT/DBASENAME' />
<data key='user.user.db.url.cm,com.ibm.mdm.advanced'
value='jdbc:oracle:thin:@HOSTNAME:PORT/DBASENAME' />
```

データベース・サーバーのホスト名

```
<data key='user.db.host,com.ibm.mdm.advanced' value='DBHOSTNAME' />
<data key='user.db.host.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='DBHOSTNAME' />
```

データベース・サーバー・ポート

```
<data key='user.db.port,com.ibm.mdm.advanced' value='1521' />
<data key='user.db.port.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='1521' />
```

データベース・スキーマ名

```
<data key='user.db.schema,com.ibm.mdm.advanced' value='SCHEMANAME' />
<data key='user.db.schema.cm,com.ibm.mdm.advanced' value='SCHEMANAME' />
```

Oracle クライアントのホーム・ディレクトリー

```
<data key='user.L2.db.home,com.ibm.mdm.advanced' value='ORACLEHOMEPATH' />
```

応答ファイルで、以下のパラメーターは変更しないでください。

```
<data key='user.L2.mdm.mad.type.oracle,com.ibm.mdm.advanced' value='ORACLE' />
```

サイレント・インストールで使用する WebSphere Application Server のパラメーター:

サイレント・インストールの応答ファイルで、WebSphere Application Server のパラメーターを指定する必要があります。

応答ファイルで、以下の行を入力します。value= に続くプレースホルダーを、アプリケーション・サーバー・インスタンスで使用する特定の値に変更してください。

重要: 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、<.../> の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

WebSphere Application Server のインストール・ホーム・ディレクトリー

```
<data key='user.L1.was.home,com.ibm.mdm.advanced' value='/WAS_INSTALL_HOME' />
```

WebSphere Application Server のタイプ (Network Deployment または Base)

```
<data key='user.was.type,com.ibm.mdm.advanced' value='ND' />
```

プロファイル・ホーム (INSTALL モードで MDM データベースのみをインストールする場合は必須)

```
<data key='user.was.profile.home,com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
```

WebSphere Application Server Network Deployment Manager または WebSphere Application Server Base の server1 の SOAP ポート

```
<data key='user.deploy.port,com.ibm.mdm.advanced' value='8880' />
```

WebSphere Application Server Deployment Manager または WebSphere Application Server Base の server1 のホスト名

```
<data key='user.deploy.host,com.ibm.mdm.advanced' value='HOSTNAME' />
```

WebSphere Application Server のデプロイメント・ターゲット (単一サーバー)

```
<data key='user.was.cell,com.ibm.mdm.advanced' value='CELLNAME' />
<data key='user.was.node,com.ibm.mdm.advanced' value='NODENAME' />
<data key='user.was.server,com.ibm.mdm.advanced' value='SERVERNAME' />
<data key='user.was.cluster,com.ibm.mdm.advanced' value='None' />
<data key='user.was.cluster.flag,com.ibm.mdm.advanced' value='false' />
```

WebSphere Application Server のデプロイメント・ターゲット (クラスター)

```
<data key='user.was.cell,com.ibm.mdm.advanced' value='CELLNAME' />
<data key='user.was.node,com.ibm.mdm.advanced' value='None' />
<data key='user.was.server,com.ibm.mdm.advanced' value='None' />
<data key='user.was.cluster,com.ibm.mdm.advanced' value='CLUSTERNAME' />
<data key='user.was.cluster.flag,com.ibm.mdm.advanced' value='true' />
```

WebSphere Application Server セキュリティー・パラメーター - WebSphere 管理 セキュリティー・ユーザー

```
<data key='user.was.user,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.was.password,com.ibm.mdm.advanced' value='' />

<data key='user.security.user.name,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.security.user.password,com.ibm.mdm.advanced' value='' />

<data key='user.was.user.ba,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.was.password.ba,com.ibm.mdm.advanced' value='' />

<data key='user.was.user.ds,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.was.password.ds,com.ibm.mdm.advanced' value='' />

<data key='user.was.user.pui,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.was.password.pui,com.ibm.mdm.advanced' value='' />

<data key='user.was.user.inspector,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.was.password.inspector,com.ibm.mdm.advanced' value='' />

<data key='user.was.user.ev,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.was.password.ev,com.ibm.mdm.advanced' value='' />

<data key='user.was.user.wb,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.was.password.wb,com.ibm.mdm.advanced' value='' />
```

重要: 以下のセキュリティ・パラメーターは変更できません。

```
<data key='user.was.security,com.ibm.mdm.advanced' value='1' />
<data key='user.was.security.on.off,com.ibm.mdm.advanced' value='on' />
```

WebSphere Application Server セキュリティー・パラメーター - OSGI と Web サービスを保護するための WebSphere アプリケーション・セキュリティのロール・マッピング・ユーザー

```
<data key='user.L2.was.admin.user,com.ibm.mdm.advanced' value='USERNAME' />
<data key='user.L2.was.admin.password,com.ibm.mdm.advanced' value='' />
```

サイレント・インストール時のインストーラーのsplash画面の無効化

サイレント・インストールで IBM Installation Manager のsplash画面を無効にするには、この手順を使用します。サイレント・インストールを正常に実行するには、このタスクを実行する必要があります。

このタスクについて

以下の手順を実行して、**-nosplash** パラメーターを IBMIM.ini ファイル内に追加します。

手順

1. `INSTALLATIONMANAGER_INSTALL_HOME/eclipse` ディレクトリーに移動します。
2. `IBMIM.ini` ファイルを開きます。
3. `-nosplash` パラメーターを追加します。以下に例を示します。

- Microsoft Windows:

```
-toolId ibmim
-accessRights nonAdmin
-vm
/home/ws7admin/IBM/InstallationManager/eclipse/jre_5.0.1.sr8a_20080811c/jre/bin/java
-nosplash
-vmargs
-Xms40m
-Xmx512m
-Xquickstart
-Xgcpolicy:gencon
```

- Linux および UNIX:

```
vi IBMIM.ini
/opt/IBM/InstallationManager/eclipse/jre_6.0.0.sr9_20110208_03/jre/bin/java
-nosplash
-vmargs
-Xquickstart
-Xgcpolicy:gencon
```

4. ファイルを保存して閉じます。

応答ファイルを使用したサイレント・インストール

InfoSphere MDM はサイレント・インストールすることができます。この場合、インストールの選択項目は、IBM Installation Manager の対話式パネルではなくオプション・ファイルで指定します。このタイプのインストールは、同一のインストールを複数回行う場合に便利です。

始める前に

170 ページの『サイレント・インストール時のインストーラーのスプラッシュ画面の無効化』の手順が完了していることを確認してください。

このタスクについて

プロパティー・ファイルは、対話式インストール・プログラムの実行時に生成されます。サイレント・インストールを使用するには、プロパティー・ファイルを編集するか、サンプル応答ファイルのいずれかを編集して独自のファイルを作成する必要があります。

手順

1. サンプル応答ファイルを使用するには、`STARTUPKIT_INSTALL_HOME` に移動します。

ヒント: ダウンロードしたパッケージ・ファイル `disk1.zip` から、Installation Startup Kit を抽出できます。

応答ファイルには `.res` 拡張子が付いています。ご使用のオペレーティング・システムに適用できるファイルを使用してください。

2. インストールを開始する前に、応答ファイルを編集して必要な変更を行います。
3. 該当のコマンドを使用して、インストールを開始します。

- 以下のコマンドを使用して、IBM Installation Manager を実行し、対応する応答ファイルを生成します。

```
IBMIM -record recordedFile
```

- 以下のコマンドを使用して、IBM Installation Manager をサイレント・モードで実行します。

```
IBMIM -acceptLicense -silent -input inputFile
```

4. サイレント・インストール中にリカバリー不能な問題が発生した場合は、`MDM_INSTALL_HOME/logs/logs` ディレクトリーにあるログ・ファイルで問題の原因を見つけます。問題を修正した後、サイレント・インストールをもう一度実行します。

関連タスク:

163 ページの『サイレント・モードの応答ファイルのカスタマイズ』

インストールのトラブルシューティング

225 ページの『サイレント・モードでのアンインストール』

関連資料:

11 ページの『カスタム・インストールのための Installation Startup Kit』

グラフィカル・インストールの実行中の応答ファイルの作成

以下の手順を使用して、IBM Installation Manager をグラフィカル・モードで実行している場合に、応答をキャプチャーして応答ファイルを作成します。

始める前に

ファイルでは、パスワードの値が暗号化されます。システムでパスワードの値を変更する場合は、サイレント・インストールに使用する前に正しいパスワードの値を応答ファイルに入力してください。パスワードとして新しい暗号化されていない値を入力できます。インストール中にファイルが使用される場合に、システムによってその値が暗号化されます。

手順

1. 以下のコマンドを使用してインストールを開始することにより、応答ファイルを作成します。

```
../IBMIM -record $YOUR_PATH/mysilent.res
```

2. インストールが完了し、応答ファイルが作成されたら、そのファイルを開きます。
3. 応答ファイルに次の行が含まれている場合は、削除するかコメント化してください。

```
<data key='user.L2.db.driver.path,com.ibm.mdm.rdm' value='${DB2_JDBC_DRIVER_PATH}/java'/>
```

重要: この行が応答ファイルに残っていると、その応答ファイルを使用したサイレント・インストールは失敗します。

サイレント・インストールの変更

既存のサイレント・インストールに変更を加えるには、この手順を使用します。

このタスクについて

サイレント・インストールを使用して既存のインストール済み環境に変更を加えるには、インストール応答ファイルを編集する必要があります。

重要: 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、`<.../>` の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

手順

インストール済み環境に変更を加えるには、`modify` パラメーターを `true` に設定し、追加するフィーチャーをリストします。以下に例を示します。

```
<install modify='true'>
<offering id='com.ibm.mdm.advanced' version='11.0.0.v20130412-1501'
profile='IBM InfoSphere Master Data Management'
features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.im.mdm.db.feature,
com.ibm.im.mdm.app.feature,com.ibm.mdm.ba.webapp.feature,com.ibm.mdm.ds.webapp.feature,
com.ibm.mdm.pui.webapp.feature,com.ibm.mdm.pd.webapp.feature,
com.ibm.mdm.wb.webapp.feature,com.ibm.mdm.ev.webapp.feature,
com.ibm.mdm.inspector.webapp.feature,com.ibm.mdm.ba.webapp.sample.feature'
installFixes='none' />
</install>
```

madconfig ユーティリティーを使用した手動インストール

madconfig ユーティリティーを使用して、MDM 運用サーバー・コンポーネントとデータベース・コンポーネントを手動でインストールできます。IBM Installation Manager は、インストール時にこのユーティリティー・ターゲットを使用します。

どの **madconfig** ターゲットを実行する場合でも、`MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts` ディレクトリーからコマンド行プロンプトを開く必要があります。

次の表にリストしたターゲットは、基本的なユーティリティー・ターゲットです。他にも InfoSphere MDM 固有の **madconfig** ユーティリティー・ターゲットがあり、それらは別のトピックに記載されています。

表 24. 基本的な **madconfig** ユーティリティー・ターゲット

コマンド	説明
<code>-projecthelp</code>	このユーティリティーのすべての有効なオプションと使用法の情報をリストします。
<code>-propertyfile</code>	プロパティーを記録済みファイルからロードします。
<code>-recordfile</code>	応答プロパティーをファイルに記録します。

コマンドを実行すると、さらに情報を入力するようプロンプトが出されます。例えば、MDM 運用サーバーがインストールされているサーバーを構成する場合は、特定の構成パラメーターを入力するようプロンプトが出されます。次の例は、`madconfig install_server_config` ターゲットの部分出力を示しています (`user input` は応答を入力するブランク行)。

```
C:/MDM/mds/scripts:madconfig install_server_config
```

```
Buildfile: build.xml
```

```
install_server_config:
```

```
#
```



```
# Enter WAS home:
#
WAS_INSTALL_HOME/IBM/WebSphere/AppServer

#
# Enter WAS host:
#
localhost

#
# Enter WAS port:
#
8879
```

このユーティリティーはさらに、他の WebSphere Application Server パラメーター、データベース・パラメーター (アプリケーション・サーバーでの JDBC プロバイダーおよびデータ・ソース)、アプリケーション名、使用するメッセージング・タイプ (接続ファクトリー、キュー、およびトピック)、JVM ヒープ・サイズに関するプロンプトを出します。

ターゲットを実行するための代替方法は、`-propertyfile` オプションを使用することです。次の例は、`-propertyfile` を使用して `install_mdm_eba` ターゲットを実行する方法を示しています。このターゲットは、MDM エンタープライズ・バンドル・アーカイブ (.eba) ファイルをアプリケーション・サーバーにインストールします。デプロイメントに必要なプロパティとしては、サーバーの詳細、`ebaID`、`ebaName`、`blaName` (ビジネス・レベル・アプリケーション名)、および `blaDes` (ビジネス・レベル・アプリケーション記述) があります。

```
C:/MDM/mds/scripts:madconfig -propertyfile install_mdm_eba.properties install_mdm_eba
```

ターゲットが必要とするプロパティは、プロパティ・ファイルから読み取られます。このオプションを使用するときは、ターゲットが予期するおりのプロパティ名を使用して値を指定します。ターゲットを実行できるのはプロパティ名が既知の場合に限られるからです。

InfoSphere MDM のための madconfig ユーティリティー・ターゲット

madconfig ユーティリティーを使用して、物理実装および仮想実装のための MDM 運用サーバー・コンポーネントとデータベース・コンポーネントを手動でインストールします。IBM Installation Manager は、InfoSphere MDM のインストール時にこれらのユーティリティー・ターゲットを使用します。

このユーティリティーの実行は、運用サーバー・インストール済み環境の `MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts` ディレクトリーから行います。

以下の各表は、InfoSphere MDM のための **madconfig** ターゲットとその使用法をリストしたものです。

運用サーバーのインストール

次の表は、運用サーバーのインストールに関連するターゲットをリストしたものです。どのターゲットも、サーバーおよびデータベースに関連したパラメーターの値を要求します。サーバーに関するターゲットは、InfoSphere MDM がインストールされているサーバーを構成するために使用します。

表 25. 運用サーバー・インストールのための **madconfig** ユーティリティ・ターゲット

コマンド	説明
-install_native_engine_ear	仮想 MDM 実装のためのネイティブ運用サーバー (エンジン) をインストールします。
-install_server_config	JDBC、クラスパス、環境変数など、物理コンポーネントおよび仮想コンポーネントをアプリケーション・サーバーに構成します。
-stop_server	WebSphere Application Server Network Deployment 内の運用サーバーを停止します。運用サーバー構成をインストールした後、サーバーを停止して始動する必要があります。サーバーが非管理対象サーバー (Base サーバー) である場合は、オプション <code>-stop_base_server</code> を使用する必要があります。
-start_server	管理対象アプリケーション・サーバー・デプロイメント内の運用サーバーを始動します。アプリケーション・サーバーが非管理対象サーバーである場合は、オプション <code>-start_base_server</code> を使用してください。
-install_mdm_old_ws_ear	アプリケーション・サーバーに物理 MDM Web サービス JAR をインストールします。
-install_mdm_eba	InfoSphere MDM OSGi をインストールします。
-install_prop_file_jar	InfoSphere MDM アプリケーションが必要とするプロパティ・ファイル JAR をインストールします。
-install_mdm_ws_ear	InfoSphere MDM Web サービスのエンタープライズ・アーカイブをインストールします。
-install_mds_ws_api	仮想 MDM の API をインストールします。
-enable_app_security	ユーザーの作成、グループの作成、グループへのユーザーの追加、ポリシー・セットの作成、および Web サービス EAR ファイルのためのポリシー・セット・バインディングの作成を行います。
-map_roles_to_users	EBA および Web サービス EAR ファイルのためのセキュリティ・ロール・マッピングと RunAs ロール・マッピングを作成します。
-full_sync	管理対象サーバー・デプロイメント内のノードを同期させて InfoSphere MDM のユーザー・セキュリティを反映します。map_roles_to_users ターゲットを実行した後は、このターゲットを実行する必要があります。
-enable_deployment_target	運用サーバーの状況を検査します。サーバーが停止している場合は、このターゲットを使用してサーバーを再始動することができます。

InfoSphere MDM データベースのインストール

次の表は、MDM データベースの物理スキーマおよび仮想スキーマのインストールと構成に使用されるターゲットをリストしたものです。

表 26. データベース・インストールのための **madconfig** ユーティリティー・ターゲット

コマンド	説明
-install_core_db_db2	IBM DB2 にインストールされている InfoSphere MDM コア・データベースのための表、トリガー、制約、および関数を作成します。
-install_domain_db_db2	DB2 データベース上に InfoSphere MDM ドメインのための表、トリガー、制約、および関数を作成します。
-install_core_db_ora	Oracle 上に InfoSphere MDM コア・データベースのための表、トリガー、制約、および関数を作成します。
-install_domain_db_ora	Oracle データベース上に InfoSphere MDM ドメインのための表、トリガー、制約、および関数を作成します。
-install_core_db_sql	Microsoft SQL Server 上に InfoSphere MDM コア・データベースのための表、トリガー、制約、および関数を作成します。
-Update_configelement_matching	選択したマッチング・タイプの Configelement 表を更新します。
-Update_appsoftware_eba	ソフトウェア名列に EBA の適切な名前を設定して appsoftware 表を更新します。
-create_datasource	仮想 MDM によって使用されるデータ・ソースを作成します。
-create_odbc	仮想 MDM によって使用される ODBC を作成します。
-register_odbc	仮想 MDM の ODBC を登録します。
-bootstrap_datasource	仮想 MDM 用の表を作成します。
-test_datasource	データ・ソースをテストするには、データベース名と DSN 名を指定する必要があります。DSN 名は、mds/conf ディレクトリーの odbc.ini ファイル内にあります。または ./madconfig.sh list_datasources コマンドを使用することもできます。 データベース名と DSN 名を以下のように指定します。 <code>./madconfig.sh test_datasource -Dmad.db.name=dbname -Dmad.db.dsn=DSNname</code>

InfoSphere MDM Web UI のインストール

madconfig ユーティリティーは、InfoSphere MDM Web ベース・ユーザー・インターフェースのインストールをサポートしています。

重要: Web UI インストール・ターゲットを実行するには、その前にまず、適切なターゲットを実行することでアプリケーション・サーバーを作成し、始動する必要があります。

- WebSphere Application Server Network Deployment Edition の場合、**-enable_deployment_target** を実行します。
- WebSphere Application Server Base Edition の場合、**-start_base_server** を実行します。

以下の表では、Web インターフェースのインストールおよび構成に使用されるターゲットについて説明しています。

表 27. Web ベース・ユーザー・インターフェースの **madconfig** ユーティリティー・ターゲット

コマンド	説明
-config_mdm_web_app	<p>以下を構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • default_host に、WC_defaulthost_secure によって定義されたポートを、ホストの別名として追加します。 • ORB サービスに、カスタム・プロパティー com.ibm.CORBA.RequestTimeout を追加します。 • 「グローバル・セキュリティ (Global Security)」 > 「シングル・サインオン (Single sign-on)」設定で、「SSL が必要 (Requires SSL)」を「true」に設定します。
-mds_ui_prop_config	<p>仮想 MDM Web アプリケーション (「Inspector」、 「Web Reports」、 「Enterprise Viewer」 など) に対して、プロパティー・ファイルを構成します。</p>
-mdm_ui_prop_config	<p>物理 MDM Web アプリケーション (「Data Stewardship UI」、 「Business Administration UI」、 および「品目保守 UI」 など) に対して、プロパティー・ファイルを構成します。</p>
-install_mds_web_app	<p>仮想 MDM Web アプリケーションをデプロイします。「Inspector」 および「Web Reports」 の場合、このターゲットは、クラス・ローダー・モードを「PARENT_LAST」に、ポリシーを「SINGLE」に設定します。</p>
-install_mdm_web_app	<p>物理 MDM Web アプリケーションをデプロイします。</p>
-import_ssl_certificate	<p>SSL 証明書をインポートします。このターゲットは、以下の場合に必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 仮想 MDM Web インターフェースをインストールしている場合。 • 仮想 MDM Web インターフェースに対して SSL を有効にしている場合。 • 仮想 MDM Web インターフェースをデプロイしており、運用サーバーが別のアプリケーション・サーバー・セルにデプロイされる場合。

物理 MDM Web インターフェースをインストールするには、以下の **madconfig** ターゲットを順次実行します。

1. mdm_ui_prop_config
2. config_mdm_web_app
3. install_mdm_web_app

仮想 MDM Web インターフェースをインストールするには、以下の **madconfig** ターゲットを順次実行します。

1. mds_ui_prop_config
2. config_mdm_web_app
3. install_mds_web_app

Flexible Search 構成

madconfig ユーティリティーは、Flexible Search の構成および管理をサポートします。

次の表では、Flexible Search を構成および管理するために使用するターゲットについて説明しています。

表 28. Flexible Search のための **madconfig** ユーティリティー・ターゲット

コマンド	説明
-flexsearch_config	データ・エクスプローラー内の InfoSphere MDM 属性で構成されるエンティティーが作成/更新/削除されるため、これらの属性を索引付けするように、Flexible Search を構成します。
-flexsearch_syncdb	運用サーバー・データベースの索引に entrecno (エンティティー ID) 範囲の値を指定することにより、データ・エクスプローラーに対してエンティティーを索引付けします。
-flexsearch_sync_svc_enable	Flexible Search 索引の同期サービスを有効にします。
-flexsearch_sync_svc_disable	Flexible Search 索引の同期サービスを無効にします。

InfoSphere MDM のアンインストール

madconfig ユーティリティーは、アプリケーション・サーバーおよびデータベースのアンインストールもサポートします。

重要: MDM 運用サーバーおよびデータベース・コンポーネントのリセットは、InfoSphere MDM Workbench の「テスト環境 (Test Environment)」ツールでサポートされています。**madconfig** ターゲットをリセットに使用することは可能ですが、常にワークベンチ・ツールを使用するのがベスト・プラクティスです。



表 29. アンインストールのための **madconfig** ユーティリティー・ターゲット

コマンド	説明
-uninstall_mds_ws_api	仮想 MDM の API をアンインストールします。
-uninstall_mdm_ws_ear	InfoSphere MDM Web サービスのエンタープライズ・アーカイブをアンインストールします。
-uninstall_mdm_web_app	InfoSphere MDM Web インターフェースをアンインストールします。 <ul style="list-style-type: none">• Business Administration UI• Data Stewardship UI• 品目保守 UI• Inspector• Web Reports• Enterprise Viewer
-uninstall_prop_file_jar	InfoSphere MDM アプリケーションが必要とするプロパティー・ファイル JAR をアンインストールします。
-uninstall_mdm_eba	InfoSphere MDM OSGi をアンインストールします。

表 29. アンインストールのための **madconfig** ユーティリティー・ターゲット (続き)

コマンド	説明
-uninstall_mdm_old_ws_ear	アプリケーション・サーバー内の物理 MDM Web サービス JAR をアンインストールします。
-uninstall_server_config	アプリケーション・サーバーに対して行われた InfoSphere MDM 関連の構成変更を除去します。
-uninstall_native_engine_ear	仮想 MDM のためのネイティブ運用サーバー (エンジン) をアンインストールします。
-remove_datasource	仮想 MDM によって使用されるデータ・ソースを除去します。
-unregister_odbc	仮想 MDM によって使用される ODBC の登録を抹消します。

関連情報:

-  自動化された madconfig ユーティリティー・スクリプトの作成
-  テスト環境の設定の概要 (Overview of setting Test Environment preferences)

ハイブリッド MDM ソリューションのインストール

InfoSphere MDM をハイブリッド MDM ソリューションとして使用することを計画している場合、InfoSphere MDM Advanced Edition をインストールしてから、いくつかのポストインストール・タスクを実行してハイブリッド・デプロイメントをセットアップする必要があります。



このタスクについて

InfoSphere MDM のハイブリッド MDM デプロイメント・スタイルは、Advanced Edition (仮想 MDM および物理 MDM のいずれのデプロイメント・スタイルも含んでいる) と同じプロセスを使用してインストールされます。ハイブリッド MDM フィーチャーは、アプリケーションのインストール後に構成する必要があります。

手順

1. インストール手順を実行して、InfoSphere MDM Standard Edition および Advanced Edition をデプロイします。
2. 資料の『インストール後の構成』セクションに記載された手順を実行して、ハイブリッド MDM フィーチャーを使用可能にします。
3. 資料の『*Standard Edition* および *Advanced Edition* の開発 > ハイブリッド MDM』セクションに記載された手順を使用して、ハイブリッド MDM ソリューションを構成します。

関連情報:

-  ハイブリッド構成
-  ハイブリッド MDM

クライアント・アプリケーションと個々のコンポーネントのインストール

IBM Installation Manager では、個々のコンポーネントをインストールするための選択のオプションが提供されます。このオプションは、コンポーネントをワークステーションにインストールする場合、または運用サーバーと MDM データベースをインストールするサーバーとは異なるサーバーにインストールする場合に使用します。

他の InfoSphere MDM コンポーネントが既にインストールされているマシン上に個々のコンポーネントをインストールする場合は、「インストール」オプションではなく「変更」オプションを使用します。

クライアント・アプリケーションをアンインストールするには、IBM Installation Manager を使用します。

Microsoft Windows 上にインストールする場合、

- Windows レジストリーに書き込むために、IBM Installation Manager を管理者モードで実行する必要があります。管理者モードは、IBM AIX、Linux、または Solaris では使用されません。
- Microsoft Windows 7 オペレーティング・システムの場合、仮想化されていないディレクトリーに MDM をインストールする必要があります。

フィーチャーをインストールした後、ログ・ファイルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認してください。

InfoSphere MDM Web インターフェースがインストールされ実行されている場合、Web ブラウザーを使用して以下の URL からそれらのインターフェースにアクセスできます。

Business Administration UI

`https://<hostname>:<port>/CustomerBusinessAdminWeb/faces/login.jsp`

Data Stewardship UI

`https://<hostname>:<port>/CustomerDataStewardshipWeb/faces/login.jsp`

品目保守 UI

`https://<hostname>:<port>/ProductWeb/faces/login.jsp`

Inspector

`https://<hostname>:<port>/inspector/common/login.ihtml`

Enterprise Viewer

`https://<hostname>:<port>/accessweb/empi/MITLogin.jsp`

Web Reports

`https://<hostname>:<port>/webreports/common/login.html`

注: <hostname> および <port> の値は、各インストールの詳細に応じて異なります。デフォルトでは、通常のワークステーションのインストールには各 URL でポート 9443 を使用しますが、その他のタイプのインストールでは別のポートを使用できます。WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を使用して、それぞれの実際のポート値を確認してください。

関連タスク:

197 ページの『インストール済み環境の変更』
224 ページの『単一のコンポーネントのアンインストール』
197 ページの『InfoSphere MDM インストール・ログの表示』
インストールのトラブルシューティング
144 ページの『構成とインストールの分離』

関連資料:

17 ページの『ディレクトリー構造』

関連情報:

 Web アプリケーションのアプリケーション・セキュリティの構成

Business Administration UI のインストール

以下の手順を使用して、Business Administration UI をインストールします。管理者は、Business Administration UI を使用して、プロパティ・ファイルやデータベースを手動で変更しなくても、MDM 運用サーバー の特定の要素を管理できます。

始める前に

Business Administration UI をインストールするには、その前に、以下の前提条件を満たしていることを確認します。

- ご使用の環境がこのコンポーネントのハードウェアとソフトウェアの要件を満たしていること。
- IBM Installation Manager の準備ステップが完了していること。
- ユーザー・アプリケーション・インストール・ワークシートが確認済みで完了済みであること。
- IBM WebSphere Application Server がインストール済みで実行されていること。
- 前のバージョンのアプリケーションからアップグレードする場合、ご使用のプロパティ・ファイル内にカスタム設定があるなら、それらのファイルのコピーを作成します。

このタスクについて

Business Administration アプリケーションは、サーバーまたはワークステーションのいずれにもインストールできます。また、リモート WebSphere アプリケーション・プロファイルを選択して、リモート・マシンにインストールすることもできます。

このアプリケーションを、Microsoft SQL Server データベースと一緒に使用することはできません。

インストールには、「インストール」と「変更」の 2 つのオプションを選択できます。「インストール」オプションは、アプリケーションがクリーンなサーバーまたはワークステーションにインストールされることを前提としています。これは、サーバーまたはワークステーションに InfoSphere MDM コンポーネント (例えば、MDM 運用サーバー、データベース・コンポーネント、または別のユーザー・アプリケーション) がインストールされていないことを意味します。アプリケーションをインストールするマシン上に InfoSphere MDM コンポーネントが存在する場合は、「変更」オプションを使用する必要があります。

手順

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. IBM Installation Manager のホーム・パネルで、「インストール」または「変更」を選択します。
3. 「インストール」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「パッケージのインストール」パネルで、InfoSphere MDM オファリングを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 次以降のパネルでご使用条件に同意し、インストール・ディレクトリーと言語を選択します。
 - c. 「パッケージのインストール」パネルで、「**Business Administration UI**」を選択します。「次へ」をクリックします。
 - d. アプリケーションの構成情報を入力します。
 - e. インストールの要約情報を確認して、「インストール」をクリックします。
4. 「変更」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「パッケージの変更」パネルで、InfoSphere MDM パッケージを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 言語を選択して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「パッケージの変更」パネルで、「**Business Administration UI**」を選択します。以前にインストールされたコンポーネントが自動的に選択されています。それらが選択されたままであることを確認します。選択されていないと、それらは IBM Installation Manager によって削除されます。「次へ」をクリックします。
 - d. アプリケーションの構成情報を入力します。MDM ユーザー・アプリケーション・ワークシートをガイドラインとして使用します。「次へ」をクリックします。
 - e. 要約情報を確認し、インストールするコンポーネントが「追加する機能」ボックスにリストされており、「削除する機能」ボックスにはコンポーネントがリストされていないことを確認します。「変更」をクリックします。
5. インストールが完了したら「終了」をクリックして、IBM Installation Manager を閉じます。
6. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開いて、インストール時に指定したサーバーにアプリケーションがデプロイされたことを確認します。

次のタスク

インストールおよび開始後に Business Administration UI にアクセスするには、Web ブラウザーを URL 「<https://<hostname>:<port>/CustomerBusinessAdminWeb/faces/login.jsp>」 (<hostname> および <port> は適切な値に置き換えます) にナビゲートします。

Business Administration UI の使用について詳しくは、関連概念を参照してください。

関連資料:

46 ページの『ユーザー・アプリケーションのインストール・ワークシート』

関連情報:

 Web アプリケーションのアプリケーション・セキュリティの構成

Data Stewardship UI のインストール

以下の手順を使用して、Data Stewardship UI をインストールします。Data Stewardship UI アプリケーションでは、物理 MDM データのデータ・ガバナンスがサポートされます。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- ご使用の環境がこのコンポーネントのハードウェアとソフトウェアの要件を満たしていること
- IBM Installation Manager の準備ステップが完了していること
- MDM ユーザー・アプリケーション・インストール・ワークシートが確認済みで完了済みであること
- IBM WebSphere Application Server がインストール済みで実行されていること
- 前のバージョンのアプリケーションからアップグレードする場合、ご使用のプロパティ・ファイル内にカスタム設定があるなら、それらのファイルのコピーを作成します。

このタスクについて

Data Stewardship UI は、コア物理 MDM アプリケーション内のデータ品質を維持するために使用します。

このアプリケーションは、サーバーまたはワークステーションのいずれかにインストールできます。また、リモート WebSphere アプリケーション・プロファイルを選択して、リモート・マシンにインストールすることもできます。

このアプリケーションを、Microsoft SQL Server データベースと一緒に使用することはできません。

インストールには、「インストール」と「変更」の 2 つのオプションを選択できます。「インストール」オプションは、アプリケーションがクリーンなサーバーまたはワークステーションにインストールされることを前提としています。これは、サーバーまたはワークステーションに InfoSphere MDM コンポーネント (例えば、MDM と共に作動可能なサーバー、データベース・コンポーネント、または別のユーザー・アプリケーション) がインストールされていないことを意味します。アプリケーションをインストールするマシン上に MDM コンポーネントが存在する場合は、「変更」オプションを使用する必要があります。

手順

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. IBM Installation Manager のホーム・パネルで、「インストール」または「変更」を選択します。
3. 「インストール」を選択した場合は、以下のステップを実行します。

- a. 「パッケージのインストール」パネルで、InfoSphere MDM オファリングを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 次以降のパネルでご使用条件に同意し、インストール・ディレクトリーと言語を選択します。
 - c. 「パッケージのインストール」パネルで、「**Data Stewardship UI**」を選択します。「次へ」をクリックします。
 - d. アプリケーションの構成情報を入力します。MDM ユーザー・アプリケーション・ワークシートをガイドラインとして使用します。
 - e. インストールの要約情報を確認して、「インストール」をクリックします。
4. 「変更」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
- a. 「パッケージの変更」パネルで、InfoSphere MDM パッケージを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 言語を選択して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「パッケージの変更」パネルで、「**Data Stewardship UI**」を選択します。以前にインストールされたコンポーネントが自動的に選択されています。それらが選択されたままであることを確認します。選択されていないと、それらは IBM Installation Manager によって削除されます。「次へ」をクリックします。
 - d. アプリケーションの構成情報を入力します。MDM ユーザー・アプリケーション・ワークシートをガイドラインとして使用します。「次へ」をクリックします。
 - e. 要約情報を確認し、インストールするコンポーネントが「追加する機能」ボックスにリストされており、「削除する機能」ボックスにはコンポーネントがリストされていないことを確認します。「変更」をクリックします。
5. インストールが完了したら「終了」をクリックして、IBM Installation Manager を閉じます。
6. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) にアクセスし、インストール時に指定したサーバーにアプリケーションがデプロイされたことを確認します。

次のタスク

インストールおよび開始後に Data Stewardship UI にアクセスするには、Web ブラウザーを URL 「<https://<hostname>:<port>/CustomerDataStewardshipWeb/faces/login.jsp>」 (<hostname> および <port> は適切な値に置き換えます) にナビゲートします。

Data Stewardship UI の使用について詳しくは、関連概念を参照してください。

関連資料:

46 ページの『ユーザー・アプリケーションのインストール・ワークシート』

関連情報:

 [Data Stewardship の開始](#)

 [Web アプリケーションのアプリケーション・セキュリティーの構成](#)

Data Stewardship UI 用のタスク管理ユーザーを手動で作成

特定の環境では、Data Stewardship UI 用のタスク管理ユーザーを手動で作成する必要があります。

このタスクについて

MDM 運用サーバーおよびデータベース・コンポーネントをインストールする場合は、コンポーネントおよび構成リポジトリがインストール・セットに含まれており、タスク管理ユーザーはインストーラーによって自動的に作成されます。MDM データベース・コンポーネントおよび構成リポジトリが、例えば手動でインストールされたなどの理由でインストール・セットに含まれていない場合は、Data Stewardship UI を正常に実行するために、タスク管理ユーザーを手動で作成する必要があります。

手順

ご使用の環境における WebSphere Application Server のグローバル・セキュリティーの構成に従い、Data Stewardship UI 用のタスク管理ユーザーを作成するための適切なオプションを選択します。

- WebSphere Application Server のグローバル・セキュリティーが無効になっている場合、タスク管理ユーザーを作成するには、以下の SQL ステートメントを構成して実行します。

```
MDM_INSTALL_HOME/ TaskManagement/TaskManagementGSOFF.sql
```

- WebSphere Application Server のグローバル・セキュリティーが有効になっている場合、タスク管理ユーザーを作成するには、以下の SQL ステートメントを構成して実行します。

```
MDM_INSTALL_HOME/ TaskManagement/TaskManagementGSON.sql
```

品目保守 UI のインストール

以下の手順を使用して、品目保守 UI をインストールします。品目保守 UI は、製品のデータ品質を維持するために使用されます。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- ご使用の環境がこのコンポーネントのハードウェアとソフトウェアの要件を満たしていること。
- IBM Installation Manager の準備ステップが完了していること。
- MDM ユーザー・アプリケーション・インストール・ワークシートが確認済みで完了済みであること。
- IBM WebSphere Application Server がインストール済みで実行されていること。
- 前のバージョンのアプリケーションからアップグレードする場合、ご使用のプロパティー・ファイル内にカスタム設定があるなら、それらのファイルのコピーを作成します。

このアプリケーションをインストールする前に、WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー (Dmgr) JVM ヒープ・サイズの引数が 512MB と 1024MB に設定されていることを確認してください。

このタスクについて

管理者は、品目保守 UI アプリケーションのインストール、デプロイ、およびそのユーザーのサポートを担当します。

このアプリケーションは、サーバーまたはワークステーションのいずれかにインストールできます。また、リモート WebSphere アプリケーション・プロファイルを選択して、リモート・マシンにインストールすることもできます。

このアプリケーションを、Microsoft SQL Server データベースと一緒に使用することはできません。

インストールには、「インストール」と「変更」の 2 つのオプションを選択できます。「インストール」オプションは、アプリケーションがクリーンなサーバーまたはワークステーションにインストールされることを前提としています。これは、サーバーまたはワークステーションに InfoSphere MDM コンポーネント（例えば、MDM と共に作動可能なサーバー、データベース・コンポーネント、または別のユーザー・アプリケーション）がインストールされていないことを意味します。アプリケーションをインストールするマシン上に MDM コンポーネントが存在する場合は、「変更」オプションを使用する必要があります。

手順

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. IBM Installation Manager のホーム・パネルで、「インストール」または「変更」を選択します。
3. 「インストール」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「パッケージのインストール」パネルで、InfoSphere MDM オファリングを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 次以降のパネルでご使用条件に同意し、インストール・ディレクトリーと言語を選択します。
 - c. 「パッケージのインストール」パネルで、「品目保守 UI (Product Maintenance UI)」を選択します。「次へ」をクリックします。
 - d. アプリケーションの構成情報を入力します。MDM ユーザー・アプリケーション・ワークシートをガイドラインとして使用します。
 - e. インストールの要約情報を確認して、「インストール」をクリックします。
4. 「変更」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「パッケージの変更」パネルで、InfoSphere MDM パッケージを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 言語を選択して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「パッケージの変更」パネルで、「品目保守 UI (Product Maintenance UI)」を選択します。以前にインストールされたコンポーネントが自動的に選択されています。それらが選択されたままであることを確認します。選択されていないと、それらは IBM Installation Manager によって削除されます。「次へ」をクリックします。
 - d. アプリケーションの構成情報を入力します。MDM ユーザー・アプリケーション・ワークシートをガイドラインとして使用します。「次へ」をクリックします。

- e. 要約情報を確認し、インストールするコンポーネントが「追加する機能」ボックスにリストされており、「削除する機能」ボックスにはコンポーネントがリストされていないことを確認します。「変更」をクリックします。
5. インストールが完了したら「終了」をクリックして、IBM Installation Manager を閉じます。
6. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) を開いて、インストール時に指定したサーバーにアプリケーションがデプロイされたことを確認します。

次のタスク

インストールおよび開始後に品目保守 UI にアクセスするには、Web ブラウザーを URL 「<hostname>:<port>/ProductWeb/faces/login.jsp」 (<hostname> および <port> は適切な値に置き換えます) にナビゲートします。

品目保守 UI の使用について詳しくは、関連概念を参照してください。

関連資料:

46 ページの『ユーザー・アプリケーションのインストール・ワークシート』

関連情報:

 [品目保守 UI 入門](#)

 [Web アプリケーションのアプリケーション・セキュリティの構成](#)

InfoSphere MDM Workbench のインストール

カスタム・インストール・デプロイメント・タイプを使用しており、ワークベンチのみをインストールする場合は、以下のステップを使用して InfoSphere MDM Workbench をインストールします。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- ご使用の環境がハードウェアとソフトウェアの要件を満たしていること
- カスタム・インストールの場合は、IBM Installation Manager の準備のステップが完了していること
- IBM Rational Application Developer をインストールしていること
- InfoSphere MDM をインストールしていること
- 対象のコンピューター上で使用するログインには、レジストリーへの書き込み権限が保持されている必要があります。

DB2 デプロイメントへのスタンドアロン・ワークステーション・インストールの一部としてワークベンチをインストールすることを計画している場合、スタンドアロン・インストールの開始手順 (関連タスクを参照) を参照してください。

このタスクについて

InfoSphere MDM Workbench は、InfoSphere MDM 環境を管理するために実装者と管理者によって使用されます。このアプリケーションを使用すれば、アルゴリズム

の管理、複合ビューの作成、データ・ディクショナリー表の編集を行うことができ、またメンバー論理モデル、フロー、およびデータ・ソースへのマッピングを作成することもできます。

InfoSphere MDM Workbench は、Eclipse ベースのテクノロジーで、Microsoft Windows を使用するコンピューター上で実行されます。

ワークベンチを使用するには、IBM Rational Application Developer をインストールする必要があります。

手順

1. IBM Rational Application Developer が稼働中の場合、シャットダウンします。
2. IBM Installation Manager を開始します。
3. IBM Installation Manager ホーム画面で、「インストール」をクリックします。
4. 「パッケージのインストール」パネルで、「**IBM InfoSphere Master Data Management Workbench**」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. ご使用条件に同意します。
6. IBM Rational Application Developer がインストールされるパッケージ・グループを選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「インストール (Install)」をクリックします。
8. 完了したら「完了」をクリックします。

次のタスク

これで、InfoSphere MDM Workbench を使用して運用サーバーを構成することができますようになりました。

関連タスク:

69 ページの『ランチパッドを使用したスタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始』

インストール・ログの表示

関連資料:

5 ページの『64 ビットのオペレーティング・システムに必要な 32 ビット・ライブラリー』

2 ページの『インストール要件』

ワークベンチ・サーバー定義の設定

InfoSphere MDM Workbench 内で、WebSphere Application Server のパラメーターを構成して、インストールが確実に円滑に実行されるようにします。

このタスクについて

MDM ワークベンチで、アプリケーションの基本機能とその構成を反映するように、特定のパラメーターを設定します。

「Run server with resources on Server」のためのオプションを選択して開始します。このオプションは、アプリケーション全体とそのサーバー固有の構成を、ワークベンチからサーバーのディレクトリーにインストールおよびコピーします。この

オプションは、アプリケーションおよび構成を実稼働環境にデプロイする方法を表しています。特に、CBA は WebSphere Application Server の内部バンドル・リポジトリに物理的に構築、パッケージ化、およびデプロイされます。

2 番目に、「**Never publish automatically**」のためのオプションを選択します。このオプションを選択しない場合、ワークスペースで単純な変更が加えられるごとに、時間のかかるパブリッシュ操作が行われます。

3 番目に、「**Start server with a generated script**」のためのオプションのチェック・マークを外して、問題なく MDM ロギングを行えるようにします。

手順

1. 「Server」ビューで、WebSphere Application Server をダブルクリックしてサーバー・エディターを開きます。
2. 「WebSphere Application Server」ページの「Publishing」設定で、「**Modify the publishing settings**」リストにナビゲートします。
3. 「**Run server with resources on Server**」のためのオプションを選択します。
4. 「Publishing」ページで、「**Modify settings for publishing**」リストにナビゲートします。
5. 「**Never publish automatically**」のためのオプションを選択します。
6. 「Overview」ページで、「**Optimize server start for development**」リストにナビゲートします。
7. 「**Start server with a generated script**」ためのチェック・ボックスのチェック・マークを外します。
8. Ctrl+S を押して、サーバー構成の設定を保存します。
9. エディターを閉じます。
10. サーバーを始動します。
 - a. 「Server」ビューで、サーバーを右クリックします。
 - b. 「**Start**」を選択します。

サンプルのインストール

サンプルには、InfoSphere MDM の使用をデモンストレーションするマッピングとソース・コード・ファイルが含まれています。これらのサンプルは、開発環境のみインストールしてください。

サンプルは、以下の場所で入手できます。

- 資料のコード・スニペット
- IBM Installation Manager 内のパッケージ
- InfoSphere MDM の「サンプルおよび資産」サイト

関連情報:

 サンプルのリスト

IBM Installation Manager と共にサンプルをインストール

この手順を使用して、IBM Installation Manager の一部であるサンプル・フィーチャーをインストールします。

このタスクについて

その他のサンプルは資料で入手することも、「サンプルおよび資産」サイトからダウンロードすることもできます。

インストールには、「インストール」と「変更」の 2 つのオプションを選択できます。「インストール」オプションは、アプリケーションがクリーンなサーバーまたはワークステーションにインストールされることを前提としています。これは、サーバーまたはワークステーションに InfoSphere MDM コンポーネント（例えば、MDM 運用サーバー、データベース・コンポーネント、または別のユーザー・アプリケーション）がインストールされていないことを意味します。アプリケーションをインストールするマシン上に MDM コンポーネントが存在する場合は、「変更」オプションを使用する必要があります。

手順

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. IBM Installation Manager のホーム・パネルで、「インストール」または「変更」を選択します。
3. 「インストール」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「パッケージのインストール」パネルで、InfoSphere MDM オffering を選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 次以降のパネルでご使用条件に同意し、インストール・ディレクトリーと言語を選択します。
 - c. 「パッケージのインストール」パネルで、「サンプル (Samples)」を選択します。「次へ」をクリックします。
 - d. インストールの要約情報を確認して、「インストール」をクリックします。
4. 「変更」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「パッケージの変更」パネルで、InfoSphere MDM パッケージを選択し、「次へ」をクリックします。
 - b. 言語を選択して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「パッケージの変更」パネルで、「サンプル (Samples)」を選択します。以前にインストールされたコンポーネントが自動的に選択されています。それらが選択されたままであることを確認します。選択されていないと、それらは IBM Installation Manager によって削除されます。「次へ」をクリックします。
 - d. アプリケーションの構成情報を入力します。MDM ユーザー・アプリケーション・ワークシートをガイドラインとして使用します。「次へ」をクリックします。
 - e. 要約情報を確認し、インストールするコンポーネントが「追加する機能」ボックスにリストされており、「削除する機能」ボックスにはコンポーネントがリストされていないことを確認します。「変更」をクリックします。
5. インストールが完了したら「終了」をクリックして、IBM Installation Manager を閉じます。
6. サンプル・ファイルが `MDM_INSTALL_HOME` ディレクトリーに作成されたことを確認します。

InfoSphere MDM の「サンプルおよび資産」サイトからサンプルをインストール

サンプルをダウンロードするには、IBM パスポート・アドバンテージのテキスト・ファイル内のアクセス・キーが必要です。次に、サンプルをインストールするには、ローカル・コンピューターでダウンロードしたファイルを解凍します。

このタスクについて

その他のサンプルは、資料で入手することも、IBM Installation Manager を使用して、エディションに合わせてインストールすることもできます。

手順


1. サンプルのアクセス・キーを入手します。
 - a. IBM パスポート・アドバンテージにログインして、サンプルの eAssembly を検索します。

ヒント: eAssembly リストを展開して、ダウンロードする項目を選択します。
 - b. eAssembly をダウンロードして、ダウンロードしたファイルを解凍します。アクセス・キーは、ダウンロードしたファイル内のテキスト・ファイルに入っています。
2. サンプルをダウンロードします。
 - a. 「サンプルおよび資産」サイトにログインして、パッケージを選択し、「続行」をクリックします。
 - b. サンプルのアクセス・キーおよびその他の情報を入力し、ダウンロード・プロセスを完了します。
3. ローカル・コンピューターでファイルを解凍し、サンプルをインストールします。

次のタスク

一部のサンプルでは、追加のセットアップ・ステップを実行します。

関連資料:

 IBM パスポート・アドバンテージ

 「サンプルおよび資産」サイト

基本インストールの検証

IBM Installation Manager は、検査ルーチンを自動的に実行して、個人、組織、および契約を追加する 3 つの物理トランザクションと、1 つの仮想トランザクションを実行することにより、インストールをテストします。これらのトランザクションが成功した場合、インストールは正常に完了します。

さらに、テスト・クライアントを使用してテスト・トランザクションを実行して、InfoSphere MDM が適切にインストールされていることを確認できます。

関連タスク:

21 ページの『第 3 章 製品のインストール』

70 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』
79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に)のインストール』
134 ページの『InfoSphere MDM のカスタム・デプロイメントのインストール』
150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』
インストールのトラブルシューティング

関連資料:

7 ページの『第 2 章 インストールの概説』
14 ページの『インストール・アプリケーションで使用されるユーザー・アカウント、グループ、およびデフォルト』

WebSphere Application Server でのテスト・クライアントを使用したインストールの検証

いくつかの事前設定されたテスト・ケースを実行する、アプリケーション・サーバーのテスト・クライアントを使用して、インストールを検証します。

このタスクについて

テスト・クライアントでサポートされるのは、DB2 データベースと Oracle データベースのみです。

手順

1. `MDM_INSTALL_HOME/IVT/properties` フォルダの `TestClient.properties` ファイルで、アプリケーションのセキュリティーが有効な場合は、`user=` にユーザー名、`password=` にパスワードを入力します。
2. 実行するテスト用のパラメーターの作成に必要なその他のプロパティを編集します。編集できるプロパティについて詳しくは、テスト・クライアント・プロパティのトピックを参照してください。
3. `MDM_INSTALL_HOME/IVT` ディレクトリーに移動します。
4. インストール・タイプに応じて、ステップに従い、データをクリアします。
 - Oracle に InfoSphere MDM をインストールした場合は、コマンド行で以下のスクリプトを実行して、データをクリアします。

```
sqlplus <DB_USER>/<DB_PASSWORD>@TNS@./sql/clearOperationData.sql
```
 - DB2 に InfoSphere MDM をインストールした場合は、以下のステップを実行してデータをクリアします。
 - a. DB2 データベースに接続します。
 - b. コマンド行で以下のスクリプトを実行して、DB2 のデータをクリアします。

```
db2 -tvf ./sql/deleteIVTdata
```
5. テスト・ケースを実行するには、コマンド行から以下のスクリプトを実行します。

`TestClient.sh TEST_CHANNEL XML_FOLDER [USER_NAME PASSWORD]` ここで、

- `TEST_CHANNEL` は、テスト・ケースをサーバーに送信するメソッドで、以下のいずれかになります。

- RMI の場合は、rmi を入力します。
- HTTP の場合は、soap を入力します。
- JMS の場合は、jms を入力します。
- XML_FOLDER は、実行する XML テスト・ケースが含まれるフォルダーで、以下のいずれかになります。
 - TCRM テスト・ケースの場合は、./testCases/xml を入力します。
 - 仮想 MDM テスト・ケースの場合は、./testCases/xml_virtual を入力します。
 - 管理テスト・ケースの場合は、./testCases/xml_admin を入力します。
 - TCRM 複合テスト・ケースの場合は、./testCases/xml_composite を入力します。
 - メッセージング・テスト・ケースの場合は、./testCases/xml_msg を入力します。
- セキュリティーが有効になっている場合は、USER_NAME にシステムにログオンするためのユーザー名を入力します。
- セキュリティーが有効になっている場合は、PASSWORD にユーザー名に対応するパスワードを入力します。

例えば、セキュリティが有効になっていない状態で、WebSphere Application Server で HTTP を経由して admin テスト・ケースを実行するには、以下を入力します。

```
TestClient.sh soap testCases/xml_admin
```

6. テストが完了すると、以下のディレクトリーで結果を確認できます。
 - テストによって作成された応答を確認するには、各テスト・ケースの ./response フォルダ (./testCases/xml/response など) を確認します。
 - ログ、テスト・ケースの実行のリスト、およびそれらの状況を確認するには、MDM_INSTALL_HOME/IVT/logs のログ・ファイルを確認します。

例

以下の表に、実行できるテスト、および対応するコマンド行を示します。

表 30. インストール検査テスト

テストの実行目的	使用するコマンド
単一の TCRM テスト・ケースを実行するために要求ファイルを指定する場合	TestClient.sh rmi ./testCases/xml/TCRMaddPerson.xml
JMS テスト・ケースを実行する場合	キュー接続ファクトリー、要求キュー名、および応答キュー名を TestClientJMS.properties ファイルで指定してから、TestClient.sh jms ./testCases/xml を実行します。

表 30. インストール検査テスト (続き)

テストの実行目的	使用するコマンド
メッセージング・テスト・ケースを実行する場合	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle の場合: <ol style="list-style-type: none"> 1. @./sql/Oracle/update_event_active.sql を実行して、イベントをアクティブ化します。 2. WebSphere Application Server を再始動します。 3. TestClientWL.sh rmi ./testCases/xml_msg を実行します。 • DB2 の場合: <ol style="list-style-type: none"> 1. IVT/sql/db2/update_event_active.sql を実行して、イベントをアクティブ化します。 2. WebSphere Application Server を再始動します。 3. TestClientWL.sh rmi ./testCases/xml_msg を実行します。
管理テスト・ケースを実行する場合	TestClient.sh rmi ./testCases/xml_admin

テスト・クライアント・プロパティ

MDM_INSTALL_HOME/IVT/properties フォルダにある TestClient.properties ファイルのエントリを編集することで、テスト用のパラメーターを設定できます。

表 31. テスト・クライアント・プロパティ・ファイルで設定できるプロパティ

パラメーター設定の目的	パラメーターの設定内容
ソートせずにテスト・ケースを実行するには。	sort=
ディレクトリーを基準にテスト・ケースをソートするには。 regex=for ソート基準を参照。	sort=d
テスト・ケースをソートするには。 regex=for ソート基準を参照。	sort=f
ディレクトリーおよびテスト・ケースをソートするには。 regex=for ソート基準を参照。	sort=dlf
比較キーでソートして最初の一致を抽出するには。ソート順はキーに基づきます。 デフォルトでは、要求ファイルから最後のデジタル数を抽出します。	regex= [0-9]*[0-9]\$
ストリングの順序を基準にソートするには。	regex=
ユーザー名を追加するには。	user=
パスワードを追加するには。	password=
正規表現を使用して抽出値をテストするため。	java -cp ./lib/TestClient.jar -regex termtest_001
Java を使用したテスト・ケースの実行に関する情報のため。	java -cp ./lib/TestClient.jar ?
MDM JMS アダプターを使用するには、キュー接続ファクトリー名を入力します。	QueueConnectionFactory=

表 31. テスト・クライアント・プロパティ・ファイルで設定できるプロパティ (続き)

パラメーター設定の目的	パラメーターの設定内容
要求キュー宛先名を入力します。	RequestQueue=
応答キュー宛先名を入力します。	ResponseQueue=

インストール・ログ

インストール・プロセス時に作成されるログには 2 種類があります。一方は IBM Installation Manager 関連の情報を記録し、もう一方は InfoSphere MDM 関連の情報を記録します。

IBM Installation Manager ログの場所は、アプリケーションのインストール方法によって異なります。IBM Installation Manager を admin モード (UNIX 上の root ユーザー) でインストールした場合、ログは `/var/ibm/InstallationManager/logs` にあります。アプリケーションを admin モードでインストールしていない場合、ログは `$HOME/var/ibm/InstallationManager/logs` にあります。

`config.ini` ファイルで Agent Location 変数 (`cic.appDataLocation`) を更新して、IBM Installation Manager ログの場所を指定することもできます。`config.ini` は `InstallationManager_INSTALL_HOME/eclipse/configuration` ディレクトリーにあります。

InfoSphere MDM ログは `MDM_INSTALL_HOME/logs/database` ディレクトリーにあります。

以下のディレクトリーに含まれるログは、(手動インストールおよびインストーラーによる) 物理 MDM データベースの SQL スクリプトの実行時に作成されます。

- `MDM_INSTALL_HOME/logs/database/DomainData`
- `MDM_INSTALL_HOME/logs/database/CoreData`
- `MDM_INSTALL_HOME/logs/database/CMDData`

ODBC を使用する仮想 MDM データベースのブートストラッピングによって作成されるログ・ファイルは、`MDM_INSTALL_HOME/logs/database/Virtual` にあります。

Installation Manager のログ・ファイルの表示

IBM Installation Manager アプリケーションは、インストール・プロセス中にログ・ファイルを作成します。これらのログは、ブラウザーで見ることができます。

始める前に

ログ・ファイルを表示するには、ブラウザーが必要です。ブラウザーがインストールされていないサーバーを使用している場合は、ログをワークステーションにコピーしてください。

`./InstallationManager/logs` で拡張デバッグ・ロギングを有効にするには、IBM Installation Manager を起動して InfoSphere MDM のインストールを開始する前に、`STARTUPKIT_INSTALL_HOME/InstallationManagerDebug/log.properties` を `./InstallationManager/logs` にコピーします。

重要: 拡張デバッグ・ロギングを有効にすると、./InstallationManager/logs 内のログ情報に、インストール時にユーザーが入力したパスワードの詳細を含めることができます。パスワードの機密漏れを防ぐために、必ず、これらのログは安全な場所に保管してください。

このタスクについて

ログに含まれるメッセージには、INFO、DEBUG、WARNING、ERROR のいずれかのラベルが付いています。インストールが正常に行われていれば、すべてのメッセージのラベルが INFO または DEBUG になります。WARNING または ERROR として識別されているメッセージを確認してください。

ヒント: IBM Installation Manager ログを使用したインストールのトラブルシューティングに関する詳細については、このトピックの終わりにある関連リンクを参照してください。

手順

1. ./InstallationManager/logs ディレクトリーに移動します。
2. index.xml ファイルを開きます。
3. 「すべてのログ・ファイル (All Log Files)」表で、InfoSphere MDM をインストールした IBM Installation Manager セッションに対応するリンクをクリックします。
4. 「カスタム運用の MDM 運用サーバー、ユニット `mdmv.app.set.install.location` でのインストール場所の検証 (Custom operation MDM Operational Server, verifying install location in unit `mdmv.app.set.install.location`)」リンクを見つけます。

このリンクと後続のリンクをクリックすると、インストール・プロセスのメッセージが表示されます。

5. WARNING または ERROR として識別されているメッセージを見つけます。このメッセージを確認して、インストールに関して考えられる問題を特定してください。
6. インストール・プロセス・セグメントのネイティブのログ・ファイル表現を表示するリンクをクリックします。

このようなプロセスには、InfoSphere MDM ファイルの管理、`madconfig` ユーティリティー (SQL スクリプトを実行する Ant ベースのツール) の実行、および InfoSphere MDM デプロイメント・アーカイブ (EBA ファイル、EAR ファイル、その他のアクションなど) をデプロイする WebSphere Application Server MBean API の実装を行うカスタム Java コードの実行などが考えられます。

タスクの結果

WARNING または ERROR として識別されたメッセージがある場合は、Java または Ant 例外エラーを検索して、問題の原因を判別してください。WARNING または ERROR に対する回避策を見つけるには、インストールの修正を試みるか、IBM ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

関連タスク:

インストールのトラブルシューティング

関連資料:

11 ページの『カスタム・インストールのための Installation Startup Kit』

関連情報:

 IBM Installation Manager: インストールのトラブルシューティング

InfoSphere MDM インストール・ログの表示

インストール処理中に、ログが `MDM_INSTALL_HOME/logs/database` ディレクトリーに作成されます。これらのログを使用して、インストールのトラブルシューティングや検証に役立てることができます。

このタスクについて

ログは、インストールの日時がファイル名になっている `.xml` ファイルに格納されます。例えば、名前が `20130312_1101.xml` のファイルは、インストールが 2013 年 3 月 12 日 11:01 に実行されたことを示します。ログには、2 つの異なる方法でアクセスできます。

手順

- インストールが完了した後に、最後の IBM Installation Manager パネルで、「**ログ・ファイルの表示**」をクリックします。
- `MDM_INSTALL_HOME/logs/database` ディレクトリーに移動し、`.xml` ファイルを開きます。

関連概念:

180 ページの『クライアント・アプリケーションと個々のコンポーネントのインストール』

関連タスク:

21 ページの『第 3 章 製品のインストール』

インストールのトラブルシューティング

関連資料:

160 ページの『サイレント・インストール』

インストール済み環境の変更

以下の手順を使用して、他の InfoSphere MDM コンポーネントを、既に同じバージョンのコンポーネントがインストールされているワークステーションまたはサーバーにインストールします。

手順

1. IBM Installation Manager を始動して「**変更**」をクリックします。
2. InfoSphere MDM パッケージを選択して、「**次へ**」をクリックします。
3. 言語を選択して、「**次へ**」をクリックします。
4. 「パッケージの変更」パネルで、インストールするコンポーネントを選択します。以前にインストールされたコンポーネントが自動的に選択されています。それらが選択されたままであることを確認します。選択されていないと、それらは IBM Installation Manager によって削除されます。「**次へ**」をクリックします。

5. 要約情報を確認し、インストールするコンポーネントが「追加する機能」ボックスにリストされており、「削除する機能」ボックスにはコンポーネントがリストされていないことを確認します。「変更」をクリックします。
6. 最後の IBM Installation Manager パネルで、ログ・ファイル・ビューアーを開く場合は「ログ・ファイルの表示 (View Log Files)」をクリックします。
7. 「終了」をクリックし、IBM Installation Manager を閉じます。

次のタスク

最後のインストーラー・パネルに表示されるメッセージに、インストールの変更が成功したかが示されます。変更失敗の場合は、確認可能なエラー・メッセージとログ・ファイルが生成されます。変更が成功した場合にもログ・ファイルを確認できます。エラーに対処する際は、トラブルシューティング・トピックを利用してください。

関連概念:

180 ページの『クライアント・アプリケーションと個々のコンポーネントのインストール』

関連タスク:

150 ページの『クラスター環境への InfoSphere MDM のインストール』

インストールのトラブルシューティング

144 ページの『構成とインストールの分離』

新しいノードを既存のクラスターに追加する

新しい InfoSphere MDM ノード・メンバーを既存の IBM WebSphere Application Server クラスターに追加するには、ノードを作成し、それをクラスターにアタッチしてから、ノードとクラスターの間を構成する必要があります。

このタスクについて

WebSphere Application Server クラスターのノードは、プロファイルとして定義されます。それは別個のマシン上、または 1 つ以上の既存のプロファイルが構成されているマシン上に存在します。

手順

1. アプリケーション・サーバーのコマンド行から以下のコマンドを実行して、新しい InfoSphere MDM ノードを作成し、それを既存の WebSphere Application Server クラスターにアタッチします。

```
cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/bin
./manageprofiles.sh -create -profileName profile_name -profilePath
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name -templatePath /opt/IBM/WebSphere/AppServer/
profileTemplates/managed -federateLater false
-dmgrAdminUserName username -dmgrAdminPassword password -dmgrHost
dmgr_host -dmgrPort dmgr_port
```

コマンド内の変数を、使用するデプロイメントに適した値を持つ、適切なプロファイル名、パス、ユーザー名、パスワード、DMgr ホスト、および DMgr ポートに置き換えます。以下に例を示します。

```

cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/bin
./manageprofiles.sh -create -profileName AppSrv03 -profilePath /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv03
-templatePath /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profileTemplates/managed
-federateLater false -dmgrAdminUserName perf01
-dmgrAdminPassword perf01 -dmgrHost warhol-10ge -dmgrPort 8879

```

コマンドが完了すると、追加のノードが WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) に表示されます。

2. 新しいノードが存在することを確認するために、「システム管理 (System administration)」 > 「ノード (Nodes)」 にナビゲートします。
3. 以下のようにして、新しいサーバー・インスタンスを新しいノード上のクラスターに追加します。
 - a. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console で、「WebSphere Application Server クラスター (WebSphere application server clusters)」 > 「SECluster」 > 「クラスター・メンバー (Cluster members)」 にナビゲートして「新規」をクリックします。
 - b. 新規メンバーに名前を付け、ドロップダウン・リストから新しいノードを選択してから、設定を保存して同期します。
 - c. 「WebSphere Application Server クラスター (WebSphere application server clusters)」 > 「SECluster」 > 「クラスター・メンバー (Cluster members)」 にナビゲートして、新規メンバーがノードのリストに存在することを確認します。
4. 次のようにして、新しいノードを表す新しい行を APPINSTANCE 表に追加します。

```
id|1000|server_name|current_timestamp|installer
```

行内の変数をノードに適した詳細情報に置き換えます。

5. madconfig タスクを実行して、次のように新しいノードを構成します。
 - a. ファイル `MDM_INSTALL_HOME/properties/install_native_engine.ear.properties` をフォルダー `MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts` にコピーして、コピーされたファイルを `install_native_engine.ear.local.properties` に名前変更します。
 - b. `install_native_engine.ear.local.properties` で、すべての暗号化されたパスワードをプレーン・テキストのパスワードに変更します。

ヒント: `trustFilePwd` プロパティの値は WebAS です。

- c. パスワードに加えて、以下のプロパティを変更または追加します。

```

cluster.flag=false
cluster=None
node=node_name
server=server_name
configForNewNode=true

```

- d. 以下のコマンドを使用して、`install_native_engine madconfig` スクリプトを実行します。

```
MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts/madconfig.sh install_native_engine.ear
```

- e. ファイル `MDM_INSTALL_HOME/properties/install_server_config.properties` をフォルダー `MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts` にコピーして、コピーされたファイルを `install_server_config.local.properties` に名前変更します。

- f. `install_server_config.local.properties` で、すべての暗号化されたパスワードをプレーン・テキストのパスワードに変更します。

ヒント: `trustFilePwd` プロパティーの値は `WebAS` です。

- g. パスワードに加えて、以下のプロパティーを変更または追加します。

```
cluster.flag=false
cluster=None
node=node_name
server=server_name
configForNewNode=true
```

- h. 以下のコマンドを使用して、`install_server_config madconfig` スクリプトを実行します。

```
MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts/madconfig.sh install_server_config
```

- i. 以下のコマンドを使用して、`map_roles_to_users madconfig` スクリプトを実行します。

```
MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts/madconfig.sh map_roles_to_users
```

- j. `map_roles_to_users` スクリプトに以下の詳細情報を指定します。

- EBA 接頭部: `com.ibm.mdm.hub.server.app`
- WAS アプリケーション名: `MDM-web-services-instance_id`。

注: アプリケーション名は `Integrated Solutions Console` に示されています。

- BLA ユーザー: `InfoSphere MDM` の `admin` ユーザー (`mdmadmin` など)。
 - BLA パスワード: `InfoSphere MDM admin` ユーザーのパスワード
- k. 以下のコマンドを使用して、`full_sync madconfig` スクリプトを実行します。
- ```
MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts/madconfig.sh full_sync
```
- l. `MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts` に作成した `local.properties` ファイルを削除します。

**重要:** これらのファイルは、できるだけ早く削除する必要があります。プレーン・テキストのパスワードが含まれているため、それらにはセキュリティ問題が潜在しています。

6. `WebSphere Application Server` クラスタを再始動します。

#### 関連タスク:

クラスタ環境で `InfoSphere MDM` を使用するために `DB2` データベースを準備するには

107 ページの『クラスタ環境で `InfoSphere MDM` を使用するために `Oracle` データベースを準備するには』

150 ページの『クラスタ環境への `InfoSphere MDM` のインストール』

## 物理 MDM のデプロイされたプロパティー・ファイルの更新

`InfoSphere MDM` をインストールまたはアップグレードした後で、構成マネージャーを使用して適用できない変更が必要な場合、デプロイされたプロパティー・ファイルの更新が必要な場合があります。以下の手順を使用して、デプロイされたプロパティー・ファイルを更新します。



## このタスクについて

**重要:** プロパティの動的な更新は理想的ではありません。可能な場合は常に、カスタム・プロパティを構成マネージャーに移植します。

プロパティ・ファイルは .jar にパッケージ化され、ビジネス・レベル・アプリケーション (BLA) の共有ライブラリー資産としてデプロイされているため、プロパティ値を変更するだけでは変更できません。インストールすると、複製された `properties.jar` ファイルが BLA 構成単位のデプロイメント・サブディレクトリーに解凍されます。この解凍により、エンタープライズ・バンドル・アプリケーション (EBA) を再インストールしなくても、ほぼリアルタイムで更新できます。例えば、アプリケーションのデプロイメントの名前が E001 であり、WebSphere Application Server のインストール済み環境のホーム・ディレクトリーが `opt/IBM/WebSphere/AppServer/` の場合、デプロイされたプロパティ・ファイルのロケーションは、アプリケーション・プロファイルのインストール済み資産のディレクトリー内です。この場合では、`opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/Node01/installedAssets/com.ibm.mdm.server.resources.properties-E001.jar/BASE` です。

ノードの JAR ファイルのコンテンツを直接変更できます。マルチノードまたはクラスタのトポロジーでは、変更はすべてのノードとサーバーに手動で複製する必要があります。プロパティを更新するには、ユーザーの代わりに伝搬を処理する WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) の使用をお勧めします。

## 手順

1. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を開始して、「アプリケーション」 > 「アプリケーション・タイプ」 > 「資産」に移動します。
  - a. `com.ibm.mdm.server.resources.properties-deployment_name_used_for_install.jar` ファイルを選択します。
  - b. 「エクスポート」をクリックして、現在デプロイしているプロパティをエクスポートします。ここから、ライブラリーを更新のためにローカル・システムにダウンロードできます。
2. ステップ 1 でダウンロードした `com.ibm.mdm.server.resources.properties-deployment_name_used_for_install.jar` パッケージの解凍したプロパティ・ファイルを使用して、値とファイルを編集します。
3. 変更したプロパティを新しい `com.ibm.mdm.server.resources.properties-deployment_name_used_for_install.jar` ファイルに再パッケージ化します。元のライブラリーと同じ名前を保持していることを確認します。
4. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console で、もう一度 `com.ibm.mdm.server.resources.properties-deployment_name_used_for_install.jar` ファイルを選択します。
  - a. 「更新」をクリックします。
  - b. 次の画面で、必要な更新のタイプを選択して、新しいプロパティの JAR を選択します。例: 「資産全体を置き換える (Replace entire asset)」オプション、および新しいプロパティの JAR または更新したプロパティの JAR



を選択します。このオプションを使用してプロパティの資産を更新すると、すべてのノードとサーバーに変更が自動的に伝搬されます。

5. 更新が完了したら、BLA アプリケーションを再始動する必要があります。

---

## 第 4 章 フィックスパックの適用

IBM から InfoSphere MDM 用のフィックスパックがリリースされたら、それを IBM Installation Manager を使用して適用できます。

### このタスクについて

フィックスパックを適用するには、フィックスパック成果物をダウンロードし、抽出してから、コマンド・ライン・ツールを実行してフィックスパックを構成する必要があります。何らかの理由で一部のフィックスを適用しない場合は、オプションで、指定したコンポーネントをスキップするようにフィックスパックを構成できます。

必要であれば、IBM Installation Manager を使用して適用したフィックスパックをロールバックできます。

**ヒント:** 更新の適用を開始する前に、フィックスパックの README で、含まれているフィックスに関する重要な指示や詳細を確認してください。各フィックスパックの README は、IBM Support Web サイトから入手可能です。

---

## フィックスパックのインストール

IBM Installation Manager を使用してフィックスパック成果物をダウンロードし、抽出してから、スクリプトを実行してフィックスパック・ファイルをインストールします。

### 始める前に

- 更新の適用を開始する前に、フィックスパックの README を確認してください。各フィックスパックの README は、IBM Support Web サイトから入手可能です。
- IBM Installation Manager の資料を参照し、更新 モードでフィックスパックを見つけてダウンロードする方法を確認します。詳しくは、関連するリンクを参照してください。
- 更新する際に、IBM ID を使用して [ibm.com](http://ibm.com) サーバーにログインしなければならない場合があります。IBM ID をお持ちでない場合は、登録できます。

### このタスクについて

フィックスパックのインストールは、2 段階のプロセスです。まず、IBM Installation Manager を使用してフィックスパック資産をダウンロードして解凍し、次に、解凍されたフィックスパック資産をコマンド行スクリプトを使用して手動でインストールする必要があります。

**制約事項:** InfoSphere MDM のフル・プロダクトとフィックスパックの両方を単一の Installation Manager セッションでインストールすることはできません。まず、

Installation Manager のインストール・モードで InfoSphere MDM をフルインストールし、次に、別の Installation Manager セッションでフィックスパックを更新モードで適用する必要があります。

## 手順

1. ファイアウォールの内側にいる場合は、事前定義された InfoSphere MDM フィックスパック・リポジトリに IBM Installation Manager が確実に接続できるようにプロキシを構成してください。詳しくは、関連するリンクを参照してください。

**ヒント:** ファイアウォールの内側にいるが、所属組織がプロキシの使用を許可していない場合は、IBM Fix Central などの別のソースからフィックスパックを取得する必要があります。

- a. Fix Central でフィックスパックを見つけてローカル・ディレクトリー `MDM_INSTALL_HOME/updates` にダウンロードします。
  - b. ダウンロードしたフィックスパックの ZIP ファイルを解凍します。
  - c. IBM Installation Manager を開始します。
  - d. 「ファイル」 > 「設定...」と選択してから、「リポジトリの追加...」をクリックします。
  - e. 「参照...」をクリックして、解凍したフィックスパック・ディレクトリーにナビゲートし、`MDM_INSTALL_HOME/updates/fix_pack_version/delta/repository.config` を選択します。「OK」をクリックします。
  - f. 「適用」、「OK」の順にクリックします。
  - g. IBM Installation Manager を閉じます。
2. IBM Installation Manager を開始します。
  3. 「更新」をクリックします。
  4. プロンプトが出されたら、IBM ID 資格情報を入力します。
  5. 適用するフィックスパックの更新を選択し、「次へ」をクリックします。
  6. ライセンス条項を読み、受諾します。
  7. 「Upgrade Summary」ページで、フィックスパックおよびそれによって解決される問題について読み、「Upgrade」をクリックします。Installation Manager は、フィックスパック成果物をファイル・システムにダウンロードして抽出します。抽出されたフィックスパック・ファイルは `MDM_INSTALL_HOME/updates/fix_pack_version` にあります。

**重要:** いずれかの InfoSphere MDM コンポーネントをフィックスパックによる更新から除外する場合は、この手順を実行する前に、抽出された `FeatureFixpackApplied.properties` ファイルを変更する必要があります。詳しくは、関連するリンクを参照してください。



8. InfoSphere MDM サーバー、Web アプリケーション、およびアプリケーション・サーバーをすべて始動します。
9. コマンド・プロンプトを開き、`MDM_INSTALL_HOME/mds/scripts` にナビゲートします。
10. フィックスパックを適用するスクリプトを実行します (`./madconfig.sh Apply_Fixpack`)。

11. スクリプトのプロンプトに従ってパスワードを指定します。
12. InfoSphere MDM サーバー、Web アプリケーション、およびアプリケーション・サーバーをすべて再始動します。

**関連タスク:**

『指定したコンポーネントをフィックスパックから除外』

**関連情報:**

-  IBM Installation Manager: ウィザード・モードの使用によるパッケージの更新
-  IBM Installation Manager: インターネットの設定

---

## 指定したコンポーネントをフィックスパックから除外

任意の InfoSphere MDM コンポーネントをフィックスパックによる更新から除外するには、フィックスパックをインストールするスクリプトを実行する前に、抽出した `FeatureFixpackApplied.properties` ファイルを変更する必要があります。

### 始める前に

この手順を実行するには、その前に、フィックスパック成果物のダウンロードおよび抽出を既に完了している必要があります。詳しくは、関連するリンクを参照してください。

### このタスクについて

InfoSphere MDM インスタンスに、変更または拡張済みのコンポーネントが含まれている場合、これらのコンポーネントをフィックスパックによる更新から除外したいと考えるかもしれません。例えば、特定の InfoSphere MDM ユーザー・インターフェースに変更を加えた場合、そのユーザー・インターフェースをフィックスパックの更新から除外することを選択すれば、カスタマイズ内容を保持することができます。

### 手順

1. `MDM_INSTALL_HOME/backup/fix_pack_version` にナビゲートします。
2. `FeatureFixpackApplied.properties` を開きます。

このプロパティ・ファイルには、プロパティのリスト (各プロパティが InfoSphere MDM コンポーネントに対応している) が含まれています。各コンポーネントをフィックスパックの更新に組み込む、または除外することを選択できます。デフォルトでは、すべてのコンポーネント・プロパティの値は `NO` であり、コンポーネントが除外されず、更新されることを意味します。

3. コンポーネントをフィックスパックによる更新から除外するには、その対応する値を `YES` に変更します。
4. ファイルの変更内容を保存します。 フィックスパックのインストール・スクリプトを実行するときに、`YES` にマークが付けられたコンポーネントは更新されません。

**関連タスク:**

203 ページの『フィックスパックのインストール』

---

## 適用済みのフィックスパックのロールバック

フィックスパックの適用後にそれを削除することを決定した場合は、更新をロールバックすることができます。

### このタスクについて

フィックスパックのロールバックは、2 段階のプロセスです。まず、一部の構成更新を手動でロールバックし、次に、IBM Installation Manager を使用して、残りのフィックスパック要素をロールバックしてロールバック・プロセスを完了する必要があります。

### 手順

1. 該当するフィックスパックの README ファイルの指示に従って、手動で構成変更をロールバックします。手動によるロールバック手順が、ロールバック・プロセスの第 1 段階です。この手動手順を、適用されたフィックスパックの削除の一環として完了させることが重要です。
2. 次のようにして、IBM Installation Manager を使用してロールバック・プロセスを実行します。
  - a. IBM Installation Manager を開始します。
  - b. 「ロールバック」を選択してから、「次へ」をクリックします。
  - c. ロールバックするバージョンを選択してから、「次へ」をクリックします。
  - d. 「ロールバック」をクリックします。IBM Installation Manager がロールバック・プロセスを実行します。

---

## 第 5 章 Standard Edition または Advanced Edition のインストールのトラブルシューティング

Standard Edition または Advanced Edition のインストールが失敗した場合、トラブルシューティング・ステップを試行して、既知のエラーを確認することができます。

### 症状

インストールの完了後、IBM Installation Manager の「Installation Complete」パネルで、エラー・メッセージを確認できる場合があります。インストール・ログ、またはインストール検証テストから、エラーを確認することもできます。

最後のインストーラー・パネルに表示される成功メッセージは、検証テストがインストール・プロセスの一環として自動的に実行されたことを示します。

データベース、アプリケーション・サーバー、または IBM Installation Manager の問題の場合、それぞれのツールを使用して、個々のエラー状態を診断し、訂正します。

### 問題の解決

1. インストール・ログのメッセージを確認し、エラー状態を見つけます。
2. ソリューションまたは回避策のエラー・トピックで説明されているエラー状態を確認します。この文書化されたエラーは、発生する可能性のあるすべてのエラーを網羅するリストではありません。ログに示されているエラーがリストされていない場合は、IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。
3. エラーの訂正後、インストール・プログラムを再実行します。

#### 関連タスク

WebSphere Application Server でのテスト・クライアントを使用したインストールの検証

InfoSphere MDM インストール・ログの表示

---

## インストール・エラー

リストされているエラーは、MDM インストール中に発生する可能性のあるエラーの抽出です。このリストは、すべてのエラーを網羅するリストではありません。ログに示されているエラーがリストされていない場合は、IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。

**重要:** エラー・トピックに示されているログの内容は、単なる例に過ぎません。ご使用の実装環境で表示される実際のログ・ファイルの名前、パス、タイム・スタンプなどは、例に示されているものとは異なります。

#### 関連情報

 IBM Installation Manager の資料

## インストール・エラー: AppManagement MBean での checkIfAppExists 操作でアクセスが拒否されます

AppManagement MBean での checkIfAppExists 操作でアクセスが拒否されます。

### 説明

アンインストール中に、アンインストール・パネルで間違った SOAP パスワードが入力されると、アンインストールが失敗する可能性があります。この問題が発生すると、インストーラーはアンインストール・セッションを中断し、エラー・メッセージを表示します。

エラー・メッセージは、次の IBM Installation Manager ログ・ファイルのサンプル・メッセージのようになります。

```
Error uninstalling. CRIMA1076E: Error executing
"/opt/IBM/MDM/E455/mdm/mds/scripts/madconfig.sh" operation (status=255).
See agent output log for more information:
/home/var/ibm/InstallationManager_LocalTesting_AE007/logs/native/TIME_STAMP.log
CRIMA1076E: Error executing "/opt/IBM/MDM/E455/mdm/mds/scripts/madconfig.sh"
operation (status=255). See agent output log for more information:
/home/var/ibm/InstallationManager_LocalTesting_AE007/logs/native/TIME_STAMPa.log
CRIMA1076E: Error executing "/opt/IBM/MDM/E455/mdm/mds/scripts/madconfig.sh"
operation (status=1). See agent output log for more information:
/home/var/ibm/InstallationManager_LocalTesting_AE007/logs/native/20130506_1551b.log
CRIMA1076E: Error executing "/opt/IBM/MDM/E455/mdm/mds/scripts/madconfig.sh"
operation (status=1). See agent output log for more information:
/home/var/ibm/InstallationManager_LocalTesting_AE007/logs/native/TIME_STAMPc.log
CRIMA1076E: Error executing "/opt/IBM/MDM/E455/mdm/mds/scripts/madconfig.sh"
operation (status=255). See agent output log for more information:
/home/var/ibm/InstallationManager_LocalTesting_AE007/logs/native/TIME_STAMP.log
CRIMA1076E: Error executing "/opt/IBM/MDM/E455/mdm/mds/scripts/madconfig.sh" operation
(status=255). See agent output log for more information:
/home/var/ibm/InstallationManager_LocalTesting_AE007/logs/native/TIME_STAMP.log

Buildfile: build.xml

uninstall_mds_ws_api:
.....
trustFilePwd is *****
com.ibm.websphere.management.exception.AdminException:
 at com.ibm.websphere.management.application.AppManagementProxy.proxyInvoke
(AppManagementProxy.java:192)
 at com.ibm.websphere.management.application.AppManagementProxy.checkIfAppExists
(AppManagementProxy.java:269)
 at com.ibm.mdm.de.config.appserver.core.MDSAppDeploy.checkIfAppExists
(MDSAppDeploy.java:165)
 at com.ibm.mdm.de.config.appserver.configurator.MSDSDeployAppConfigurator.configure
(MSDSDeployAppConfigurator.java:24)
 at com.ibm.mdm.de.config.appserver.remoteclient.command.MSDSDeployAppRemoteCommand.performUninstall
(MSDSDeployAppRemoteCommand.java:36)
 at com.ibm.mdm.de.config.appserver.remoteclient.command.MSDSDeployAppRemoteCommand.execute
(MSDSDeployAppRemoteCommand.java:22)
 at com.ibm.mdm.de.config.appserver.remoteclient.MDSRemoteClient.execute
(MDSRemoteClient.java:26)
 at com.ibm.mdm.de.ant.task.UninstallMDSWSAPITask.execute(UninstallMDSWSAPITask.java:84)
 at org.apache.tools.ant.UnknownElement.execute(UnknownElement.java:275)
 at org.apache.tools.ant.Task.perform(Task.java:364)
```

### 解決法

MDM データベースのアンインストールが成功したが、InfoSphere MDM 運用サーバーのアンインストールに失敗した場合、運用サーバーを手動でアンインストールする必要があります。

1. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を使用して、InfoSphere MDM デプロイメント・モジュール、およびビジネス・レベル・アプリケーションをアンインストールします。



2. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を使用して、  
com.ibm.mdm.hub.server.app-<>.eba および  
com.ibm.mdm.server.resources.properties-<>.jar 資産をアンインストールし  
ます。
3. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を使用して、ローカル・リポジトリ・バンドル com.ibm.mdm.mds.api.app、  
com.ibm.mdm.mds.jni.app、com.ibm.mdm.server.jaxrpcws.cba、および  
com.ibm.mdm.thirdparty.cba をアンインストールします。
4. デプロイメント・ターゲット (サーバーまたはクラスター) を削除して、JDBC  
プロバイダー、データ・ソース、およびメッセージング・プロバイダーなどの  
InfoSphere MDM 構成オブジェクトをドロップします。

## インストール・エラー: AdminTask

AdminTask エラーがインストール障害の原因となる可能性があります。

### 説明

この問題が原因で、InfoSphere MDM インストールが失敗し、インストールの完全ロールバックがトリガーされる場合があります。この問題は、InfoSphere MDM インストールの一環として、Business Administration UI アプリケーション、Data Stewardship UI アプリケーション、または品目保守 UI アプリケーションをインストールしている際に発生する可能性があります。この問題は、IBM WebSphere Application Server Deployment Manager の InfoSphere MDM インストール・アプリケーションと対話する機能に関連しています。この問題が発生した場合、インストール・セッションは停止し、エラー・メッセージが出され、インストール・ロールバックがトリガーされます。

警告メッセージは、次の IBM Installation Manager ログ・ファイルのサンプル・メッセージのようになります。

```
Error occurred in phase: install SU: com.ibm.mdm.ba.webapp 11.0.0.v20130410-1220
IU: com.ibm.mdm.ui.ba.config.server_create.config.objects.on.server
null->11.0.0.v20130410-1220
Message: Error executing the /usr/IBM/WebSphere/AppServer8502ND/bin/wsadmin.sh
command: status=105. For more information, see the agent log file:
/home/wsadmin/var/ibm/InstallationManager_H001/logs/native/TIME_STAMP.log

WASX7209I: Connected to process "dmgr" on node myCellManager01 using SOAP connector;
The type of process is: DeploymentManager
WASX8011W: AdminTask object is not available.
WASX7303I: The following options are passed to the scripting environment and are available
as arguments that are stored in the argv variable:
"[myCell01, None, myNode01, mdm-s3-H080, default_host]"
Setting up application server and VirtualHost for WCC UIs...
Cell name :myCell01
Cluster name :None
Node name :myNode01
Server name :mdm-s3-H080
VirtualHost Name :default_host
Setting up server mdm-s3-H080 at node myNode01 in cell myCell01...
Server 'mdm-s3-H080' does not exist. Creating new server from template 'default'...

server is 'mdm-s3-H080'
Adding new alias with ports to virtual host...
WC_defaulthost Port to be added : 9080
WC_defaulthost_secure Port to be added : 9443
Added new alias with ports to virtual host!!

Added ORB timeout for server:mdm-s3-H080
modify cookie security
create property com.ibm.ws.webcontainer.HTTPOnlyCookies
```

```
WASX7017E: Exception received while running file
"/usr/IBM/MDM/H080/Shared/tmp/script/wccUISetupAppServer.py";
exception information: com.ibm.bsf.BSFException: exception from Jython:
Traceback (innermost last):
File "<string>", line 198, in ?
File "<string>", line 131, in createProperty
NameError: AdminTask
```

```
WASX7341W: No "save" was performed before the interactive scripting session exited;
configuration changes will not be saved.
```

## 解決法

1. IBM WebSphere Application Server Deployment Manager JVM のヒープ・サイズを 1024/2048 に増やします。
2. MDM インストールを再度実行します。
3. MDM のインストール中は、IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を使用しないようにします。

## インストール・エラー: AdminTask オブジェクトは使用できません

AdminTask オブジェクトは使用できません。

## 説明

このエラーが原因で、インストーラーがロール・マッピング設定を処理しようとしたときに問題が発生したことによる障害が、IVT 応答ファイルに表示される可能性があります。この問題は、IBM WebSphere Application Server Deployment Manager の、InfoSphere MDM インストール・アプリケーションと対話する機能に関連しています。この問題が発生すると、インストーラーはインストールの終わりに達しますが、IVT (インストール検証ツール) が成功しなかったことを示すことがあります。

IVT は、以下の例外を示します。

```
CORBA NO_PERMISSION 0x0 No; nested exception is:
org.omg.CORBA.NO_PERMISSION:
>> SERVER (id=5b5ab1aa, host=evg01.torolab.ibm.com) TRACE START:
>> org.omg.CORBA.NO_PERMISSION: java.rmi.AccessException: ; nested exception is:
com.ibm.websphere.csi.CSIAccessException: SECJ0053E: Authorization failed
for defaultWIMFileBasedRealm/mdmadmin while invoking
(Home)com.ibm.mdm.hub.server-
E457..11.0.0..com.ibm.mdm.server.dwlcommonservlets.ejb..11.0.0.FP00IF000_20130503-1713.war
#com.ibm.mdm.server.dwlcommonservlets.ejb..11.0.0.FP00IF000_20130503-1713.war
#DWLServiceController create::2 is not granted any of the required roles:
ServiceConsumer ServiceProvider vmcid: 0x0 minor code: 0 completed: No
>> at com.ibm.ws.security.core.SecurityCollaborator.performAuthorization(SecurityCollaborator.java:626)
>> at com.ibm.ws.security.core.EJSSecurityCollaborator.preInvoke(EJSSecurityCollaborator.java:265)
>> at com.ibm.ejs.container.EJSContainer.EjbPreInvokeForStatelessCreate(EJSContainer.java:4561)
>> at com.dwl.base.requestHandler.beans.EJSRemoteCSLDWLServiceControllerHome_2c54996d.create
(EJSRemoteCSLDWLServiceControllerHome_2c54996d.java)
>> at com.dwl.base.requestHandler.beans.EJSRemoteCSLDWLServiceControllerHome_2c54996d.Tie.create
(_EJSRemoteCSLDWLServiceControllerHome_2c54996d.Tie.java:1)
>> at com.dwl.base.requestHandler.beans.EJSRemoteCSLDWLServiceControllerHome_2c54996d.Tie._invoke
(_EJSRemoteCSLDWLServiceControllerHome_2c54996d.Tie.java)
>> at com.ibm.CORBA.iioop.ServerDelegate.dispatchInvokeHandler(ServerDelegate.java:669)
>> at com.ibm.CORBA.iioop.ServerDelegate.dispatch(ServerDelegate.java:523)
>> at com.ibm.rmi.iioop.ORB.process(ORB.java:523)
>> at com.ibm.CORBA.iioop.ORB.process(ORB.java:1575)
>> at com.ibm.rmi.iioop.Connection.doRequestWork(Connection.java:3039)
>> at com.ibm.rmi.iioop.Connection.doWork(Connection.java:2922)
>> at com.ibm.rmi.iioop.WorkUnitImpl.doWork(WorkUnitImpl.java:64)
>> at com.ibm.ws.giop.threadpool.WorkQueueElement.dispatch(WorkQueueElement.java:165)
>> at com.ibm.ws.giop.filter.GiopFilterChain.processMessage(GiopFilterChain.java:203)
>> at com.ibm.ws.giop.threadpool.PooledThread.handleRequest(PooledThread.java:81)
```

```
>> at com.ibm.ws.giop.threadpool.PooledThread.run(PooledThread.java:102)
>> at com.ibm.ws.util.ThreadPool$Worker.run(ThreadPool.java:1814)
>> SERVER (id=5b5ab1aa, host=evg01.torolab.ibm.com) TRACE END.
vmcid: 0x0 minor code: 0 completed: No
```

警告メッセージは、次の IBM Installation Manager ログ・ファイルのサンプル・メッセージのようになります。

```
Problem with executing "/usr/IBM/WebSphere/AppServer8502ND/bin/wsadmin.sh"
operation (status=105). See agent output log for more information:
/home/ws8admin/var/ibm/InstallationManager_H001/logs/native/TIME_STAMP.log
/home/ws8admin/var/ibm/InstallationManager_H001/logs/native/TIME_STAMP.log
shows message similar to following
WASX7209I: Connected to process "dmgr" on node myCellManager01 using SOAP
connector; The type of process is: DeploymentManager
WASX8011W: AdminTask object is not available.
WASX7303I: The following options are passed to the scripting environment and
are available as arguments that are stored in the argv variable:
"--blaName, MDM-operational-server-EBA-H085, --ebaPrefix, com.ibm.mdm.hub.server.app,
--blaUser, mdmadmin, --wsName, MDM-web-services-H085,
--blaPwd, mdmadmin]"
Configuring application security

AdminBLA: List composition units in a BLA
BLA ID (or BLA name): MDM-operational-server-EBA-H085
Optional parameter:
Display description:
Usage: AdminBLA.listCompUnits("MDM-operational-server-EBA-H085", "")
Return: List the composition units within the specified business-level application.

```

```
Exception: exceptions.NameError AdminTask
WASX7017E: Exception received while running file
"/usr/IBM/MDM/H085/Shared/tmp/script/RoleMapping.py"; exception information:
com.ibm.bsf.BSFException: exception from Jython:
Traceback (innermost last):
File "<string>", line 144, in ?
File "<string>", line 28, in retrieveCompUnitID
File "/usr/IBM/WebSphere/AppServer8502ND/scriptLibraries/application/V70/AdminBLA.py",
line 763, in listCompUnits
ScriptLibraryException: : 'exceptions.NameError AdminTask'
```

## 解決法

1. IBM WebSphere Application Server Deployment Manager JVM のヒープ・サイズを 1024/2048 に増やします。
2. InfoSphere MDM のインストールを再実行します。
3. InfoSphere MDM のインストール中は、IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を使用しないようにします。

## インストール・エラー: バインド処理がアクティブではありません

[DB2 JDBC Driver] バインド処理がアクティブではありません。

### 説明

IBM DB2 for z/OS では、DB2 Wire Protocol ドライバーは、接続を予定するすべてのサーバーに適切なパッケージが存在していないと、正しく機能しません。ドライバーがパッケージを作成し、バインドするには、ユーザー ID に BINDADD 特権が必要です。バインド・パッケージが配置されていない場合、運用サーバーで InfoSphere MDM データ・ソースへの接続をテストしている間に、以下のメッセージが表示されます。

```
java.sql.SQLException: [IBM][DB2 JDBC Driver]Bind process is not active.
Please ensure that the user has permissions to create packages.
Packages cannot be created in an XA Connection. DSR40010E: SQL State = HY000, Error Code = 0.
```

## 解決法

データベース・ユーザー ID が MDM データベースにおける BINDADD 特権を保持していることを確認します。

1. データベース管理者 (DBA) ユーザーとしてログインします。
2. MDM データベースに接続します。
3. データベース・ユーザー (*dbuser*) に BINDADD 特権を付与します。
4. DBA ユーザー・アカウントからログアウトします。
5. データベース・ユーザー・アカウントを使用してログインします。データベース・ユーザー・アカウントが DB2 Wire Protocol ドライバーを使用してデータベースに接続すると、自動的に正しいパッケージが作成されます。

注: デフォルトでは、パッケージは 200 個の動的セクションを含んでおり、NULLID という名前のコレクションに作成されます。

この問題の追加の詳細については、関連リンクを参照してください。

### 関連情報



The DB2 Wire Protocol Driver and Packages

## インストール・エラー: UI へのログイン後に空白ページが表示されます

Business Administration UI、Data Stewardship UI、または品目保守 UI へのログイン後に、空白ページが表示されることがあります。

### 説明

IBM WebSphere Application Server SystemOut.log ファイルで認証エラー・メッセージが確認できる場合があります。この空白ページは、アプリケーションのセキュリティ役割からユーザー/グループへのマッピングが原因で表示される可能性があります。空白ページが役割マッピングの問題であるかどうかを確認する手順は、以下のとおりです。

1. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console を開きます。
2. 「アプリケーション」 > 「アプリケーション・タイプ」 > 「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」から、UI アプリケーションを選択します。
3. 「セキュリティ役割からユーザー/グループへのマッピング (Security role to user/group mapping)」をクリックして、すべての役割が「なし」に設定されていることを確認します。

### 解決法

1. UI アプリケーションのページで、役割を選択します。
2. 「特殊なサブジェクトのマップ (Map Special subjects)」をクリックしてから、「アプリケーションのレルムですべて認証済み (All Authenticated in Application's Realm)」を選択します。
3. 「OK」をクリックして保存します。
4. サーバーを再始動します。

## インストール・エラー: 資産 com.ibm.mdm.hub.server.app.eba を追加できません

資産 com.ibm.mdm.hub.server.app-*name*.eba を追加できません。

### 説明

このエラーは、エンタープライズ・バンドル・アーカイブ (EBA) のデプロイ中に問題が発生したため、IVT 応答ファイルが使用不可であることを意味します。InfoSphere MDM のインストール中にIBM WebSphere Application Server が com.ibm.mdm.hub.server.app-*name*.eba ファイルをデプロイできない場合、このエラーがログに記録されます。EBA ファイルは、InfoSphere MDM インストール・デプロイメント・アーカイブの 1 つです。この問題が発生すると、インストーラーはインストール・タスクの終わりまで処理して InfoSphere MDM をインストールできますが、IVT (インストール検証ツール) が成功しなかったことを示すことがあります。IBM Installation Manager ログ・ファイルでエラー・メッセージを確認できます。

エラー・メッセージは、次の IBM Installation Manager ログ・ファイルのサンプル・メッセージのようになります。

```
Custom operation MDM Operational Server, deploying enterprise business application (EBA) on target server1 in unit com.ibm.mdm.mdm_config.install.eba.win completed: output in TIME_STAMP.log
```

```
Buildfile: build.xml
```

```
install_mdm_eba:
Creating new property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Updating property file: C:\IBM\E443\MDM\properties\install_mdm_eba.properties
Expanding: C:\IBM\E443\MDM\InstallableApps\com.ibm.mdm.hub.server.app.eba into
C:\IBM\E443\MDM\tmp\mdm_eba_temp_TIME_STAMP
entering ConfigEBATask
baseDir is ../../tmp/mdm_eba_temp_TIME_STAMP/
ebaID is E443
versionFilePath is ./MDM_VERSION
Begin to modify the file.
Begin to read the File.
Read the file successfully.
Begin to write the modified file.
Write the modified file successfully.
Modify the file successfully.
Begin to read version.
Read the file successfully: 11.0.0
Begin to record version.
Record version successfully: C:\IBM\E443\MDM\mds\scripts\%.MDM_VERSION
.....
Set cuSourceID parameter to assetname=com.ibm.mdm.hub.server.app-E443.eba
Failed from asyncCmdClientHelper.processCommandParameters(cmd).
com.ibm.wsspi.management.bla.op.OpExecutionException: CWSAL0022E: Cannot add asset
com.ibm.mdm.hub.server.app-E443.eba because bundles that it requires
are not downloaded. To start the bundle download, save changes to the
master configuration after importing the asset.
at com.ibm.ws.management.bla.commands.ADTCommand.finishOp(ADTCommand.java:320)
at com.ibm.ws.management.bla.commands.ADTCommand.opCompleted(ADTCommand.java:428)
at com.ibm.wsspi.management.bla.op.Operation.notifyListeners(Operation.java:170)
```

```
at com.ibm.wsspi.management.bla.op.Operation.execute(Operation.java:242)
at com.ibm.wsspi.management.bla.op.compound.CompoundOperation.execute(CompoundOperation.java:83)
at com.ibm.ws.management.bla.commands.ADTCommand$OperationScheduler.run(ADTCommand.java:672)
at java.lang.Thread.run(Thread.java:773)
.....
```

## 解決法

1. InfoSphere MDM をデプロイするマシンがハードウェア要件を満たしていること、および少なくとも 8G の RAM を保持していることを確認します。
2. 必須ではないその他のアプリケーション (特に、JVM を実行しているアプリケーション) をシャットダウンします。
3. InfoSphere MDM をアンインストールして、もう一度インストールしてください。

## インストール・エラー: httpPort プロパティをブランクにすることはできません

httpPort プロパティをブランクにすることはできません。

### 説明

この問題が原因で、InfoSphere MDM インストールが失敗し、インストールの完全ロールバックがトリガーされる場合があります。

この問題が発生する原因として、以下の 2 つのケースが考えられます。

- InfoSphere MDM のインストール時に IBM WebSphere Application Server ノード・エージェントが InfoSphere MDM インストール・アプリケーションとの対話を処理できない。
- InfoSphere MDM デプロイメント・モジュールのインストール中に、サーバーがデプロイメント・ターゲットとして使用する HTTP トランスポート・チェーンが無効になっている。

これらの状態が発生した場合、インストール・セッションは中断し、インストール・アプリケーションは、インストール・ロールバックがトリガーされる前にエラー・メッセージを表示します。

警告メッセージは、次の IBM Installation Manager ログ・ファイルのサンプル・メッセージのようになります。

```
Error occurred in phase: install SU: com.ibm.mdm.application.server.component.config.server
11.0.0.FP00IF000_20130502-1800 IU: com.ibm.mdm.mdm_config.install.ws.api.unix
null->999.999.999.1127209126
Message: Error executing "/opt/IBM/MDM/E453/mdm/mds/scripts/madconfig.sh"
operation (status=1). See agent output log for more information:
/home/var/ibm/InstallationManager_LocalTesting_AE007/logs/native/TIME_STAMP.log

Buildfile: build.xml

install_mds_ws_api:
Creating new property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
Updating property file: /opt/IBM/MDM/E453/mdm/properties/install_mds_ws_api.properties
```



```
BUILD FAILED
/opt/IBM/MDM/E453/mdm/mds/scripts/build-utils-app.xml:1508:
The following error occurred while executing this line:
/opt/IBM/MDM/E453/mdm/mds/scripts/build-utils-config.xml:618:
ERROR: httpPort property cannot be blank.
```

Total time: 1 second

## 解決法

1. IBM WebSphere Application Server ノード・エージェントが稼働中であることを確認してください。ノード・エージェントを開始し、InfoSphere MDM インストールを再度実行します。クラスター環境にデプロイしている場合は、そのクラスター内のすべてのノードを開始してください。
2. IBM WebSphere Application Server ノード・エージェントが Deployment Manager と適切に同期されていることを確認します。ノード・エージェントを同期し、InfoSphere MDM インストールを再度実行します。クラスター環境にデプロイしている場合は、そのクラスター内のすべてのノードを同期してください。
3. サーバーが HTTP トランスポート・チェーンをデプロイメント・ターゲットとして使用することが不可になっていないことを確認してください。
  - a. WebSphere Application Server Integrated Solutions Console で、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」 > 「<クラスター・メンバー名>」 > 「ポート」と移動します。
  - b. 使用可能なポートのリストで、WC\_defaulthost を見つけて「関連付けられたトランスポートの表示 (View associated transports)」をクリックします。
  - c. HttpQueueInboundDefault に移動し、「有効にする (Enable)」を選択してから、「OK」をクリックして変更内容を保存します。
  - d. WCInboundDefault に移動し、「有効にする (Enable)」を選択してから、「OK」をクリックして変更内容を保存します。
  - e. 上記のステップをクラスター・メンバーごとに完了させて、クラスター全体を再始動します。

ヒント: クラスター・メンバーの再始動は機能しません。クラスター全体を再始動する必要があります。

## アンインストール・エラー: インストーラーが仮想 MDM 表をドロップしません

IBM DB2 for z/OS と共に InfoSphere MDM をアンインストール中に、インストーラーが仮想 MDM 表をドロップしません。

### 解決法

手動で表をドロップする必要があります。仮想 MDM 表の完全なリストは、MDM\_INSTALL\_HOME/mds/sql/mpihub.db2z.sto ファイルで確認できます。

## インストール・エラー: 'java.lang.RuntimeException: アプリケーションを初期化できませんでした

java.lang.RuntimeException: アプリケーションを初期化できませんでした。アプリケーション名とバージョンを解決できませんでした。



## 説明

この問題が原因で、IVT (インストール検証ツール) の応答ファイルが NULL を表示することがあります。これは、InfoSphere MDM インストールの完了後に InfoSphere MDM 構成リポジトリ・データが欠落しているためです。この問題は、データベース表の作成およびデータ設定プロセスの間の障害に関連しています。この問題が発生した場合、インストーラーは InfoSphere MDM インストールを完了でき、IVT 応答ファイルが NULL であることを示します。

このエラー・メッセージは、IBM WebSphere Application Server SystemOut.log ファイルの次のサンプル・メッセージのようになります。

```
TIME_STAMP] 0000006f TopologySessi E java.lang.RuntimeException: Application could
not be initialized. Application Name and Version could not be resolved.
 at com.dwl.management.config.cache.CachingLoaderHelperImpl.initApplication
(CachingLoaderHelperImpl.java:171)
 at com.dwl.management.config.cache.CachingLoaderHelperImpl.getApplicationName
(CachingLoaderHelperImpl.java:185)
```

## 解決法

1. `MDM_INSTALL_HOME/logs/database` に保管されているインストール・ログ・ファイルを検索して、このエラーの考えられる原因を見つけます。以下のテキストを検索して、このエラーに関連することが知られているメッセージの場所を見つけます。
  - Custom operation MDM Operational Server, updating data in Configuration Repository tables in unit  
com.ibm.mdm.mdm\_config.update.appsoftware.table.unix completed:
  - Custom operation MDM Operational Server, Updating Configuration Repository to setup matching type in unit  
com.ibm.mdm.mdm\_config.update.PME.tables completed:
2. データベース接続の問題があれば、すべて修正します。
3. InfoSphere MDM をアンインストールして、もう一度インストールしてください。

## インストール・エラー: OutOfMemoryError - PermGen スペース

WebSphere Application Server のデフォルトの `ws_ant.sh` プロセスで PermGen スペースのメモリーが不足している場合に、このエラーは発生します。

## 説明

この問題は、Solaris 環境に影響を与えます。1 つ以上のユーザー・インターフェース・アプリケーションを含む InfoSphere MDM インストール環境は、IBM Installation Manager ネイティブ・ログ・ファイルに次のエラーを出して失敗することがあります。

```
[timestamp] [main] INFO
com.ibm.mdm.de.config.appserver.core.MDMWebAppDeploy.roleMapping(Line:214) - =====
java.lang.OutOfMemoryError: PermGen space
PermGen space
```

## 解決法

InfoSphere MDM をインストールする前に、PermGen スペースのメモリー・サイズを拡張します。

1. \$WAS\_HOME/bin/ws\_ant.sh を開きます。
2. ws\_ant.sh ファイルで、Java コマンド・ライン引数として  
"-XX:MaxPermSize=256m" を追加します。  

```
eval "$JAVA_EXE" "-XX:MaxPermSize=256m"
```

## インストール・エラー: SSL ハンドシェイク障害

グラフィカル・ユーザー・インターフェースをサポートしないマシンに InfoSphere MDM をサイレント・インストール・モードでインストールすると、「SSL ハンドシェイク障害 (SSL handshake failure)」メッセージが表示されて、インストールが失敗することがあります。

### 説明

InfoSphere MDM のインストール時に IBM WebSphere Application Server の「SSL ハンドシェイク (SSL handshake)」ポップアップ・ウィンドウが想定どおりに開かない場合、ノード・エージェントは InfoSphere MDM インストール・アプリケーションとの対話を処理できません。この問題が原因で、InfoSphere MDM インストールが失敗し、インストールの完全ロールバックがトリガーされます。

警告メッセージは、次の IBM Installation Manager ログ・ファイルのサンプル・メッセージのようになります。

```
Updating property file: /app_2/IBM/MDM/KM1Dev05/mdm/properties/sync_nodes.properties
Updating property file: /app_2/IBM/MDM/KM1Dev05/mdm/properties/sync_nodes.properties
Updating property file: /app_2/IBM/MDM/KM1Dev05/mdm/properties/sync_nodes.properties
Updating property file: /app_2/IBM/MDM/KM1Dev05/mdm/properties/sync_nodes.properties
Updating property file: /app_2/IBM/MDM/KM1Dev05/mdm/properties/sync_nodes.properties
entering SyncNodesTask
wasUser is mdmadmin
wasPwd is *****
hostname is M2848
port is 28879
trustFile is /m1/mdm/WebSphere85dev/AppServer/etc/DummyClientTrustFile.jks
trustFilePwd is *****
node is None
CWPKI0308I: Adding signer alias "CN=M2848, OU=Root Certifica" to local
 keystore "null" with the following SHA digest:
 33:1A:02:2A:C1:10:77:AD:09:3F:FF:CB:F8:8B:49:53:22:3F:5A:89

CWPKI0022E: SSL HANDSHAKE FAILURE: A signer with SubjectDN "CN=M2848, OU=c1_mdm_dev, OU=dm_c1_mdm_dev,
O=ACME5, C=US" was sent from target host:port "10.87.17.230:28879".
The signer may need to be added to local trust store
"/m1/mdm/WebSphere85dev/AppServer/etc/DummyClientTrustFile.jks" located in SSL configura-
tion alias "null" loaded from
SSL configuration file "null". The extended error message from the SSL handshake exception is:
"PKIX path building failed: java.security.cert.CertPathBuilderException:
PKIXCertPathBuilderImpl could not build a valid CertPath.; internal cause is:
 java.security.cert.CertPathValidatorException: The certificate issued by CN=M2848,
OU=Root Certificate, OU=01_mdm_dev, OU=dm_c1_mdm_dev, O=ACME5,
C=US is not trusted; internal cause is:
 java.security.cert.CertPathValidatorException: Certificate chaining error".
CWPKI0040I: An SSL handshake failure occurred from a secure client. The server's SSL signer has to be
added to the client's trust store. A retrieveSigners utility is provided
to download signers from the server but requires administrative
permission. Check with your administrator to have this utility run to
setup the secure environment before running the client. Alternatively,
the com.ibm.ssl.enableSignerExchangePrompt can be enabled in ssl.client.props
for "DefaultSSLSettings" in order to allow acceptance of the signer during the
connection attempt.
Exception in com.ibm.mdm.de.ant.task.SyncNodesTask
```

```
com.ibm.websphere.management.exception.ConnectorException: ADMC0016E: The system cannot create a SOAP
connector to connect to host M2848 at port 28879.
ADMC0016E: The system cannot create a SOAP connector to connect to host M2848 at port 28879.
existing SyncNodesTask
```

## 解決法

- 以下のいずれかの回避策を適用します。
  - サーバーの SSL 署名者をクライアントのトラストストアに追加します。
    - retrieveSigners ユーティリティを使用して、署名者をサーバーからダウンロードします。
    - 署名者をクライアントのトラストストアに追加します。

注: retrieveSigners ユーティリティには管理権限が必要です。クライアントを実行する前に、このユーティリティを実行してセキュア環境をセットアップするには、管理者に問い合わせてください。

  - 次のようにして、接続の試行時に署名者の受け入れを許可します。
    - DefaultSSLSettings の ssl.client.props ファイルで、com.ibm.ssl.enableSignerExchangePrompt プロパティを有効にして、接続の試行時に署名者の受け入れを許可します。
- InfoSphere MDM のインストールを再実行します。

## アンインストール・エラー: システムはポート 88xx でホスト localhost に接続するための SOAP コネクターを作成できませんでした

システムは、ポート 88xx でホスト localhost に接続するための SOAP コネクターを作成できませんでした。

## 説明

アンインストール機能は、アンインストールを処理する前に、IBM WebSphere Application Server Dmgr (Network Deployment の場合) または Server (基本デプロイメントの場合) が実行されているかどうかを検証しません。InfoSphere MDM のアンインストール中にそれらが実行されていない場合、インストーラーはホストに接続するための SOAP コネクターを作成できません。アンインストール・プロセスは正常に続行できますが、IBM WebSphere Application Server 関連のリソースは一切削除されません。

エラー・メッセージは、次の IBM Installation Manager ログ・ファイルのサンプル・メッセージのようになります。

```
com.ibm.websphere.management.exception.ConnectorException: ADMC0016E:
The system cannot create a SOAP connector to connect to host localhost at port 8881.
at com.ibm.websphere.management.AdminClientFactory.createAdminClientPrivileged
(AdminClientFactory.java:634)
at com.ibm.websphere.management.AdminClientFactory.access$000(AdminClientFactory.java:126)
at com.ibm.websphere.management.AdminClientFactory$1.run(AdminClientFactory.java:209)
at com.ibm.ws.security.util.AccessController.doPrivileged(AccessController.java:63)
at com.ibm.websphere.management.AdminClientFactory.createAdminClient(AdminClientFactory.java:205)
at com.ibm.mdm.de.config.appserver.remoteclient.MDSRemoteClient.init(MDSRemoteClient.java:43)
at com.ibm.mdm.de.config.appserver.remoteclient.MDSRemoteClient.execute(MDSRemoteClient.java:21)
at com.ibm.mdm.de.ant.task.UninstallMDSWSAPITask.execute(UninstallMDSWSAPITask.java:84)
at org.apache.tools.ant.UnknownElement.execute(UnknownElement.java:275)
at org.apache.tools.ant.Task.perform(Task.java:364)
at org.apache.tools.ant.Target.execute(Target.java:341)
at org.apache.tools.ant.Target.performTasks(Target.java:369)
```

```

at org.apache.tools.ant.Project.executeSortedTargets(Project.java:1216)
at org.apache.tools.ant.Project.executeTarget(Project.java:1185)
at org.apache.tools.ant.helper.DefaultExecutor.executeTargets(DefaultExecutor.java:40)
at org.apache.tools.ant.Project.executeTargets(Project.java:1068)
at org.apache.tools.ant.Main.runBuild(Main.java:668)
at org.apache.tools.ant.Main.startAnt(Main.java:187)
at org.apache.tools.ant.Main.start(Main.java:150)
at org.apache.tools.ant.Main.main(Main.java:240)
at sun.reflect.NativeMethodAccessorImpl.invoke0(Native Method)
at sun.reflect.NativeMethodAccessorImpl.invoke(NativeMethodAccessorImpl.java:60)
at sun.reflect.DelegatingMethodAccessorImpl.invoke(DelegatingMethodAccessorImpl.java:37)
at java.lang.reflect.Method.invoke(Method.java:611)
at com.ibm.ws.bootstrap.WSLauncher.main(WSLauncher.java:277)
Caused by: java.lang.reflect.InvocationTargetException
at sun.reflect.NativeConstructorAccessorImpl.newInstance0(Native Method)
at sun.reflect.NativeConstructorAccessorImpl.newInstance(NativeConstructorAccessorImpl.java:56)
at sun.reflect.DelegatingConstructorAccessorImpl.newInstance(DelegatingConstructorAccessorImpl.java:39)
at java.lang.reflect.Constructor.newInstance(Constructor.java:527)
at com.ibm.websphere.management.AdminClientFactory.createAdminClientPrivileged(AdminClientFactory.java:456)
... 24 more
Caused by: com.ibm.websphere.management.exception.ConnectorNotAvailableException:
[SOAPException: faultCode=SOAP-ENV:Protocol; msg=; targetException=java.net.MalformedURLException]
at com.ibm.ws.management.connector.soap.SOAPConnectorClient.reconnect(SOAPConnectorClient.java:422)
at com.ibm.ws.management.connector.soap.SOAPConnectorClient.<init>(SOAPConnectorClient.java:222)
... 29 more
Caused by: [SOAPException: faultCode=SOAP-ENV:Protocol; msg=; targetException=java.net.MalformedURLException]
at org.apache.soap.rpc.Call.WASinvoke(Call.java:529)
at com.ibm.ws.management.connector.soap.SOAPConnectorClient$4.run(SOAPConnectorClient.java:380)
at com.ibm.ws.security.util.AccessController.doPrivileged(AccessController.java:118)
at com.ibm.ws.management.connector.soap.SOAPConnectorClient.reconnect(SOAPConnectorClient.java:365)
... 30 more

```

## 解決法

InfoSphere MDM のアンインストール時に、IBM WebSphere Application Server Dmgr および AppSrv (Network Deployment) または Server (基本デプロイメント) が実行されていることを確認します。

## インストール・エラー: 仮想 MDM IVT 障害

仮想 MDM に対するインストール検証テスト (IVT) を実行するときに、アプリケーション・サーバーが適切に始動されていないと、

「com.dwl.base.exception.DWLBaseException: Could not locate business object: VirtualMDMBObj」というメッセージを出してテストが失敗することがあります。

## 説明

InfoSphere MDM のインストール完了後にアプリケーション・サーバーが適切に始動されなかった場合、仮想 MDM の IVT が失敗することがあります。

この問題は、Microsoft Windows への WebSphere Application Server Base エディション付きの InfoSphere MDM のインストールに影響を与えます。これは、DB2 付きのスタンドアロン・インストール、またはカスタム・インストールのいずれかを実行した後で発生する可能性があります。

## 解決法

1. アプリケーション・サーバー (server1) を手動で始動します。
2. IVT スクリプト (*MDM\_INSTALL\_HOME%IVT%verify.bat*) を実行して、インストール検証テストを再実行します。



---

## 第 6 章 InfoSphere MDM のアンインストール

IBM Installation Manager を使用して、ご使用のエディションをアンインストールするか、個々のコンポーネントを削除します。

エディション全体 (運用サーバー、データベース、およびコンポーネント) を削除する場合は、IBM Installation Manager のアンインストール・オプションを使用します。

選択したコンポーネントのみを削除する場合は、変更オプションを使用します。

---

### InfoSphere MDM インスタンスのアンインストール

以下の手順を使用して、InfoSphere MDM フル・プロダクトのインスタンスをアンインストールします。

#### 始める前に

この InfoSphere MDM ランタイム環境を後ほど再インストールして、そこで使用されるものと同じデータベース・インスタンスを使用することを計画している場合、予防措置として必ずそのデータベースのバックアップ・イメージを作成してください。

アンインストールする環境で、各ランタイム InfoSphere MDM インスタンス (運用サーバー、エンティティ・マネージャー・インスタンス、クライアント・アプリケーションなど) を停止してください。

#### このタスクについて

IBM Installation Manager アンインストール・オプションを使用すると、オファリング全体が削除されます。選択したコンポーネントのみ (例えば、Inspector や Data Steward UI) を削除したい場合、「変更」オプションを使用します。

#### 手順

1. オプション: `Configure_MasterDataManagement madconfig` スクリプトを使用してインストールと構成を分離した場合は、別の `madconfig` スクリプトを実行して構成ファイルをクリーンアップする必要があります。

- Microsoft Windows システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.bat Uninstall_MDM
```

- Linux や UNIX システムでは、次のスクリプトを実行します。

```
madconfig.sh Uninstall_MDM
```

**重要:** `Uninstall_MDM madconfig` スクリプトを実行する際には、注意が必要です。`Uninstall_MDM` を実行すると、特定のコンポーネントの構成だけでなく、すべてのフィーチャーの構成が削除されます。

2. IBM Installation Manager を始動して、「アンインストール」をクリックします。

3. InfoSphere MDM パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
4. 要約情報を確認して、「アンインストール」をクリックします。
5. 「終了」をクリックします。

## 次のタスク

アンインストール・プロセスでは、複合バンドル・アーカイブ (CBA) を内部バンドル・リポジトリから削除することはしません。CBA は、IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) で手動で削除する必要があります。

### 関連タスク:

227 ページの『内部バンドル・リポジトリからの CBA の削除』  
インストールのトラブルシューティング

---

## スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に) のアンインストール

InfoSphere MDM をスタンドアロン・サーバー・インストールを使用して DB2 と共にインストールした場合、そのフィーチャーをアンインストールするには、以下の手順を実行してください。

### このタスクについて

スタンドアロン・インストールでは、MDM11DB という名前のデータベースが作成されます。Microsoft Windows では、InfoSphere MDM をアンインストールすると、MDM11DB データベースが完全に除去されます。Linux または UNIX では、データベースは削除されません (手動で MDM11DB データベースを削除する必要があります)。

アンインストールする環境で、各ランタイム InfoSphere MDM インスタンス (運用サーバー、エンティティ・マネージャー・インスタンス、クライアント・アプリケーションなど) を停止してください。

InfoSphere MDM フィーチャーのみをアンインストールする場合は、221 ページの『InfoSphere MDM インスタンスのアンインストール』の手順を実行してください。

IBM Installation Manager では、一度に複数のオフリングをアンインストール対象として選択することができます。ただし、この手順の説明に従って、オフリングを個別にアンインストールすることもできます。

### 手順

1. IBM Installation Manager を始動して、「アンインストール」をクリックします。
2. InfoSphere MDM をアンインストールします。
  - a. 「InfoSphere MDM」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
  - b. プロンプトに従って続行し、「アンインストール」をクリックします。



- c. 「完了」をクリックし、IBM Installation Manager ホーム・パネルに戻ります。
3. IBM DB2 をアンインストールします。
    - a. 「**IBM DB2**」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
    - b. プロンプトに従って続行し、「アンインストール」をクリックします。
    - c. 「完了」をクリックし、IBM Installation Manager ホーム・パネルに戻ります。
  4. WebSphere Application Server をアンインストールします。
    - a. WebSphere Application Server および Deployment Manager がいずれも停止されていることを確認します。これらのプロセスが実行中の場合は、WebSphere Application Server をアンインストールできません。
    - b. IBM Installation Manager ホーム・パネルで、「アンインストール」を選択します。
    - c. 「**WebSphere Application Server**」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
    - d. プロンプトに従って続行し、「アンインストール」をクリックします。
    - e. 「終了」をクリックし、IBM Installation Manager を閉じます。

#### 関連タスク:

70 ページの『スタンドアロン・サーバー・インストール (DB2 と共に)』

---

## スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のアンインストール

スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) を使用して InfoSphere MDM をインストールした場合、フィーチャーをアンインストールするには、以下の手順を実行してください。

### このタスクについて

スタンドアロン・インストールでは、MDM11DB という名前のデータベースが作成されます。Microsoft Windows では、InfoSphere MDM をアンインストールすると、MDM11DB データベースが完全に除去されます。Linux または UNIX では、データベースは削除されません (手動で MDM11DB データベースを削除する必要があります)。

アンインストールする環境で、各ランタイム InfoSphere MDM インスタンス (運用サーバー、エンティティ・マネージャー・インスタンス、クライアント・アプリケーションなど) を停止してください。

InfoSphere MDM フィーチャーだけをアンインストールする場合には、InfoSphere MDM インスタンスのアンインストールの手順を実行してください。

IBM Installation Manager では、一度に複数のオフリングをアンインストール対象として選択することができます。ただし、この手順の説明に従って、オフリングを個別にアンインストールすることもできます。

## 手順

1. IBM Installation Manager を始動して、「アンインストール」をクリックします。
2. InfoSphere MDM をアンインストールします。
  - a. 「InfoSphere MDM」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
  - b. プロンプトに従って続行し、「アンインストール」をクリックします。
  - c. 「完了」をクリックし、IBM Installation Manager ホーム・パネルに戻ります。
3. IBM DB2 をアンインストールします。
  - a. 「IBM DB2」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
  - b. プロンプトに従って続行し、「アンインストール」をクリックします。
  - c. 「完了」をクリックし、IBM Installation Manager ホーム・パネルに戻ります。
4. InfoSphere MDM Workbench と IBM Rational Application Developer (RAD) を同時にアンインストールします。
  - a. 「MDM ワークベンチ」パッケージと「IBM Rational Application Developer」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
  - b. プロンプトに従って続行し、「アンインストール」をクリックします。
  - c. 「終了」をクリックし、IBM Installation Manager を閉じます。
5. WebSphere Application Server をアンインストールします。
  - a. WebSphere Application Server および Deployment Manager がいずれも停止されていることを確認します。これらのプロセスが実行中の場合は、WebSphere Application Server をアンインストールできません。
  - b. IBM Installation Manager ホーム・パネルで、「アンインストール」を選択します。
  - c. 「WebSphere Application Server」パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
  - d. プロンプトに従って続行し、「アンインストール」をクリックします。
  - e. 「完了」をクリックし、IBM Installation Manager ホーム・パネルに戻ります。

### 関連タスク:

79 ページの『スタンドアロン・ワークステーション・インストール (DB2 と共に) のインストール』

---

## 単一のコンポーネントのアンインストール

以下の手順を使用して、InfoSphere MDM の 1 つのアプリケーションまたはコンポーネントをアンインストールします。

### このタスクについて

この手順では、選択したアプリケーションまたはコンポーネントのみを削除します。InfoSphere MDM エディション全体を削除したい場合は、IBM Installation Manager のアンインストール・オプションを使用します。

## 手順

1. IBM Installation Manager を始動して「変更」をクリックします。
2. InfoSphere MDM パッケージを選択して、「次へ」をクリックします。
3. 言語を選択して、「次へ」をクリックします。
4. 「パッケージの変更」パネルで、前にインストールされているすべてのコンポーネントが自動的に選択されます。削除するコンポーネントだけを必ずクリアしてください。「次へ」をクリックします。
5. 要約情報を確認し、削除するコンポーネントのみが「削除する機能」ボックスにリストされていることを確認します。「変更」をクリックします。
6. 「終了」をクリックします。

## 次のタスク

アンインストール・プロセスでは、複合バンドル・アーカイブ (CBA) を内部バンドル・リポジトリから削除することはしません。CBA は、IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) で手動で削除する必要があります。

### 関連概念:

180 ページの『クライアント・アプリケーションと個々のコンポーネントのインストール』

### 関連タスク:

227 ページの『内部バンドル・リポジトリからの CBA の削除』  
インストールのトラブルシューティング

---

## サイレント・モードでのアンインストール

InfoSphere MDM コンポーネントをサイレント・モードでアンインストールするには、以下の手順を使用します。

### このタスクについて

対話式アンインストールの実行時には、プロパティ・ファイルが生成されます。サイレント・アンインストールを使用するには、このファイルを編集するか、またはユーザー独自のファイルを作成する必要があります。

**重要:** 以下の内容ではコード例が改行されている場合もありますが、応答ファイルでは、`<.../>` の間のテキストは改行せずに 1 行で入力してください。

### 手順

1. アンインストールするには、応答ファイル内の `<install modify='false'>` タグと `</install>` タグを `uninstall` に置き換えます。以下に例を示します。

```
<uninstall modify='false'>
<offering id='com.ibm.mdm.advanced' version='versionNumber' profile='IBM InfoSphere Master
Data Management' features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,
com.ibm.im.mdm.db.feature,com.ibm.im.mdm.app.feature,
com.ibm.im.mdm.native.feature,com.ibm.mdm.ba.webapp.feature,com.ibm.mdm.ds.webapp.feature,
com.ibm.mdm.pui.webapp.feature,com.ibm.mdm.inspector.webapp.feature,
com.ibm.mdm.ev.webapp.feature,com.ibm.mdm.wb.webapp.feature,com.ibm.mdm.pd.webapp.feature,
com.ibm.im.mdm.pair.manager.feature,com.ibm.im.mdm.message.broker.feature,com.ibm.im.mdm.ei.feature,
com.ibm.mdm.ba.webapp.sample.feature,com.ibm.im.mdm.eutc' />
</uninstall>
```

2. デフォルト・プロファイルの値を実際のプロファイルの値に置き換えます。以下に例を示します。

変更前:

```
<data key='user.was.profile.home.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
<data key='user.was.profile.home.ba.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
<data key='user.was.profile.home.ds.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
<data key='user.was.profile.home.pui.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
<data key='user.was.profile.home.inspector.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
<data key='user.was.profile.home.wb.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
<data key='user.was.profile.home.ev.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
<data key='user.was.profile.home.pd.com.ibm.mdm.advanced'
value='/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01' />
```

変更後:

```
<data key='user.was.profile.home.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
<data key='user.was.profile.home.ba.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
<data key='user.was.profile.home.ds.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
<data key='user.was.profile.home.pui.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
<data key='user.was.profile.home.inspector.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
<data key='user.was.profile.home.wb.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
<data key='user.was.profile.home.ev.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
<data key='user.was.profile.home.pd.com.ibm.mdm.advanced'
value='/home/wsadmin/WAS8502NDC1usterProfiles/DmgrCL1' />
```

3. サイレント・アンインストールを実行するには、応答に常に以下の 3 つのフィーチャーが含まれていることを確認してください。

```
com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature,com.ibm.mdm.server.swtag.feature,
com.ibm.mdm.server.bundles.feature
```

4. Installation Startup Kit のサンプル応答ファイルをサイレント・アンインストール用に変更して使用する場合、

「com.ibm.mdm.server.swtag.feature,com.ibm.mdm.server.bundles.feature features」を追加します。以下に例を示します。

```
<uninstall modify='false'>
<offering id='com.ibm.mdm.advanced' version='versionNumberprofile=
'IBM InfoSphere Master Data Management' features='com.ibm.mdm.install.iu.localization.feature
,com.ibm.mdm.server.swtag.feature,com.ibm.mdm.server.bundles.feature,
com.ibm.im.mdm.db.feature,com.ibm.im.mdm.app.feature,com.ibm.mdm.ba.webapp.feature'
installFixes='none' />
</uninstall>
```

## 次のタスク

アンインストール・プロセスでは、複合バンドル・アーカイブ (CBA) を内部バンドル・リポジトリから削除することはしません。CBA は、IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console で手動で削除する必要があります。

関連タスク:

- 163 ページの『サイレント・モードの応答ファイルのカスタマイズ』
- 171 ページの『応答ファイルを使用したサイレント・インストール』

関連資料:

---

## 内部バンドル・リポジトリからの CBA の削除

InfoSphere MDMをアンインストールしても、複合バンドル・アーカイブ (CBA) は内部バンドル・リポジトリから削除されません。アンインストール・プロセスの実行が終了した後で、手動で削除する必要があります。

### 手順

1. IBM WebSphere Application Server Integrated Solutions Console (管理コンソール) にログインします。
2. 「環境」 > 「OSGi バンドル・リポジトリ」 > 「内部バンドル・リポジトリ」に移動します。
3. MDM.ear CBA を選択して、「削除」をクリックします。

### 関連タスク:

221 ページの『InfoSphere MDM インスタンスのアンインストール』

224 ページの『単一のコンポーネントのアンインストール』



---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

### 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。この資料は IBM から他の言語で利用できる場合があります。ただし、その資料を利用するには、その言語の製品または製品バージョンのコピーを所有していなければならない場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510  
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
法務・知的財産  
知的財産権ライセンス渉外

**以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。** IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。



IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation  
J46A/G4  
555 Bailey Avenue  
San Jose, CA 95141-1003 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式

においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。© Copyright IBM Corp. \_年を入れる\_. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

## プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、認証、お客様の利便性の向上、シングル・サインオン構成、またはお客様がログイン前にロードしようとした Web ページの識別の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、パスワード、プロフィール名、またはその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を利用できなくなる可能性があります。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、IBM のプライバシー・ポリシー ([www.ibm.com/privacy](http://www.ibm.com/privacy)) および IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』 ([www.ibm.com/privacy/details](http://www.ibm.com/privacy/details)) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』セクションおよび『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』 ([www.ibm.com/software/info/product-privacy](http://www.ibm.com/software/info/product-privacy)) を参照してください。

## 製品のセキュリティーに関する概要

IBM のシステムおよび製品は、最高の効果を得るために他のシステム、製品、またはサービスの使用が必要な場合のある、包括的なセキュリティー手段の一部として実装するように設計されています。ご使用の環境にシステムおよび製品を追加するたびに、必ず包括的なセキュリティー手段を確認する必要があります。

IT システムまたは製品を完全にセキュアな状態にすることはできません。また、単一の製品またはセキュリティー対策によって不正なアクセスを完全に防ぐことはできません。

IT システム・セキュリティーには、企業内外からの不正なアクセスからの保護、検出、および対応によってシステムおよび情報を保護することが求められます。不正なアクセスによって、情報の改ざん、破壊、悪用を招くおそれがあり、また他のシステムの攻撃のためにご使用のシステムが誤用または悪用されるおそれがあります。

IBM は、何者かの悪意のある行為または違法行為によって、システム、製品のいずれも影響を受けないことを保証していません。

IBM は、セキュリティーの脆弱性の識別とその対処に対して、単一のプロセスによって完全かつ効果的に支援できるものとは考えません。IBM は多層的な方法を用意しています。

- 製品およびサービスの開発において一貫性のあるセキュリティー手段の採用を推進し、すべての IBM 製品およびサービスの品質およびセキュリティー特性の継続的な改良を目指す取り組みが社内で行われています。この取り組みは、IBM からのソフトウェア開発プラクティスに関する公開情報を含め、IBM Redguide「*Security in Development: The IBM Secure Engineering Framework*」で説明されています。
- IBM 製品のテストおよびスキャンは、さまざまな IBM の技術を使用して、深刻または重大な脆弱性を含む、欠陥や脆弱性の積極的な識別および修正を実行します。修正は、分析、影響評価、および修正を配信するために IBM が定義した対応の目標時間枠内で行われます。
- IBM 製品セキュリティー・インシデント対応チーム (PSIRT) は、IBM オファリングに関連したセキュリティーの脆弱性に関する情報の受領、検証、および内部調査を管理します。IBM PSIRT チームは、セキュリティー研究者、業界団体、政府機関、ベンダー、およびお客様が IBM PSIRT ポータルを介して IBM 製品の潜在的なセキュリティー脆弱性について報告するためにコンタクトできるフォーカル・ポイントの役割を担います。このチームは IBM 製品およびソリューションのチームと連携して、適切な対応プランを調査および識別します。
- グローバルなサプライ・チェーンのインテグリティ・プログラムおよびフレームワークにより、IT 製品の購入者は Open Group Trusted Technology Forum において認可された技術パートナーおよびベンダーを選択できます。

コンピューター・システムおよびコンピューター・ソフトウェアのセキュリティーに関する問題は非常に複雑であるため、IBM は個別の製品の開発プラクティスに関して、標準の製品資料にある情報または IBM の公開活動で説明されている情報以外の情報は提供していません。

IBM が推奨するソフトウェア開発プラクティスに関する公開情報は IBM Secure Engineering Framework に記述されています。この情報は IBM ビジネス・ユニットと開発チームのプラクティスを編集したものです。

多くの場合、公表された脆弱性は IBM Security Bulletins に適時公開されます。これには、関連する Common Vulnerability Scoring System (CVSS) のベース・スコアが含まれています。IBM から特定の脆弱性に関して直接また慎重にお客様に連絡する場合があります。

IBM 内部で実行される影響評価を超えて IBM ソフトウェアの脆弱性の検証を希望するお客様は、ライセンスを受けたソフトウェアに対するスキャンを実行してください。既存のソフトウェア・ライセンスの条件の範囲内で、希望するツールを使用することができます。例えば、スキャンを実行することは許可されますが、法律の強行規定がある場合を除き、IBM ソフトウェアの逆コンパイルまたはリバース・エンジニアリングは許可されません。

## 商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://ibm.com) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

IT Infrastructure Library は英国 Office of Government Commerce の一部である the Central Computer and Telecommunications Agency の登録商標です。

Linear Tape-Open、LTO、LTO ロゴ、Ultrium および Ultrium ロゴは、HP、IBM Corp. および Quantum の米国およびその他の国における商標です。

インテル、Intel、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Intel Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Cell Broadband Engine は、Sony Computer Entertainment, Inc.の米国およびその他の国における商標であり、同社の許諾を受けて使用しています。

ITIL は英国 The Minister for the Cabinet Office の登録商標および共同体登録商標であって、米国特許商標庁にて登録されています。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

# 索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

## [ア行]

アカウントの前提条件 88  
アクセス・キー、サンプル 191  
アプリケーション  
    インストール 180  
アプリケーションの手動インストール 108  
アプリケーション名 43  
アプリケーション・サーバー  
    基本デプロイメントのための準備 94  
    準備 89  
    非管理対象サーバーの準備 93  
    dmgr の準備 90  
アプリケーション・リソース言語 48  
アンインストール 221  
    個々のアプリケーションまたはコンポーネント 224  
    サイレント 225  
    フル・プロダクト 221  
インストール  
    アプリケーション 180  
    アプリケーションの手動インストール 108  
    概説 7  
    カスタム 134  
    カスタム・デプロイメント・タイプ 27  
    クラスター内 150  
    グラフィカル 29  
    検証 191, 192, 194  
    サイレント 29  
        アプリケーション・サーバーのパラメーター 169  
        応答ファイルのカスタマイズ 163  
        応答ファイルの作成 172  
        応答ファイルの使用 171  
        スプラッシュ画面の無効化 170  
        フィーチャーの指定 166  
        DB2 パラメーター 166, 167  
        Oracle のパラメーター 168  
    サイレントでのアンインストール 225  
    サイレント変更 173  
    サイレント・インストール 160  
    サンプル 189, 190, 191  
    手動インストール  
        Oracle データベースの設定 112  
        スタンドアロン・サーバー 70  
        スタンドアロン・デプロイメント・タイプ 23, 25, 26  
        スタンドアロン・ワークステーション 79  
        ディレクトリー構造と名前 17

インストール (続き)  
    デプロイメント・タイプ  
        スタンドアロンまたはカスタム 23  
    品目保守 UI 185  
    フィーチャー 9  
    変更 197  
    ランチパッドの使用 69, 78  
    ログの表示 197  
        Installation Manager 195  
    ワークシート 30  
    Business Administration UI 181  
    Data Stewardship UI 183  
    DB2 for Linux または DB2 for UNIX でのアプリケーションの手動インストール 112, 113, 115  
    DB2 for z/OS でのアプリケーションの手動インストール 110, 111, 118, 120  
    Installation Manager 87  
    Oracle でのアプリケーションの手動インストール 123, 124  
    z/OS への 154  
インストール環境 134  
インストールと構成の分離 144  
    シナリオ 147  
インストールの検証 191, 192, 194  
インストールの準備 86  
    アカウントの前提条件 88  
    アプリケーション・サーバー dmgr 90  
    アプリケーション・サーバー非管理対象サーバー 93  
    インストーラーへの MDM オフラインの追加 88  
    インストール・メディアのセットアップ 68, 76, 85  
    開始キット 11  
    基本デプロイメントのためのアプリケーション・サーバー 94  
    クラスター環境の DB2 データベース 101  
    クラスター環境の Oracle データベース 107  
    クラスター環境の SQL Server データベース 104  
    異なるサーバー上の DB2 データベース 100  
    異なるサーバー上の Oracle データベース 106  
    異なるサーバー上の SQL Server データベース 103  
    スタンドアロン・インストール (DB2 と共に) 68, 77  
    データベース 96  
    DB2 ユーティリティーのパスの設定 102  
    Oracle ユーティリティーのパスの設定 107  
    WebSphere Application Server 89  
インストール要件  
    検証 73, 82, 139  
    テスト 73, 82, 139  
インストール要件の確認 73, 82, 139  
インストール・シナリオ 51  
運用サーバー  
    ユーザー・アプリケーションの関連付け 48



- エラー・メッセージ
  - 検証テスト 156
- 応答ファイル
  - アプリケーション・サーバーのパラメーター 169
  - カスタマイズ 163
  - グラフィカルな作成 172
  - サイレント・インストール 160, 173
  - 使用 171
  - フィーチャーの指定 166
  - DB2 パラメーター 166, 167
  - Oracle のパラメーター 168
- お客様サポート
  - お問い合わせ 237

## [力行]

- 開始キット 11
- カスタム
  - インストール 134
- カスタム・インストール
  - デプロイメント・タイプ 27
- キー、サンプルへのアクセス 191
- 業種 48
- クラスター 39, 43, 46
  - インストール 150
  - インストール・シナリオ 52, 56
  - InfoSphere MDM ノードの追加 198
- グラフィカル
  - インストール 29
- グループ 14
- グローバル化 132
- 言語
  - アプリケーション・リソース 48
  - コード表 48
- 検証テスト 73, 82, 139
  - エラー・メッセージ 156
- コード表言語 48
- 高可用性 29, 52, 56, 198
- 構成
  - インストールからの分離 144, 147
  - 構成の分離 144, 147
  - シナリオ 147
  - プロパティ・ファイル 144
  - ワークシート 30
    - インストール・ディレクトリー 30
    - ユーザー・アプリケーション 46
    - 履歴トリガー 48
    - DB2 データ・ソース 31
    - MDM アプリケーション 43
    - Microsoft SQL Server データ・ソース 34
    - Oracle データ・ソース 36
    - WebSphere Application Server 39

## [サ行]

- サーバー
  - WebSphere Application Server 39, 46
- サイレント
  - インストール 29
- サイレント・インストール 160
  - アプリケーション・サーバーのパラメーター 169
  - アンインストール 225
  - 応答ファイルのカスタマイズ 163
  - 応答ファイルの作成 172
  - 応答ファイルの使用 171
  - スプラッシュ画面の無効化 170
  - フィーチャーの指定 166
  - 変更 173
  - DB2 パラメーター 166, 167
  - Oracle のパラメーター 168
- 作成
  - データベース・スクリプト 11
- サポート
  - お客様 237
- サンプル
  - インストール 189
  - インストールの概説 190
- システム要件 134
- 手動インストール
  - Oracle にドメイン・データベース 126
- 準備
  - インストールのための DB2 データベース 98
  - インストールのための Oracle データベース 104
  - インストールのための SQL Server データベース 102
  - 高可用性 29
- 商標
  - リスト 229
- スタンドアロン
  - インストール 79
    - サーバーのインストール 70
  - スタンドアロン・インストール
    - デプロイメント・タイプ 23
      - サーバーの 25
      - ワークステーションの 26
- スプラッシュ画面の無効化
  - サイレント・インストール 170
- セキュリティー
  - チャンネル役割 96
- 接続
  - データベース 97
- セル
  - WebSphere Application Server 39, 46
- 前提条件検査 73, 82, 139
- 前提条件検査ツール 134
- ソフトウェア・サービス
  - お問い合わせ 237



## [タ行]

大/小文字を区別する検索 48  
ダウンロード  
    サンプル 191  
タスク管理  
    ユーザーを手動で作成するには 185  
チェックリスト 30, 31, 34, 36, 39, 43, 46, 48  
データベース  
    手動インストール 31, 34, 36  
    スキーマ 31, 34, 36  
    接続 97  
    タイプ 31, 34, 36  
    ポート 31, 34, 36  
    ホーム 31, 34, 36  
    ホスト名 31, 34, 36  
    ユーザー名とパスワード 31, 34, 36  
    ユーザー・アカウント 97  
    DB2 の準備 98  
    Oracle の準備 104  
    SQL Server の準備 102  
ディレクトリー構造 17  
デフォルト  
    ユーザー・アカウント設定 14  
デプロイされたプロパティ・ファイルの更新 201  
デプロイメント  
    複数のタイム・ゾーン 43  
デプロイメント・タイプ  
    カスタム 27  
    スタンドアロン 23, 25, 26  
    WebSphere Application Server 39, 46  
特記事項 229

## [ナ行]

ノード  
    WebSphere Application Server 39, 46  
ノードをクラスターに追加する 198

## [ハ行]

パスワード 39, 43, 46  
パッケージ・グループ  
    既存 30  
    新規 30  
品目保守 UI  
    インストール 185  
複数インスタンス  
    インストールおよび構成 13  
複数のタイム・ゾーンへのデプロイメント 43  
物理 MDM データベースの手動インストール 112  
プロファイル  
    WebSphere Application Server 46  
変更  
    インストール 197  
    サイレント変更 173

ホスト名 39, 46

## [マ行]

マッチング・スタイル 43  
メッセージング  
    Message Brokers 43  
    WebSphere MQ 43  
    WebSphere のデフォルト・メッセージング 43  
メッセージング・コンポーネント  
    手動インストール 131  
メッセージ・バス  
    構成 156  
文字エンコード  
    ターゲット・コンピューターへの設定 132

## [ヤ行]

ユーザー  
    グループへのユーザーの追加 95  
ユーザーの追加 95  
ユーザー名 39, 46  
ユーザー・アカウント 14  
    データベース 97  
ユーザー・アプリケーション  
    運用サーバーの関連付け 48

## [ラ行]

ランチパッド  
    スタンドアロン (DB2 と共に) インストールの開始 69, 78  
リモート・サーバー  
    インストール・シナリオ 63  
リモート・データベース  
    インストール・シナリオ 63  
ローカル開発環境  
    インストール・シナリオ 63  
ログ  
    表示 197  
    Installation Manager 195  
ロケール  
    ターゲット・コンピューターへの設定 132

## [ワ行]

ワークシート 30  
    インストール・ディレクトリー 30  
    ユーザー・アプリケーション 46  
履歴トリガー 48  
DB2 または DB2 for z/OS のデータ・ソース 31  
MDM アプリケーション 43  
Microsoft SQL Server データ・ソース 34  
Oracle データ・ソース 36  
WebSphere Application Server 39

## B

Business Administration UI  
インストール 181

## D

Data Stewardship UI  
インストール 183

Data Stewardship のインストール  
タスク管理ユーザーを手動で作成するには 185

DB2 for Linux または DB2 for UNIX でのアプリケーションの  
手動インストール 112, 113, 115

DB2 for z/OS でのアプリケーションの手動インストール 110,  
111, 118, 120

DB2 for z/OS 用の XA 構成 108

DB2 データベース  
インストールの準備 98

インストール・シナリオ 52

DB2 ユーティリティのパスの設定 102

## I

IBM Support Assistant Data Collector 134

Installation Manager  
インストール 87

MDM オファリングの追加 88

Installation Startup Kit 134

## M

MAD\_HOMEDIR 20

MAD\_ROOTDIR 20

MDM グループ  
ユーザーの追加 95

MDM\_INSTALL\_HOME 20

## O

ODBC ドライバー 107

Oracle  
ドメイン・データベースの手動インストール 126

Oracle データベース  
インストールの準備 104

インストール・シナリオ 56

Oracle でのアプリケーションの手動インストール 123, 124

Oracle ユーティリティのパスの設定 107

## R

RMI ポート 43

## S

SOAP ポート 39, 46

SQL Server データベース  
インストールの準備 102  
インストール・シナリオ 60

## W

WebSphere Application Server  
サーバー 39  
セル 39  
デプロイメント・タイプ 39  
ノード 39  
プロファイル 39  
ホーム 39

WebSphere MQ  
メッセージング 43

WebSphere のデフォルト  
メッセージング 43

Windows ネイティブ認証 34

## Z

z/OS

へのインストール 154

メッセージ・パスの構成 156

z/OS データベースの作成およびインストール 108

## IBM へのお問い合わせ

お客様サポート、ソフトウェア・サービス、製品情報、および一般情報について、IBM にお問い合わせいただくことができます。また、製品および資料についてのフィードバックを行うことができます。

以下の表に、お客様サポート、ソフトウェア・サービス、技術研修、製品およびソリューション情報に関するリソースの一覧を示します。

表 32. IBM のリソース

リソース	説明およびアクセス先
InfoSphere MDM の製品資料	InfoSphere MDM の資料は、 <a href="http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSWSR9_11.4.0">http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSWSR9_11.4.0</a> で検索および参照できます。
InfoSphere MDM Reference Data Management を含む InfoSphere MDM Custom Domain Hub の製品資料	InfoSphere MDM Custom Domain Hub の資料は、 <a href="http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSLSQH_11.4.0">http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSLSQH_11.4.0</a> で検索および参照できます。
IBM サポート・ポータル	<a href="http://www.ibm.com/support/">www.ibm.com/support/</a> で対象の製品とトピックを選択して、サポート情報をカスタマイズできます。
ソフトウェア・サービス	ソフトウェア、IT、およびビジネス・コンサルティング・サービスについての情報は、「ソリューション」サイト <a href="http://www.ibm.com/businesssolutions/">www.ibm.com/businesssolutions/</a> にアクセスしてください。
My IBM	<a href="http://www.ibm.com/account/">www.ibm.com/account/</a> の My IBM サイトでアカウントを作成することにより、ご自身の技術サポートのニーズに合わせて IBM Web サイトおよび情報へのリンクを管理することができます。
研修と認定	個人、法人、および公共団体向けに、IT 技術の習得、維持、最適化を目的としてデザインされた技術研修および教育サービスについては、 <a href="http://www.ibm.com/software/sw-training/">www.ibm.com/software/sw-training/</a> にアクセスしてください。
IBM 担当員	ソリューションについて IBM 担当員と連絡を取るには、 <a href="http://www.ibm.com/connect/ibm/us/en/">www.ibm.com/connect/ibm/us/en/</a> にアクセスしてください。

### フィードバックの提供

次の表は、製品および製品資料についてのフィードバックを行う方法を示しています。

表 33. IBM へのフィードバックの提供

フィードバックの種類	方法
製品に関するフィードバック	<p><a href="https://www.ibm.com/survey/oid/wsb.dll/studies/consumabilitywebform.htm">https://www.ibm.com/survey/oid/wsb.dll/studies/consumabilitywebform.htm</a>の「Consumability Survey」を通して、全般的な製品のフィードバックを行うことができます。</p>
資料に関するフィードバック	<p>製品資料に関するコメントをお送りいただくには、次の方法があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Knowledge Center のトピックの「コメントの追加」をクリックする</li> <li>• IBM Knowledge Center のトピックの「フィードバック」リンクをクリックする</li> <li>• オンラインの読者コメント・フォーム (<a href="http://www.ibm.com/software/data/rcf/">www.ibm.com/software/data/rcf/</a>) を使用する</li> <li>• E メールを <a href="mailto:comments@us.ibm.com">comments@us.ibm.com</a> に送信する</li> </ul>





Printed in Japan

GC43-1871-00



日本アイ・ビー・エム株式会社  
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21